

5 古墳時代後期の遺構

(1) 概要

古墳時代後期に相当すると思われる住居跡は55軒、このうち何軒かは7世紀のいわゆる飛鳥時代～白鳳時代に含まれるが、この時期を古代として扱う考え方もあり、時代区分の概念規定がやや判然としない時期である。また、土器様式の変化からこの時期を明確に分離することも現状では不可能である。そこで、6世紀的な土器様式を残すものまでを古墳時代後期として本節で扱い、古代的な土器様相が濃厚な住居跡については次項で扱うことにした。したがって、7世紀代の扱いはあいまいにならざるを得ず、時代的に前後してしまうものも含まれる可能性を排除できなかった。

古墳時代後期の住居跡は各地で確認されているが、散在的なものがほとんどで、ある程度の規模をもつ集落は極端に少ない。長野市周辺でも隣接する塩崎遺跡群塩崎小学校地点以外に著名なものはなかった。

篠ノ井遺跡群内では今回の新幹線地点程の規模の集落は報告されていない。

(2) 竪穴住居跡

SB101 (第12図、PL-)

位置 1A区、VI-R25グリッド

重複関係 なし。SM115内。

形状 方形?大部分調査区域外。

覆土 不明。

壁 明確に検出されやや傾いて立ち上がる。

床面 堅固。貼り床、掘り方等は不明。

柱穴 不明。たぶん調査区域外。

カマド 不明。調査区域外。

その他施設 不明。

遺物 長胴甕と思われる破片及び内黒の坏が少々出土したのみである。

所見 調査面積はわずかだが検出面のレベル、周辺の遺構の様子から古墳時代後期の住居跡と考えたい。

SB103 (第131図、PL-)

位置 1A区、VI-W04・09・10グリッド

重複関係 なし。SM113・114内。

形状 方形。一部調査区域外。

覆土 単層。詳細不詳。

壁 明確に検出されほぼ垂直に立ち上がる。

床面 堅固。貼り床、掘り方等は不明。

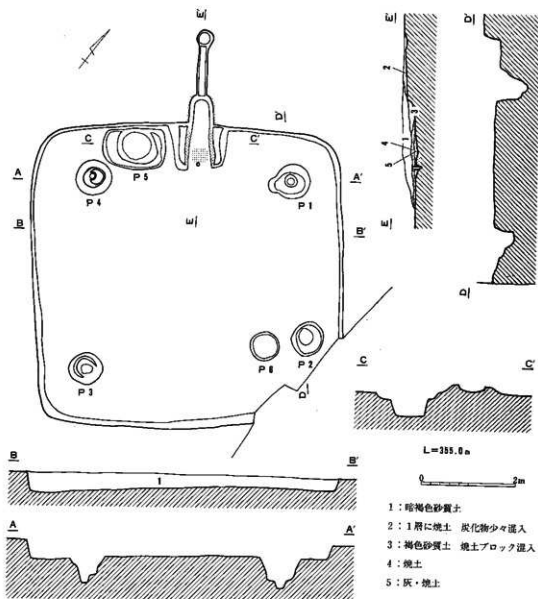
柱穴 P1～4。柱痕の存在は不明。

カマド 地山切り出し?粘土補強。煙道が長く、支脚石が残っている。

その他施設 カマド脇のP5は灰溜めか。P6は柱の立て管えまたは支柱と思われるが判然としない。

遺物 内黒の坏、長胴甕がカマド付近から検出されている。

所見 遺物から古墳時代後期と考えたい。



第131図 SB103

SB106 (第12図、PL-)

位置 1A区、VI-W10、X06・11グリッド

重複関係 SB105に切られる。

形状 隅丸方形?大部分が調査区域外。

覆土 単層。詳細不詳。

壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。

床面 堅固。貼り床、掘り方等は不明。

柱穴 不明。調査区域外?

カマド 不明。

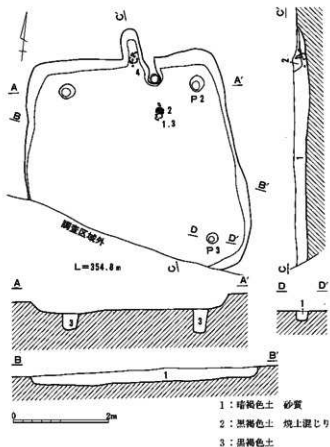
その他施設 不明。

遺物 遺物ほとんどなし。

所見 時期決定に足る遺物がなため、判然としないが古代のSB105に切られていること、検出面のレベル等から古墳時代後期の住居跡と考えたい。

SB302 (第132図、PL-)

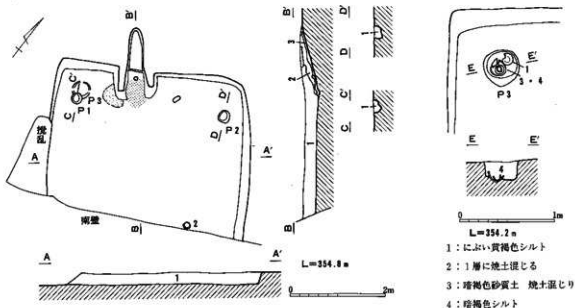
位置 1A区、VI-122、N02グリッド
 重複関係 なし。
 形状 隅丸方形。一部調査区域外。
 覆土 均質な単層。自然埋没？
 壁 明確に検出され、ほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。
 床面 明確であるが軟弱。貼り床、掘り方等はない。
 柱穴 P1～3。残りは調査区域外。
 カマド 右袖のみ残存。地山と酷似した土を用いているため、切り出しかどうか不明。先端に長胴甕を埋め込んで補強している。
 その他施設 特になし。
 遺物 涙滴型の坏？が床面から出土している。
 所見 古墳時代後期7世紀ころの住居跡と思われる。



第132図 SB302

SB305 (第133図、PL18)

位置 1B区、VI-R14・15・19・20グリッド
 重複関係 なし。一部掘乱を受ける。
 形状 方形。一部調査区域外。

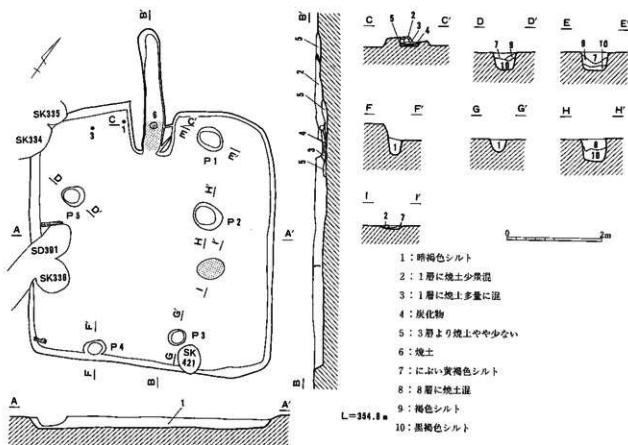


第133図 SB305

- 覆 土 均質な単層。自然埋没？
- 壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。
- 床 面 堅固であるが貼り床程ではない。貼り替え、掘り方等はない。
- 柱 穴 P 1・2。残りは調査区域外。P 3はその他施設に記載。
- カ マ ド 粘土補強。火床に支脚石が残存。袖内部に構築材は埋め込まれていない。
- その他施設 床下に P 3。ほぼ完形の坏、鉢、短頸壺及び円礫、骨粉を底部から検出。地鎮にかかわるものか。
- 遺 物 上記以外には遺物ほとんどなし。
- 所 見 古墳時代後期の住居跡で床下に祭祀的な遺構を伴う例は珍しい。類例の増加を待ちたい。

SB313 (第134図、PL18)

- 位 置 1 A区、VI-M25、R05、S01グリッド
- 重複関係 SB311、SK708を切り、SD301・302、SK334~6・339・420・421・467・469に切られる。
- 形 状 隅丸方形。
- 覆 土 均質な単層。自然埋没？
- 壁 明確に検出され、傾いて立ち上がる。
- 床 面 堅固な貼り床。平坦な掘り方が確認されているが硝化しなかった。貼り替えはない。
- 柱 穴 P 2・5？これらと対をなす柱穴は不明。P 3・4は浅く、入口施設に伴うものか。
- カ マ ド 地山に似た土で造られており、粘土等の使用は明らかでない。甕の底部を逆位に設置して支



第134図 SB313

脚としている。右袖はSK467により破壊されている。

その他施設 カマドとは別に地床炉。暖房・採光用か。

遺物 カマド内外に大型破片。遺棄によるものと思われる。ウマの上腕骨、梶尺骨が床面から検出されている。覆土最上部から蹄脚碗が出土しているが流れ込みによるものと思われる。

所見 古墳時代後期の一般的な住居跡。

SB314 (第135図、PL-)

位置 1A区、VI-M15・20、N11
・16グリッド

重複関係 SB357、SK471・472・712・713を切り、SK355に切られる。

形状 隅丸方形?約半分が調査区域外。

覆土 均質な単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、ゆるやかに立ち上がる。

床面 やや堅固であるが貼り床ではない。浅く平坦な掘り方が確認されているが図化しなかった。

柱穴 P1・2?これらと対をなす柱穴は調査区域外。P3は浅く、性格不明。

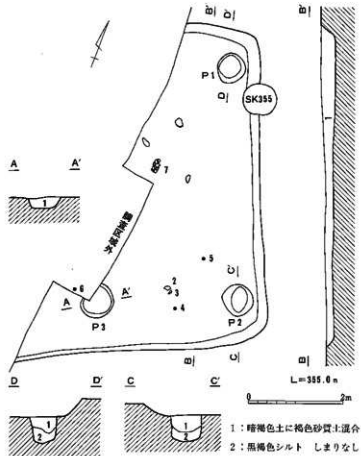
カマド 不明。調査区域外。

その他施設 不明。

遺物 床面から光形の環が2個体ほど検出されていることから遺棄の可能性が高い。獣骨とみ

られる骨片が少数出土しているが種類等は不明である。

所見 出土遺物から古墳時代後期7世紀初頭ころの住居と思われる。床下にSK471・472があり、SK472はP1とP2の中間に位置するため本跡の柱穴の可能性もあるが、双方とも明確な本跡との関連性はとらえられなかった。



第135図 SB314

SB326 (第136図、PL18)

位置 1B区、VI-N01グリッド

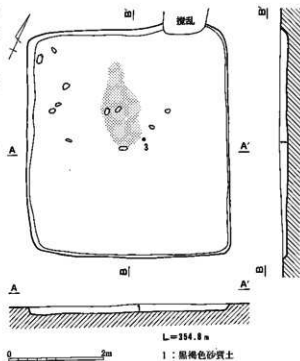
重複関係 SB325を切り、SK305・306に切られる。

形状 隅丸方形。一部攪乱を受ける。

覆土 均質な単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。

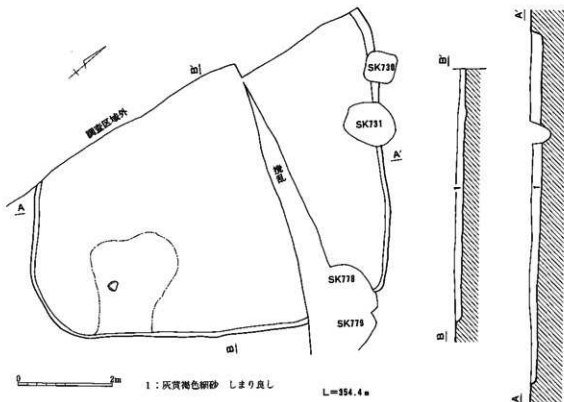
- 床 面 中央付近は堅固な貼り床状であるが他の部分はそのほどでもなく、掘り方等は確認されていない。
- 柱 穴 なし。下層遺構の調査でも柱穴らしい遺構は検出されなかった。
- カ マ ド なし。
- その他施設 中央部の床面に焼土が散っているが床面そのものは焼けていない。
- 遺 物 完形の環が1点。須恵器の高坏の小破片が1点。あとは長胴甕の破片ばかりである。
- 所 見 掘り込みは浅く、カマドも柱穴もないことから住居とする根拠は希薄。竪穴状遺構ととらえておきたい。



SB328 (第137図、PL18)

- 位 置 1C区、VI-X04・05・09・19グリッド
- 重複関係 SB347、ST307、SK730・731・778・779に切られる。
- 形 状 隅丸方形。一部調査区域外。攪乱を受ける。
- 覆 土 均質な単層。自然埋没?
- 壁 明確に検出され、ゆるやかに立ち上がるがこれは上部を削りすぎた結果と思われる。

第136図 SB326

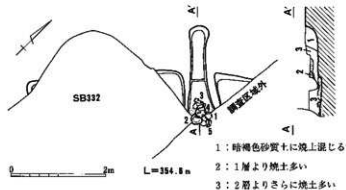


第137図 SB329

- 床 面 軟弱。この時期には珍しく掘り方も確認されなかった。
- 柱 穴 なし。下層遺構の調査でも柱穴らしい遺構は検出されなかった。
- カ マ ド 不明。調査区域外？
- その他施設 特になし。
- 遺 物 覆土が薄いためほとんどが床面遺物。遺棄または流れ込みと思われる。
- 所 見 床は軟弱で柱穴もはっきりせず、住居跡だと断定するにはやや弱い。

SB331 (第138図、PL18)

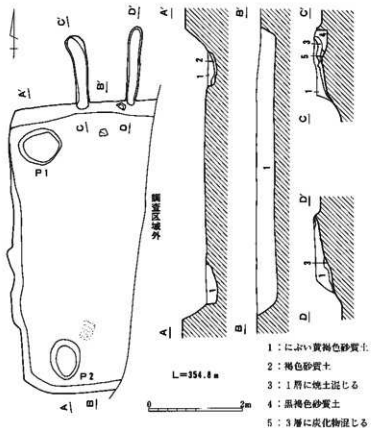
- 位 置 1 A区、VI-N16グリッド
- 重複関係 SB332に切られる。
- 形 状 切られて不明。カマド部分、コーナーの一部のみ調査。
- カ マ ド 粘土補強。長胴甕の底部を支脚に利用している。
- 遺 物 カマド内から長胴甕3~4個体。
- 所 見 一辺7m程の住居跡だったと推定されるがそれ以上は不明。



第138図 SB331

SB332 (第139図、PL-)

- 位 置 1 A区、VI-N16-21グリッド
- 重複関係 SB331、SK710・726・727を切り、SD302、SK349に切られる。
- 形 状 方形？半分以上調査区域外。
- 覆 土 均質な単層。自然埋没？
- 壁 明確に検出され、ゆるやかに立ち上がる。
- 床 面 堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は確認されなかった。
- 柱 穴 P1・2。直径は十分だがやや浅いことが気になる。これらと対をなす柱穴は調査区域外。
- カ マ ド 2基。煙道しか残っていないが西側のものが新しい。
- その他施設 特になし。
- 遺 物 上層及び床面付近に多いが破片ばかりで図になるものはごく少ない。
- 所 見 カマドの形態、柱穴の位置、遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われるが、覆土内から四耳壺の大型破片が出土するなどやや確実性に欠ける。



第139図 SB332

SB333 (第140図、PL-)

位置 1C区、VI-X19・20・25グリッド

重複関係 SB358を切る。

形状 方形?大部分調査区域外。

覆土 分層されるが漸移的であり、自然か人為か埋没過程ははっきりしない。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は不明。

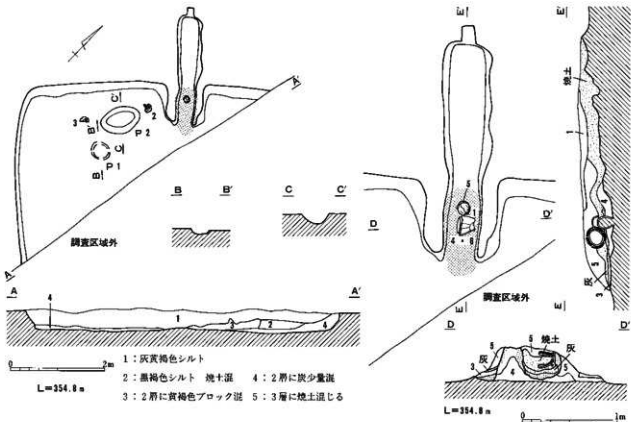
柱穴 不明。浅くてもよいのなら床下のP1か。これらと対をなす柱穴は調査区域外。

カマド 土器と粘土で補強。とくに天井部にも長胴甕を横に配置している。支脚には長胴甕欠損品を倒置し、さらに坯を逆位にかぶせている。

その他施設 カマド左脇のP2は灰溜めか。

遺物 全般に少ないが床面からはほぼ完形~半完形の坯3点。遺棄によるものと思われる。

所見 遺物等から古墳時代後期の住居跡。床面からやや浮いたレベルに炭化物が多いが材はみられなかった。焼却によるものか。ほぼ同じ時期と思われるSB358を切る。



第140図 SB333

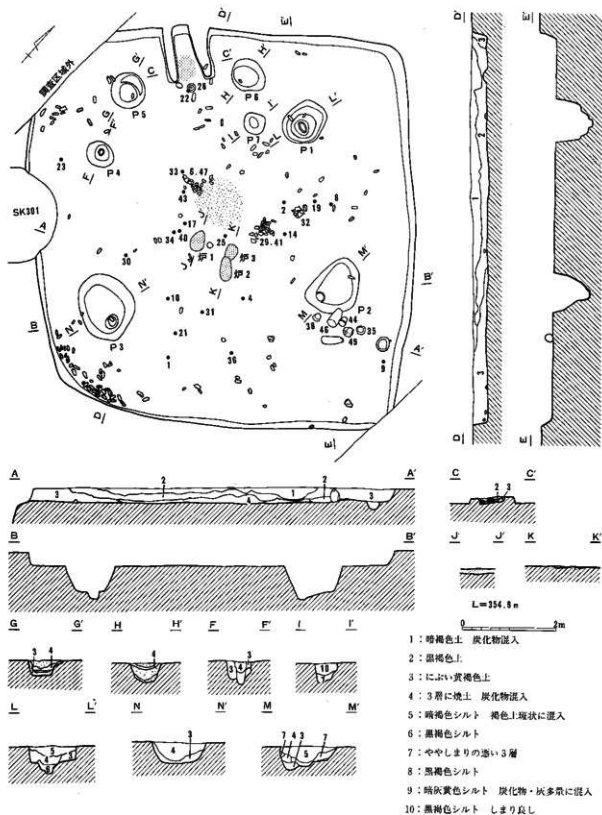
SB340 (第141図、PL18・19)

位置 1B区、VI-I07・11・12・13グリッド

重複関係 SK301・451に切られる。また本跡直上に平安時代の畠跡SL301がある。

形状 隅丸方形?一部調査区域外。

覆土 上層から炭化物が大量に検出され、中層には焼土。下層は地山に酷似。住居廃絶後の凹地に



第141図 SB340

焚火と土器の投棄が行われた模様。

- 壁 明確に検出され、やや傾いてほぼ立ち上がる。
- 床 面 非常に堅固な貼り床。貼り替えないが、深さ20cm程の掘り方をもつ。
- 柱 穴 P1・2・3・5。柱痕あり。ただしこれらはすべて床面では検出できず、貼り床と掘り方を除去して検出した。

カマド 袖は粘土による構築。長胴甕の破損品を倒置してあったが、支脚とするには位置がやや適当でない。遺物はカマド内外に多数散乱。完形は少なく投棄をうかがわせる。

その他施設 P5・6は灰溜めか。P7は不明。地床炉3基。いずれもよく焼けている。

遺物 覆土、床面とも破片が大量に出土。投棄によるものと思われる。P2付近の床面に長胴甕、平瓶。わずかな焼土を伴っており、祭祀的なものか。覆土からは土製を含む玉類もまとまって検出されており、焚火の際に投棄されたものと考えたい。

所見 大型の住居が廃絶後土器投棄施設となることは本遺跡内でもしばしば観察されるが、玉類や手づくね土器の出土をもって祭祀に結びつけるのはやや性急すぎるか。

本跡は隣接するSB353と規模、カマドの方向等が類似しており、時期もほぼ一致すると考えられる。

SB342 (第142図、PL-)

位置 1C区、VI-X24・25グリッド

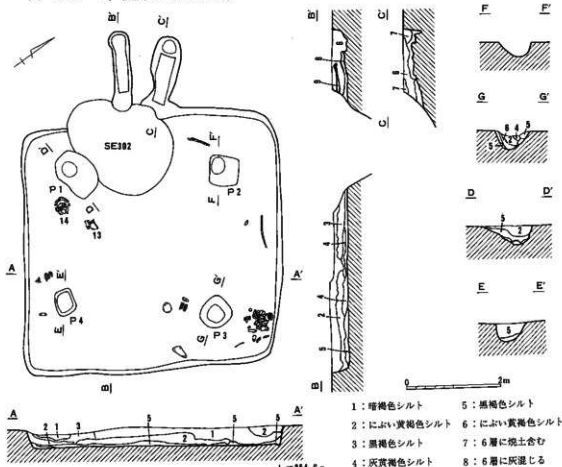
重複関係 SB343、SE302に切られる。

形状 方形。一部調査区域外。

覆土 炭化物及び焼土が大量に含まれる層が覆土下層に観察される。人為埋没と考えたい。明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。貼り替えないが、浅い掘り方を持つ。

柱穴 P1~4。柱痕はみられない。



第142図 SB342

カマド 袖は粘土による構築。2基あり新旧関係にあると思われるが切られて不明。

その他施設 特になし。

遺物 覆土下層、床面に半円形の土器が多い。床面では炭化材、ワラのほかこも石がまとまって出土した。

所見 住居廃絶後、時間をおかずに焼却か。

SB348 (第143図、PL-)

位置 1C区、VI-X15・20グリッド

重複関係 SB365を切り、SB328に切られる。

形状 方形。大部分調査区域外。

覆土 カマドに近い部分の断面を調査したためか炭化物及び焼土が多い。自然埋没と考えたい。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 カマド周辺は堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は不明。

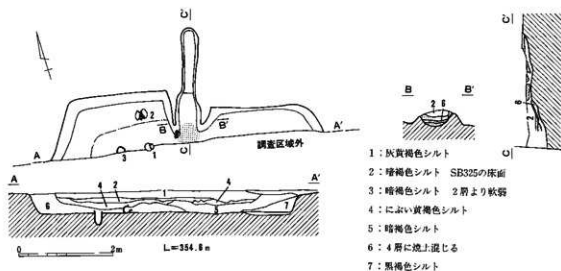
柱穴 不明。多分調査区域外。

カマド 袖は粘土による構築。故意による破壊か判断しかねるが、この時期のカマドとしては支脚がみられないことが気になる。

その他施設 長胴甕が直立して埋められ、頸部を床面に出す。

遺物 覆土下層、床面付近に多い。

所見 調査面積が少なく詳細は不明だが床面に埋められた長胴甕は灰溜めのようなものか。



第143図 SB348

SB349 (第144・145・146図、PL19)

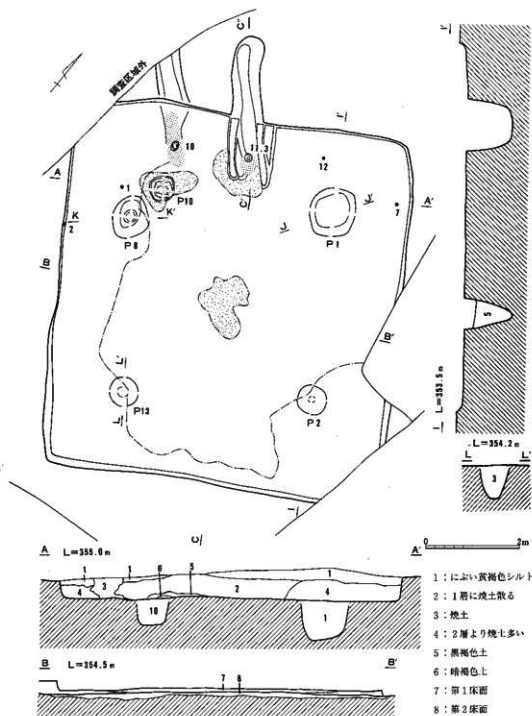
位置 1C区、VI-X13・14・16・19グリッド

重複関係 SB339・341・345・362・363に切られる。

形状 方形?一部調査区域外。

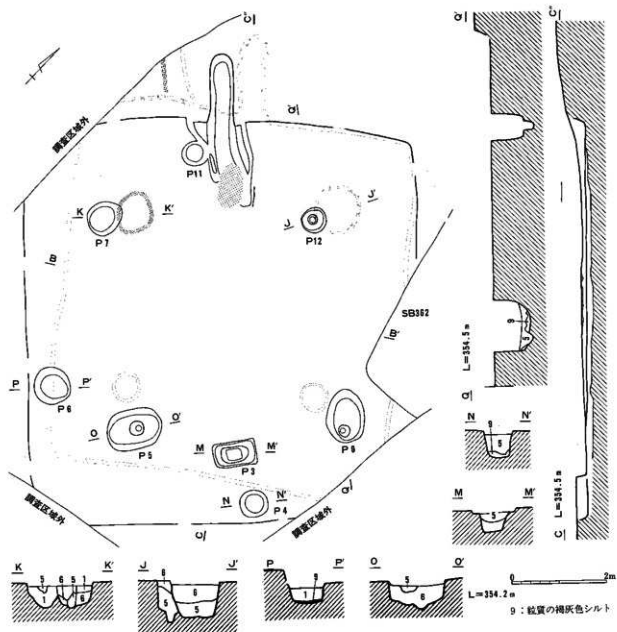
覆土 いくつかに分層されるが漸移的であり、自然埋没と考えたい。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。



第144図 SB349(1)

- 床 面 壁周辺を除き堅固な貼り床が2枚。いずれも10cm程度の厚さに貼っている。
- 柱 穴 新床面では検出できず、すべて旧床面で確認。旧床面P5・7・9・12。P4は棟持ち柱か。P11は灰溜めと思われる。新床面P1・2・8・13。
- カ マ ド 旧床面に1基、新床面に2基(新旧)。袖は粘土による構築。新床面の左カマドは高坏环部を支脚とし、右カマドは高坏脚部に甕の底部をかかせている。
- その他施設 特に見当たらない。
- 遺 物 旧床面で白玉多数。P8掘り方下部から完全な土鈴。内部の玉は球ではなく孔のあいた土玉である。ともに地鎮にかかわるものか。旧床面からは骨も検出されたが取り上げられなかった。



第 図 SB348(2)

第145図 SB349(2)

所 見 床面を噴砂が貫いている。

SB353 (第147図、PL20)

位 置 1 B区、VI- I 02・03・07・08グリッド

重複関係 SB351、SE303を切り、ST309、SD311に切られる。

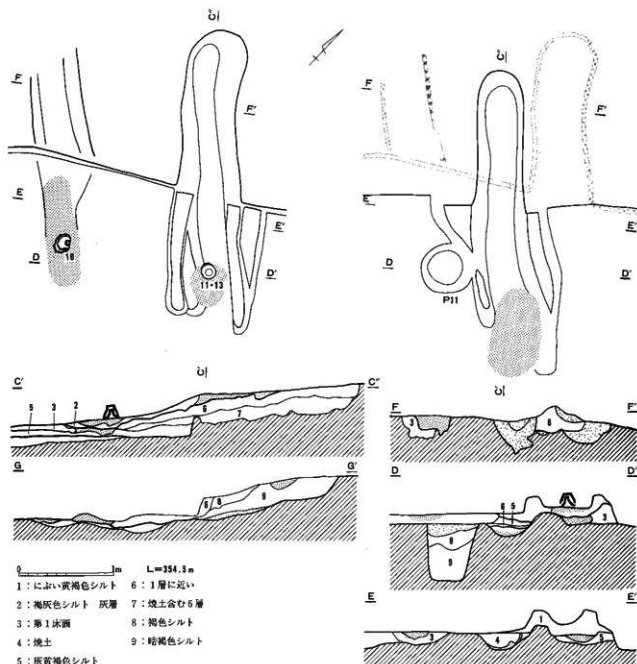
形 状 隅丸方形。一部調査区域外。

覆 土 分層されるが漸移的であり自然埋没と考えたい。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 カマド周辺と住居中央部は堅固な貼り床。浅い掘り方をもつが貼り替えは認められなかった。

柱 穴 P 1～4。6本柱か？いずれも柱痕が明瞭。



第146図 SB349(3)

カマド 袖は粘土補強。土器の支脚。カマド内から検出された土器を原位置とすれば支脚の位置以外に3個体以上の土器がカマドにかけられていたことになる。

其他施設 カマド脇に貯蔵穴。土器片が大量に出土。

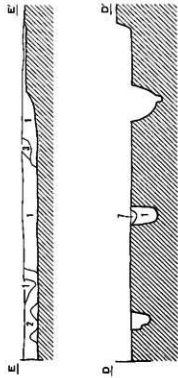
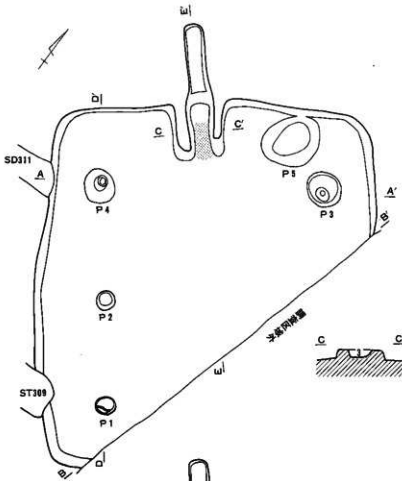
遺物 床面付近から使用時点の状況を残して大量に出土。この時期のセットがほぼそろっていると思われるがやや個体数が多すぎるか。鉄製品、紡錘車等も検出されている。

所見 住居廃絶時点で遺棄された土器群とみなすことができ、古墳時代後期の好資料となろう。

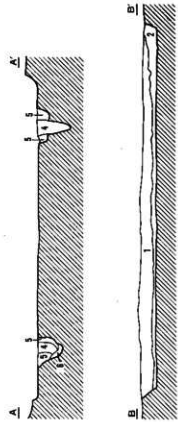
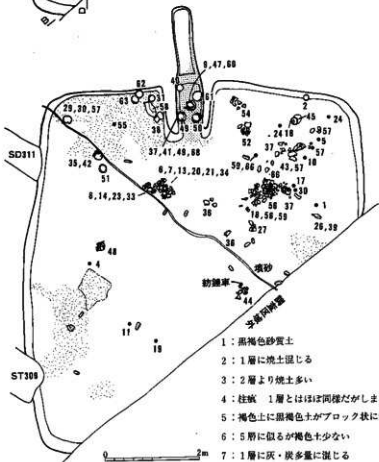
SB355 (第148図、PL-)

位置 1B区、VI-I02グリッド

重複関係 ST311、SD311に切られる。



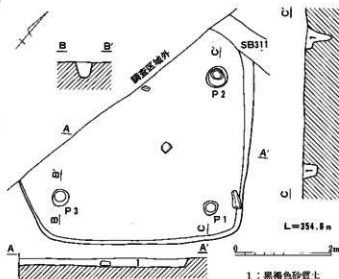
L=254.0m



- 1 : 黒褐色砂質土
- 2 : 1層に焼土混じる
- 3 : 2層より焼土多い
- 4 : 柱状 1層とはほぼ同様だがしまりなし
- 5 : 褐色上に黒褐色土がブロック状に混じる
- 6 : 5層に似るが褐色土少ない
- 7 : 1層に灰・炭多量に混じる

第147図 SB353

- 形状 隅丸方形。一部調査区域外。
 覆土 単層。自然埋没と考えたい。
 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
 床面 軟弱で貼り床、掘り方等は見られない。
 柱穴 P1～3。残りは調査区域外。
 カマド 不明。多分調査区域外。
 その他施設 不明。調査範囲内では特に見当たらない。
 遺物 全般に少なく図示できるものはない。
 所見 遺物は僅少だが柱穴の位置等から古墳時代後期と思われる。



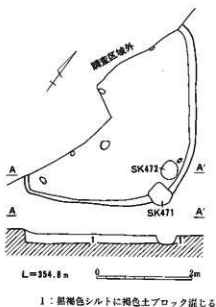
SB357 (第149図、PL-1)

- 位置 1 AB区、VI-M15・20、N11・16グリッド

第148図 SB355

- 重複関係 SK713を切り、SB314、SK471・472に切られる。

- 形状 隅丸方形。一部調査区域外。
 覆土 単層。自然埋没と考えたい。
 壁 明確に検出され、傾いて立ち上がる。
 床面 軟弱で貼り床、掘り方等は見られない。
 柱穴 なし? 調査区域外は不明だが一般的な位置には見当たらない。
 カマド 不明。多分調査区域外。
 その他施設 不明。調査範囲内では特に見当たらない。
 遺物 全般に少ないが壁際からやや大型の破片が検出されている。
 所見 遺物は僅少だが古墳時代後期と思われる。明確な柱穴が確認できないことから、竪穴状遺構ととらえたほうが適当かもしれない。床面全体にこぶし大の礫が散乱していた。



第149図 SB357

SB358 (第150図、PL20)

- 位置 1 C区、IV-X19グリッド
 重複関係 SK477を切り、SB333に切られる。
 形状 長方形? 検出しづらくやや不明瞭。
 覆土 覆土は薄く均質なため人為埋没とする根拠は弱いだが、カマドに灰層がよく残っていたため埋められた可能性も捨て切れない。
 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
 床面 壁際を除き堅固な貼り床。掘り方ははっきりしないがごく浅いか。貼り替えはない。

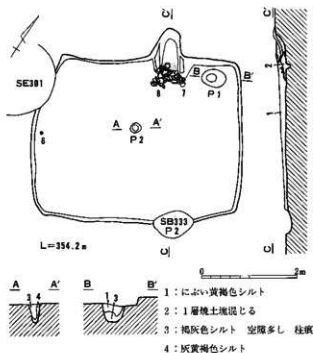
柱 穴 P1・2?一般的な位置とは程遠いが
P2には柱痕が明瞭であった。

カ マ ド 袖には土器、礫など混入。煙道は削平
のため不明。支脚石の抜き取りが明ら
かなため故意による破壊と思われる。

その他施設 特になし。床下については不明。

遺 物 覆土が薄いため下層、特にカマド脇に
半完形の土器が多い。P2から滑石製
白玉が出土している。

所 見 床下を調査していないため柱穴のあり
方はやや確証に欠けるが、しっかりし
たカマドの存在から古墳時代後期の住
居跡でよいと思われる。本跡南側を切
るSB333もほぼ同時期の住居である。



第150図 SB358

SB361 (第151図、PL-)

位 置 1 C区、VI-N06・11グリッド

重 複 関 係 SD322を切り、SB316・318・319・322
・356に切られる。

形 状 方形。約3割をSB356に切られる。

覆 土 均質な単層。自然埋没。

壁 明確に検出されれば垂直～やや傾いて
立ち上がる。

床 面 軟弱であり、貼り替え、掘り方はみら
れなかった。

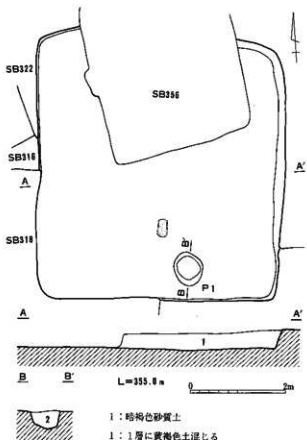
柱 穴 不明。P1は柱穴とするにはやや根拠
に欠ける。

カ マ ド 切られて不明。

その他施設 特になし。

遺 物 全体に少なく、図示すべきものは見当
たらぬ。

所 見 不明な点が多いが、わずかな遺物から
古墳時代としておきたい。



第151図 SB361

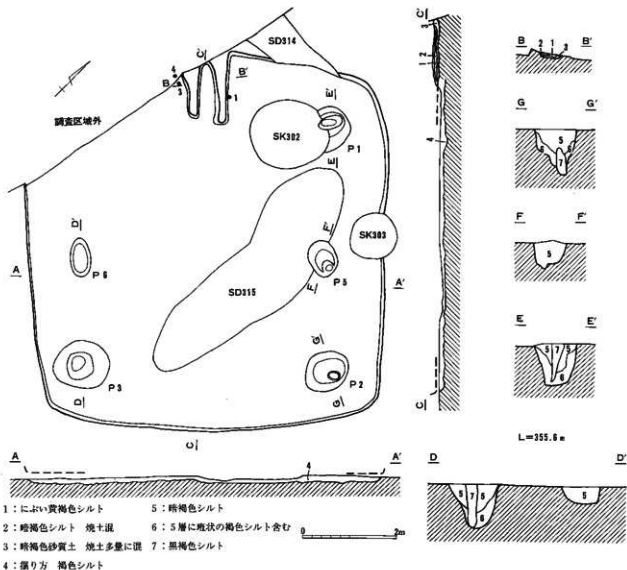
SB371 (第152図、PL20)

位 置 1 B区、VI-I11・12・16・17・22グ
リッド

重 複 関 係 SB369、SD314・315、SK302・303・450、SX301に切られる。

形 状 方形。一部調査区域外。

覆 土 覆土ほとんどなし。



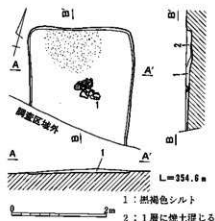
第152図 SB371

- 壁 上層遺構の調査により壁の大半を破壊したため立ち上がりはほとんど不明。
- 床 面 カマド付近の貼り床のみ明確。他の部分では掘り方のみとなっていた。掘り方は浅く平坦である。
- 柱 穴 P1～6。6本柱だがP5・6はやや小さく、柱痕も明確ではないため補助的なものか。
- カマド 袖は粘土補強。支脚はない。煙道が長く伸びるタイプと思われるが調査区域外。
- その他施設 特になし。
- 遺物 カマド左脇にややまとまってみられた以外、遺物僅少。
- 所見 古墳時代後期の典型的な住居跡。6本柱はやや大型の住居では一般的か。

SB372 (第153図、PL-)

- 位置 1B区、VI-N06・07・11・12グリッド
- 重複関係 SB321、SD322を切り、SB319、SK350・438・439に切られる。
- 形状 長方形?一部調査区域外。
- 覆土 薄く単層。自然埋没か。

- 壁 明確に検出されるが覆土が薄いため立ち上がりの状況はほとんど不明。
- 床 面 不明確かつ軟弱。貼り床、掘り方等はない。
- 柱 穴 なし。
- カマド 不明。焼土の分布から西カマドであったと推定されるが完全に破壊されており形跡をとどめていない。
- その他施設 特になし。
- 遺 物 全般に少ないが床面中央部、やや浮いた地点にまもって出土した。
- 所 見 短辺2m強の小型住居。他の住居と対をなすいわゆるカマド屋か。



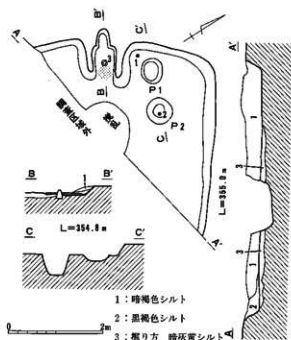
第153図 SB372

SB385 (第13図、PL-)

- 位 置 1A区、VI-S06グリッド
- 重複関係 SB312、SM206・208を切る。
- 形 状 不明。コーナー部分を調査したのみでほとんど調査区域外。
- 覆 土 炭化物を多量に含む間層が観察され、埋没過程で焚火が行われた模様。
- 壁 やや傾いて立ち上がる。
- 床 面 軟弱で貼り床、掘り方等は調査範囲内では検出されなかった。
- 柱 穴 不明。多分調査区域外。
- カマド 不明。
- その他施設 不明。
- 遺 物 床面から1点出土しているが図示できなかった。
- 所 見 古墳時代後期の住居跡と思われるが調査面積が少なすぎ、詳細は不明。

SB386 (第154図、PL-)

- 位 置 唐猫神社地点。
- 重複関係 なし。中央部を床面まで攪乱されている。
- 形 状 隅丸方形。約半分が調査区域外。
- 覆 土 分層されるが漸層的であり、自然埋没と考えたい。
- 壁 明確に検出されればは垂直~やや傾いて立ち上がる。
- 床 面 貼り床だが中央部付近のみ堅固。浅い掘り方を伴う。貼り替えはみられなかった。
- 柱 穴 P2。これ以外の柱穴は調査区域外。P2底部から完形の埴1点。



第154図 SB386

カマド 袖は粘土補強。支脚石あり。煙道が長く伸びるタイプと思われるが、検出面が低いため不明。燃焼部、右袖脇に甕。破壊時点での遺棄か。

その他施設 P1。灰溜めか。甕、坏が出土。

遺物 遺物はカマド付近に限られる。遺棄によるものと考えたい。

所見 古墳時代後期の住居跡であるが、ほぼ同時期とみられるSB387が約50cmを隔てて近接している。

SB387 (第155図、PL-)

位置 唐猫神社地点。

重複関係 SM234を切る。

形状 隅丸方形。大部分が調査区域外。

覆土 分層されるが漸移的であり、自然埋没と考えたい。

壁 明確に検出されればほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。

床面 貼り床だが壁際は軟弱。ごく浅い掘り方を伴う。貼り替えはみられなかった。

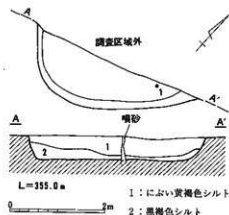
柱穴 不明。多分調査区域外。

カマド 不明。

その他施設 不明。

遺物 覆土全体に多いが破片ばかりで図になるものは少ない。獣と思われる骨が検出されたが取り上げられなかった。

所見 古墳時代後期の住居跡。噴砂が覆土上端まで達している。



第155図 SB387

SB401 (第156図、PL20)

位置 1D区、IV-D22・23、T02・03グリッド

重複関係 SB409?・515を切り、SD324、SK781・783・788を切る。

形状 隅丸方形?一部調査区域外のうえ切られて不明。

覆土 単層。検出面が低い埋没状況不明。

壁 カマド付近のみ残存。覆土がわずかなため立ち上がりの形状も不明。

床面 壁際を除きやや堅固。貼り床ではない。掘り方等はみられない。

柱穴 切られて不明。

カマド 新旧2基。右側のカマドに焼土、土器等が残っているため新しいと考える。袖は粘土補強。支脚はない。火床の土器は遺棄されたものか。

その他施設 特になし。

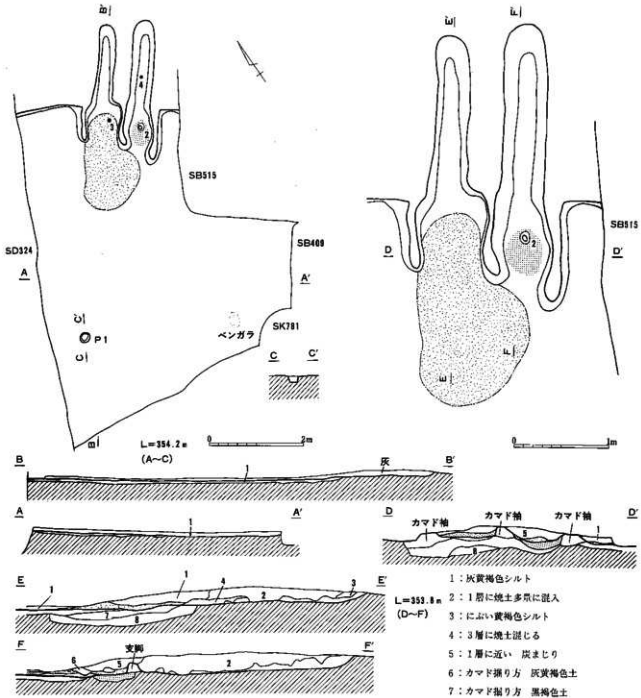
遺物 覆土が10cm前後のため不明確であるが床面遺物と断定できるものはなく、数も少ない。ベンガラと思われる赤色顔料が検出されているが、床からはやや浮いているか。

所見 古墳時代後期のやや大型の住居跡だが調査できたのはほとんどカマドのみで詳細は不明。

SB402 (第157図、PL21)

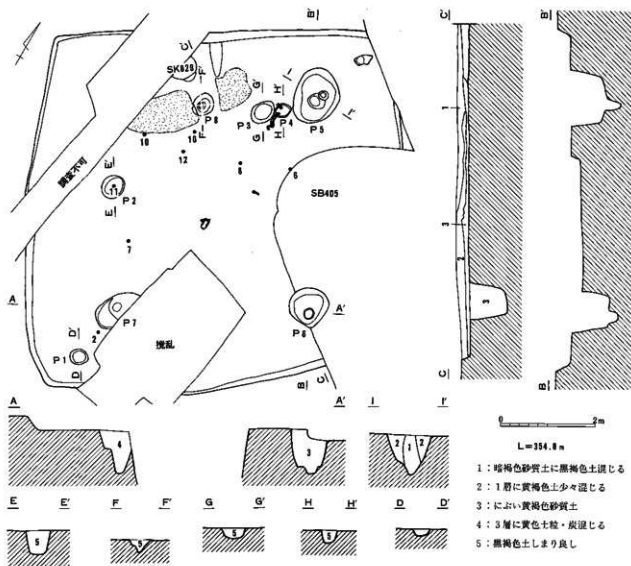
位置 1D区、IV-S05・10、T01・06グリッド

重複関係 SB411を切り、SB403・405・413、SD324、SK829を切る。



第156図 SB401

- 形状 方形。一部調査区域外の上切られて不明。
- 覆土 灰が大量に含まれる層があるが詳細不明。
- 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。
- 床面 堅固な貼り床。浅い掘り方を伴う。貼り替えはみられない。
- 柱穴 P 5～7。柱痕あり。残りは調査不能部分に存在すると推定される。P 1・3・4は補助柱穴か。P 2・8は何らかの施設と考えたい。
- カマド 完全に破壊されているが軸の痕跡を確認している。
- その他施設 P 2。土器片がまとめて検出されたが性格不明。



第157図 SB402

遺物 覆土全体に多いが完形品はごく少なく、投棄または流れ込みが多いと思われる。床面付近からウマの右脛骨が出土している。

所見 古墳時代後期の一般的な住居跡。

SB403 (第158図、PL-)

位置 1D区、IV-T01・02グリッド

重複関係 SB405、ST319、SD324に切られる。

形状 隅丸方形? 切られて不明。

覆土 単層。自然埋没?

壁 傾いて立ち上がる。

床面 軟弱。貼り替え、掘り方等はない。

柱穴 P1・2。残りは切られて不明。柱痕状の一段深い部分が観察された。

カマド 袖は粘土補強。燃焼部に土器片がみられるので土器で袖を補強している可能性もある。ほぼ完形の高坏を倒置し支脚としている。

その他施設 不明。

遺物 覆土、床面とも多くなく細片ばかりである。投棄・遺棄いずれとも言えず、当然流れ込みの可能性がある。

所見 篠ノ井遺跡群新幹線地点内の古墳時代後期の住居跡は軸をN-45°-Wに取るものがほとんどで本跡も例外ではないがカマドを南東に持つ住居は珍しい。

SB405 (第15図、PL-)

位置 1 D区、IV-T01グリッド

重複関係 SB402~404を切り、SB406、ST319、SD324、SK784、SC304に切られる。

形状 隅丸方形?

覆土 分層されるが明確な差はない。自然埋没?

壁 明確に検出され、傾いて立ち上がる。

床面 軟弱。掘り方を確認しているが面的な調査はできなかった。貼り替え等はない。

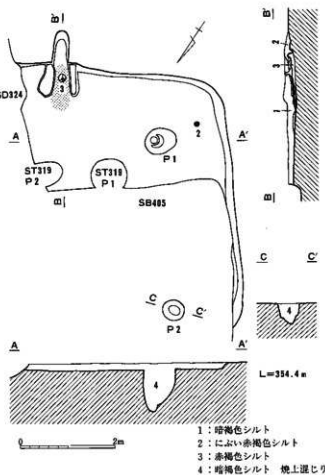
柱穴 不明。

カマド 不明。

その他施設 不明。調査範囲内では検出されなかった。

遺物 破片が少量出土したのみ。壁際に多いことから投棄によるものと考えたい。

所見 遺物は少ないがSB403を切るため古墳時代後期でもやや新しいか。



第158図 SB403

SB409 (第15図、PL-)

位置 1 D区、IV-O23、T03グリッド

重複関係 SB401・515を切り、SK781に切られる。

形状 方形?大部分調査区域外。

覆土 単層。自然埋没。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。厚さ20~30cmの平坦な掘り方をもつ。

柱穴 不明。

カマド 不明。

その他施設 不明。

遺物 遺物ほとんどなし。

所 見 遺物は僅少だが検出面の高さ、覆土の状況、主軸方向等から古墳時代後期と考えたい。

SB410 (第15図、PL-)

位 置 1 D区、IV-O23、T03グリッド

重複関係 SD329、SK856に切られる。

形 状 方形?大部分調査区域外。

覆 土 単層。自然埋没。

壁 やや不明確であるが、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 部分的に堅固であるがやや不明確。小規模な掘り方をもつが面的な調査はしていない。貼り替え等は見られない。

柱 穴 不明。

カ マ ド 不明。

その他施設 不明。

遺 物 遺物ほとんどなし。

所 見 遺物は僅少だが検出面の高さ、覆土の状況、主軸方向等から古墳時代後期と考えたい。

SB411 (第159図、PL21)

位 置 1 D区、IV-N25、S05グリッド

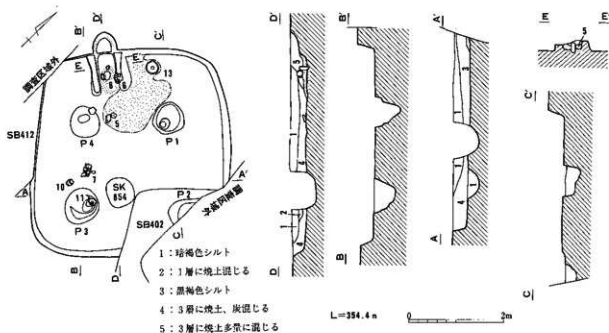
重複関係 SB402・412、SK854・855に切られる。

形 状 隅丸方形?大部分調査区域外。

覆 土 分層されるが明確な根拠に欠ける。自然埋没?

壁 明確に検出され、ほぼ垂直~やや傾いて立ち上がる。

床 面 カマド付近のみ堅固な貼り床。他の部分では明確でない。掘り方、貼り替え等は見られない。

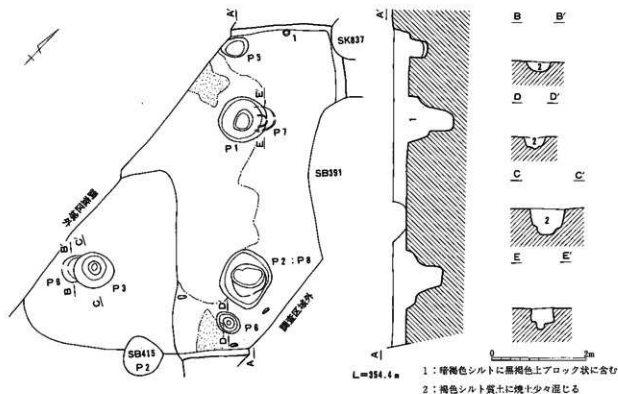


第159図 SB411

- 柱 穴 P1～4。柱底は明確でない。
- カ マ ド 地山に近いやや粘性のある土で袖を構築。支脚石も残存。燃焼部に半完形の甕。遺棄によるものか。
- その他施設 特になし。
- 遺 物 カマド周辺からほぼ完形の坏・甕（大・小）。カマド焚き口付近の床下からガラス小玉。床面の遺物は遺棄によるものと考えられる。
- 所 見 古墳時代後期の典型的な住居跡としてはやや小規模か。甕が大小あることが注目される。

SB414 (第160図、PL21)

- 位 置 1D区、IV-S05・09・10グリッド
- 重複関係 SB391・415、SK817・856・860に切られる。
- 形 状 方形?一部調査区域外。
- 覆 土 単層。自然埋没と思われる。
- 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
- 床 面 堅固であるが貼り床は明確でない。方形周溝状の掘り方をもつ。貼り替え等はみられない。
- 柱 穴 P1～3。残りは調査区域外。P5・6は何らかの施設と思われるが判然としない。
- カ マ ド 不明。多分調査区域外。
- その他施設 P5はカマド脇の灰溜めか。
- 遺 物 覆土下層に多いが、細片ばかりで図になるものはほとんどない。
- 所 見 調査の都合から掘り方を面的に精査した住居跡は少ないが、古墳時代後期で明確な方形周溝状の掘り方が確認されたものは本跡とSB564のみである。



第160図 SB414

SB415 (第161図、PL-)

位置 1D区、IV-S09・10・14・15グリッド

重複関係 SK839に切られる。

形状 方形?約半分が調査区域外。

覆土 単層。自然埋没と思われる。

壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。

床面 部分的に堅固な貼り床。掘り方を確認しているが面的な調査はしていない。貼り替等はみられなかった。東壁際に焼土が散っている部分がみられた。

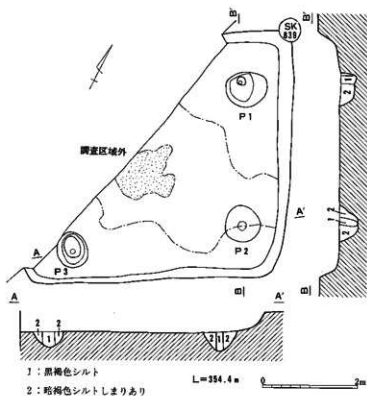
柱穴 P1~3。柱痕が明瞭。残りは調査区域外。

カマド 不明。多分調査区域外。

その他施設 不明。調査範囲内では見当たらない。

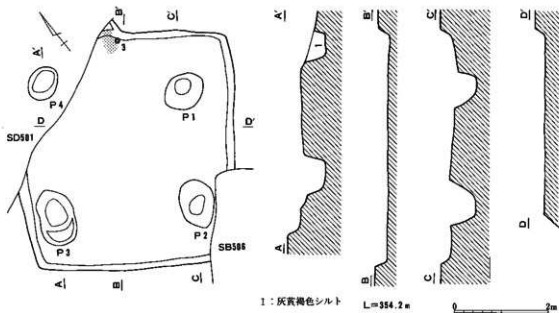
遺物 覆土全体に少ない。特筆すべきものはない。

所見 古墳時代後期の住居跡であるが柱穴が壁際に寄るタイプである。



第161図 SB415

SB505 (第162図、PL21)



第162図 SB505

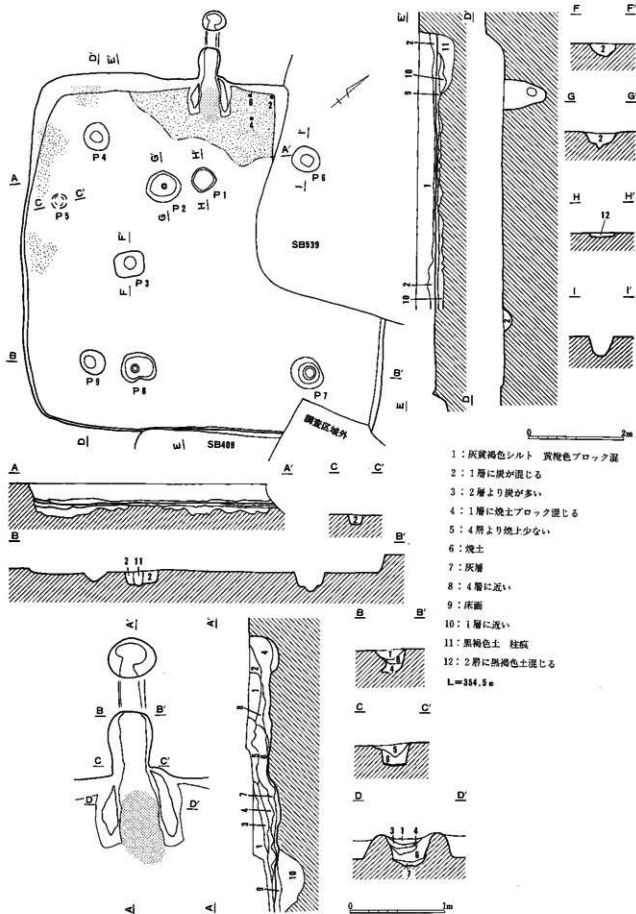
位置	1 E区、IV-J23グリッド
重複関係	SB522を切り、SB506に切られる。
形状	方形。
覆土	単層。自然埋没と思われる。
壁	明確に検出され、ほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。
床面	堅固な貼り床。掘り方は中央部でほとんど認められず、壁際で深さ15～20cmとなる。しかし周溝状ではない。貼り替え等はみられなかった。
柱穴	P1～4。床面をわずかに削って検出。
カマド	袖がわずかに残る程度で構造等は明らかでない。支脚として俗に鯉採りと呼ばれる細長い甕の底部付近を倒置している。
その他施設	特になし。
遺物	全体に少なく、特筆すべきものは上記の鯉採りのみである。
所見	古墳時代後期の住居跡であるがやや時期が下るか。

SB513 (第16図、PL22)

位置	1 D区、IV-O11・12・16・17グリッド
重複関係	SB516・518・519を切る。
形状	方形。
覆土	均質な単層。自然埋没と思われる。
壁	明確でなく、ほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。
床面	堅固だが貼り床程ではない。掘り方、貼り替え等はみられなかった。北東壁付近に薄く焼土が広がっている。
柱穴	不明。P1～4は異様に深く底部まで調査できなかった。このため井戸等の別遺構の可能性もある。P2・3は浅く、位置も適正でないため何らかの施設と考えたい。
カマド	床面をわずかに削って検出。袖がわずかに残る程度で構造等は明らかでない。
その他施設	支脚とP2・3があるか性格不明。
遺物	全体に少なく、特に床面にはほとんどなし。
所見	検出面の高さ等から概期の住居跡らしいが不明な点が多く、竪穴状遺構としておきたい。

SB515 (第163図、PL-)

位置	1 D区、IV-O22・23、T02・03グリッド
重複関係	SB402・517切り、SB409・539、ST507に切られる。
形状	方形。
覆土	床面付近に炭化物を含む薄い層及び焼土がある以外均質な単層。住居廃絶時点で焚火し、その後自然埋没したと思われる。
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。
床面	堅固な貼り床。壁付近が溝状に深くなる掘り方が観察されるので多分方形周溝状の掘り方になると思われる。
柱穴	P4・6・7・9。P8は立て替えか。他のピットは性格不明。
カマド	袖は粘土補強。支脚なし。カマド脇、焚き口付近に土器が多いが使用時の状況ではない。



第163図 SB515

その他施設 ビットがあるが性格不明。

遺物 覆土下層、カマド脇に多く住居廃絶時に使用不能の土器を遺棄したものと考えたい。

所見 住居廃絶時点での焚火はしばしば観察されるが、古墳時代後期には特に多いようである。

SB517 (第164図、PL22)

位置 1 D区、IV-O11・12・16・17グリッド

重複関係 SB515・516・539、ST508に切られる。

形状 方形。

覆土 単層であるが2種類の土が混入してかき回されたような状態になっており、人為的に埋め戻されたものと思われる。

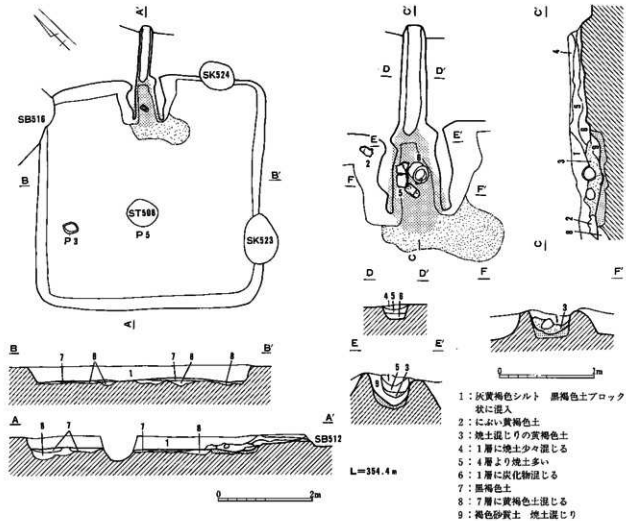
壁 明確でなく、ほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。掘り方は壁付近に溝状に掘られているが、周溝状になるか明確でない。貼り替え等は見られなかった。

柱穴 不明。床面でいくつかのビットが検出されたが別遺構の可能性が高い。

カマド 袖は粘土補強。燃焼部に半完形の土器が複数みられ、支脚石も残っていた。

その他施設 特になし。



第164図 SB517

遺物 覆土内には少なく、カマド周辺の床面付近にややまとまってみられた。遺棄によるものと考えたい。シカの右中足骨が検出されている。

所見 柱穴が明らかでないが古墳時代後期の典型的な住居跡である。

SB518 (第165図、PL22)

位置 1 D区、IV-O12グリッド

重複関係 SB520を切り、SB513・519・544、ST501・508に切られる。

形状 方形。

覆土 分層されるが明確な根拠に欠ける。自然埋没か。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。

床面 軟弱で掘り方、貼り替え等は観察されなかった。

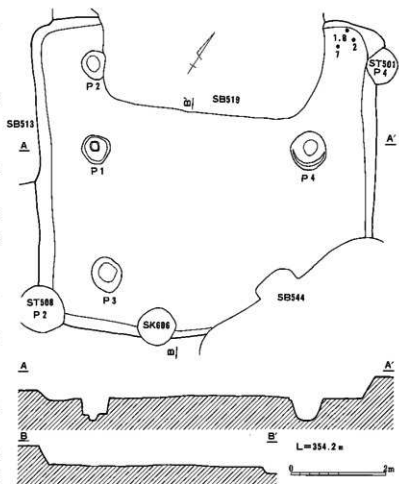
柱穴 P 1～4。6本柱と思われる。

カマド 切られて不明。

その他施設 不明。調査範囲内には見当たらない。

遺物 覆土上層に多く、流れ込みまたは投棄によるものと思われる。

所見 古墳時代後期の住居としては床が軟弱である。



第165図 SB518

SB520 (第166図、PL-))

位置 1 D区、IV-O12グリッド

重複関係 SB511・513・518・519に切られる。

形状 方形?切られて不明。

覆土 単層。自然埋没か。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。

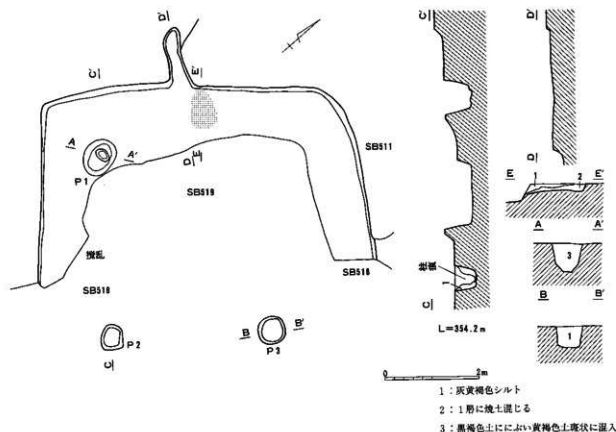
床面 堅固であるが貼り床ではない。掘り方等はない。

柱穴 P 1～3。残りは切られて不明。

カマド 煙道と火床のみ残存。しかも位置的にズレている。火床を新しいカマドと考えたい。

その他施設 不明。調査範囲内には見当たらない。

遺物 破片ばかりで図になるものは少ない。



第166図 SB511

所見 カマドからP1にかけて焼土が濃密に散布されていることから、住居廃絶後の焼却と考えたい。

SB529 (第167図、PL-)

位置 1E区、IV-O02・03・07・08グリッド

重複関係 SB538・543を切り、SB527、SD501に切られる。

形状 隅丸方形?切られて不明。

覆土 単層。検出面が低いため埋没過程不明。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。

床面 中央部分に堅固な貼り床がみられる。掘り方、貼り替え等は観察されなかった。

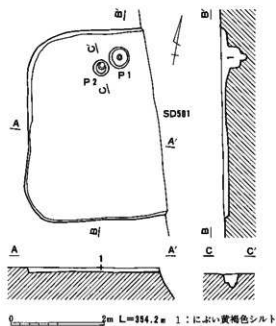
柱穴 不明。P1・2とも位置が適正でない。

カマド 切られて不明。北壁付近に焼土が濃密に散っているのではなかろうか。

その他施設 P1・2。性格不明。

遺物 全体に少なく、図になるようなものはない。

所見 カマドも柱穴もはっきりしないため堅穴状遺構として扱うのが適当だろう。時期決定の根拠に



第167図 SB529

乏しいが、わずかな遺物・検出面のレベル等から古墳時代後期としたい。

SB530 (第168図、PL-)

位置 1 E区、IV-O21・22グリッド

重複関係 SB536、SD324に切られる。

形状 隅丸方形?切られて不明。

覆土 均質な単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、ほぼ垂直ーやや傾いて立ち上がる。

床面 中央部分に堅固な貼り床がみられる。掘り方、貼り替え等は観察されなかった。P1とP3の間に薄い炭化物と焼土の堆積がみられた。

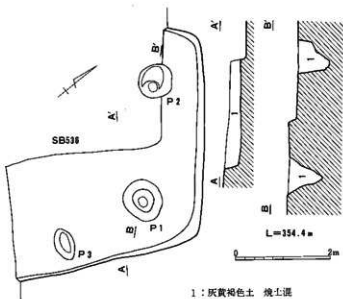
柱穴 P1・2。P3は補助柱穴か。

カマド 切られて不明。

その他施設 P3。性格不明。

遺物 全体に少ないが床面付近の壁際からややまとまって出土した。

所見 古墳時代末のSB530に切られていること、遺物・検出面のレベル等から古墳時代後期としたい。



第168図 SB530

SB533 (第169図、PL22)

位置 1 E区、IV-J19グリッド

重複関係 SB524に切られる。

形状 隅丸方形?約半分が調査区域外。

覆土 均質な単層。自然埋没?

壁 明確ではないが、ほぼ垂直ーやや傾いて立ち上がる。

床面 中央部分に堅固で貼り床状。他の部分ははっきりしない。掘り方、貼り替え等は観察されなかった。

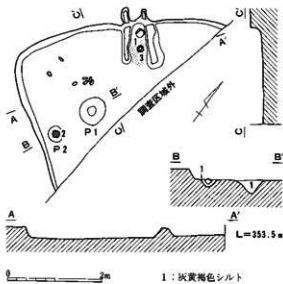
柱穴 P1。残りは調査区域外。P2は補助柱穴か。

カマド 粘土補強カマド?詳細不明。煙道が長いタイプだったと思われる。焼焼部から短頸壺。

その他施設 切られて不明。

遺物 全体に少ないが床面付近の壁際から、ややまとまって出土した。

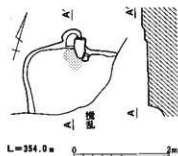
所見 遺物・検出面のレベル等から古墳時代後期としたい。



第169図 SB533

SB534 (第170図、PL-)

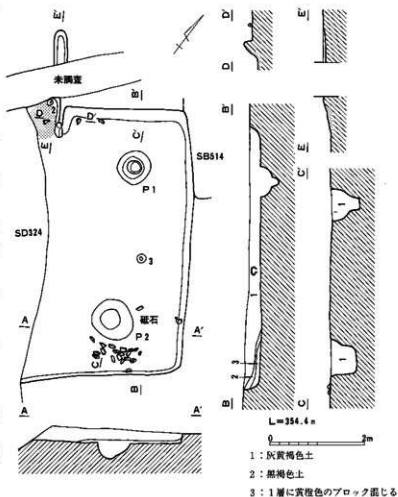
- 位置 1 E区、IV-J 18グリッド
 重複関係 なし。
 形状 隅丸方形? カマド付近を調査したのみ。
 覆土 均質な単層。自然埋没?
 壁 明確ではないが、ほぼ垂直~やや傾いて立ち上がる。
 床面 調査部分は堅固で貼り床状。掘り方、貼り替え等は観察されなかった。
 柱穴 不明。
 カマド 粘土補強カマド? 検出面が低く、詳細不明。長胴甕、甌が出土している。
 その他施設 不明。
 遺物 カマドを除き、ほとんど遺物なし。
 所見 遺物、検出面のレベル等から古墳時代後期としたい。



第170図 SB534

SB536 (第171図、PL-)

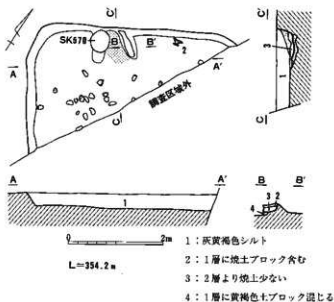
- 位置 1 E区、IV-O 21グリッド
 重複関係 SB514・530・571を切り、SD324に切られる。
 形状 方形。切られて不明。
 覆土 壁際に三角堆土がみられるため自然埋没と考えられる。
 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
 床面 堅固であるが貼り床状ではない。掘り方、貼り替え等は観察されなかった。
 柱穴 P1・2。残りは切られて不明。
 カマド 右袖先端に石。粘土補強カマド? 支脚石なし。
 その他施設 不明。
 遺物 覆土上層に多く、石製紡錘車、鉄製刀子などがみられたが本跡との帰属関係は不明。
 所見 遺物、検出面のレベル等から古墳時代末か。



第171図 SB536

SB541 (第172図、PL-)

位置 1D区、IV-O09・13・14グリッド
 重複関係 ST501、SD501、SK566・570に切られる。
 形状 方形?カマド付近を調査したのみ。大部分調査区域外。
 覆土 均質な単層。自然埋没と考えられる。
 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
 床面 堅固であるが貼り床状ではない。掘り方、貼り替え等は観察されなかった。
 柱穴 切られて不明。なし?
 カマド 粘土補強カマド?支脚石なし。詳細不明。



第172図 SB541

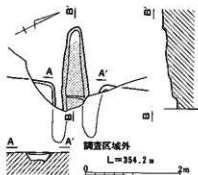
其他施設 不明。

遺物 覆土下層に多いが、細片ばかりで図になるものは少ない。床面付近にこも石が散乱していた。

所見 調査面積が狭く、明確な根拠に欠けるが古墳時代末の住居跡か。

SB545 (第173図、PL-)

位置 1D区、IV-O23グリッド
 重複関係 不明。ほとんどが調査区域外。カマドの一部を調査したのみ。
 形状 不明。多方形。
 覆土 不明。
 壁 不明。
 床面 不明。
 柱穴 不明。
 カマド 袖粘土補強。煙道は長い。



第173図 SB545

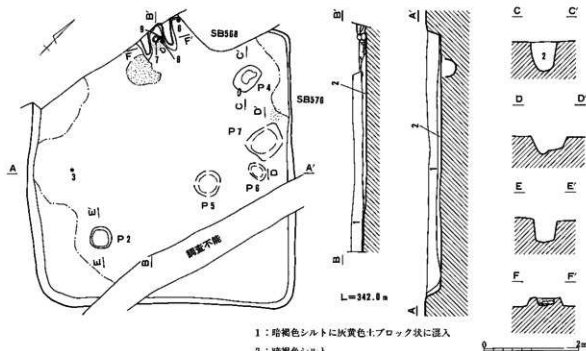
其他施設 不明。

遺物 カマド内より半完形の坏等。

所見 遺物、カマドの形態から古墳時代後期と思われるが調査範囲が狭く詳細不明。

SB546 (第174図、PL22)

位置 1D区、IV-O06・11グリッド
 重複関係 SB568・576、SK677・679、ST504に切られる。
 形状 方形。一部調査区域外。
 覆土 単層。自然埋没。
 壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。
 床面 中央部分に2枚の貼り床。壁際は不明確。掘り方は不明。



1：暗褐色シルトに灰黄色土ブロック状に混入
2：暗褐色シルト

第174図 SB546

柱 穴 P1・2・4。残りは調査区域外。P5～7は何らかの施設か。

カ マ ド 袖粘土補強? 地山の切り出しではない。ほぼ完形の甕に坏をかぶせて支脚としている。

その他施設 P5～7。性格不明。

遺 物 覆土全体に多く、カマド周辺の土器は遺棄の可能性が高い。

所 見 P7付近に旧火床と思われる焼土がみられることから床の貼り替えに伴いカマドも移動したことが窺える。北カマドから西カマドへの移動である。

SB580 (第16図、PL-)

位 置 1D区、IV-O11・16グリッド

重複関係 SK644を切り、SB559、SK613に切られる。

形 状 方形? 切られて不明。

覆 土 単層だが2種の土が混じるため人為埋没か。

壁 不明。貼り床を追ってプランを決定した。

床 面 堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等はみられなかった。

柱 穴 不明。

カ マ ド 不明。多分調査区域外。

その他施設 不明。

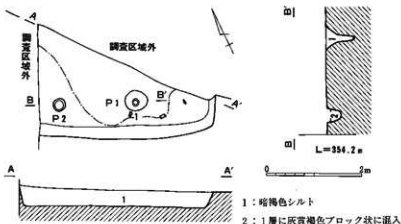
遺 物 覆土全体に少なく、床面遺物ほとんどなし。

所 見 検出状況から古墳時代後期と思われるが調査面積が狭く詳細不明。

SB581 (第175図、PL-)

位 置 1D区、IV-J17グリッド

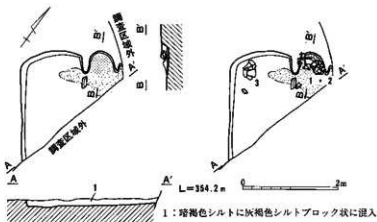
- 重複関係 SB562を切る。
 形状 方形。大半が調査区域外。
 覆土 単層。自然埋没。
 壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。
 床面 貼り床であるが、あまり堅固ではない。浅い掘り方がみられた。貼り替えはない。
 柱穴 P1。残りは調査区域外。P2は何らかの施設か。
 カマド 不明。多分調査区域外。
 その他施設 P2。性格不明。
 遺物 覆土全体から少量出土。床面遺物は壁際から少々。
 所見 遺物から古墳時代後期と思われるが調査面積が狭く詳細不明。



第175図 SB561

SB562 (第176図、PL-)

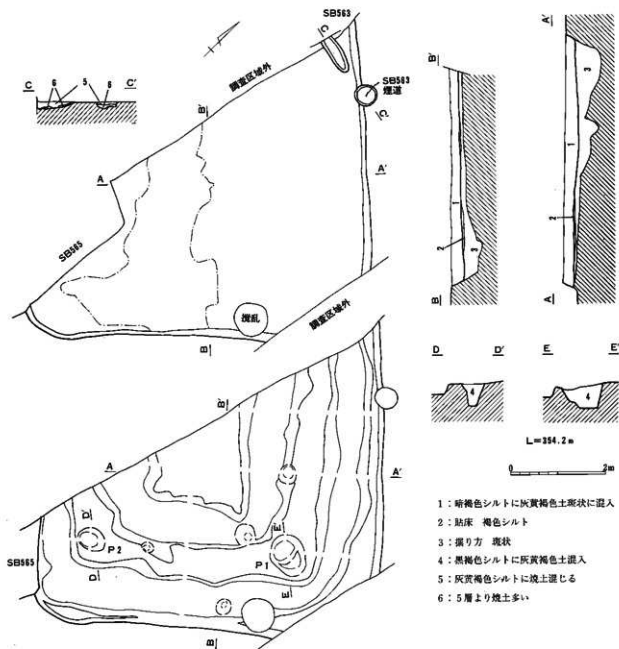
- 位置 1 D区、IV-J 17グリッド
 重複関係 SB561に切られる。
 形状 方形? 大半が調査区域外。
 覆土 単層だがブロック状の断面が観察され人為埋没と思われる。
 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
 床面 堅固な貼り床。浅く平坦な掘り方がみられた。貼り替えはない。
 柱穴 不明。調査区域外?
 カマド 地山と同質の土で構築? 袖の大半が破壊されている。支脚石と思われる礫が袖付近で検出された。
 その他施設 不明。
 遺物 覆土全体に多いが細片ばかりである。カマドから長胴甕2個体。北西コーナーの床面から大型甕とみられる大型破片。
 所見 時期決定にかかわる根拠に乏しいが古墳時代末あたりか。



第176図 SB562

SB564 (第177図、PL-)

- 位置 1 E区、IV-J 16・17・21・22グリッド
 重複関係 SB563・565に切られる。
 形状 方形。約半分が調査区域外。
 壁 明確に検出され、傾いて立ち上がる。
 床面 部分的に堅固な貼り床。中央部が高い、二重周溝状の掘り方をもつ。貼り替えは観察されな



第177図 SB564

かった。

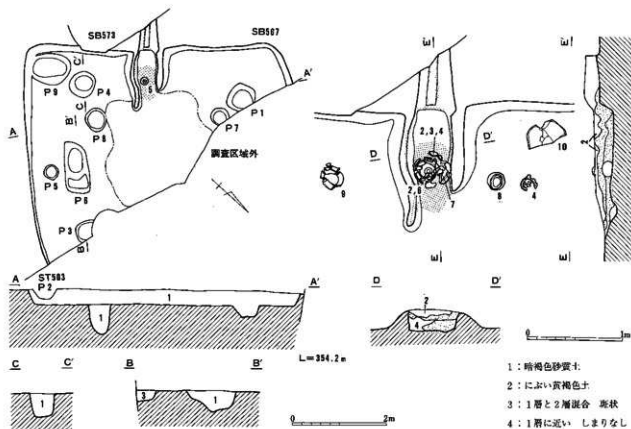
柱 穴 P1・2。残りは調査区域外。

カ マ ド 不明。多分調査区域外。

その他施設 特になし。

遺 物 覆土・床面とも遺物僅少。

所 見 9世紀の遺物も検出されているが住居の規模、軸の方向、柱穴が明確であること等から古墳時代後期と考えたい。二重の掘り方から住居の拡張も想定したが、柱穴がP1・2のみであることから最初から二重の掘り方だったと思われる。



第178図 SB567

SB567 (第178図、PL23)

- 位置 1 E区、IV-J21・22、O01・02グリッド
- 重複関係 SK685を切り、SB526・573、ST503・654・656・658に切られる。
- 形状 方形。一部調査区域外。
- 覆土 単層。自然埋没?
- 壁 明確に検出され、傾いて立ち上がる。
- 床面 堅固な貼り床が部分的に存在。掘り方がみられたが詳細不明。貼り替えはない。
- 柱穴 P1・3・4・6。6本柱と思われるが他は調査区域外。P7・8も柱穴とすれば4本柱から6本柱への立て替えか。
- カマド 袖は地山との区別が困難。長胴甕が火床中央にみられるので原位置をとどめられていると考えられる。丸底の甕を倒置して支脚としている。
- その他施設 P9は灰溜めの穴か。P5は性格不明。
- 遺物 覆土全般に多く、床面には大型破片が散乱。カマド周辺の土器は遺棄によるものと考えたい。
- 所見 古墳時代後期の典型的な住居跡。本跡程度の規模で6本柱はやや珍しい。

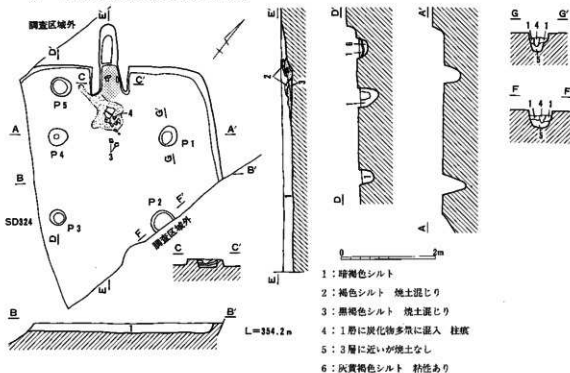
SB570 (第16図、PL-)

- 位置 1 D区、IV-N20グリッド
- 重複関係 なし。

- 形状 方形?ほとんどが調査区域外。
 覆土 分層されるが明確な根拠に欠ける。自然埋没?
 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
 床面 軟弱。柱穴の周辺にのみ小規模な掘り方がみられた。貼り替えはない。
 柱穴 P1。他は調査区域外。
 カマド 不明。
 その他施設 不明。
 遺物 遺物ほとんどなし。
 所見 検出面のレベル等から古墳時代後期が。

SB571 (第179図、PL23)

- 位置 1D区、IV-O16・21グリッド
 重複関係 SB514・536、SD324、SC305に切られる。
 形状 方形?一部調査区域外。
 覆土 単層。自然埋没?
 壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。
 床面 堅固な貼り床。小規模な掘り方がみられたが詳細不明。貼り替えはない。
 柱穴 P1~4。柱痕が明瞭。
 カマド 粘土補強の袖。支脚石が残存。廃絶時点での破壊か。
 その他施設 P5。灰溜めか。
 遺物 覆土中には少ない。床面遺物はカマド周辺のみ。
 所見 古墳時代後期の典型的な住居跡。



第179図 SB571

SB575 (第16図、PL-)

- 位 置 1 E区、IV-O01グリッド
 重複関係 ST503に切られる。
 形状 方形?ほとんどが調査区域外。
 覆 土 下層はブロック状に土が混じり、人為的に埋め戻されたらしい。上層は均質な砂質土で自然埋没と考えたい。
 壁 不明確であり、やや傾いて立ち上がる。
 床 面 やや堅固。貼り床、掘り方等は見られない。
 柱 穴 不明。
 カ マ ド 不明。
 その他施設 不明。
 遺 物 遺物僅少。
 所 見 大半が調査区域外で明確な根拠に欠けるが、検出時の状況等から古墳時代後期の住居跡か。

(3) その他の遺構

SD322 (第180図、PL23)

- 位 置 1 B区、IV-N01・06・11・12グリッド
 重複関係 SM221～3・229・230・238、SD323を切り、SB319・320・322・325・356・361・372、SK360・362～370・378・379に切られる。
 形状・規模 幅40～64cm、深さ30～40cm。北北西～南南東方向に伸び調査区域内では17.5m。
 覆 土 褐色砂ブロック、焼土・炭化物を含む。人為埋没か。
 遺 物 拳大～人頭大の礫とともに骨片、須恵器短頸壺、平瓶、ミニチュア土器など。
 所 見 古墳時代後期の住居跡の軸が本跡の方向とほぼ一致するため、該期の集落を区画するものかムラ境の溝あるいは道路跡とも考えられる。

SD329 (第15図、PL-)

- 位 置 1 D区、IV-N25グリッド
 重複関係 SB410を切り、SC305 (SD324の堤防) に切られる。
 形状・規模 幅80～94cm、深さ15～29cm。北西～南東方向に伸び調査区域内では5.3m。
 覆 土 単層。自然埋没。
 遺 物 土器片数点。流れ込みか。
 所 見 覆土の状況、切り合い等から古墳時代後期。機能・用途は不明。

SD330 (第15図、PL-)

- 位 置 1 D区、IV-N24グリッド
 重複関係 SB414を切り、SB319・415に切られる。
 形状・規模 幅65～118cm、深さ17～29cm。北西～南東方向に伸び調査区域内では2.8m。断面船底状。
 覆 土 明確に2分層され、上層は炭化物を多量に含む層。下層は細粒砂ブロックを含み焼土・炭化物は少量。
 遺 物 土器片数点。流れ込みか。

所 見 覆土の状況、切り合い等から古墳時代後期。溝で焚火は考えにくく何らかの遺構の底部が溝状に残ったものか。

SK305 (第13図、PL-)

位 置 1 B区、VI-N10グリッド

重複関係 SB326を切る。

形状・規模 長方形。約1.0m×0.6m。壁は緩やかに立ち上がり、底部はやや硬い。

覆 土 全体に炭化物が散っており、下層に炭化物が集中。

遺 物 炭化物とともに土器片少々。

所 見 遺物から古墳時代後期あたりと思われるが詳細不明。底部付近に炭化物は多いものの焼土はみられず、土坑そのものは焼けていない。

SK306 (第13図、PL-)

位 置 1 B区、VI-N10グリッド

重複関係 SB325・326を切る。

形状・規模 不整形。涙滴型？約1.6m×0.8m。壁は緩やかに立ち上がり、底部は明確で全面が硬い。

覆 土 全体に炭化物が散っており、下層に炭化物が集中。

遺 物 炭化物とともに土器片少々。

所 見 遺物から古墳時代後期あたりと思われるが詳細不明。底部付近に炭化物は多いものの焼土はみられず、土坑そのものは焼けていない。SK305と同様の機能・性格か。

SK312 (第180図、PL)

位 置 1 A区、VI-R10グリッド

重複関係 なし。

形状・規模 径1.6m程の円形？約半分が調査区域外。

覆 土 分層されるが明確な根拠に欠ける。焼土、炭化物、ブロック状の土を含み、明らかに人為埋没。

遺 物 底部から甕・瓶の大型破片とともに人の歯。

所 見 古墳時代後期～末の土坑墓。すぐ南側には平安時代の土坑墓SK310・437があり墓域を形成しているものと思われる。

SK321 (第13図、PL)

位 置 1 A区、VI-R10、S06グリッド

重複関係 なし。

形状・規模 径1.0m程の円形～楕円形。

覆 土 単層。自然埋没？

遺 物 高坏。

所 見 覆土は均質で人為埋没とは思えないが、高坏が出土していること、前述のSK312とさほど離れていないこと等から土坑墓の可能性もある。

SK373 (第13図、PL)

位 置 1 B区、VI-N06・07グリッド

重複関係 SB303に切られる。

形状・規模 不整形。約3.2m×1.6m。

覆 土 単層。自然埋没?

遺 物 土師器甕等少々。

所 見 機能・性格不明。切り合い関係とわずかな遺物から古墳時代とした。

SE303 (第180図、PL)

位 置 1 B区、VI-I03グリッド

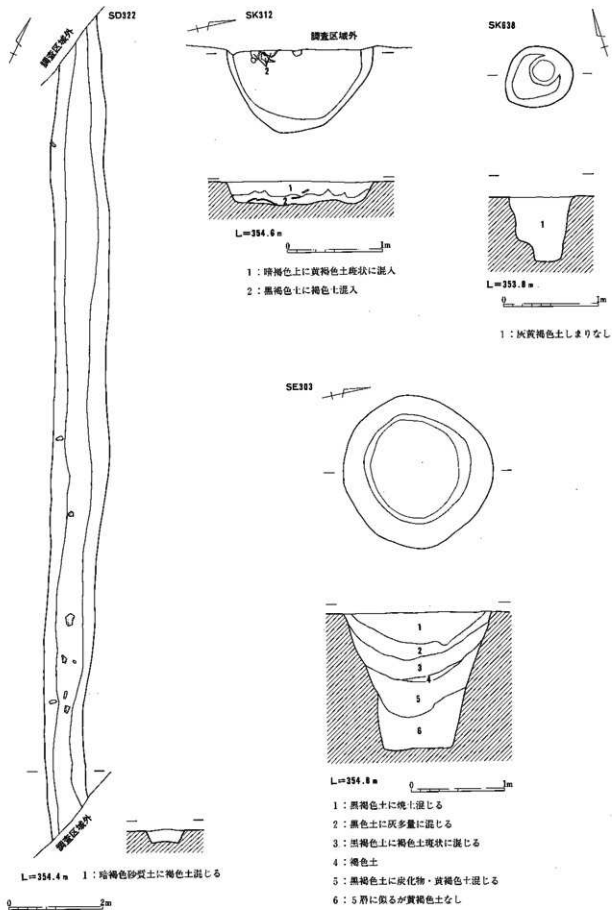
重複関係 SB353に切られる。

形状・規模 円形。直径約1.7m。深さ約1.5m。断面逆台形状。

覆 土 6分層され、灰・焼土が多量に混じる層が見られるため明らかに人為埋没。

遺 物 土師器甕等。

所 見 切り合い関係と遺物から古墳時代であるが、該期の井戸は本跡のみである。



第180図 その他の遺構 SD322, SK312, SK638, SE303

6 古墳時代後期の土器

(1) 概要

古墳時代後期、6～7世紀付近の土器をまとめた。第2節5でもふれたとおり、7世紀代の土器については古代の土器として扱っているものもあり時代が前後してしまう遺構も存在するだろう。おおまかな目安として6世紀的な土師器を中心とした土器組成を持つ時期までを古墳時代後期とし、古代的な須恵器の食器が土器組成のなかにみられるようになる時期から古代として扱ったつもりである。しかし筆者の認識不足から誤った場合にはご叱正願いたい。

本遺跡内では5世紀的な土器を持つ住居跡はかなり少数であるように思われる。すなわち高坏が食器の中心となる古墳時代中期的な土器組成を受け継ぐ住居跡は皆無とって良いと思う。大半の住居跡は6世紀代に納まり、残りの住居が7世紀前半～中頃に位置付けられると考えたい(注)。以下遺構番号順に述べる。

(2) 竪穴住居跡

SB101 (第181図、PL62)

1は内・外面ともミガキを施した坏で底部にへら記号がある。2は口縁のみで判然としないが内面の一部にミガキが残っており、壺と考えたい。3はカマドに残されていた土器で、外面には焼土化した粘土が付着しているためややはっきりしないが、ほぼ全面をナデで仕上げていると思われる。

やや底部が広い坏、あまり胴の張らない長胴甕の存在から本跡は7世紀の前半～中頃に位置付けられると考えたい。

SB103 (第181図、PL-))

1の坏は内面の稜線がはっきりせず沈線状になるが、破片が小さいため明確でない。3の長胴甕は胴部に張りがみられる。長胴甕の形態から6世紀後半あたりか。

SB302 (第181図、PL62)

1・2の坏は内面をミガキで仕上げているが、内面の黒色処理がはっきりしない。3はあまり例をみない器形であるが、佐久市上桜井北遺跡出土例と瓜二つであり特殊なものには違いないが、捜せば類例は増えると思われる。5の長胴甕にはやや胴部に張りがみられる。6世紀に盛んにみられる稜を持つ高坏がみられないことから7世紀初頭付近まで下るか。

SB305 (第182図、PL62)

1の坏はやや底部が広めでへら記号が施されており、SB101-1の個体に近い特徴を備えている。2の坏はナデだけの仕上げでまったくミガかれておらず、黒色処理もない。3は短頸壺とも呼ぶべきか。全面をていねいにミガいている。4は鉢であろうか。本個体は口縁の一部を欠損しているのみでほぼ完形である。図示した土器群はどれも残存率が高いため遺棄されたと思われるが、完全品が存在しないことは偶然であろうか。時期的には1の坏から7世紀前半あたりか。

SB313 (第182図、PL62)

1～3の内面に稜を持つ坏とともに高坏もみられる。また7・8の長胴甕も明らかに胴の張るタイプである。6世紀代であろうが高坏を伴うことから前半あたりか。

SB314 (第182図、PL62)

2は須恵器蓋を模倣した環と思われ、底部は薄く仕上げられている。4は底部をヘラケズリして平坦に仕上げている。5は有段口縁環で体部はナデのままミガかれていない。7は壺と思われ内外面をミガキで仕上げている。本住居跡の時期はやや問題が多いが、やはり1の須恵器環、4・5の環の存在から7世紀初頭あたりとしたい。

SB328 (第182図、PL63)

2は須恵器の高環と思われる。3の甕は残存部が少なくはっきりしないがやや胴の張るタイプと思われる。6世紀代の住居跡であろう。

SB329 (第183図、PL63)

図示した環はいずれも屈曲部を体部の下半に持ち、3は黒色処理が施されていない。やや古い様相を持つ土器群と思われるが時期的には6世紀初頭～前半あたりか。

SB331 (第183図、PL-)

長胴甕ばかりである。どの土器も胎土に金雲母を含み、外面に焼土化した粘土が付着した個体が多い。内外面ともナデ仕上げが多いが、3の個体のように外面に粗いミガキを施すものもある。器形的には5の個体のようなやや胴の張るタイプと思われる。6世紀代の住居跡であろう。

SB333 (第183図、PL63)

1～3はよく似た器形の環であるが1は2・3にくらべて底部が広い。1・2とも黒色処理の可能性があるが不明確なため網かけはしていない。5・6は全面をナデで仕上げている、器形的には鉢と呼ぶべきであろうか。双方ともほぼ完形である。4の長胴甕は内面に粘土紐を巻き上げた痕跡が明瞭であり、外面にはやはり焼土化した粘土が付着している。6世紀前半～中頃の住居と考えたい。

SB340 (第183図～185図、PL63・64)

廃絶後に土器投棄施設、あるいは祭祀施設となった住居である。1・2は対を成すかと思われる須恵器の蓋環であるが兩個体とも半分に割られたような状態である。3～8は須恵器蓋を模倣したと思われる環で、1・2も黒色処理の可能性があるが明確でないため網はかけていない。10・11の環には黒色処理はない。12～17は体部に稜を持つ環を一括したが16はやや系統を異にするものか。この個体も黒色処理がはっきりしない。18～24はやや深めのもので、20・21は内・外面ともナデだけの仕上げである。22～24は環とするより鉢とした方が適当かもしれない。25～28は高環をまとめたが27は別器種の可能性が高い。29・30、32～34はいずれも内・外面をミガキで仕上げている、29の個体は口縁部に鋸歯状の暗紋を施している。

31の土器は数は多くないもののしばしばみられる器形で長頸壺とも呼ぶべきか。外面及び頸部内面を磨いているが胴部内面はヘラナデである。

35は須恵器の鉢と思われるが口縁部を欠損しているためやや判然としない。36・37はミガキが施されておらず甕の類であろう。

38～47は甕を一括したが38は内外面を、39は外面を磨いている。40以降は大小あるが長胴甕としてよいと思う。調整、胴部の張り具合ともさまざまであるが、やはり6世紀代に納まるものと考えたい。

48は土製の紡錘車で4割ほどしか残っていないが、いねいにミガかれている。

SB342 (第185図・186図、PL64・65)

2～8は土師器の坏をまとめた。2は屈曲部が底部付近にありやや古い様相の坏であろうか。本個体も黒色処理がはっきりしない。9はやや特異な器形で内・外面をミガキで仕上げている。10も全面にミガキが施されている。

11は器種不明の土器で脚部内面をナデしているほかはミガキで仕上げている。12～14は長胴甕の類である。15の甕は底部を除き全面ミガキが施されている。16の紡錘車はほぼ完形であるが表面は荒れており調整ははっきりしない。本跡は6世紀前半～中頃の住居跡といえるだろう。

SB348 (第186図、PL65)

1は短頸壺か。全面ミガキが施され口縁の一部を欠損している以外、完形である。2の甕は内面をナデただけの仕上げである。3は一般的な6世紀代の長胴甕と思われる。

SB349 (第187図、PL65)

1～8は土師器の坏をまとめた。2は屈曲部が底部近くにあり、須恵器蓋を模したと思われる。7は内面に放射状の暗紋が施された個体である。

9は小型であるが須恵器の高環かと思われる。11の高環の窓はかなりゆがんでおり、脚部に窓を持つ高環としては新しく位置付けられそうである。12は外面はミガキ、内面はナデで仕上げられており黒色処理を施している。器種は不明であるが鉢の類か。

15の土鈴は柱穴内から検出されたもので外面はナデで仕上げられ、内部に土玉が数個入っている。この土玉はミガカれ穿孔された玉で黒色処理されているようにもみえる。地鎮にかかわるものと考えているが類例を知らず、今のところ性格ははっきりしない。

本跡は土器の様相から6世紀前半あたりだろうか。

SB353 (第187～191図、PL65～68)

使用時点の状態を残したまま廃絶されたと考えられている住居跡の一括資料である。やや大型の住居跡であるが、果たしてこれほどの数の土器を所持していたか、やや疑問な点もあるが該期の良好な資料であることには変わりない。

2～23は土師器の坏を一括したが2～9は主体とならない器形の坏をまとめた。2はまったくミガキがなく、ナデとケズリのみで仕上げられている。3は須恵器蓋を模したと思われる個体で4・7とともにやや古い様相を持つものと思われる。6は黒色処理がないが4と同様な位置付けか。

10～23は本跡の主体をなす坏で内面の稜線が明確なものから、かなりあいまいなものまで幅があるが全体のプロポーションはどれもよく似ている。一部に黒色処理のはっきりしない個体もあるが一応すべて黒色処理が施されていると考えたい。

24～32は鉢かと思われる土師器を一括したが24・29はやや疑問である。24はナデとハケだけで仕上げられており、まったく磨かれていない。29は表面が荒れていて調整が観察できないが、焼成前に穿孔されており、この孔に対応するように口縁端部にキザミがある。このキザミは焼成後のもので孔の使用にかかわるものと考えたいが、孔そのものに使用による痕跡は認められず、性格は不明である。

25～28・32は全面にミガキを施したもので、30・31はナデまたはハケで仕上げたものである。26・28はや

や古い様相を持つ個体と思われる。

33～35の高環はどれもていねいなミガキを施されており、残存率も高い。35の個体はやや古く位置付けられるか。

36～38はミガキで仕上げられている壺・甕の類である。40～42は口縁部を回転ナデ、体部をナデまたはハケで仕上げられており、42の個体も外面はハケによる調整である。

43～61は甕・長胴甕の類を法量の順にならべた。外面の調整、口縁の形態等さまざまであるが、胴部に張りのある個体が主体を占めているようである。

62～67は甕を一括した。67を除きどれも大きさ、調整等に大差なくミガキが施されているものはない。68は把手付きの大型甕で内面にはまばらなミガキがみえる。

本住居跡は6世紀前半付近と考えたい。

SB357 (第191図、PL-)

1の環は底部が広く、屈曲部が底部付近に位置する。やや古い様相を備えていると考えたい。2は器種がはっきりしない土器で外面はナデ、内面は口縁付近がナデ、胴部がまばらなミガキとなっている。甕であろうか。

SB358 (第191・192図、PL69)

1・2の環は双方とも黒色処理が施されていたようであるが、2はやや不明確であるため網掛けはしていない。4は内・外面ともミガキを施した甕の類である。5は鉢の類であろうか。ナデだけの仕上げである。6～8は長胴甕であるがやや小型の6を除き胴部に張りはみられない。7は外面をごく弱いケズリまたはナデで仕上げ、内面はナデである。

体部に稜を持つ環がみられないこと、長胴甕に胴部の張りがなく鳥帽子型に近くなっていることから、本跡は7世紀あたりと思われる。

SB371 (第192図、PL69)

2の個体は内・外面ともナデ、3の個体は内外面をミガキで仕上げている。双方とも大差ない器形・法量であるため、調整の差は機能・用途の差と推測されるが判然としない。

本住居跡は6世紀代か。

SB372 (第192図、PL70)

1の長胴甕は本遺跡内ではほとんど例をみないタイプで、外面はナデ、内面はヘラナデである。強く屈曲する口縁部とややつまみ出し気味になる端部が特徴であるが、共伴する土器からやはり6世紀代に位置付けられるのだろうか。

SB385 (第192図、PL70)

図示した土器は体部をヘラケズリ、それ以外の部分はナデで仕上げている。鉢の類であろうか。

SB386 (第193図、PL70)

1の環は調整がはっきりしないが内外面とも粗いミガキが施されているようである。2の環は外面には稜はないが内面にはごく弱い稜というか屈曲面が存在する。3の長胴甕はナデまたはヘラナデの仕上げら

しいが、外面には焼土化した粘土が付着しており判然としなない。坏の形態から6世紀末ころの住居跡か。

SB187 (第193図、PL70)

本住居跡は大半が調査区域外にかかるため、図示できた土器は掲載した須恵器坏1点のみである。形態から7世紀前半と思われる。

SB401 (第193図、PL-)

1・2は内面に稜を持つ坏で一見よく似ているが、1は底部が小さく尖りぎみで稜以上の口縁部が長いのに対し、2は口縁部が短く底部も広く、平底に近くなるタイプと思われる。3は身の深い坏、あるいは鉢と呼ぶべきか。内面に稜はない。4は黒色処理がはっきりしないが底部付近の形態から高坏と考えたい。

本住居跡は高坏を伴っていることから6世紀前半～中頃にあたるのだろうか。

SB402 (第193図、PL70)

1は黒色処理がはっきりしない。3は須恵器蓋模倣の坏か。4・5は球形に近い底部を持つと考えられる坏で、5はやや不明確であるが4は確実に黒色処理が施されていない。9の高坏は脚部のみであるが3窓を持ち、ていねいに仕上げられている。

6は表面が荒れているためはっきりしないが、ミガキで仕上げているようである。7は胴部内面を除きミガキが施されている。8は鉢の類か。表面の剝落が激しく不明確であるが、外面および胴部下半の内面はミガキのようである。10～12は長胴甕の胴部上半で、口縁部の形態・調整等さまざまであるがどれも胴に張りのあるタイプのようである。

高坏を伴っていること、3・6のようなやや古い様相の土器が存在すること等から、本跡は6世紀前半に位置すると思われる。

SB403 (第194図、PL70)

1の坏は内面の稜がはっきりしており、底部がやや広く平底に近くなると思われる。2・3の高坏は双方とも同様な形態と考えられ、脚部に窓はない。本跡も6世紀代の住居跡であろう。

SB405 (第194図、PL)

1の高坏は須恵器模倣か。表面が荒れていて調整は明確でない。2・3は底部付近のみで2は外面をミガキ、内面をへらナデで仕上げ、3は外面にナデ、内面にまばらなミガキを施している。

SB411 (第194図、PL71)

1～5は坏をまとめた。1の坏は黒色処理が施されていない。2～3は胴部の屈曲の度合いがさまざまであるが、どれも内面の稜以上がやや長く、底部が尖りぎみになることが共通している。

6～10は鉢の類か。6・7・10はミガキ、8・9はナデの仕上げである。11は全面にミガキを施した甌であるが、小型であり実際の使用に耐えるかやや疑問である。13の甌は外面にハケを施した後、全面を磨いている。こちらの甌を実用品とすれば11の甌はどのような用途・機能を持つものなのだろうか。

12は一般的な長胴甕で胴部に張りのあるタイプと考えられる。本跡は坏の形態等から6世紀代と思われる。

SB414 (第194図、PL71)

図示した環は須恵器蓋の模倣と思われる。

SB415 (第194図、PL71)

1は須恵器環の模倣か。口縁部の内側に向かう屈曲が須恵器環を連想させる。2の環は底部がやや広く平底ぎみである。本住居は6世紀前半付近に位置付けられるだろうか。

SB505 (第195図、PL71)

1の環はヘラケズリとナデだけで仕上げられ、黒色処理もない。2は浅く平底に近いタイプでやや新しいタイプと思われる。3は支脚として利用されていたもので、俗にうなぎ採りと称される細長い甕状の土師器の胴部下半から底部と考えている。

SB513 (第195図、PL71)

1は薄く仕上がっており、一見古代の環にも見えるが底部は丸底である。全面にミガキが施されている。2は小型で浅く、体部外面にはヘラケズリ、口縁部はナデ、内面はミガキとなっている。

環のあり方から本住居跡は7世紀中頃まで下るか。

SB515 (第195図、PL71)

1の須恵器は特殊な器形で外面をヘラケズリ、内面はナデが施され、全体に薄く自然釉がかかっている。2・3の環もあまりみかけない器形で両個体とも全面ミガキで仕上げている。

5は鉢または甌か。内・外面とも雑なミガキがみえる。6は全面にいいミガキが施されている。

SB517 (第195図、PL71)

1は須恵器蓋を模倣したものか。2の環はやや底部が広く平底ぎみである。3は丸底になる器形の土師器で全面をいいミガキで仕上げている。4は甌かと思われるが底部が欠損しており判然としない。

5～8は長胴甕の胴部上半でどれも胴に張りのあるタイプと思われる。

本住居跡は6世紀前半あたりか。

SB518 (第195図、PL71)

タイプの異なる2種類の須恵器環が出土している。本住居跡の遺物は覆土上層に多いことから投棄された可能性が高い。3・4の須恵器環は底部をナデ、それ以外はロクロナデの仕上げである。5・6の土師器環は両個体とも良く似ており、やや小型である。7はあまりみかけない器形で、底部を含めた内・外面にミガキが施されている。8は壺の類と思われ、全面ミガキで口縁部を除きほぼ完形である。

本住居の時期はやはり3～6の環で判断すべきか。だとすれば7世紀後半となるが、投棄によるとすれば遺構自体はもう少し遡ることになる。

SB520 (第195図、PL-)

図示可能な土器は1の須恵器環と2のミニチュア土器のみである。2の土器は手づくねである。1の須恵器は6世紀半ばあたりだろうか。

SB530 (第196図、PL)

1は須恵器蓋の模倣か。3は高環の脚と考えたい。4は黒色処理がなく、どのような器形か判然としな
いが高環の可能性もある。

SB533 (第196図、PL72)

1の土師器は内外面とも風化しており調整がはっきりしない。2はやや不明確であるが外面をミガキ、
内面をナデで仕上げているようである。3は長胴甕の口縁部付近と思われる。

SB534 (第176図、PL72)

1はやや大型の甎で内外面をハケで仕上げている。2の長胴甕は胴部に張りがみられないことが特徴で
ある。長胴甕の形態からすれば7世紀まで下ると思われる。

SB536 (第196図、PL72)

1の環は薄手に作られており底部も平底さみである。2は高環の坏部で、坏部は完全であるか脚がまっ
たく欠損している。3は須恵器の短頸壺の類か。底部付近に回転ヘラケズリを施している。この住居跡も
7世紀前半あたりまで下ると考えたい。

SB541 (第196図、PL72)

1の環は外面に雑なミガキがみられるものの、内面はナデだけの仕上げである。2はかなり小型化し
た高環で、1の環とともに新しい時期に位置付けられるものと思われる。

SB545 (第196図、PL72)

1の環は底部外面をヘラケズリしたのちミガキを施し、内面は口縁部がナデ、それ以下はミガキであ
る。2の環は口縁が内湾しており内面はナデだけの仕上げである。3の環は全面をミガキで仕上げている
が黒色処理がはっきりしない。4は台付甕と思われ、表面の風化が激しいが、内外面ともナデだけの
ようである。

総じて本住居跡出土の土器は、古墳時代後期の住居跡としてはあまりみかけない土器が多いように思わ
れる。期的にやや遡るとも考えられるが、カマド部分のみしか調査されておらず、判然としない。

SB546 (第196・197図、PL72)

1・2は須恵器模倣の坏か。4・5はよく似ており同一個体かと思われたが調整が異なり、4の個体は
明らかに黒色処理が施されていない。

7は小型の甕は外面を粗いハケ、内面をヘラナデで仕上げているようである。8・9の長胴甕は一部し
か残存せず全体の器形は不明だが、やはり胴の張るタイプになるのだろうか。9の個体はやや疑問であ
る。10のミニチュア土器は口縁に孔を1対あけており、体部の指頭圧痕が明瞭である。

SB561 (第197図、PL-)

図示した土器は鉢の類か。全面をナデで仕上げている。

SB562 (第197図、PL73)

甕の類しか図示できなかった。1の長胴甕は外面をヘラケズリ、2の個体はナデの仕上げである。3はかなり大型の甕であるが本遺跡内では他に類例がない。

本住居跡も6世紀代と考えている。

SB567 (第198図、PL72)

1は内面に稜がなくやや深いタイプである。2は須恵器蓋の模倣か。5は台付甕と思われるが脚部を欠損しているため判然としない。6はカマドの支脚として利用されていた土器で丸底の甕である。7～9の長胴甕は口縁部がやや長いことが特徴である。調整はどれも同様で外面はナデ、内面はヘラナデとなっており外面に焼土化した粘土が付着している個体もある。10は大型の甕または壺と思われ、外面をミガキ、内面をナデとまばらなミガキで仕上げている。

本住居跡は1・5・6など他の住居跡からは検出されない器種を含み、やや古い段階に位置付けられると思われる。

SB571 (第197図、PL73)

1・2の坏とも黒色処理ははっきりしないため網かけはしていない。3は甕あるいは甗か。口縁部付近を除き、外面はミガキを施している。

4の長胴甕は外面をナデまたは弱いミガキで仕上げている。やや緻密な胎土を持ち、割と重い土器である。本個体は90%以上残存しているが胴部下半の一部を欠損している。このような欠損は長胴甕にしばしば認められ、カマド内から使用時の状況のまま検出されたような個体にも観察されることが多い。口縁等の欠損ならばともかく、胴部のそれも底部に近い位置での欠損は故意によるものの可能性が高く、住居廃絶時点でのカマド破壊にともなう行為が予想されるが、今のところ明確な根拠を見いだせていない。

SD322 (第198図、PL74)

1の短頸壺は底部をヘラオコシしたのちナデている。2は高坏を模したと思われるミニチュア土器である。

SK312 (第198図、PL74)

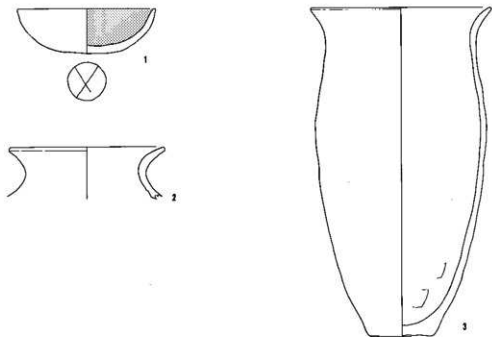
土坑墓からの出土品である。1は須恵器を模したと思われる坏。2は大型甗ではほぼ完形である。

SK321 (第198図、PL一)

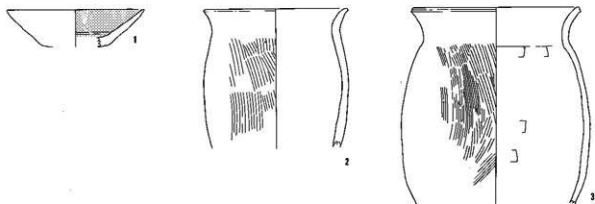
当初1・2の高坏は同一個体と考えられていたが、実際には胎土が微妙に異なり別個体と判断した。本跡も土坑墓の可能性が有る。

注) 本文の執筆にあたり宇賀神誠司氏、鳥羽英雄氏から有益な教示を得た。記して感謝したい。

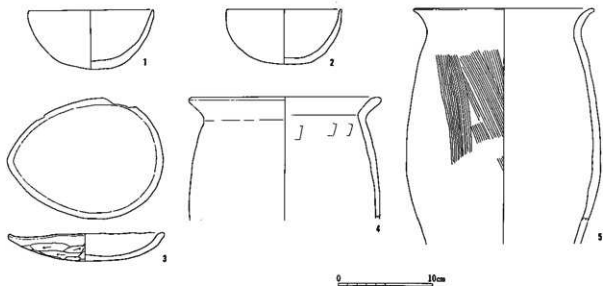
SB 101



SB 103

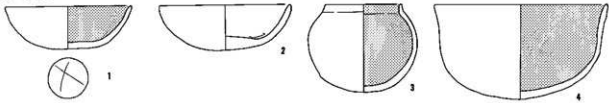


SB 302

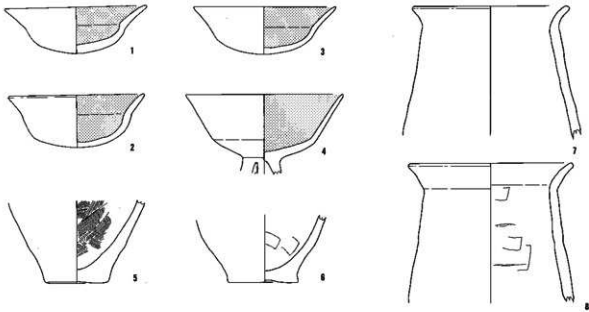


第181図 古墳時代後期の土器(1)

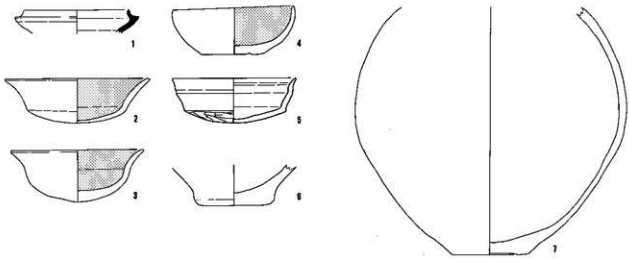
SB 305



SB 313



SB 314



SB 326



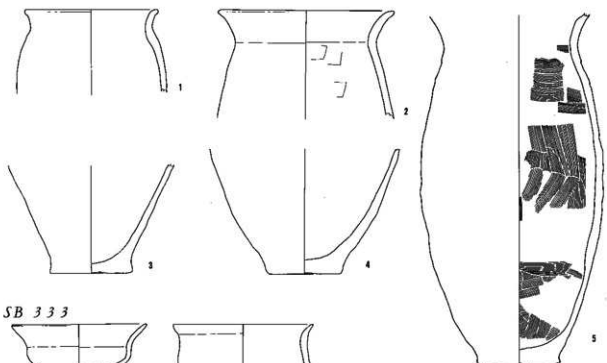
0 10cm

第182図 古墳時代後期の土器(2)

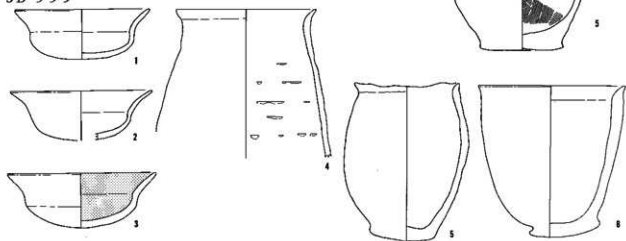
SB 329



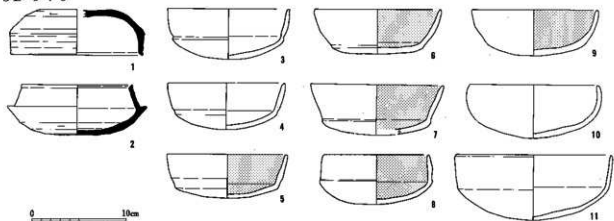
SB 331



SB 333

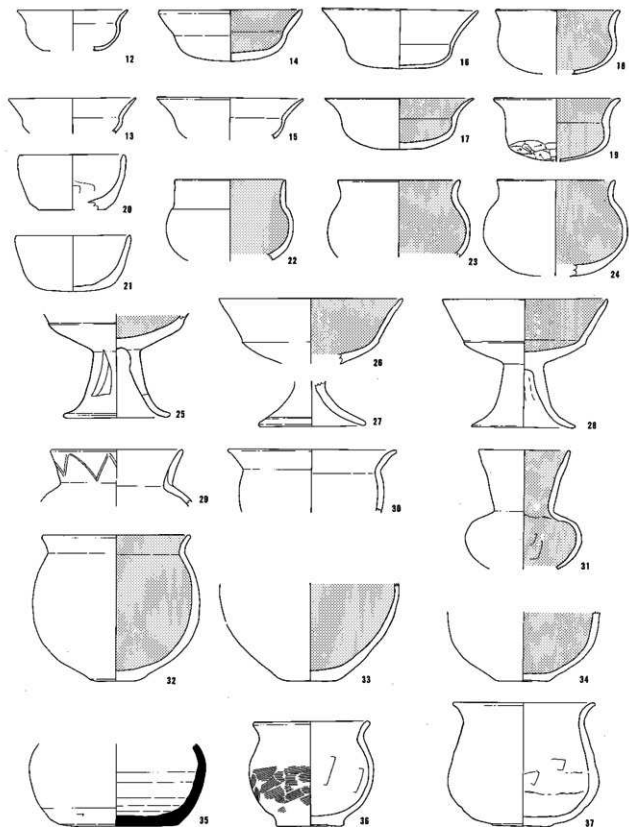


SB 340

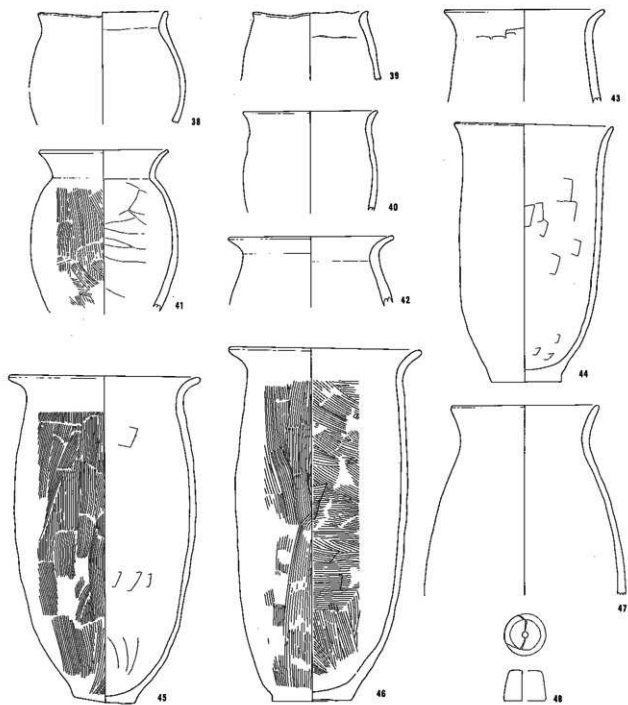


0 10cm

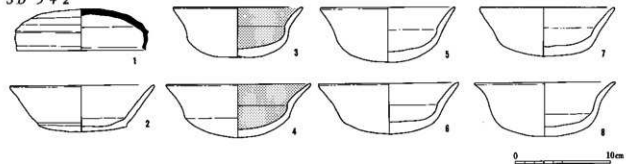
第183図 古墳時代後期の土器(3)



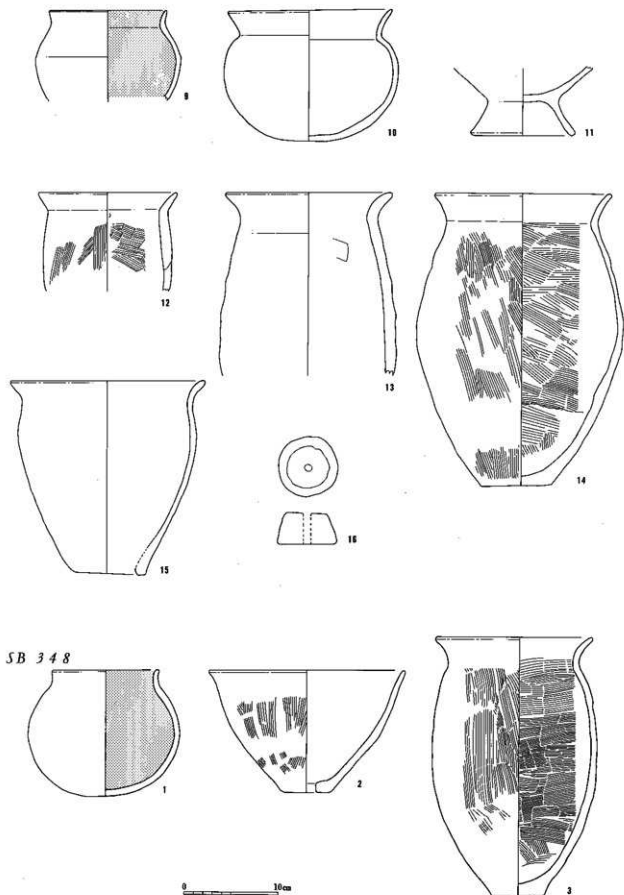
第184図 古墳時代後期の土器(4)



SB 342

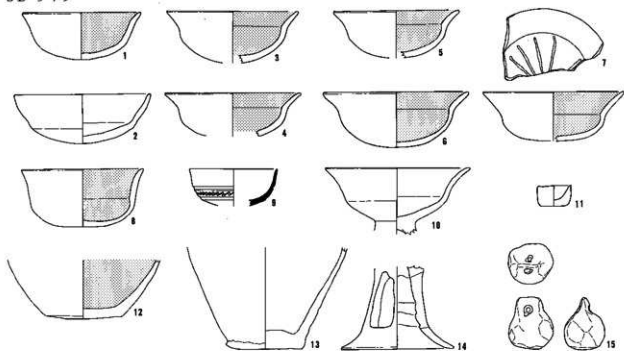


第185図 古墳時代後期の土器(5)

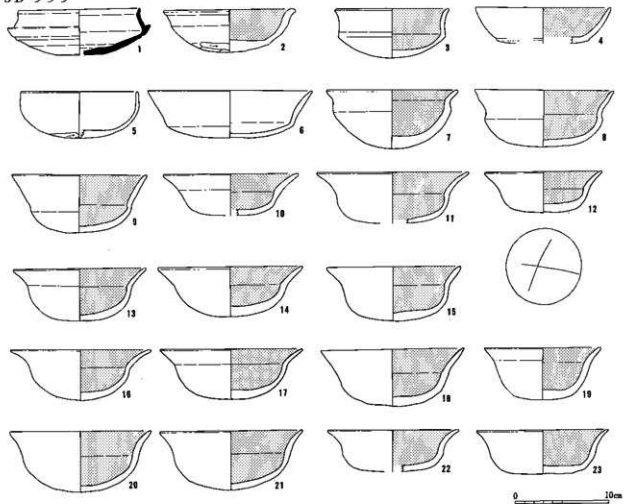


第186図 古墳時代後期の土器(6)

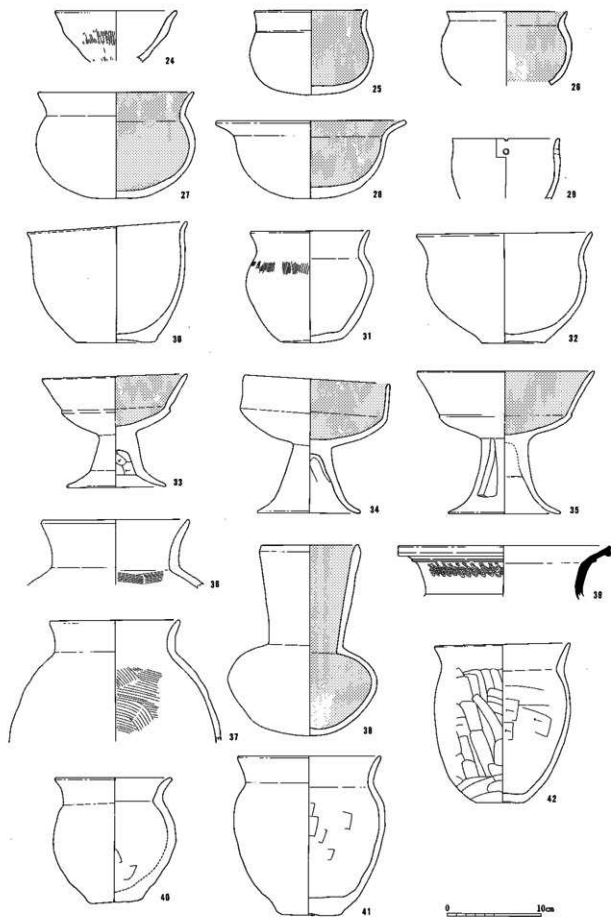
SB 349



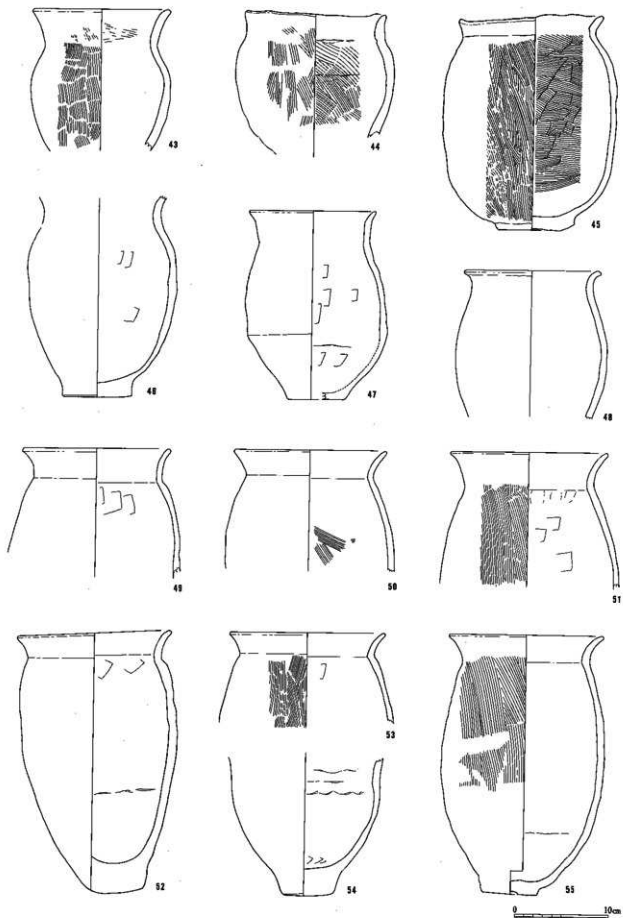
SB 353



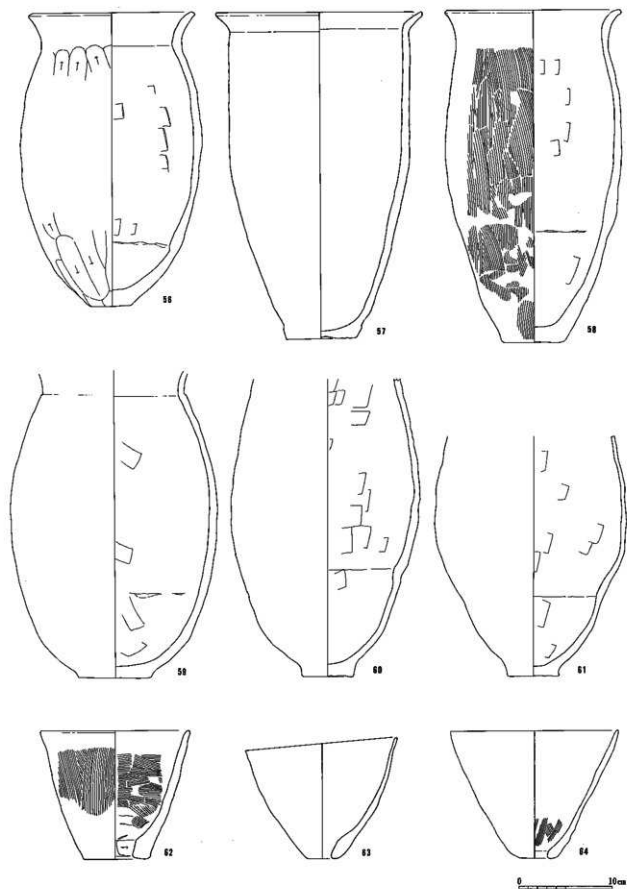
第187図 古墳時代後期の土器(7)



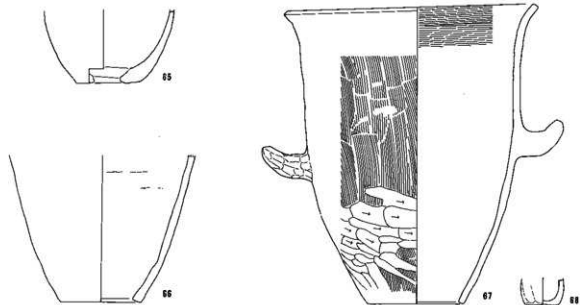
第188図 古墳時代後期の土器(8)



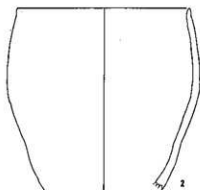
第189図 古墳時代後期の土器(9)



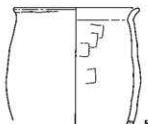
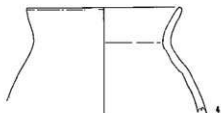
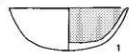
第190図 古墳時代後期の土器00



SB 357

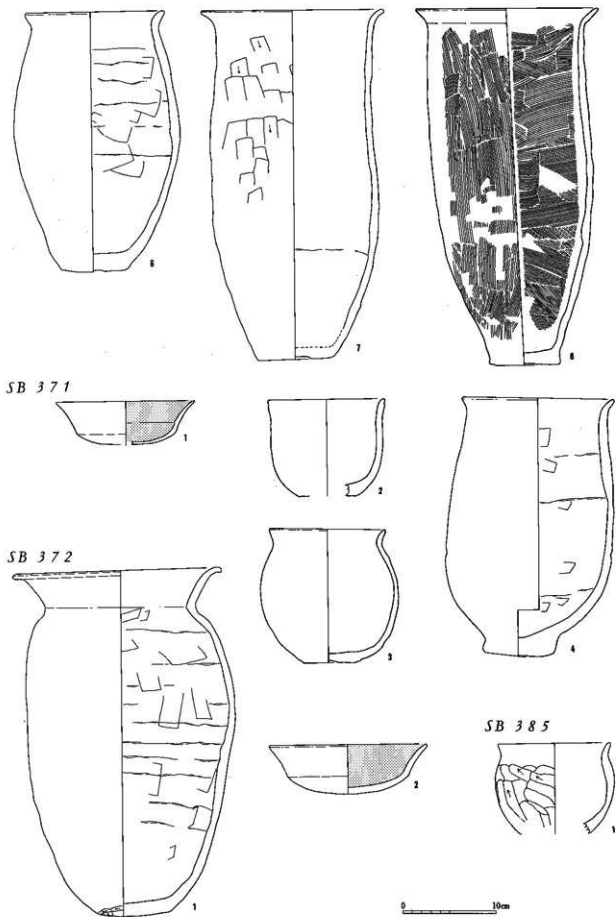


SB 358



0 10cm

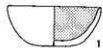
第191図 古墳時代後期の土器01



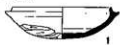
第192図 古墳時代後期の土器04

第2章 篠ノ井遺跡群

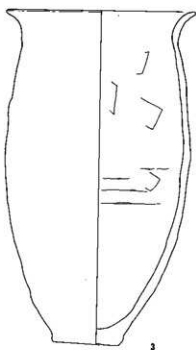
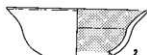
SB 386



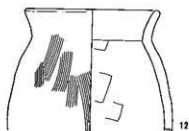
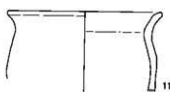
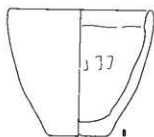
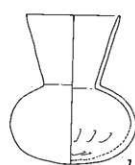
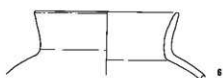
SB 387



SB 401



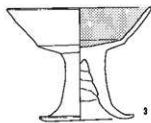
SB 402



0 10cm

第193図 古墳時代後期の土器③

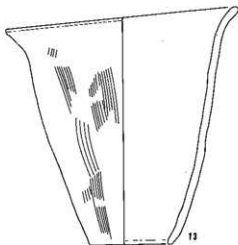
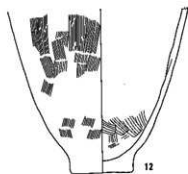
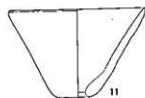
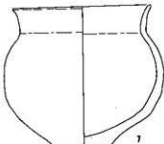
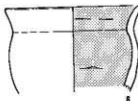
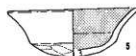
SB 403



SB 405



SB 411



SB 414



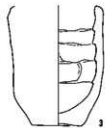
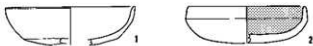
SB 415



0 10cm

第194図 古墳時代後期の土器00

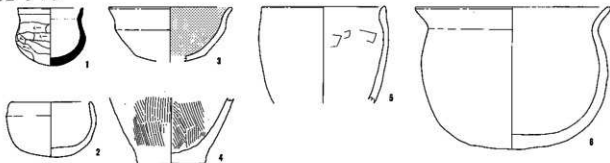
SB 505



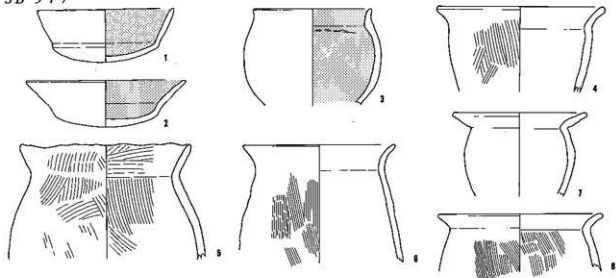
SB 513



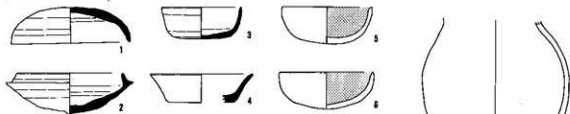
SB 515



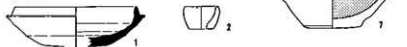
SB 517



SB 518



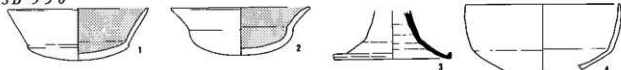
SB 520



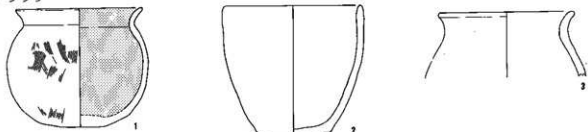
0 10cm

第195図 古墳時代後期の土器09

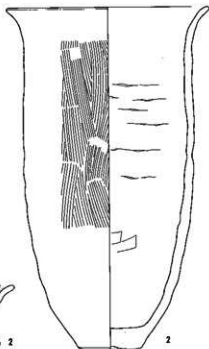
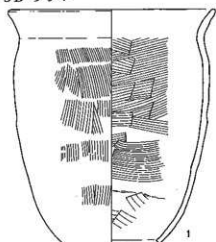
SB 530



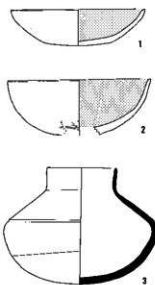
SB 533



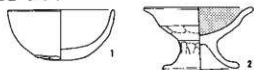
SB 534



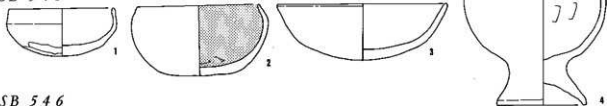
SB 536



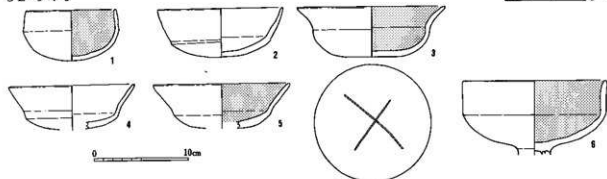
SB 541



SB 545



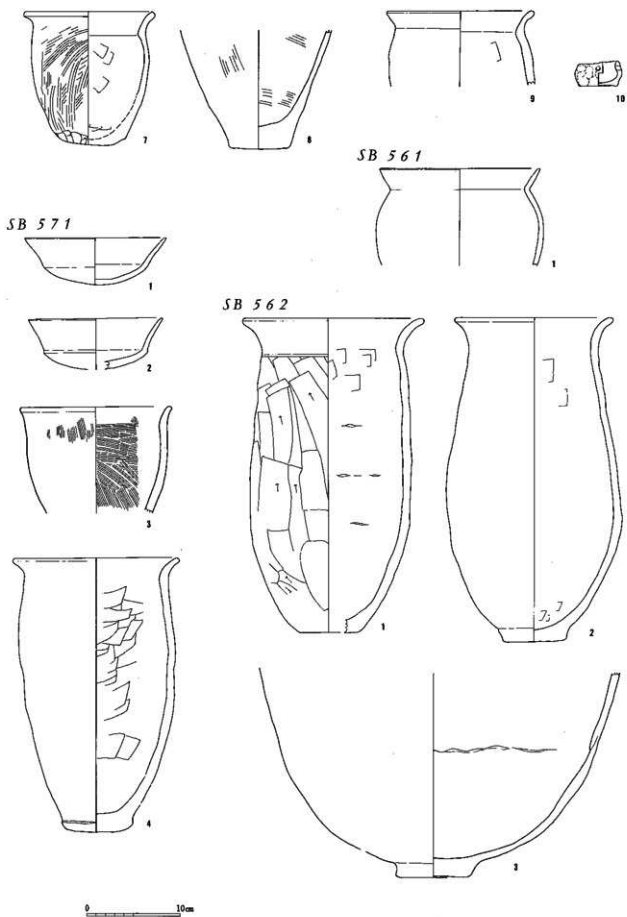
SB 546



0 10cm

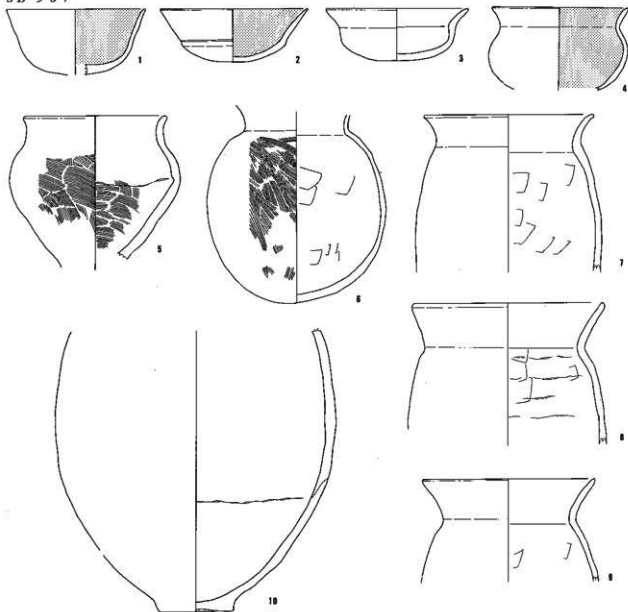
第196図 古墳時代後期の土器00

第2章 篠ノ井遺跡群



第197図 古墳時代後期の土器(1)

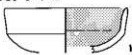
SB 567



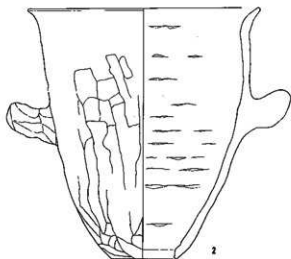
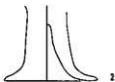
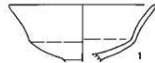
SD 322



SK 312



SK 321



0 10cm

第198図 古墳時代後期の土器00

7 古代の遺構

(1) 概要

古代に相当すると考えられる居住跡は、不明確なものまで含めれば90軒を超える。これらの中には5古墳時代後期の遺構でも述べたように時期決定が困難な住居跡もあるが、他の時代と比較しても最大の住居跡数である。また、時期的には8～9世紀に集中しており、灰釉陶器を伴出するころの住居は数える程しか検出されていない。8～9世紀、この地域が他のどの時代よりも発展していたということが言えそうである。住居跡の中には明らかに工房と思われるものや集会所のような巨大住居跡もみつかり、住居跡以外にも掘立柱建物跡・大規模な水路と考えられる溝・土坑墓・鳥跡等多様な遺構が検出され、当時のムラの姿を知る上で重要な資料を提供することとなった。

古代の住居の上層には水田の痕跡が認められ、古くから、少なくとも弥生時代後期以前から集落が営まれてきたこの地域に住居を切る形で水田が形成されたことが判明している。そして、その水田もさほど時を経ないうちに洪水の砂に埋もれてしまった事実が明らかになりつつある。

(2) 竪穴住居跡

SB102 (第199図、PL-)

位置 1A区、VI-W09・10グリッド

重複関係 なし。下層にSM101・115がある。

形状 隅丸方形。半分以上が調査区域外。

覆土 単層。詳細不明。

壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。

床面 堅固。貼り床、掘り方等は不明。

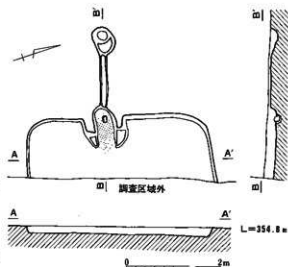
柱穴 不明。多分なし。

カマド 袖は地山との区別が困難。粘土で補強しており支脚石が残存していた。支脚石の位置からやや壁外に張り出すカマドである。

その他施設 不明。調査区域内には見当たらない。

遺物 須恵器等の細片が若干出土したのみ。図示すべきものは見当たらない。

所見 9世紀の住居跡と思われる。



第199図 SB102

SB104 (第12図、PL-)

位置 1A区、VI-W08・09グリッド

重複関係 SB108を切り、SD101に切られる。

形状 方形? 大半が調査区域外。

覆土 不詳。

壁 やや傾いて立ち上がる。

床面 不詳。

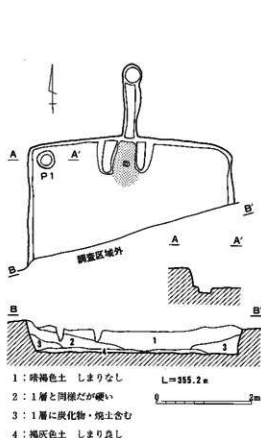
柱穴 不明。多分なし。

カマド 不明。調査区域外。

その他施設 不明。

遺物 内黒の椀、土師器の杯がある。出土状態等の詳細は不詳。

所見 遺物から9世紀後半の住居跡と考えられるが判然としない。



第200図 SB105

SB105 (第200図、PL-)

位置 1 A区、VI-W10・15、X06・11グリッド

重複関係 SB106を切る。

形状 方形。約半分が調査区域外。

覆土 分層され、三角堆土が認められる。自然埋没。

壁 はは垂直～やや傾いて立ち上がる。

床面 不詳。

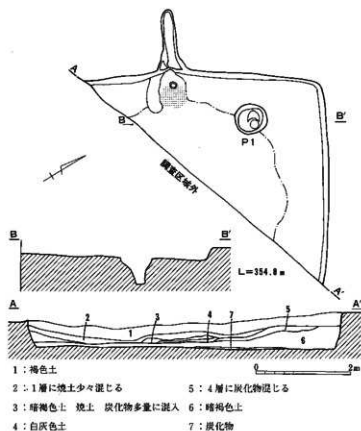
柱穴 なし？調査範囲には見当たらない。P1は何らかの施設か。

カマド 袖は地山との区別が困難。火床に支脚石の抜き取り痕が明瞭。

その他施設 P1。灰溜めの穴にしてはややカマドから離れている。

遺物 カマドから出土したと思われる長胴甕破片を除き、遺物僅少。

所見 遺物から9世紀代の居住跡と思われるが詳細不明。



第201図 SB107

SB107 (第201図、PL-)

位置 1 A区、VI-W14・15グリッド

重複関係 なし。

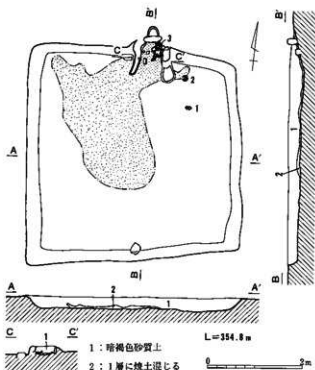
- 形状 方形。約半分が調査区域外。
 覆土 自然埋没を示す土層が観察されるが、中間に焼土・炭化物を多く含む層がみられるため、埋没途中で焚火が行われた模様。
 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。
 床面 堅固な貼り床。張り替え、掘り方等は不明。
 柱穴 P1。これと対をなす柱穴は調査区域外。
 カマド 袖はほぼ完全に取り払われており、左袖の痕跡を確認したにすぎない。火床には支脚の抜き取り痕が明瞭である。
 その他施設 特になし。
 遺物 須恵器の食器が多い。大型の紡錘車が出土している。
 所見 遺物から奈良時代の住居跡と思われる。

SB108 (第12図、PL-)

- 位置 1A区、VI-W08・09グリッド
 重複関係 SB104、SD101に切られる。
 形状 方形?大半が調査区域外。
 覆土 単層?詳細不明。
 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。
 床面 不詳。
 柱穴 不明だが多分なし。
 カマド 不明。調査区域外。
 その他施設 不明。ピットがあるが記録が残されていない。
 遺物 内黒の椀、羽釜。
 所見 羽釜の出土から10世紀ころか。本遺跡の古代の住居跡の中では最も新しいものである。

SB304 (第202図、PL24)

- 位置 1AB区、VI-N11・16グリッド
 重複関係 SB315、SK711を切る。
 形状 歪んだ方形。
 覆土 床面付近に焼土が混じる薄層がみられる以外均質な単層。自然埋没?
 壁 明確に検出され、ゆるやかに立ち上がる。
 床面 堅固であるが貼り床ではない。掘り方、貼り替え等はない。
 柱穴 なし。
 カマド 粘土補強、一部石組み。支脚石、天井石が残存。廃絶時点での破壊か。



第202図 SB304

その他施設 特になし。

遺物 覆土下層に多いが、細片ばかりで図になるものはカマド内に遺棄されたものがほとんどである。獣骨、鉄滓もみられた。

所見 床面の焼土は住居廃絶時の焚火か。遺物から9世紀の住居跡と思われる。

SB307 (第203図、PL24)

位置 1A区、IV-R15、S11グリッド

重複関係 SK701・702に切られる。

形状 方形。一部調査区域外。

覆土 均質な単層。自然埋没と考えたい。

壁 明確であるが検出面が低いため立ち上がりは明確でない。

床面 堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等はみられない。

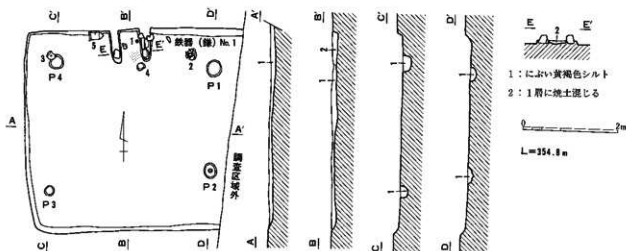
柱穴 P1~4。柱痕は確認されなかった。

カマド 石組みカマド。支脚石はなく袖石の一部も抜き取られている。

その他施設 特になし。

遺物 覆土中には少なく、カマド付近の床面上にややまとまって検出された。墨書をもつ高台環も得られた。

所見 遺物から8世紀末~9世紀前半の住居跡と思われる。



第203図 SB307

SB308 (第13図、PL-))

位置 1A区、IV-R14・15・19・20グリッド

重複関係 SK436に切られる。

形状 隅丸方形?大半が調査区域外。

覆土 均質な土で、自然埋没したのち攪乱を受けたような状況が窺えたというが詳細不明。

壁 明確であり、やや傾いて立ち上がる。

床面 堅固であるが貼り床ではない。掘り方等はみられない。

柱穴 不明。多分なし。

カマド 不明。調査区域外。

その他施設 特になし。

遺物 全般に少なく。床面にも図示すべき遺物は残されていなかった。

所見 わずかな遺物、検出面の高さ等から平安時代の住居跡と思われる。

SB310 (第13図、PL-)

位置 1A区、IV-R15・20グリッド

重複関係 SK437に切られる。

形状 長方形。

覆土 単層だが検出面が低いため、埋没状況は不明。

壁 明確に検出されるが上記理由により立ち上がりは不明。

床面 軟弱かつ不明確。

柱穴 なし。

カマド なし。

その他施設 特になし。

遺物 覆土がわずかなため遺物ほとんどなし。

所見 検出は明瞭であったが、床面、カマドとも不明なため竪穴状遺構として扱っておきたい。時的には9世紀以前か。

SB315 (第204図、PL24)

位置 1B区、VI-N11グリッド

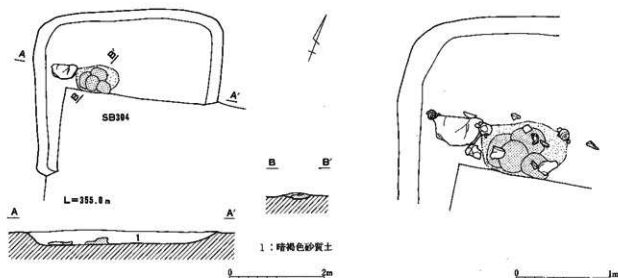
重複関係 SB304に切られる。

形状 隅丸方形。

覆土 床面付近に焼土層がみられるほかは単層。自然埋没と思われる。

壁 明確に検出され、緩やかに立ち上がる。

床面 堅固であるが貼り床ほどではない。掘り方はない。



第204図 SB315

- 柱 穴 不明。多分なし。
 カ マ ド 切られて不明。
 その他施設 鍛冶炉4基。新旧関係が明瞭。
 遺 物 床面から鍛造台石、完形～半完形の坏8個体。覆土から獣骨。
 所 見 明らかに鍛冶のための工房。床面の遺物は遺棄によるものか。SB304に切られているため9世紀以前。

SB316 (第13図、PL24)

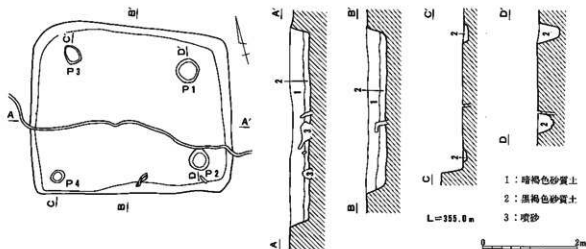
- 位 置 1 B区、VI-N06・11グリッド
 重複関係 SB356・361、SK714を切り、SB317～9・322に切られる。
 形 状 隅丸方形？
 覆 土 単層だが検出面が低いため埋没状況不明。
 壁 他の遺構に切られて不明な部分が多いが、検出された部分ではほぼ垂直に立ち上がる。
 床 面 軟弱かつ不明確。掘り方はない。
 柱 穴 不明。多分なし。
 カ マ ド 切られて不明。
 その他施設 不明。
 遺 物 覆土が少ないため遺物僅少。図示すべきものは見当たらない。
 所 見 床面に炭化物が散る部分があるが焼土はみられず、かわりに骨片を伴っていた。いずれにせよ調査できた面積が少なく、性格は不明。時期的には平安時代か。

SB317 (第13図、PL-))

- 位 置 1 B区、VI-M10・15、N06・11グリッド
 重複関係 SB316を切り、SB318に切られる。
 形 状 方形？大半が調査区域外の上切られて不明。
 覆 土 単層。自然埋没？
 壁 やや傾いて立ち上がる。
 床 面 堅固であるが貼り床ほどではない。小規模な掘り方を確認している。
 柱 穴 不明。
 カ マ ド 切られて不明。
 その他施設 不明。
 遺 物 覆土が少ないため遺物僅少。図示すべきものは見当たらない。
 所 見 周囲の状況から平安時代の住居跡と考えられるが調査可能な面積が狭く、詳細は不明。噴砂が床面を貫いている。

SB318 (第205図、PL24)

- 位 置 1 B区、VI-N06・11グリッド
 重複関係 SB316・317・361、SK714を切る。
 形 状 長方形。
 覆 土 分層されるが明確な根拠に欠ける。自然埋没？

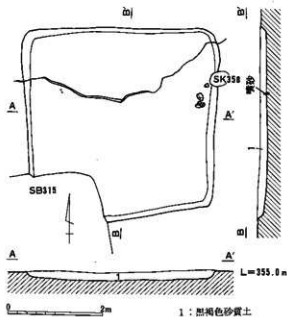


第205図 SB318

- 壁 やや傾いて立ち上がる。
 床 面 軟弱。掘り方、貼り替え等はない。
 柱 穴 P1～4。
 カマド なし。
 その他施設 不明。
 遺 物 僅少。図示すべきものは見当たらない。覆土及び床面の一部から焼土・炭化物とともに獣骨。
 所 見 カマドが存在しないため竪穴状遺構としておきたい。獣骨の出土が気になる。噴砂が床面を貫き、覆土の途中で止まっている。

SB319 (第206図、PL-1)

- 位 置 1 B区、VI-N11・12グリッド
 重複関係 SB316・361・372、SD322を切り、SK358
 ・375に切られる。
 形 状 方形。
 覆 土 均質な単層。自然埋没？
 壁 ゆるやかに立ち上がる。
 床 面 軟弱だが貼り床で、掘り方もあると調査担当者には記録している。
 柱 穴 なし。
 カマド なし。
 その他施設 不明。
 遺 物 全般に少なく、図になるものはない。
 所 見 記録が不足しているため詳細不明。カマドが見当たらず、あるとすれば南西のコーナーということになるが、9世紀初頭のSB315に切られているためその可能性は薄い。SB315のような工房か。



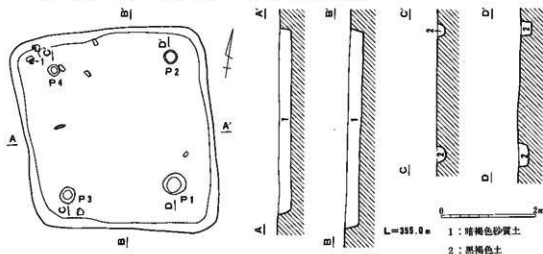
第206図 SB319

SB320 (第13図、PL-)

位置 1 B区、VI-N12グリッド
 重複関係 SD358、SK322を切る。
 形状 方形?大半が調査区域外。
 覆土 均質な単層。自然埋没?
 壁 やや傾いて立ち上がる。
 床面 堅固であるが貼り床ではない。掘り方等は不明。
 柱穴 不明。
 カマド 不明。
 その他施設 不明。
 遺物 覆土、床面とも図示すべき遺物は見当たらない。
 所見 平安時代の住居跡か。

SB322 (第207図、PL24)

位置 1 B区、VI-N06グリッド
 重複関係 SB316・323・324・356・361を切り、SK714・715を切る。
 形状 隅丸方形。
 覆土 均質な単層。自然埋没?
 壁 やや傾いて立ち上がる。
 床面 軟弱。貼り床、掘り方等はない。
 柱穴 P1~4。
 カマド なし?
 その他施設 なし。
 遺物 全般に少なく、図になるものはごく少ない。
 所見 記録が不足しており詳細不明。カマドが見当たらないが床面付近に礫が散在しているので石組みカマドが破壊されたものとも考えられる。しかし火床は検出されていない。時期的には9世紀のSB356を切るのでそれ以降。この時期としては柱穴が明確なことがやや気になる。強いて本住居跡の性格を考えるならば、何らかの工房か。



第207図 SB322

SB323 (第13図、PL-)

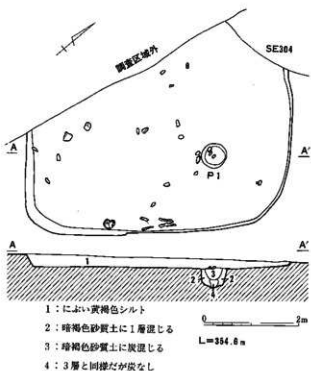
- 位置 1 B区、VI-N06グリッド
 重複関係 SB324を切り、SB322に切られる。
 形状 方形?大半が調査区域外。
 覆土 均質な単層。自然埋没?
 壁 緩やかに立ち上がる。
 床面 明確だが軟弱。掘り方等は不明。
 柱穴 不明。
 カマド 袖は取り払われている。調査区域外にかかって詳細は不明。
 その他施設 不明。
 遺物 覆土、床面とも図示すべき遺物は見当たらない。
 所見 平安時代の住居跡か。

SB324 (第13図、PL-)

- 位置 1 B区、VI-N01・06グリッド
 重複関係 SD323、SK716を切り、SB322・323に切られる。
 形状 方形?大半が調査区域外。
 覆土 均質な単層。自然埋没?
 壁 やや傾いて立ち上がる。
 床面 明確だが軟弱。掘り方等はみられない。
 柱穴 不明。
 カマド 不明。
 その他施設 不明。
 遺物 覆土、床面とも図示すべき遺物は見当たらない。
 所見 平安時代の住居跡か。

SB325 (第208図、PL25)

- 位置 1 B区、VI-N01・06グリッド
 重複関係 SD322・323、SK716を切りSB326、SK306・378~380、SE304に切られる。
 形状 隅丸方形。一部調査区域外。
 覆土 単層。自然埋没?
 壁 やや傾いて立ち上がる。
 床面 堅固な貼り床。浅く不明確な掘り方をもつ。貼り替えはない。
 柱穴 P1。これと対をなす柱穴は不明。
 カマド 切られて不明。
 その他施設 特になし。



第208図 SB325

遺物 覆土中では遺物は多くなく、中央部から拳大の礫が多数検出された。床面でも遺物は少なくなかって南東壁際に成人の白骨を確認した。土坑は認められなかったため住居内埋葬（鹿屋墓）と考えたい。

所見 礫群は床面からは浮いておりカマドが破壊されたものとは考えにくい。白骨は副葬品も伴わず打ち捨てられたかのようなのである。時期的には8～9世紀であろう。

SB327 (第209図、PL25)

位置 1 C区、IV-X10・15グリッド

重複関係 ST307を切り、SB330に切られる。

形状 隅丸方形。

覆土 単層。自然埋没?

壁 やや傾いて立ち上がる。

床面 やや軟弱な貼り床。掘り方、貼り替え等はない。

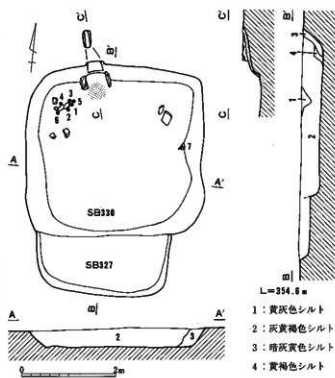
柱穴 不明。なし?

カマド 切られて不明。

その他施設 特になし。

遺物 覆土中では遺物は多くなく床面の遺物もほとんどない。須恵器の鉢、灰釉陶器を模した内黒の碗が出土している。

所見 SB330に切られているため調査面積が小さく、性格不明。一辺2.5m程度なので住居跡としてはかなり小型である。



第209図 SB327・330

SB328 (第210図、PL-)

位置 1 C区、IV-X15・20グリッド

重複関係 SB348を切る。

形状 方形。半分程度が調査区域外。

覆土 分層されるが漸移的であり、自然埋没と考えたい。最上層を洪水砂が覆う。

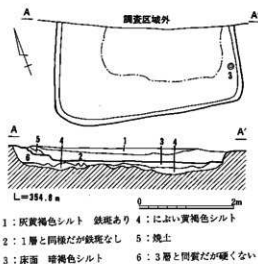
壁 ほげ垂直に立ち上がる。

床面 壁際を除き堅固な貼り床。深さ10cm程の掘り方をもつ。貼り替えはない。

柱穴 なし。

カマド 不明。南北断面上に焼土がみえるので調査区域外の北壁に存在すると思われる。

その他施設 特になし。



第210図 SB328

遺物 全般に少ないが、床面から墨書をもつ坏が出土している。

所見 9世紀の住居跡と思われる。

SB330 (第209図、PL25)

位置 1C区、IV-X10グリッド

重複関係 SB327・347を切る。

形状 方形。

覆土 分層されるが漸移的であり、自然埋没と考えたい。

壁 やや傾いて立ち上がる。

床面 壁際を除き堅固。貼り床ではない。掘り方は存在しない。

柱穴 なし。

カマド 石組みカマド。支脚石なし。残存する柚石が少なく、それらしい石が床面に散在するため故意に破壊されたものと思われる。

その他施設 特になし。

遺物 遺物は下層に多く、カマド脇に礫とともにまとも出土した。住居廃絶時点の遺棄と思われる。

所見 やや小型だが9世紀の住居跡である。

SB334 (第211図、PL-)

位置 1C区、IV-X19グリッド

重複関係 SD305を切り、SK432・434、SA302に切られる。

形状 方形? 検出の不幸際によりカマドの位置と床面の広がりでプラン設定。

覆土 不明。

壁 不明。

床面 堅固な貼り床。掘り方(旧SK、SD)は部分的。貼り替えはない。

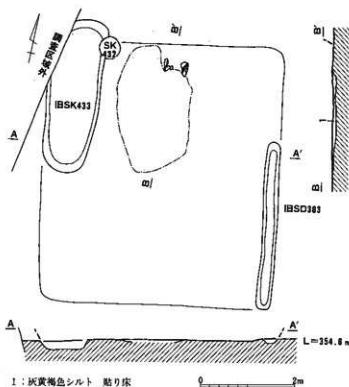
柱穴 なし。

カマド 袖に石・土器など混入。支脚石なし。煙道・火床は不明。

その他施設 不明。

遺物 カマド内に少々。

所見 9世紀前半の住居跡と思われるが詳細は不明。



第211図 SB334

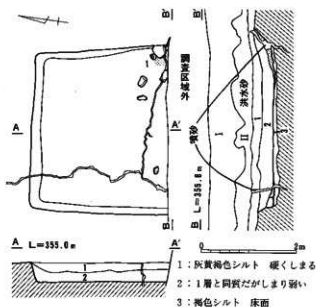
SB335 (第14図、PL-)

位置 1C区、VI-D04グリッド

重複関係	なし。
形状	方形?大半が調査区域外。
覆土	単層。人為埋没とする根拠はない。
壁	不明確。傾いて立ち上がる。
床面	軟弱。掘り方等はない。
柱穴	不明。
カマド	不明。
その他施設	不明。
遺物	覆土内には少量散在。図示すべきものはない。
所見	住居とする明確な根拠はない。住居跡とすれば周囲の状況から8~9世紀か。

SB339 (第212図、PL-)

位置	1C区、VI-D18グリッド
重複関係	なし。
形状	方形。一部調査区域外。
覆土	単層。人為埋没とする根拠はない。
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。
床面	壁際を除き堅固な貼り床。浅い掘り方をもつ。貼り替えはみられない。
柱穴	なし。
カマド	石組みカマド。南東のコーナー付近に位置すると思われるが調査区域外にかかって判然としない。
その他施設	特になし。
遺物	覆土内には少量散在。カマド脇に完形の環。
所見	床面全面に薄く濃密な灰。しかし床は焼けていない。床が焼土化しない程度の焼却か。噴砂が本跡覆土を貫き、洪水砂下部で止まる。



第212図 SB339

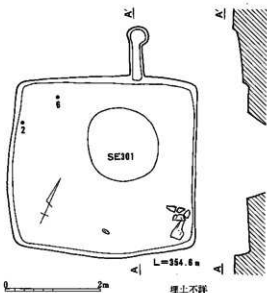
SB341 (第14図、PL-)

位置	1C区、VI-D08・09グリッド
重複関係	SB349・362を切る。
形状	方形?きわめて不明確。
覆土	分層されるが漸移的。人為埋没とする根拠はない。
壁	不明確。ゆるやかに立ち上がる。
床面	軟弱。掘り方等はない。
柱穴	なし。
カマド	なし。
その他施設	なし。
遺物	覆土内には少量散在。床面に半完形の環1点。獣骨と思われる骨が検出されている。

所 見 住居とする明確な根拠はない。住居跡とすれば遺物等から8～9世紀か。

SB343 (第213図、PL-)

位 置 1 C区、VI-X19・24グリッド
 重複関係 SB358を切り、SK434、SE301に切られる。
 形 状 方形。
 覆 土 単層。人為埋没とする根拠はない。
 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。
 床 面 堅固な貼り床。浅い掘り方を持つ。貼り替えはみられない。
 柱 穴 なし。
 カ マ ド 石組みカマド? 煙道の痕跡が東壁にあるが火床等は不明。南壁に石がかたまっているのをこれをカマド石に想定した。



その他施設 特になし。

遺 物 覆土内は遺物僅少。床面でも4点が散在したのみ。

所 見 9世紀ころの住居跡。

第213図 SB343

SB344 (第215図、PL-)

位 置 1 C区、VI-X10グリッド
 重複関係 SB347に切られる。
 所 見 カマド煙道のみ。SB347の旧カマドの可能性もあるがSB347に旧カマドの痕跡が認められないため別遺構とした。

SB345 (第14図、PL-)

位 置 1 C区、VI-D13・14・19グリッド
 重複関係 SB362・363に切られる。
 形 状 方形。大半が調査区域外。
 覆 土 分層されるが漸移的。人為埋没とする根拠はない。
 壁 緩やかに立ち上がる。
 床 面 軟弱。貼り床状であるが明確でない。掘り方、貼り替えはみられない。
 柱 穴 なし? 切られて不明。
 カ マ ド 煙道のみ残存。詳細不明。

その他施設 特になし。

遺 物 覆土には遺物僅少。床面から半完形の須恵器環1点。

所 見 遺物から奈良時代の住居跡と思われる。

SB346 (第214図、PL25)

位 置 1 B区、VI-D22グリッド

重複関係 SK468に切られる。

形状 方形。

覆土 単層。人為埋没とする根拠はない。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 軟弱。掘り方、貼り替えはみられない。

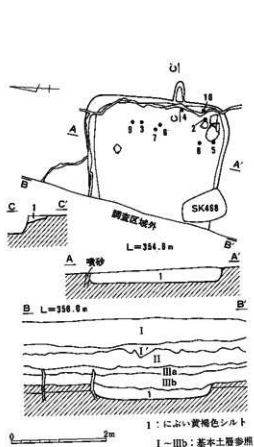
柱穴 なし。

カマド 煙道・火床のみ残存。右脇に石・完形土器がまともてみられるので石組みカマドだったか。

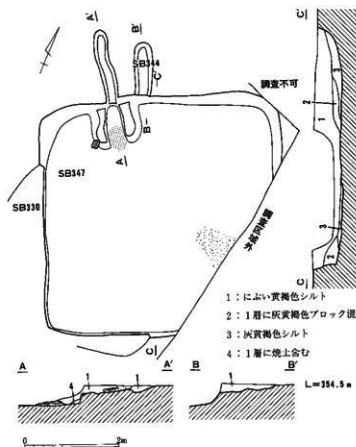
その他施設 特になし。

遺物 全体に多く、覆土上層に投棄と思われる完形の坏。床面からはカマド脇の土器。どちらもあまり時期差はなく9世紀半ばあたりと思われる。

所見 9世紀の住居跡としてはかなり小型である。噴砂が本跡を貫いている。



第214図 SB346



第215図 SB344・347

SB347 (第215図、PL-)

位置 1 C区、VI-X10グリッド

重複関係 SB330に切られる。

形状 隅丸方形。一部調査区域外。

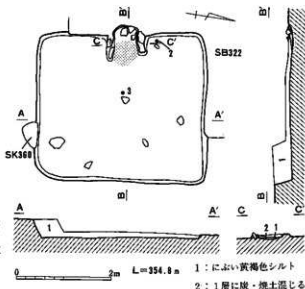
覆土 分層されるが漸移的。自然埋没か。

壁 ほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。

- 床 面 堅固な貼り床。浅い掘り方をもつ。貼り替えはみられない。
 柱 穴 なし。
 カ マ ド 粘土補強カマド。左袖に接して腰がみられるので構築材の可能性もある。
 その他施設 特になし。
 遺 物 全般に少なく、床面からは皆無。
 所 見 わずかな遺物から9世紀の住居と思われる。

SB356 (第216図、PL25)

- 位 置 1 B区、VI-N06グリッド
 重複関係 SB361、SD322を切り、SB316・322、SK360~367に切られる。
 形 状 方形。
 覆 土 単層。自然埋没か。
 壁 ほぼ垂直~やや傾いて立ち上がる。
 床 面 堅固であるが貼り床ではない。掘り方、貼り替えはみられない。
 柱 穴 なし。
 カ マ ド 石組みカマド。一部の石が抜かれておりカマド内外に土器が散乱するため故意による破壊か。

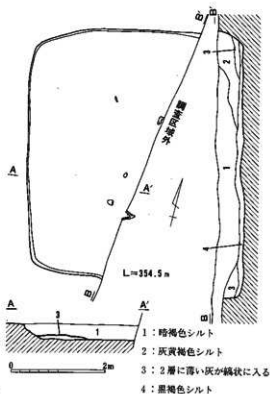


第216図 SB356

- その他施設 特になし。
 遺 物 覆土内には僅少。カマド脇には完形土器がみられ、墨書をもつ環がある。
 所 見 9世紀前半の住居と思われる。

SB362 (第217図、PL-)

- 位 置 1 C区、VI-D09・14グリッド
 重複関係 SB345を切り、SB34Iに切られる。
 形 状 方形。約半分が調査区域外。
 覆 土 分層されるが漸移的。自然埋没か。
 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。
 床 面 軟弱。貼り床ではない。掘り方は不明。
 柱 穴 不明。なし？
 カ マ ド 不明。たぶん調査区域外。
 その他施設 特になし。

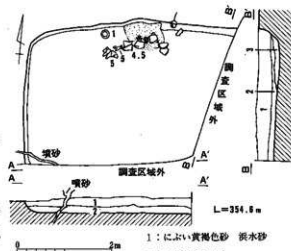


第217図 SB362

- 遺 物 覆土・床面とも土器は破片が少量出土したのみだが環状つまみの蓋が検出され、床面からは獣骨・鉄製品が出土している。
 所 見 わずかな遺物から奈良時代の住居跡と思われる。

SB363 (第218図、PL-)

位置 1 C区、VI-D13・14・18・19グリッド
 重複関係 SB345を切り、SB339に切られる。
 形状 方形。半分以上が調査区域外。
 覆土 分層されるが漸移的。自然埋没か。
 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。
 床面 カマド付近のみ堅固。貼り床、掘り方はみられない。
 柱穴 なし。
 カマド 袖に石・土器など混入。煙道は削平のため不明。支脚石は不明だが抜き取られたと思われる。



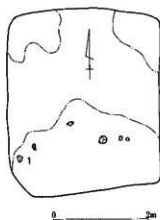
第218図 SB363

その他施設 特になし。

遺物 覆土内には少なくカマド脇の床面から完形の坏など。銅製品が出土しているが腐食が激しく特定できない。
 所見 遺物から奈良時代の住居跡と考えたい。

SB369 (第219図、PL-)

位置 1 B区、VI-I16・17・21・22グリッド
 重複関係 SB371を切り、SD315に切られる。
 形状 方形。貼り床の範囲からプランを推定。
 覆土 不明。検出面が低く覆土ほとんどなし。
 壁 不明。
 床面 部分的に堅固な貼り床が残存。掘り方、貼り替え等はみられない。
 柱穴 不明。
 カマド 不明。西壁に焼土が散在していたため西カマドであった可能性が高い。



第219図 SB369

その他施設 なし。

遺物 高台坏を模したと思われる奇妙な土師器の坏が出土している。
 所見 奈良時代あたりの住居跡か。

SB391 (第15図、PL-)

位置 1 D区、IV-S10・15グリッド
 重複関係 SB414を切る。
 形状 方形。
 覆土 単層。ブロック状の地積が観察されるため人為埋没と考えたい。
 壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。
 床面 堅固であるが貼り床ほどではない。壁際が深くなる掘り方が観察されるため周溝状になると思われる。貼り替え等はみられない。

柱 穴 なし。

カ マ ド なし。

その他施設 なし。

遺 物 覆土内、床面とも少なく、図示すべきものは見当たらない。

所 見 カマドも柱穴もないため住居とするにはやや根拠に乏しい。一応竪穴状遺構としておく。

SB392 (第220図、PL25)

位 置 1 D区、IV-S10、T06グリッド

重複関係 SB393・394に切られる。

形 状 方形。

覆 土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出されれば垂直に立ち上がる。

床 面 全面にわたって堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等はみられない。

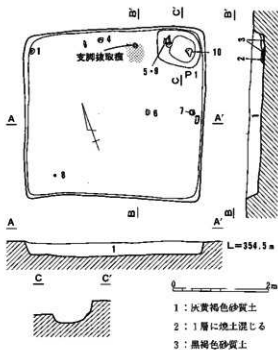
柱 穴 なし。

カ マ ド 袖等は破壊されて不明。火床のみ残存しており、支脚石の抜き取り痕が明瞭である。

その他施設 P1。灰溜めか。炭化物が多い。

遺 物 覆土内には少なく、床面・P1に大型破片。鉄製刀子が検出されている。

所 見 須恵器環・内黒の環のほか、小型甕等も出土している。特筆すべきは灰釉の碗が検出されており、本住居跡の年代決定に役立つものである。灰釉は光が丘あたりと思われるが、本遺跡内では唯一のものである。



第220図 SB392

SB394 (第221図、PL26)

位 置 1 D区、IV-S10・15、T06・11グリッド

重複関係 SB392、SK768に切られる。

形 状 方形。

覆 土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出されれば垂直に立ち上がる。

床 面 堅固な貼り床。掘り方が確認されているが詳細不明。貼り替え等はみられない。

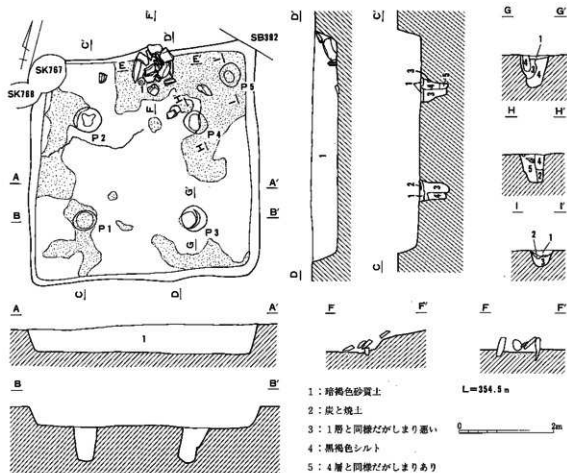
柱 穴 P1~4。柱痕が明瞭。

カ マ ド 石組みカマド。支脚石も残存。自然崩壊か。

その他施設 P5。灰溜めか。

遺 物 覆土内には少なく、床面にやや大型の破片が少々。鉄製刀子が出土している。

所 見 床面に炭化物・焼土が広がっているため、住居廃絶後の焼却と思われる。遺物から7世紀~8世紀初頭の住居跡である。



第221図 SB394

SB395 (第226図、PL-)

位置 1D区、IV-S15・20、T11・16グリッド

重複関係 SB400・407を切り、SD327、SK772・805・824・827に切られる。

形状 方形。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出されほぼ垂直に立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等は見られない。

柱穴 なし。

カマド 火床のみ残存。袖は完全に取り払われている。支脚石なし。

その他施設 特になし。

遺物 覆土中には少なく、床面に完形の環。遺棄によるものと思われる。

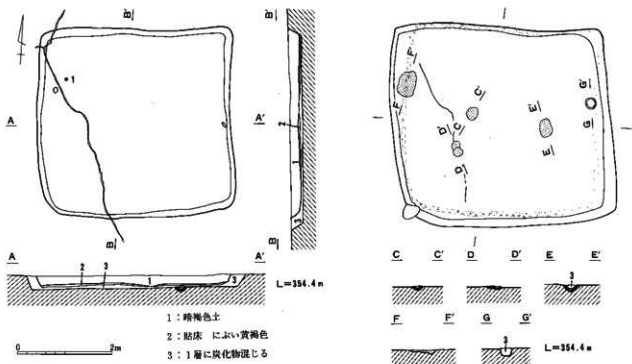
所見 平安時代の住居跡としては煙道が長い。噴砂が本跡を貫いている。本跡下層にSB407があり本跡はSB407の埋まりかけた凹地を利用して構築されたものと思われる。

SB396 (第222図、PL-)

位置 1D区、IV-T15・16グリッド

重複関係 SB400、ST314、SK753を切り、SB396に切られる。

形状 方形。



第222図 SB396

覆 土 単層。自然埋没？

壁 明確に検出されほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 堅固な貼り床が2枚。掘り方が存在するが、面的な調査は都合により行わなかった。

柱 穴 なし。第2床面（下層）にはビットがあるが柱穴とは思えない。

カ マ ド なし。

その他施設 第1床面には何もないが、第2床面には鍛冶炉が4基、地床炉が1基。鍛冶炉底部は楕型滓がみられ、刀子・モミガラ等を取り込んだものもみられた。

遺 物 第1床面からわずかに検出されたのみ。釜と思われる須恵器が出土している。

所 見 9世紀の鍛冶工房跡と思われるが、第1床面に何の施設もないのはどうしたことか。精錬にかかわる技術が変化したとも思えず、単に別の工房へ転換しただけのことかもしれないが釈然としない。本跡を噴砂が貫いている。

SB397 (第223図、PL25)

位 置 1 D区、IV-S25・X05グリッド

重複関係 SA396に切られる。

形 状 方形。

覆 土 単層。自然埋没？

壁 明確に検出されやや傾いて立ち上がる。

床 面 堅固な貼り床。掘り方が存在するが、面的な調査は都合により行わなかった。貼り替えはない。

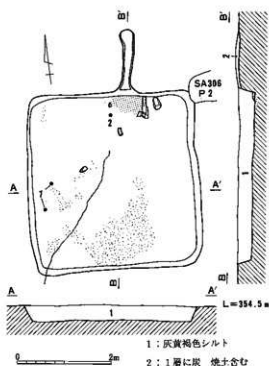
柱 穴 なし。

カ マ ド 石組みカマド。左袖が破壊されている。支脚石は不明だが抜き取りの痕跡はみれらなかつ

- た。
- その他施設 特になし。
- 遺物 覆土には遺物僅少。床面ではやや大きめの破片が検出されているが、坏ばかりである。
- 所見 床面には焼土が広範囲に認められ、住居廃絶の際の焼却と思われる。遺物は須恵器の坏がほとんどであることから8世紀中ごろの住居跡と考えたい。

SB398 (第15図、PL-)

- 位置 1D区、IV-Y01グリッド
- 重複関係 なし。
- 形状 方形。大半が調査区域外。
- 覆土 単層。自然埋没?
- 壁 明確に検出されやや傾いて立ち上がる。
- 床面 不明確かつ軟弱。掘り方、貼り替え等はない。
- 柱穴 P1・2。これらと対をなす柱穴は調査区域外。
- カマド 不明。
- その他施設 不明。
- 遺物 覆土・床面ともに遺物僅少。
- 所見 8~9世紀の住居跡と考えたい。



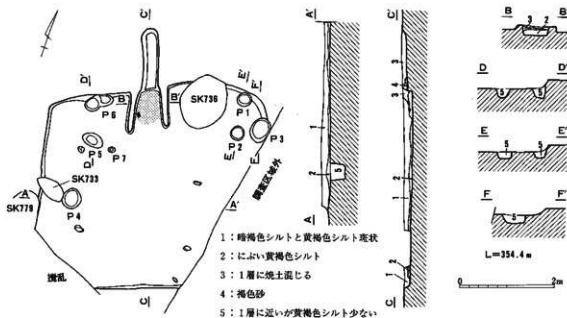
第223図 SB397

SB399 (第224図、PL-)

- 位置 1D区、IV-X05・10、Y01グリッド
- 重複関係 SK782を切り、SK773~736に切られる。
- 形状 方形。一部調査区域外。
- 覆土 分層されるが漸移的。自然埋没?
- 壁 明確に検出されやや傾いて立ち上がる。
- 床面 堅固な貼り床。掘り方、貼り替えはない。
- 柱穴 P2・5。これらと対をなす柱穴は調査区域外。
- カマド 不明。
- その他施設 不明。いくつかピットがあるが性格不明。
- 遺物 床面から砥石が検出された以外遺物なし。
- 所見 遺物はほとんど皆無だが検出面の位置、住居の形態等から奈良時代あたりか。

SB400 (第225図、PL-)

- 位置 1D区、IV-S15・20、T11・16グリッド
- 重複関係 ST314を切り、SB395・396・407、SK804・805・822・825・827に切られる。



第224図 SB399

形状 長方形。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、傾いて立ち上がる。

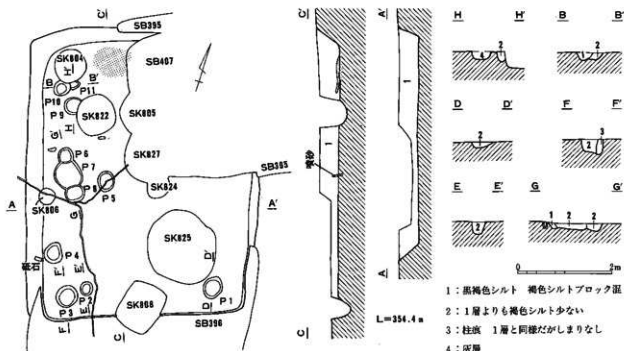
床面 堅固であるが貼り床ほどではない。掘り方、貼り替えはない。

柱穴 P1・3・10か。残りは切られて不明。

カマド 不明。火床のみ残存。

その他施設 ビット多数。柱穴の立て替えと思われるものもあるが判然としない。

遺物 覆土中には少なく、図示すべきものは見当たらない。床面には遺物ほとんどなし。



第225図 SB400

所 見 わずかな遺物から奈良時代の住居跡と思われるが、長方形プランを呈すること、床にピット多数存在することがやや特異である。

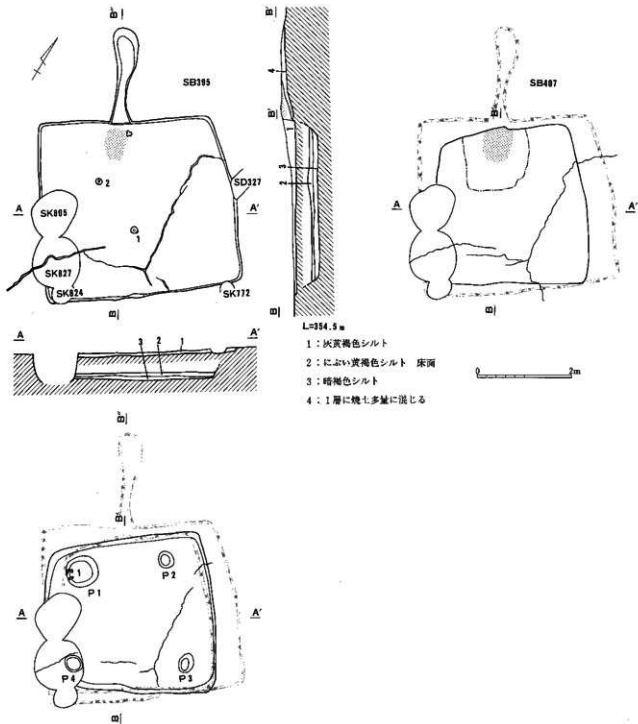
SB406 (第15図、PL-)

位 置 1 D区、VI-T01グリッド

重複関係 SB403・405を切り、ST319、SD324、SL304に切られる。

形 状 方形?

覆 土 単層。ややブロック状の断面が観察されるため人為埋没か。



第226図 SB395・407

壁	明確。ほぼ垂直に立ち上がる。
床	面 堅固な貼り床。中央部は特に硬い。平坦な掘り方をもつが貼り替えはない。
柱	穴 不明。なし？
カマド	不明。なし？
その他施設	特になし。
遺物	覆土内には少量散在。床面には皆無。
所見	住居とする明確な根拠はない。住居跡とすれば9世紀か。

SB407 (第226図、PL-)

位置	1 D区、VI-T01グリッド
重複関係	SB400を切り、SB395、SD327、SK772・805・824・827に切られる。
形状	方形。
覆土	単層。自然埋没。
壁	明確。傾いて立ち上がる。
床	面 堅固な貼り床が2枚。掘り方は確認していない。
柱	穴 第1床面になし。第2床面にP1~4。痕は不明。
カマド	第1床面には火床のみ残存。第2床面では不明。
その他施設	特になし。
遺物	第1床面では検出の不手際から遺物なし。第2床面では坏等の大型破片が少数。
所見	出土遺物から9世紀初頭の住居跡と思われるが古い床面に柱穴がみられ、新しい床面にみられない事実は大変興味深い。一般に住居跡の柱穴が明確に検出できるのは8世紀あたりまでで、それ以降は床下を綿密に調査しても柱穴はほとんど検出されない。住居の構築法が柱穴を必要としなかりかたに変化した結果と考えられているが、その変化の時期を本住居跡は示しているということだろうか。

SB412 (第15図、PL-)

位置	1 D区、VI-N25、S05グリッド
重複関係	SB411を切る。
形状	方形？大半が調査区域外。
覆土	単層。自然埋没。
壁	明確。傾いて立ち上がる。
床	面 堅固な貼り床。中央部は特に硬い。掘り方は確認していない。
柱	穴 なし。床下からも柱穴は検出されなかった。
カマド	不明。調査区域外？
その他施設	不明。
遺物	下層に多く、床面からほぼ完形の小型甕。
所見	9世紀ころの住居跡。

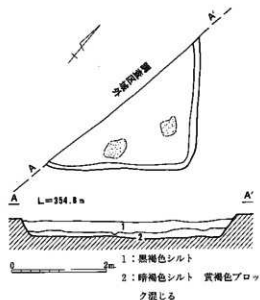
SB413 (第15図、PL-)

位置	1 D区、VI-S05グリッド
----	-----------------

重複関係 SB402・411、SK850・852を切り、SK836に切られる。
 形状 方形?貼り床の広がりからプランを設定。
 覆土 不明。
 壁 不明。
 床面 堅固な貼り床。平坦でごく浅い掘り方を持つ。貼り替えはない。
 柱穴 なし。
 カマド 不明。なし。
 その他施設 不明。
 遺物 遺物ほとんどなし。
 所見 9世紀ころの住居跡か。

SB416 (第227図、PL-)

位置 1D区、VI-S19グリッド
 重複関係 なし。
 形状 方形?約半分が調査区域外。
 覆土 下層はブロック状の断面が観察される人為的な埋土。上層は均質な土で自然埋没と思われる。
 壁 明確に検出され、傾いて立ち上がる。
 床面 堅固であるが貼り床ではない。掘り方、貼り替え等は不明。
 柱穴 なし。
 カマド 不明。調査区域外?
 その他施設 特になし。
 遺物 覆土中層にやや多い。床面には大型の破片が散在していたが図化できたものは須恵器ばかりである。
 所見 床面の一部に薄い炭化物が散っているが焼土はなく、住居廃絶時の焼却とは言い切れない。遺物から8世紀の住居跡であろう。



第227図 SB416

SB501 (第228図、PL-)

位置 2B区、IIA01、B03グリッド
 重複関係 調査区の制約と遺構の広さから重複関係不明。
 形状 方形?
 覆土 単層。上部は洪水砂層下の水田により攪乱されている。自然埋没か。
 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。水田化により上部は削平されている。
 床面 平坦かつ堅固。壁際と中央部を除き、きわめて硬い。部分的に深くなる掘り方をもつが詳細不明。
 柱穴 P1~5。一般的な柱穴の位置ではなく、一見掘立柱建物跡の一部にもみえるが、断面観察により確実に本跡に伴うことが判明した。
 カマド 煙道は削平されている。袖は地山との区別が困難で石は使われていない。火床は深さ50cmに

達する掘り方の上部に焼土ブロックを敷き、完形の土師器坏を倒置した上、さらに埋め戻して構築されている。

その他施設 P 6・7とも焼土を多量に含み、P 6では床面上にまではみだしている。しかし両ピットとも内面は焼けていない。

遺物 覆土内出土の建物は深テンバコ1杯に及ぶがすべて破片であるため図示可能なものは多くない。掘り方からも出土しているが須恵器の食器が多く、土師器は少量である。

所見 南北12m近い大型住居である。特に柱穴の配置は注目に値し、部分調査であることが悔やまれる。本跡は篠ノ井遺跡群新幹線地点内での集落域の最北端にあたると思われる。その規模とともに特殊な機能を付与されていたものと思われる。また、平安洪水砂層に被覆された水田が本跡を攪乱していることから、本来の集落域を強制的に開墾したことが窺え、本跡の時期がこの地区における条里水田成立期の上限を示すことになろう。

SB502 (第229図、PL-)

位置 2A区、IV-E24、J05グリッド

重複関係 なし。

形状 方形。

覆土 単層。自然埋没?

壁 不明確であるがほぼ垂直に立ち上がる。

床面 あまり硬くない。詳細不明。

柱穴 P 1・2・5・8。他のピットは何らかの施設か。

カマド 火床のみ残存。故意による破壊か。

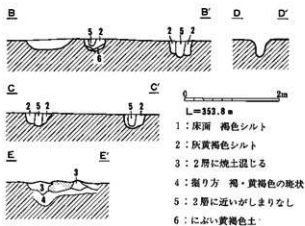
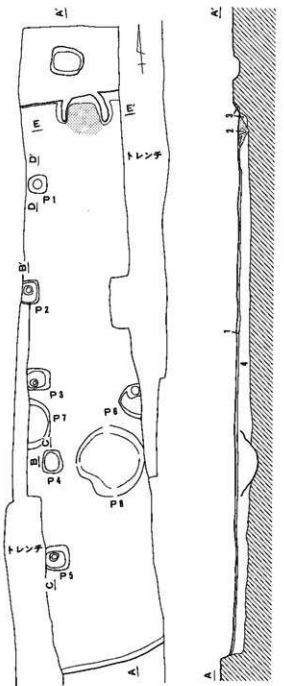
その他施設 P 3・4・6・7。P 4底部から石が出土しているが詳細不明。

遺物 須恵器の坏がほとんどである。

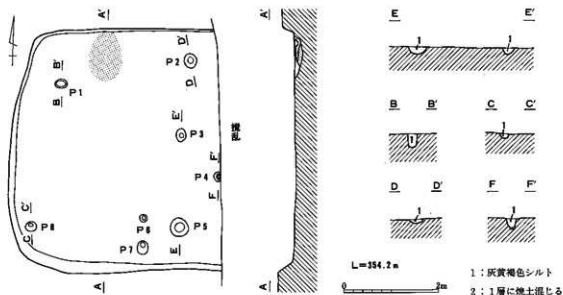
所見 8世紀末～9世紀初頭の住居跡か。

SB503 (第230図、PL-)

位置 1E区、IV-O03・08グリッド

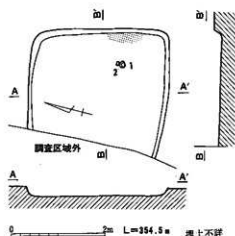


第228図 SB501



第229図 SB502

- 重複関係 SB547を切る。
- 形状 方形。
- 覆土 単層。自然埋没?
- 壁 不明確であるがほぼ垂直に立ち上がる。
- 床面 中央部は堅固で貼り床状。貼り替えはない。
- 柱穴 なし。
- カマド 不明。西壁に焼土の集中がみられるが断定はできない。
- その他施設 なし。
- 遺物 覆土内には少なく床面にややまとまってみられた。
- 所見 9世紀ころの住居跡か。

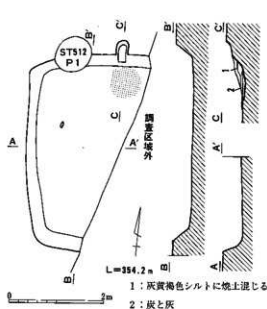


第230図 SB503

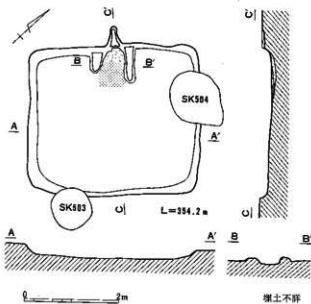
SB504 (第231図、PL-)

- 位置 1 E区、IV-O09グリッド
- 重複関係 SK529に切られる。
- 形状 方形。半分以上が調査区域外。
- 覆土 単層。自然埋没?
- 壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。
- 床面 堅固な貼り床。凹凸が激しいが中央が浅く、壁際が深くなる掘り方が検出されている。多分周溝状になると思われる。貼り替えはない。
- 柱穴 なし。
- カマド 袖は地山と区別が困難。石は使われていない。支脚石はない。
- その他施設 特になし。
- 遺物 覆土中には少なく、床面でもカマド火床及びその付近にややまとまってみられたにすぎない。

所見 遺物から8世紀ころの住居跡か。



第231図 SB504



第232図 SB506

SB506 (第232図、PL-)

位置 1 E区、IV-J 23、24グリッド

重複関係 SB505を切り、SK503・504に切られる。

形状 長方形。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等はない。

柱穴 なし。

カマド 地山を掘り残して袖を造っている。破壊された形跡はない。

その他施設 なし。

遺物 覆土・床面とも遺物ほとんどなし。

所見 時期決定できる遺物がないので判定に苦しむが、カマドの方向等から7～8世紀の住居跡としておきたい。

SB507 (第233図、PL-)

位置 1 E区、IV-O 03・04・09グリッド

重複関係 SB521を切り、SB508に切られる。

形状 長方形。

覆土 単層。ブロック状の断面が観察されるため人為埋没か?

壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。

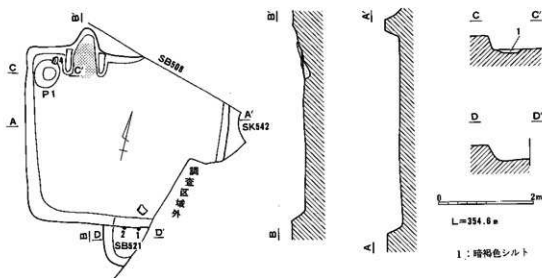
床面 部分的な貼り床。中央部～カマドにかけて堅固。貼り替え、掘り方等はない。

柱穴 なし。

カマド 袖は地山との区別が困難。火床はやや壁外にせり出す。詳細は不明。

その他施設 P 1。灰溜めと思われる。

遺物 全体に少なく、陶になるものは須恵器の坏ばかりである。
 所見 8世紀中ごろの住居跡か。



第233図 SB507・521

SB508 (第234図、PL-)

位置 1 E区、IV-J 24、O03・04グリッド

重複関係 SB507・509・510を切る。

形状 方形。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。中央が高く壁際が低い掘り方が検出されているため周溝状になると思われる。貼り替えない。

柱穴 なし。

カマド 袖は地山と区別が困難。右袖はなんとか検出できたが、左袖は痕跡的で不明確である。

その他施設 特になし。

遺物 詳細不明。カマド付近に多い。

所見 遺物から9世紀前半中ごろの住居跡と思われる。

SB509 (第235図、PL-)

位置 1 E区、IV-J 23・24、O03・04グリッド

重複関係 SB522を切り、SB508に切られる。

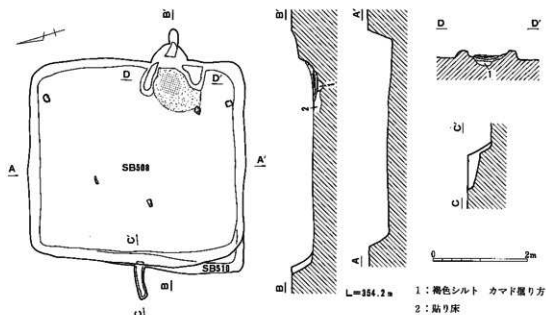
形状 方形。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。中央が高く壁際が低い掘り方が検出されているため周溝状になる可能性もある。貼り替えない。

柱穴 なし。



第234図 SB508・510

カマド 袖は地山と区別が困難。比較的良好に残存していたと記録されているが詳細不明。
 その他施設 なし。

遺物 全般に多く、カマド脇に完形品1点。須恵器ばかりである。

所見 遺物から8世紀の住居跡と思われる。

SB510 (第234図、PL-)

位置 1E区、IV-O03・04グリッド

重複関係 SB509を切り、SB508に切られる。

形状 切られて不明。壁と煙道の一部を検出したのみ。

遺物 煙道から少々。

所見 遺物から9世紀の住居跡と思われるが詳細不明。

SB511 (第16図、PL-)

位置 1E区、IV-O7グリッド

重複関係 SB519・520を切る。

形状 長方形? やや不明確。

覆土 単層。自然埋没?

壁 不明確。やや傾いて立ち上がるか。

床面 不明確かつ軟弱。貼り替え、掘り方等はない。

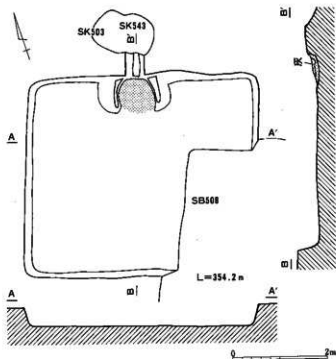
柱穴 不明。P1は位置が適正でなく対をなすピットもない。

カマド 不明。南壁に焼土のかたまりを検出しているがカマドの残骸とは思えない。

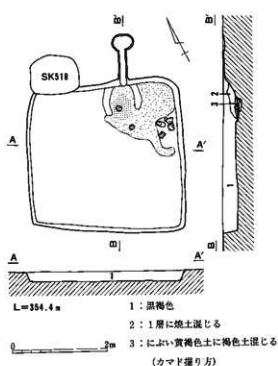
その他施設 特になし。

遺物 覆土上層に多く、検出面で刀子、炭化米を確認している。

所見 住居とする根拠は希薄。



第235図 SB509



第236図 SB514

SB514 (第236図、PL26)

位置 1 D区、IV-O16・21グリッド

重複関係 SB536を切り、SK518を切る。

形状 方形。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。やや深く平坦な掘り方をもつ。貼り替はない。

柱穴 なし。

カマド 袖は痕跡状。床面に石がみられるので石組みだった可能性もある。支脚石あり。

その他施設 なし。

遺物 細片ばかりで図になるものはほとんどない。

所見 時期決定しうる遺物に乏しいが8世紀あたりか。

SB516 (第237図、PL26)

位置 1 D区、IV-O16・17グリッド

重複関係 SB517を切り、SB513に切られる。

形状 方形。

覆土 均質な単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。カマド~中央部は特に硬い。掘り方、貼り替はない。

柱穴 なし。

カマド SKに切られているので火床しか残っていないが、明らかに張り出しカマドである。袖は取

り払われているものと思われる。
 その他施設 P1~3。及び床下ビット。P1は灰溜めか。床下ビットについては性格不明。
 遺物 全体に少なく、カマド脇にもほとんどない。
 所見 8世紀半ばころの住居跡と思われる。

SB519 (第238図、PL-)

位置 1D・E区IV-O07・12グリッド
 重複関係 SB518・520・548を切り、SB511に切られる。

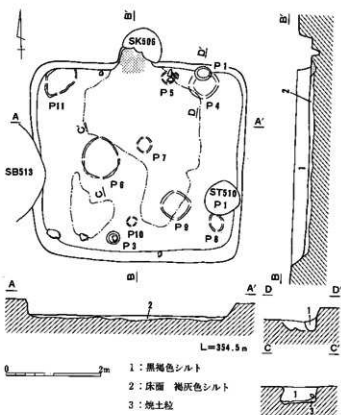
形状 方形。
 覆土 中間に炭化物を多く含む層が観察されるため、埋設途中で焚火が行われた可能性が高い。
 壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。壁際ではやや深くなるため周溝状の掘り方だったと推定される。
 柱穴 P1・3・4・5。P1には抜き取り痕がみられた。

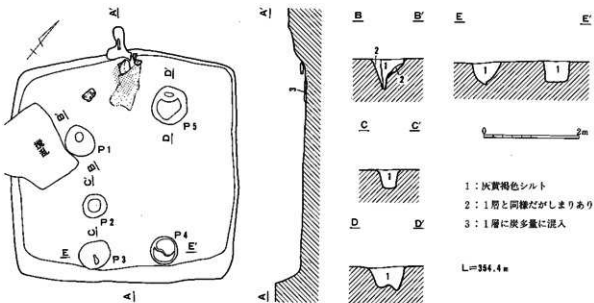
カマド 石組みカマド。故意による破壊と思われる。

その他施設 P2。性格不明。

遺物 詳細不明。図示できたものは須恵器ばかりである。



第237図 SB516



第238図 SB519

所 見 9世紀前半あたりの住居跡と思われる。

SB521 (第233図、PL-)

位 置 1 E区、IV-O04・09グリッド

重複関係 SB507に切られる。

形 状 方形?切られて不明。コーナーの一部を調査したのみ。

覆 土 単層。自然埋没?

壁 不明確。やや傾いて立ち上がるか。

床 面 不明確。貼り床か。

遺 物 壁際に完形の須恵器環2点。

所 見 住居跡とする明確な根拠はないが断面形態からの住居のコーナー部としたい。時期的には8世紀である。

SB522 (第239図、PL-)

位 置 1 E区、IV-J 23、O03グリッド

重複関係 SB509に切られる。

形 状 長方形。

覆 土 単層。自然埋没?

壁 不明確。やや傾いて立ち上がるか。

床 面 軟弱だが貼り床か。掘り方、貼り替え等はない。

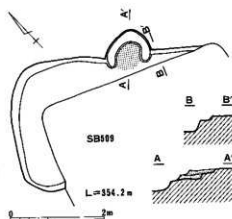
柱 穴 切られて不明。

カ マ ド 袖は地山に近い土で構築。火床がやや壁外に出る張り出しカマド。詳細不明。

その他施設 なし。

遺 物 ほとんどなし。

所 見 カマドの形態から奈良時代あたりか。住居の規模に比してカマドが大きい。



第239図 SB522

SB524 (第240図、PL27)

位 置 1 E区、IV-J 18・19グリッド

重複関係 SB533を切る。

形 状 方形。一部調査区域外。

覆 土 上部に洪水砂が堆積。下層はブロック状。人為的に埋め戻された後、洪水に見舞われたと思われる。

壁 明確に検出され、やや傾いて立ち上がるか。

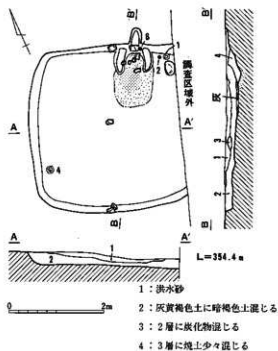
床 面 壁際は堅固な貼り床。周溝状の掘り方をもつ。貼り替えはない。

柱 穴 なし。

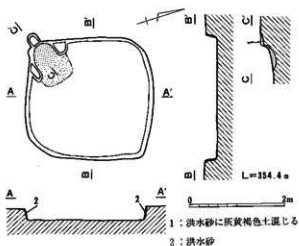
カ マ ド 袖は地山に近い土で構築。火床に多くの石が投げ込まれていたというが詳細不明。

その他施設 なし。

遺 物 覆土下層に多く、火床の上に完形土器。



第240図 SB524



第241図 SB525

所 見 遺物から9世紀の住居跡である。

SB525 (第241図、PL27)

位 置 1 E区、IV-J 14グリッド

重複関係 SB531を切る。

形 状 方形。

覆 土 上部及び壁際に洪水砂が堆積。したがって大まかに埋められた後、洪水に見舞われたと思われる。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 不明確かつ軟弱。掘り方、貼り替えはない。

柱 穴 なし。

カ マ ド 火床のみ残存。袖と煙道は痕跡のみ。

その他施設 なし。

遺 物 覆土・床面とも少ない。

所 見 コーナーにカマドをもつ住居は調査範囲内では本跡が唯一である。遺物から9世紀半ばと思われる。

SB526 (第242図、PL-)

位 置 1 E区、IV-O01・02グリッド

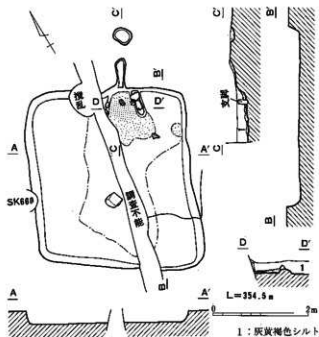
重複関係 SB567、SK871を切り、SK660に切られる。

形 状 方形。

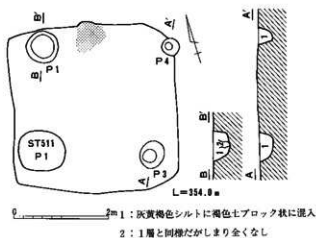
覆 土 均質な単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 堅固な貼り床。掘り方、貼り替えはない。



第242図 SB526



第243図 SB527

柱 穴 なし。

カ マ ド 石組みカマド。天井石はない。火床に土器片が散乱。

その他施設 なし。

遺 物 覆土内には少なく、カマド周辺からややまとまって出土。大型の坏または鉢が検出されている。

所 見 焼土がカマド前方にまで広がっているが住居廃絶時の焼却に近いものか。遺物から9世紀の住居跡である。

SB527 (第243図、PL-)

位 置 1 E区、IV-O02・07グリッド

重複関係 SB529を切る。

形 状 方形? 貼り床の広がりや柱穴の位置から設定。

覆 土 不明。

壁 不明。

床 面 堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等はない。

柱 穴 P1~4。

カ マ ド 火床のみ残存。検出の際、石は確認されなかったので粘土~地山による袖か。

その他施設 なし。

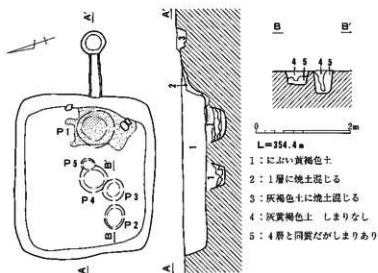
遺 物 遺物なし。

所 見 カマドの方向等から古代の住居跡としたい。

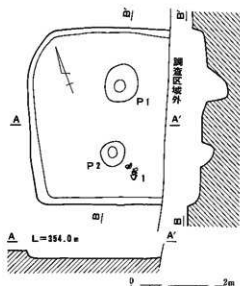
SB528 (第244図、PL27)

位 置 1 E区、IV-J12、O02グリッド

- 重複関係 SB538を切る。
- 形状 方形～長方形。
- 覆土 単層。自然埋没。
- 壁 明確に検出されやや傾いて立ち上がる。
- 床面 堅固な貼り床。平坦な掘り方をもつ、貼り替え等はない。
- 柱穴 なし。
- カマド 火床のみ検出。袖は覆土と区別ができなかったが、多分取り払われている。カマド脇に角礫が散在していることから石組みカマドであった可能性もある。
- その他施設 床下にビット5基。P1はカマドの掘り方と考えられるが、他のビットは不明。
- 遺物 覆土には少なく、カマド脇に半完形～やや大型の破片。
- 所見 カマド周辺の床面に薄く焼土が散る。遺物から8世紀末～9世紀初頭と思われる。小型であることからカマド屋の可能性もある。



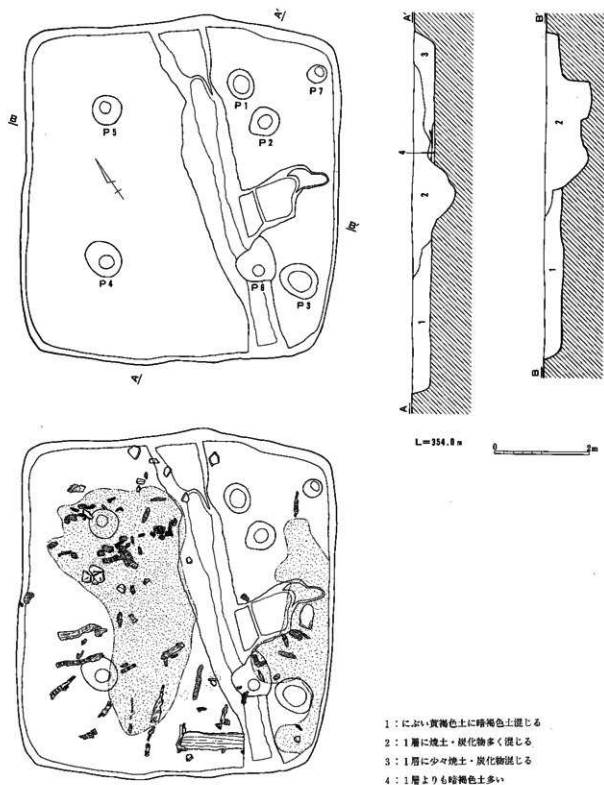
第244図 SB528



第245図 SB532

SB531 (第246図、PL26)

- 位置 1E区、IV-O02・07グリッド
- 重複関係 SB525・550に切られる。
- 形状 方形。
- 覆土 分層されるが根拠に欠ける。住居廃絶時に溝や穴を掘ったものか。溝状の部分は検出面では全くとらえられず、溝が本跡の外に伸びる状況も観察されない。
- 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
- 床面 堅固であるが貼り床ではない。掘り方、貼り替え等はない。
- 柱穴 P2・4～6。立て替えと思われるビットもあるが詳細不明。
- カマド 火床の一部のみ残存。
- その他施設 P1・3・7。性格不明。
- 遺物 覆土全体から多量に出土しており、特に下層に集中する。床面の壁際には完形・半完形品が多く炭化した材とともに消失家屋に近い状況を示す。覆土の土器は投棄によるものと思



- 1 : 1層に焼土・炭化物多く混じる
- 2 : 1層に少々焼土・炭化物混じる
- 3 : 1層よりも暗褐色土多い

第246図 SB531

れ、床面の溝や穴も投棄施設としてのものか。鉄斧、鉄製紡錘車等も検出している。

見 住居廃絶跡の焼却や土器投棄施設(ゴミ穴)への転換はしばしば目にするが、焼失に近い状況の住居跡にさらに穴や溝を掘って完形に近い土器や鉄斧まで投棄するのはいかなることか。かなり切迫した事情のもとに行われたものと考えられるが推測の域を出ない。

遺物は7世紀末～8世紀前半(あるいは初頭)の様相を呈し、かなり限定された時期のもの

のである。

SB532 (第245図、PL-)

位置 1 E区、IV-J 09グリッド

重複関係 なし。

形状 方形?一部調査区域外。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼り床。周溝状を呈する掘り方をもつ。貼り替え等はない。

柱穴 不明。P1・2とすれば長方形プランとなる。

カマド 不明。調査区域外?

その他施設 鍛造台石と思われる大型の石。P1・2も何らかの施設か。

遺物 覆土内には遺物僅少。床面にもほとんどみられない。

所見 柱穴とは思えないビット、大型の平石の存在から鍛冶工房と考えたい。遺物から8世紀前半か。

SB535 (第17図、PL-)

位置 1 E区、IV-J 14グリッド

重複関係 SB525に切られる。

形状 方形?大半が調査区域外。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 堅固であるが貼り床かどうか不明。掘り方、貼り替え等はない。

柱穴 不明。

カマド 不明。調査区域外?

その他施設 不明。調査範囲内にはない。

遺物 覆土内には遺物僅少。床面にもほとんどみられない。

所見 平面形態から住居跡と考えたい。時期決定の根拠に乏しいが、わずかな遺物から8世紀あたりか。

SB537 (第247図、PL27)

位置 1 E区、IV-O17・18・22・23グリッド

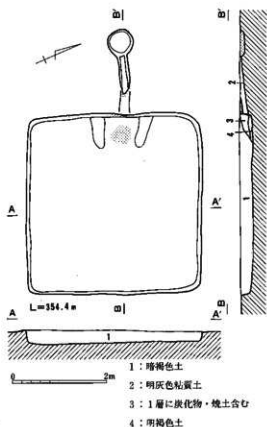
重複関係 SB539を切り、ST507に切られる。

形状 方形。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 堅固であるが貼り床ではない。掘り方、貼り



第247図 SB537

替え等はない。

柱 穴 なし。

カ マ ド 煙道・火床のみ残存。袖は痕跡的。

その他施設 特になし。

遺 物 覆土内には遺物僅少。床面にやや大型の破片がみられた。

所 見 遺物から8世紀中ごろあたりの住居跡か。

SB538 (第248図、PL-)

位 置 1 E区、IV-J 12、O02・03グリッド

重複関係 SB528・529に切られる。

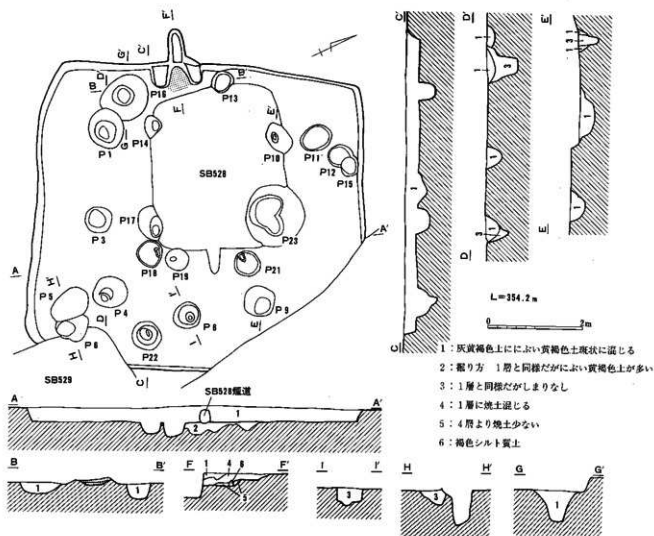
形 状 方形。

覆 土 単層だが2種類の土が混入しており人為埋没と思われる。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 堅固な貼り床。浅い掘り方をもつ。貼り替え等はない。

柱 穴 P1・3・4・9・10・23。6本柱を想定。



- 1: 灰黄褐色土上におい貴褐色土敷状に混じる
- 2: 掘り方 1層と同様だがにおい貴褐色土が多い
- 3: 1層と同様だがしまりなし
- 4: 1層に焼土混じる
- 5: 4層より焼土少ない
- 6: 褐色シルト質土

第248図 SB538

カマド 袖は地山と区別が困難。支脚石はない。

その他施設 いくつかピットがあるが性格不明。P13は灰溜めか。

遺物 覆土・床面ともに遺物は少ない。

所見 カマドの方向から古墳時代とも思われたがわずかな遺物から8世紀としたい。

SB539 (第249図、PL27)

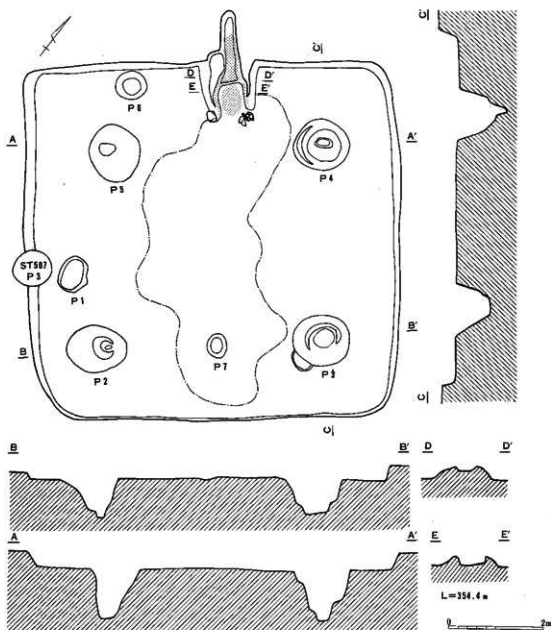
位置 1E区、IV-O17・18・22・28グリッド

重複関係 SB537、ST507に切られる。

形状 方形。

覆土 不詳。

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

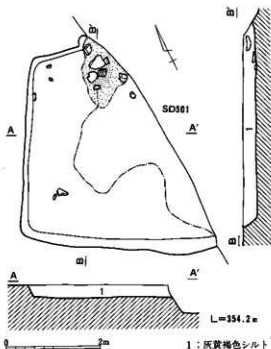


第249図 SB539

- 床 面 堅固な貼り床。詳細不明。
 柱 穴 P 2～5。
 カ マ ド 袖は地山と区別が困難。左袖先端に石。詳細不明。
 その他施設 いくつかピットがあるが性格不明。P 6は灰溜めか。
 遺 物 出土状況不明。覆土からはかなりの土器が出土している。
 所 見 カマドの方向や住居の規模から古墳時代としても良いかと思われたが、遺物が須恵器を主体とする傾向にあるため古代として扱いたい。7世紀末あたりか。

SB540 (第250図、PL-)

- 位 置 1 D区、IV-O13・18グリッド
 重複関係 SB544を切り、SD501に切られる。
 形 状 方形?切られて不明。
 覆 土 均質な単層。自然埋没?
 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
 床 面 貼り床だが中央部分のみ堅固。掘り方、貼り替え等はない。
 柱 穴 なし。
 カ マ ド 石組みカマドと思われるが、切られているため一部のみ調査。
 その他施設 特になし。
 遺 物 覆土中には少なく、床面にややまとまってみられたのみ。
 所 見 わずかな遺物から8世紀としたい。



第250図 SB540

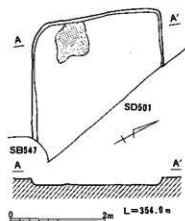
SB542 (第253図、PL-)

- 位 置 1 E区、IV-O08・13グリッド
 重複関係 SB547、SD501に切られる。
 形 状 方形?切られて不明。
 覆 土 均質な単層。自然埋没?
 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
 床 面 部分的に貼り床。掘り方、貼り替え等はない。
 柱 穴 なし。
 カ マ ド 切られて不明。
 その他施設 特になし。
 遺 物 覆土中には少なく、床面にやや大きめの破片。
 所 見 遺物から9世紀の住居跡と考えたい。

SB543 (第251図、PL-)

- 位 置 1 E区、IV-O03・08グリッド
 重複関係 SB547・549、SD501に切られる。

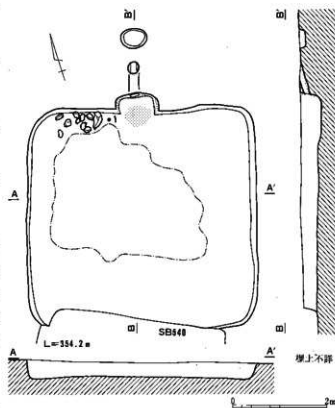
- 形 状 隅丸方形?切られて不明。
 覆 土 検出面が低く、埋没状況不明。
 壁 明確に検出されるが上記理由により立ち上がりは明確でない。
 床 面 堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等はない。
 柱 穴 なし。
 カ マ ド 火床のみ残存。石が散乱していることから石組みであったと思われる。故意による破壊か。
 その他施設 特になし。
 遺 物 覆土中には少なく、カマド周辺にややまとまってみられたのみ。
 所 見 遺物から9世紀の住居跡と考えたい。



第251図 SB543

SB544 (第252図、PL-)

- 位 置 1 E区、IV-O12・13・17・18グリッド
 重複関係 SB518を切り、SB540に切られる。
 形 状 隅丸方形。
 覆 土 均質な単層。自然埋没?
 壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。
 床 面 堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等は不明。
 柱 穴 なし。
 カ マ ド 火床・煙道のみ残存。火床が壁外に突出し、煙道の先端がビット状になる張り出しカマドである。カマド麓に拳大~人頭大の石の集積がみられるので石組みがあった可能性が高い。
 その他施設 特になし。
 遺 物 覆土中には少なく、カマド周辺にややまとまってみられたのみ。
 所 見 遺物から8世紀前半ころの住居跡と考えたい。

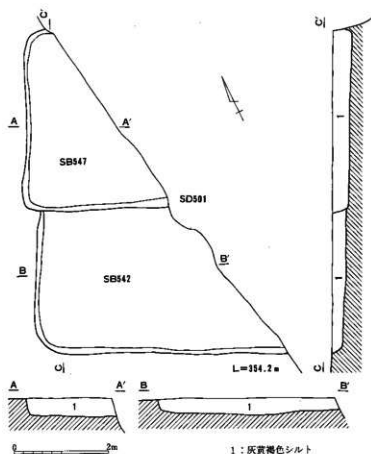


第252図 SB544

SB547 (第253図、PL-)

- 位 置 1 E区、IV-O18グリッド
 重複関係 SB503・542・543を切り、SD501に切られる。
 形 状 方形。
 覆 土 単層。自然埋没?

- 壁 明確。ほぼ垂直に立ち上がる。
- 床 面 不明確。土器の散布面を床と仮定。やや堅固であるが掘り方等はない。
- 柱 穴 なし。
- カ マ ド 切られて不明。
- その他施設 不明。調査範囲内にはなし。
- 遺 物 覆土下層に多く、床面に半完形の土器が散在。遺棄によるものと考えたい。
- 所 見 遺物から9世紀の住居跡と思われるが長頸壺、大甕、盤、短頸壺?などあまり一般的でない器種を伴っていることが気になる。



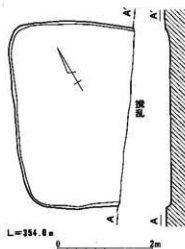
第253図 SB542・547

SB548 (第16図、PL-)

- 位 置 1 D区、IV-O12グリッド
- 重複関係 SB519に切られる。
- 形 状 不明。カマド火床のみ検出。
- 所 見 SB519の床下で検出。火床が壁外に出るタイプと思われる。

SB550 (第254図、PL-)

- 位 置 1 E区、IV-J 08グリッド
- 重複関係 SB531を切る。
- 形 状 隅丸方形。
- 覆 土 単層だが検出面が低いため埋没状況不明。
- 壁 明確。ほぼ垂直に立ち上がる。
- 床 面 堅固であるが貼り床ほどではない。掘り方等はない。
- 柱 穴 なし。
- カ マ ド 痕跡が認められたようであるが詳細不明。
- その他施設 不明。調査範囲内にはなし。
- 遺 物 覆土・床面とも遺物僅少。図示すべきものは見当たらない。
- 所 見 遺物から8世紀ころの住居跡か。



第254図 SB550

SB551 (第17図、PL-)

- 位 置 1 E区、IV-J 03・04グリッド
- 重複関係 SB554を切る。

形 状 隅丸方形? コーナーの一部を調査したのみ。ほとんどが調査区域外。
 覆 土 均質な単層。自然埋没?
 壁 明確。ほぼ垂直に立ち上がる。
 床 面 堅固な貼り床。掘り方をもつが詳細は不明。貼り替えはない。
 柱 穴 不明。
 カ マ ド 不明。
 その他施設 不明。調査範囲内にはない。
 遺 物 覆土・床面とも遺物僅少。図示すべきものは見当たらない。
 所 見 遺物から8世紀ころの住居跡か。

SB554 (第17図、PL-)

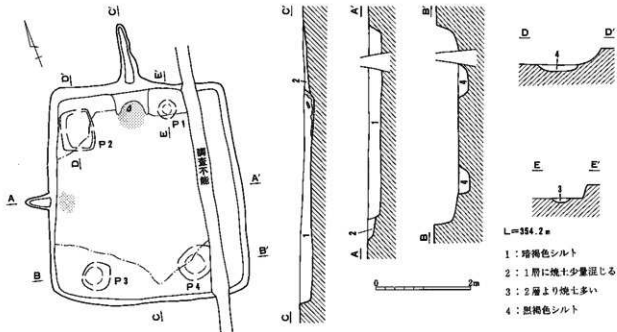
位 置 1 E区、IV-J 03・04グリッド
 重複関係 SB551、SD502に切られる。
 形 状 不明。壁の一部を調査したのみ。
 覆 土 均質な単層。自然埋没?
 壁 明確。傾いて立ち上がる。
 床 面 堅固であるが貼り床か不明。掘り方、貼り替えはない。
 柱 穴 不明。
 カ マ ド 不明。
 その他施設 P 1。底部から石臼と甕。別遺構の可能性が高い。
 遺 物 覆土・床面とも遺物僅少。図示すべきものは見当たらない。
 所 見 遺物から8世紀前半ころの住居跡か。

SB359 (第255図、PL-)

位 置 1 D区、IV-O11グリッド
 重複関係 SB551、SD502に切られる。
 形 状 方形。工程の都合で一部調査できなかった部分が生じた。
 覆 土 均質な単層。自然埋没?
 壁 明確。傾いて立ち上がる。
 床 面 堅固な貼り床。掘り方、貼り替えはない。
 柱 穴 不明。床下のピットがそれらしいがどれも浅く本跡との帰属関係は明らかではない。
 カ マ ド 2基。北壁のものが新しい。
 その他施設 P 1は灰溜めか。柱穴とするにはやや小さい。
 遺 物 覆土全体からやや多めに出土しており、床面に半環形の環。
 所 見 遺物から8世紀半ば~後半の住居跡と思われる。

SB563 (第16図、PL-)

位 置 1 E区、IV-J 17グリッド
 重複関係 SB564を切る。
 形 状 不明。煙道の一部を調査したのみ。ほとんど調査区域外。

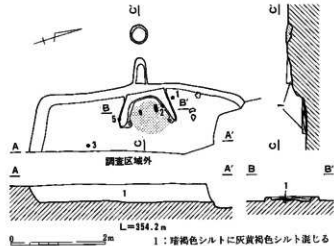


第255図 SB559

所見 SB564の時期がやや不明確であるが、本跡は9世紀以降か。

SB565 (第256図、PL27)

位置 1 E区、IV-J 21・22グリッド
 重複関係 SB564を切り、SB573に切られる。
 形状 方形? 大半が調査区域外。
 覆土 単層。ブロック状の断面が観察され人為埋没と思われる。
 壁 明確に検出され、傾いて立ち上がる。
 床面 堅固な貼り床。掘り方をもつが詳細不明。貼り替えはない。
 柱穴 不明。調査区域外?
 カマド 袖は地山と区別が困難。先端に石を配したとみられる抜き取り痕がある。火床には支脚石の抜き取り痕が2個あり、袖の間隔も広めである。



第256図 SB565

その他施設 特になし。

遺物 覆土全般に多い。カマド脇の床面には長頸壺、坏の半完形品が散乱。

所見 9世紀初頭あたりの住居跡と思われるが支脚石を2個もつものはこの住居のみである。

SB566 (第258図、PL-)

位置 1 E区、IV-J 21グリッド

重複関係 SB573を切る。

形状 不明。煙道の一部を調査したのみ。ほとんど調査区域外。

所見 SB573の時期が8世紀後半～9世紀初頭であるので本跡はそれ以降か。

SB568 (第257図、PL-)

位置 1E区、IV-O01・06グリッド

重複関係 SB546・576を切る。

形状 方形?大半が調査区域外。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、傾いて立ち上がる。

床面 部分的に堅固であるが貼り床とは言いつれない。貼り替えはなく、掘り方は不明。壁際是一段高く、テラス状を呈している。

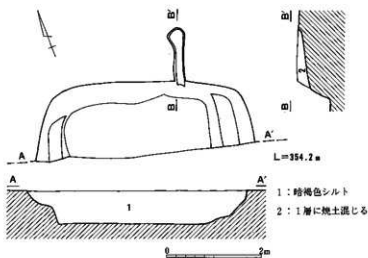
柱穴 不明。調査区域外?

カマド 煙道のみ検出。他の部分は火床も含め、完全に破壊されている。

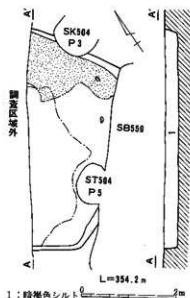
その他施設 上記壁際のテラス状遺構。

遺物 覆土全体に少なく、床面にやや大きめの破片が散在する。完形品はない。

所見 9世紀の住居跡と思われるがテラス状の遺構を伴うものはこの住居のみである。



第257図 SB568



第258図 SB569

SB569 (第258図、PL-)

位置 1D区、IV-N15、O11グリッド

重複関係 SB559、ST504に切られる。

形状 方形?大半が調査区域外。

覆土 単層。自然埋没?

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 部分的に堅固な貼り床。掘り方を確認しているが詳細不明。貼り替えはない。

柱穴 なし。

カマド 不明。調査区域外？

その他施設 特になし。

遺物 覆土・床面とも遺物は少なく、図示すべきものは見当たらない。

所見 9世紀あたりのSB559に切られるので8世紀付近か。

SB573 (第259図、PL-)

位置 1E区、IV-J21、O01グリッド

重複関係 SB565・567を切り、SB566、ST503に切られる。

形状 方形？大半が調査区域外。

覆土 単層。自然埋没？

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 堅固な貼り床。浅く平坦な掘り方を確認している。貼り替えない。

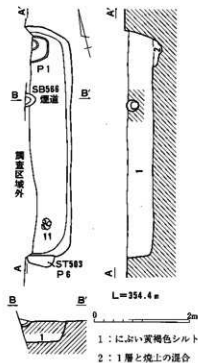
柱穴 不明。調査区域外？

カマド 不明。灰溜めが北壁にあるので調査区域外。

その他施設 P1。灰溜めと思われる。

遺物 覆土上層に遺物が多く、完形土器もみられるため埋没途中で破棄されたものと思われる。床面にはやや大きめの破片が散在していた。

所見 調査面積の割に遺物が多い。住居廃絶後、土器廃棄施設となつたらしいが大半が調査区域外で詳細不明。時期的には9世紀初頭あたりである。



第259図 SB566・573

SB576 (第260図、PL-)

位置 1D区、IV-O01・06グリッド

重複関係 SB568、SK676に切られる。

形状 方形？

覆土 単層。自然埋没？

壁 明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面 中央部は堅固な貼り床。掘り方は不明。貼り替えない。

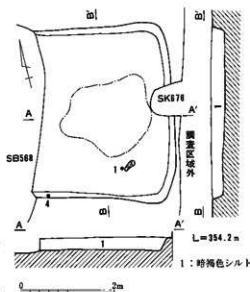
柱穴 なし。

カマド 切られて不明。

その他施設 特になし。

遺物 覆土内の遺物は細片ばかりであるが、床面からやや浮いた地点からウマの肩甲骨が出土しており、ト占骨の可能性もある。床面には須恵器甕の破片が散在。

所見 8世紀ころの住居跡としたい。



第260図 SB576

(3) 掘立柱建物跡

ST101 (第261図、PL28)

位置 1 A区、VI-R24・25、W04グリッド
形状 側柱。梁行2間以上、桁行5間。3.2m×8.0m
軸・柱間 N-45°-E。東西1.4~1.6m 南北1.2~1.7m
柱痕 不明。
覆土 不明。
遺物 不明。
所見 検出面の高さ、周辺の遺構の状況から古代と思われるが柱間が狭いことが気になる。

ST306 (第261図、PL-)

位置 1 C区、IV-X09・14・15グリッド
形状 側柱。梁行1間、桁行3間以上。3.8m×3.6m
軸・柱間 N-70°-E。南北2.0m 東西1.6~1.9m
柱痕 なし。
覆土 2分層。上層は黄褐色、下層は暗褐色のシルト。
遺物 不明。
所見 D地区の掘立柱建物跡群の南端に位置し、本跡の北にあるST307とは直接切り合わないが近すぎるので時期を異にすると思われる。

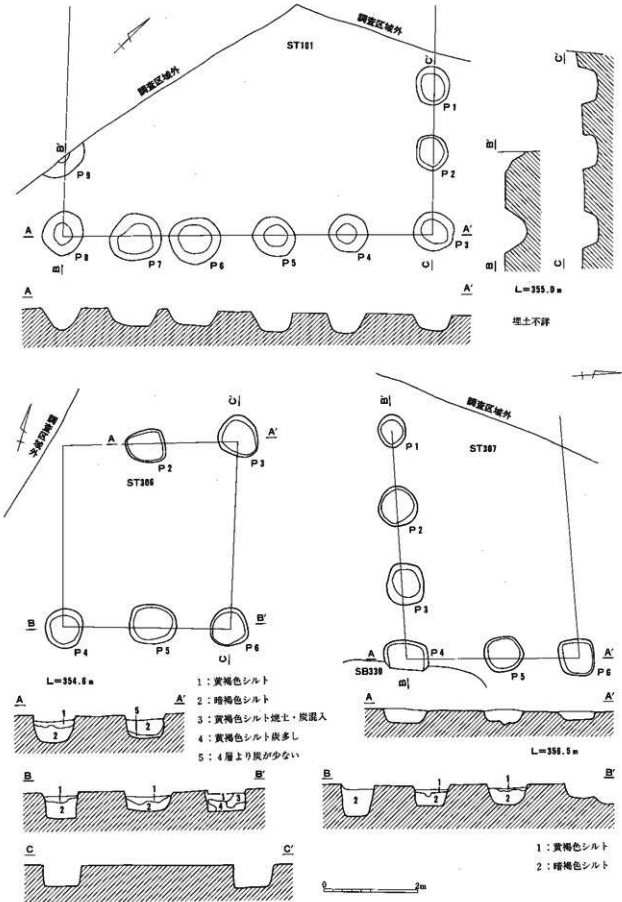
ST307 (第261図、PL-)

位置 1 C区、IV-X09・10グリッド
形状 側柱。梁行間2間、桁行3間以上。3.6m×4.8m以上?
軸・柱間 N-80°-E。南北1.2~1.6m 東西1.2~2.0m
柱痕 なし。
覆土 ST306とほぼ同様だが削りすぎたため1層が浅いか失われている。
遺物 不明。
所見 ST306とは直接切り合わないが近すぎるので時期を異にすると思われる。

ST308 (第262図、PL-)

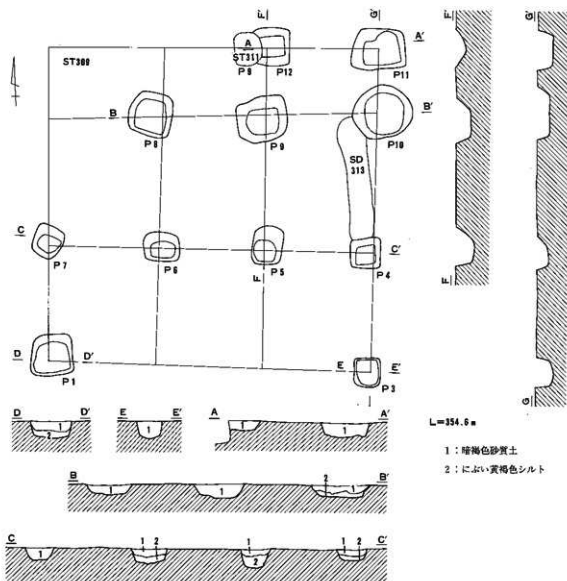
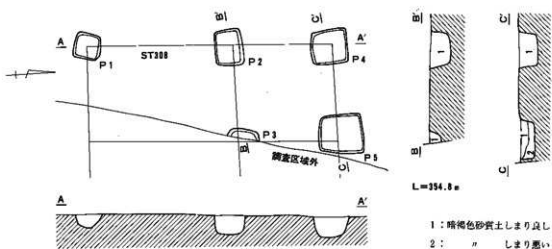
位置 1 B区、VI-I17・22グリッド
形状 総柱。梁行2間、桁行2間以上。5.1m×2.0m以上
軸・柱間 N-2°-E。南北2.1~3.0m 東西1.9m
柱痕 なし。
覆土 P5以外は単層。
遺物 土器片が若干出土しているが流れ込みらしい。
所見 瓦塔が出土したSX301、SD315が西側に位置するため本跡を瓦塔安置施設と考えることもできるが根拠に欠ける。

ST309 (第262図、PL28)



第261図 掘立柱建物跡(1)

第2章 竊ノ井遺跡群



第262図 竊立柱建物跡(2)

位置 1B区、VI-102・03・07・08グリッド
 重複関係 ST312を切り、ST311、SD313に切られる。
 形状 変則総柱。梁行3間、桁行3間以上。6.8m×6.7m
 軸・柱間 W-2'-N。南北1.4~3.0m 東西2.1~2.6m
 柱痕 なし。
 覆土 単層のものと2分層されるものがあるが上層はすべて同一の土壌である。
 遺物 土器片が数点出土している。
 所見 3×3間の総柱建物としては5基の柱穴が不足する変則的な建物を想定した。古代にこのような建物が実在しうるか疑問であるが柱穴の見落としはありえず、周囲に掘立柱建物跡が集中することから一応このように結論づけた。

ST311 (第263図、PL28)

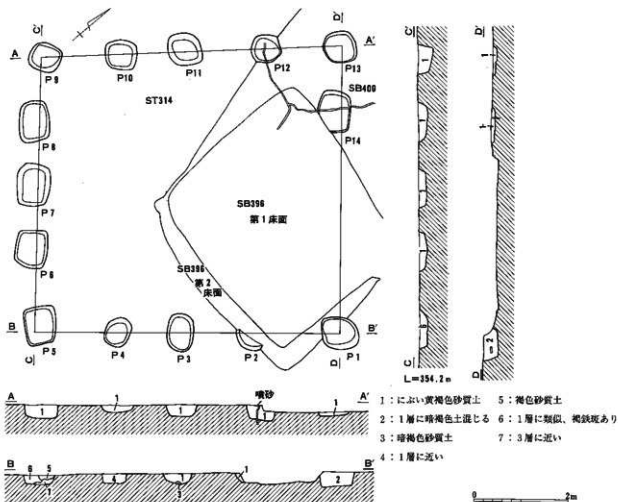
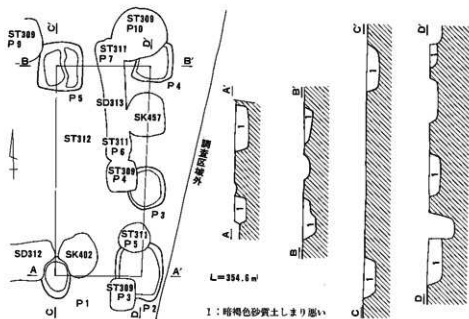
位置 1B区、VI-102・03・07・08グリッド
 重複関係 SB351・355、ST309・312を切り、SK402に切られる。
 形状 側柱。梁3間、桁行4間。6.1m×8.0m
 軸・柱間 E-6'-N。南北1.7~2.2m 東西1.9~2.1m
 柱痕 なし。
 覆土 下層にブロック状の断面が観察される。
 遺物 すべての柱穴から土器が若干出土している。
 所見 本跡周辺は掘立柱建物跡が集中しており、中世に至っても同様である。これは本跡付近が微高地となっていることが原因とみられ、基本土層の観察でも本跡南側がやや低いことが判明している。なお本跡を含む古代の掘立柱建物跡はST312→ST304→ST311となり、本跡が最も新しい。

ST312 (第264図、PL-)

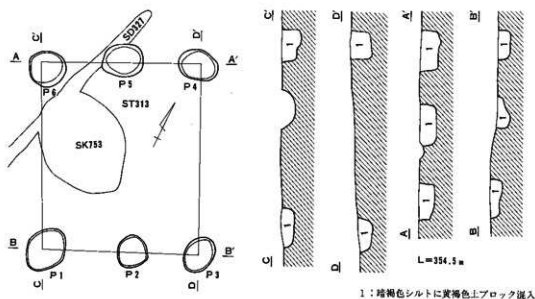
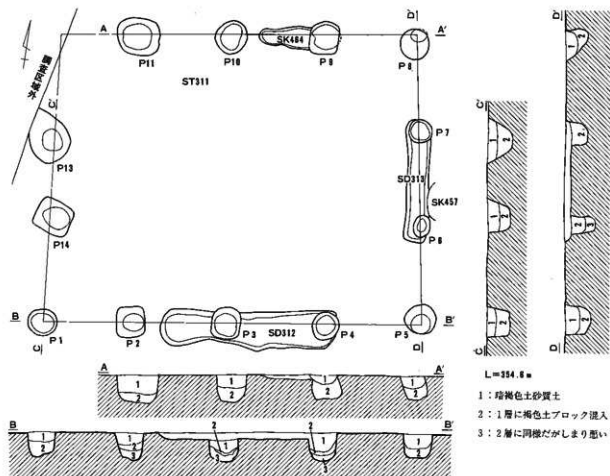
位置 1B区、VI-103・08グリッド
 重複関係 ST301・311、SD312、SK402に切られる。
 形状 側柱。梁行1間、桁行2間。1.9m×4.5m
 軸・柱間 N-2'-E。南北1.8~2.7m 東西1.8~2.0m
 柱痕 なし。
 覆土 単層。自然埋没？
 遺物 土器が若干出土している。流れ込みか。
 所見 柱穴が1基不足だが検出ミスではない。確実に存在しない。

ST313 (第263図、PL28)

位置 1D区、IV-T11・12グリッド
 重複関係 SK753を切り、SD327に切られる。
 形状 側柱。梁行2間、桁行1間。3.2m×4.0m
 軸・柱間 N-32'-E。南北3.9~4.0m 東西1.4~1.8m
 柱痕 なし。



第263図 掘立柱建物跡(3)



0 2m

第264図 掘立柱建物跡(4)

覆 土 単層。ブロック状の断面が観察される。
 遺 物 土器が若干出土している。
 所 見 機能・性格とも不明。

ST314 (第264図、PL28)

位 置 1 D区、IV-S20・25、T16・21グリッド
 重複関係 SB395・396・400に切られる。
 形 状 側柱。梁行4間、桁行4間。5.9m×6.3m
 軸・柱間 E-38°-S。北東-南西1.4~1.7m 北西-南東1.3~1.7m
 柱 痕 あり。直径10cm程度。
 覆 土 単層。ブロック状の断面が観察される。
 遺 物 土器が若干出土している。
 所 見 柱穴覆土を噴砂が貫いている。

ST315 (第265図、PL28)

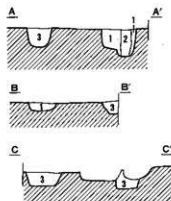
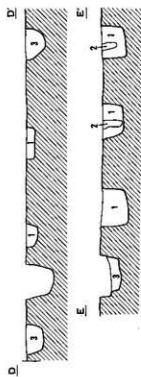
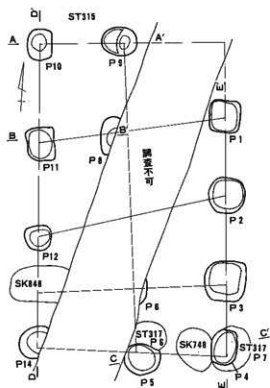
位 置 1 D区、IV-S19・20グリッド
 重複関係 ST317、SK748・848に切られる。
 形 状 総柱。梁行2間、桁行4間。4.0m×6.9m
 軸・柱間 N-5°-W。南北1.5~2.2m 東西1.6~1.8m
 柱 痕 あり。直径14~18cm程度。
 覆 土 単層。
 遺 物 土器が若干出土している。
 所 見 SF308が本跡範囲にあるが関連は不明。

ST316 (第266図、PL28)

位 置 1 D区、IV-S25グリッド
 重複関係 ST317を切り、SK751に切られる。
 形 状 側柱。梁行1間、桁行2間。3.0m×4.6m
 軸・柱間 W-16°-N。南北2.9~3.0m 東西1.7~2.8m
 柱 痕 なし。
 覆 土 2分層される。
 遺 物 土器が若干出土している。
 所 見 ST317、SK751とも奈良時代のため本跡も同様か。

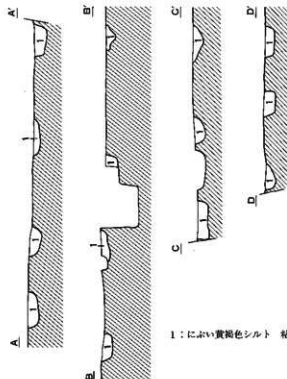
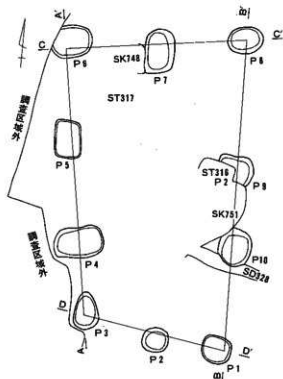
ST317 (第265図、PL28)

位 置 1 D区、IV-S20・25グリッド
 重複関係 ST316、SD328、SK748に切られる。
 形 状 側柱。梁行2間、桁行3間。2.9m×6.6m
 軸・柱間 N-4°-W。南北1.5~2.8m 東西1.3~1.9m
 柱 痕 なし。



L=354.5m

- 1: 暗褐色砂質土に黄褐色土混入
- 2: におい黄褐色砂質土
- 3: 2層に褐鉄斑混じる

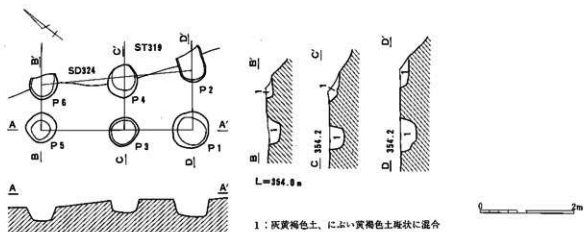
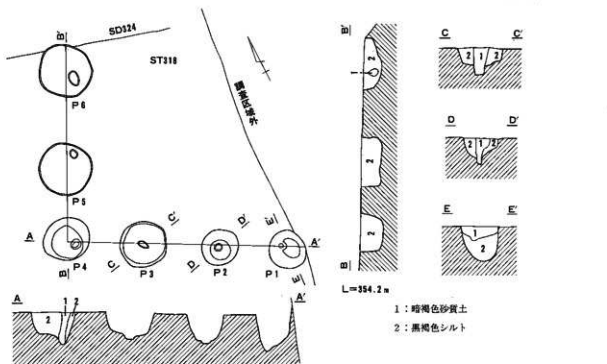
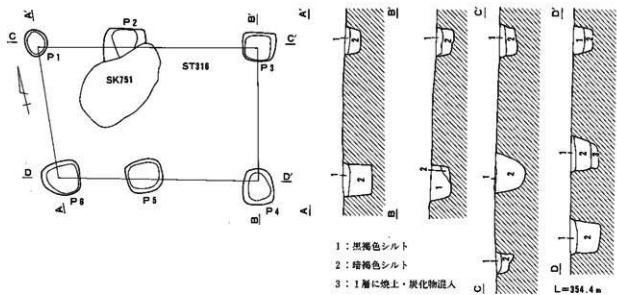


L=354.4m

- 1: におい黄褐色シルト 粘性なし



第265図 掘立柱建物跡(5)



第266図 掘立柱建物跡(6)

覆 土 単層だがブロック状を呈する。
 遺 物 P 4 覆土から底部へラオコシの須恵器坏を検出している。
 所 見 奈良時代以前であろうか。

ST318 (第266図、PL29)

位 置 1 D区、IV-T02・07グリッド
 重複関係 SD324に切られる。
 形 状 側柱。梁行2間、桁行3間以上。3.6m以上×4.5m以上
 軸・柱間 W-40°-N。北東-南西1.8~1.9m 北西-南東1.4~1.6m
 柱 痕 なし。
 覆 土 単層だがブロック状を呈する。
 遺 物 土器片が若干。
 所 見 SD324は平安洪水砂で埋まっており、本跡はこれに切られることから9世紀前半あたりか。

ST319 (第266図、PL-)

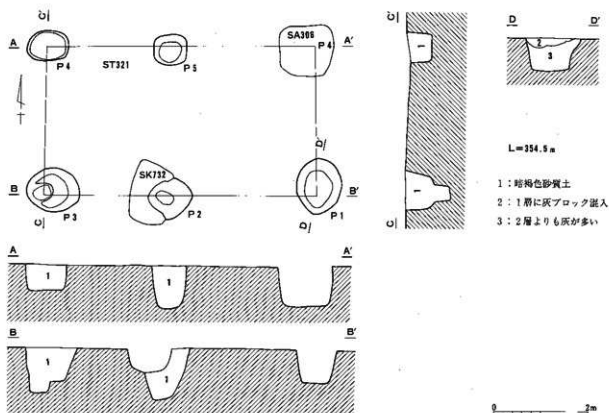
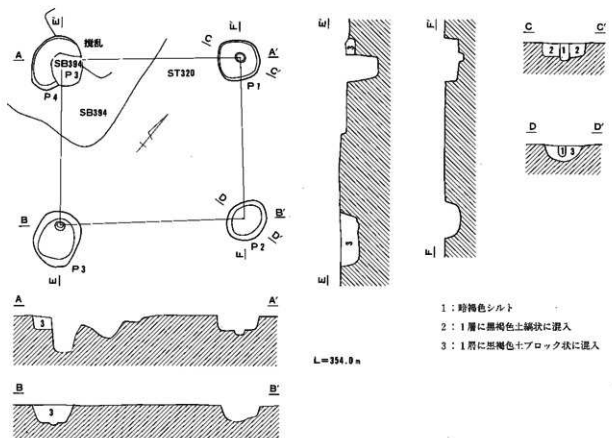
位 置 1 D区、IV-T02・グリッド
 重複関係 SB403・405・406を切り、SD324に切られる。
 形 状 総柱。梁行2間、桁行2間。2.6m×3.2m
 軸・柱間 N-45°-E。北東-南西1.2~1.4m 北西-南東1.5~1.7m
 柱 痕 なし。
 覆 土 単層だがブロック状を呈する。
 遺 物 なし。
 所 見 SB406は不明確だが8~9世紀、SD324も9世紀末の洪水で廃絶されることから本跡は9世紀なかばとなる。

ST320 (第267図、PL23)

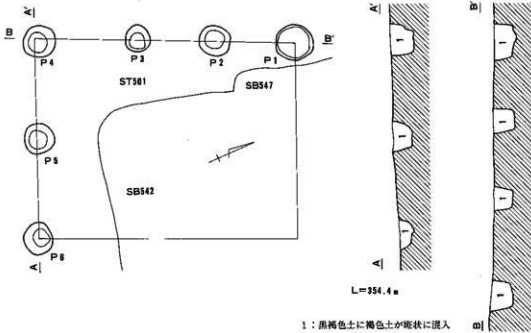
位 置 1 D区、IV-S15、T06・11グリッド
 重複関係 SB394に切られる。
 形 状 備柱。梁行1間、桁行1間。3.5m×4.0m
 軸・柱間 E-40°-N。北東-南西3.9~4.0m 北西-南東3.5m
 柱 痕 直径20cm前後。柱穴底部に食い込んでいるものもある。
 覆 土 単層だが竊状を呈し、版築状につき固められたようである。
 遺 物 なし。
 所 見 一見竪穴住居の柱穴にもみえるが周囲に竪穴はなく、直径も大きめである。

ST321 (第267図、PL-)

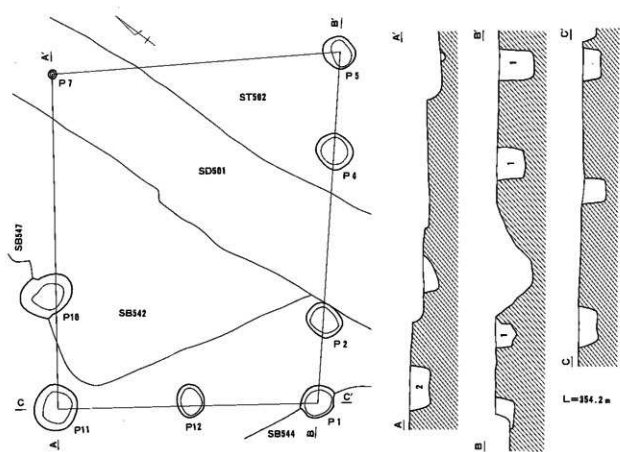
位 置 1 D区、IV-S25、X05グリッド
 重複関係 SK732を切る。
 形 状 側柱。梁行1間、桁行2間。3.1m×5.8m
 軸・柱間 E-2°-S。南北3.1m 東西2.6~3.6m



第267図 掘立柱建物跡(7)



1: 黒褐色土に褐色土が斑状に混入



1: 灰黄褐色土にふい、黄褐色土が斑状に混入

2: 黒褐色土に褐色砂質が混じる

0 2m

柱 痕 なし。
 覆 土 不詳。
 遺 物 不明。
 所 見 整理時点で設定。

ST501 (第268図、PL-)

位 置 1 D区、IV-O07・08・12・13グリッド
 重複関係 SB518を切り、SB503に切られる。
 形 状 側柱。梁行2間、桁行3間。4.2m×5.6m
 軸・柱間 N-30°-E。南北1.6~2.2m 東西2.2m
 柱 痕 なし。
 覆 土 単層。ブロック状の断面を呈する。
 遺 物 ほとんどなし。
 所 見 8世紀あたりか。

ST502 (第268図、PL-)

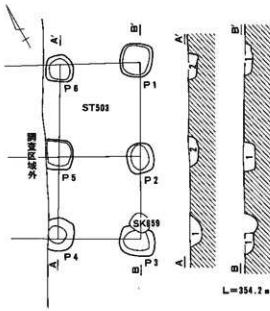
位 置 1 D区、IV-O08・09・12・13・14グリッド
 重複関係 SB544、SD501に切られる。
 形 状 側柱。梁行2間、桁行5間。6.1m×7.4m
 軸・柱間 N-47°-E。南北2.8m 東西1.8~3.6m
 柱 痕 なし。
 覆 土 単層。ブロック状の断面を呈する。
 遺 物 ほとんどなし。
 所 見 SB544は9世紀前半ころ、本跡はそれ以前。

ST503 (第269図、PL-)

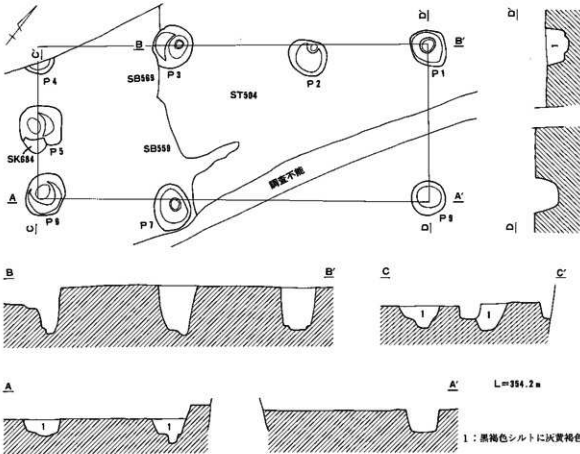
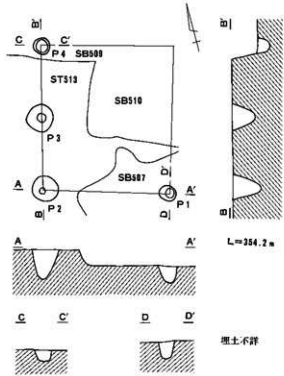
位 置 1 D区、IV-O01グリッド
 重複関係 SB567・573・575を切り、SK659に切られる。
 形 状 側柱。梁行1間、桁行2間。1.8m×3.8m
 軸・柱間 N-47°-E。南北1.7~2.1m 東西1.7~1.8m
 柱 痕 なし。
 覆 土 単層。ブロック状の断面を呈する。
 遺 物 ほとんどなし。
 所 見 切り合いから9世紀以降か。

ST504 (第269図、PL-)

位 置 1 D区、IV-N15、O06・11グリッド
 重複関係 SB546・569を切り、SB559、SK684に切られる。
 形 状 側柱。梁行2間、桁行3間。3.2m×8.2m
 軸・柱間 N-38°-E。北西南東1.4~1.6m 南西北東2.4~2.8m



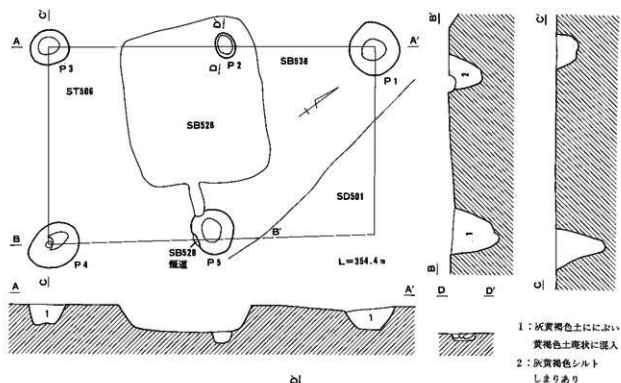
- 1 : 暗褐色砂質土
 2 : 1層に灰黄褐色土が斑状に混入



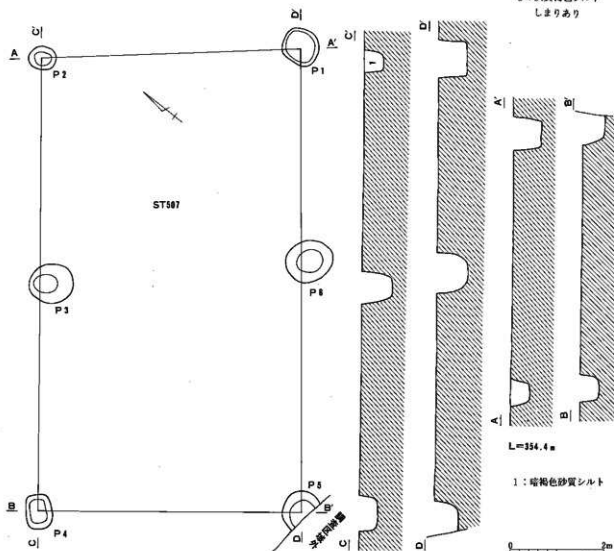
- 1 : 黒褐色シルトに灰黄褐色土斑状に混入

0 2m

第269図 掘立柱建物跡(9)

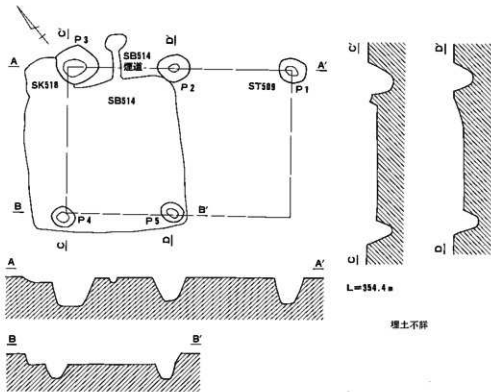
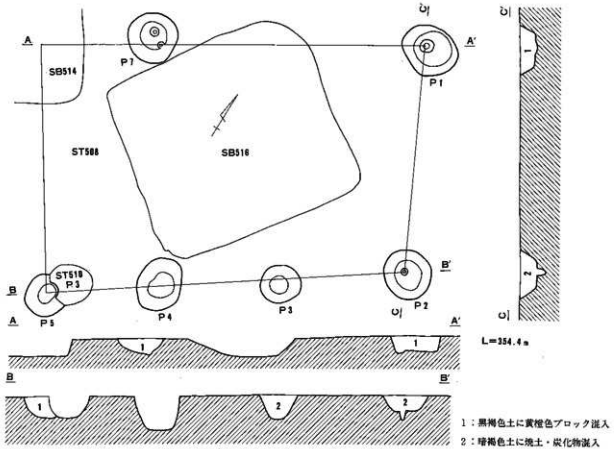


1: 灰質褐色土に濃い
黄褐色土層状に混入
2: 灰質褐色シルト
しまりあり



1: 暗褐色砂質シルト

第270図 掘立柱建物跡06



第271図 掘立柱建物跡00

第2章 篠ノ井遺跡群

柱 痕 あり。直径30cm程度。
覆 土 単層。ブロック状の断面を呈する。
遺 物 ほとんどなし。
所 見 切り合いから8世紀と思われる。

ST506 (第270図、PL-)

位 置 1 E区、IV-J22、O02・03グリッド
重複関係 SB528、SD501に切られる。
形 状 側柱。梁行1間、桁行2間。4.2m×6.1m
軸・柱間 N-30°-E。南北3.2~3.8m 東西4.0~4.2m
柱 痕 不明。
覆 土 単層。ブロック状の断面を呈する。
遺 物 不明。
所 見 整理作業中に設定。

ST507 (第270図、PL-)

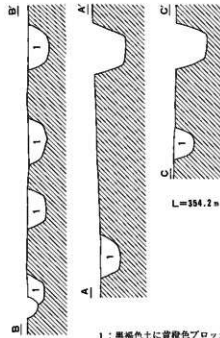
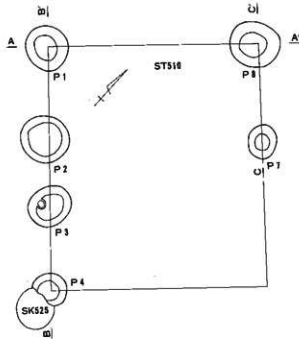
位 置 1 E区、IV-O17・18・22・23グリッド
重複関係 なし。
形 状 側柱。梁行1間、桁行2間。5.6m×9.6m
軸・柱間 N-45°-E。南北4.4~5.4m 東西5.5~5.6m
柱 痕 不明。
覆 土 不明。
遺 物 不明。
所 見 整理作業中に設定。

ST508 (第271図、PL-)

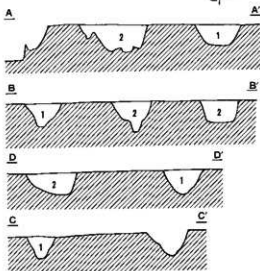
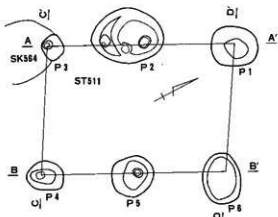
位 置 1 D区、IV-O11・12・16・17・22グリッド
重複関係 不明。SB514・517に切られる？
形 状 側柱。梁行1間、桁行3間。4.8m×7.6m
軸・柱間 N-30°-E。南北2.4~2.8m 東西4.8~5.4m
柱 痕 不明。
覆 土 単層。ブロック状の断面を呈する。
遺 物 不明。
所 見 整理作業中に設定。

ST509 (第271図、PL-)

位 置 1 D区、IV-O16・17・21グリッド
重複関係 SB514、SK518を切る。
形 状 側柱。梁行1間、桁行2間。3.1m×4.8m
軸・柱間 N-45°-W。北西南東2.3~2.5m 北東南西3.1~2.9m



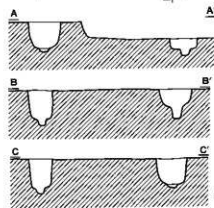
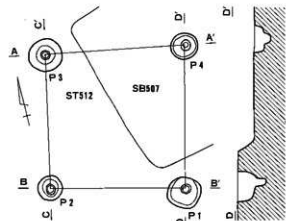
1 : 黒褐色土に黄褐色ブロック混入



L=354.0m

1 : 灰黄褐色土に褐色土ブロック混入

2 : 黒褐色土に黄褐色ブロック混入



L=354.2m

1 : 壤土不詳

第272図 獨立柱建物跡②

第2章 篠ノ井遺跡群

柱 痕 不明。
覆 土 不明。
遺 物 不明。
所 見 整理作業中に設定。

ST510 (第272図、PL-)

位 置 1 D区、IV-O16・17・22グリッド
重複関係 SB516を切り、SK525に切られる。
形 状 側柱。梁行1間、桁行3間。4.4m×5.2m
軸・柱間 N-40°-W。南北1.6~2.0m 東西4.4m
柱 痕 不明。
覆 土 単層。ブロック状の断面を呈する。
遺 物 不明。
所 見 整理作業中に設定。

ST511 (第272図、PL-)

位 置 1 D・E区、IV-O07・08グリッドSB527付近
重複関係 SK564を切る。
形 状 側柱。梁行1間、桁行2間。2.8m×4.0m
軸・柱間 N-35°-E。南北1.8~2.0m 東西2.6~2.8m
柱 痕 不明。
覆 土 単層。ブロック状の断面を呈する。
遺 物 不明。
所 見 整理作業中に設定。

ST512 (第272図、PL-)

位 置 1 D・E区、IV-O03・04・08・09グリッド
重複関係 不明。SB507を切る？
形 状 側柱。梁行1間、桁行1間。2.8m×3.0m
軸・柱間 N-30°-E。南北2.8~3.0m 東西2.9~3.0m
柱 痕 不明。柱穴底部にくぼみ。
覆 土 単層。ブロック状の断面を呈する。
遺 物 不明。
所 見 整理作業中に設定。

ST513 (第269図、PL-)

位 置 1 D区、IV-O03・04グリッド
重複関係 不明。
形 状 側柱。梁行1間、桁行2間。2.7m×3.1m
軸・柱間 N-20°-E。南北1.6m前後 東西2.7m

柱	痕	不明。
覆	土	不明。
遺	物	不明。
所	見	整理作業中に設定。

(4) その他の遺構

SA301 (第273図、PL-)

位	置	1C区、IV-X10グリッド
重	複	関係 SB330、ST307 P4を切る。
軸	・	柱間 N-30°-E。1.5m前後。
柱	痕	直径8cm程度。
覆	土	単層。
遺	物	なし。
所	見	本跡は9世紀なかば以降。しがたって周辺の掘立柱建物跡とは関係しない。

SA302 (第273図、PL29)

位	置	1C区、IV-X15・19グリッド
重	複	関係 不明。
軸	・	柱間 N-56°-E。1.0m~1.8m
柱	痕	なし。
覆	土	2分層。上部は黄褐色シルト。下層は暗褐色シルト。
遺	物	なし。
所	見	規模・軸方向・覆土などから本跡以北に集中する掘立柱建物跡群の南端に位置すると思われる。

SA303 (第273図、PL-)

位	置	1A区、VI-R15・20グリッド
重	複	関係 なし。
軸	・	柱間 N-53°-E。1.6m~1.8m
柱	痕	なし。
覆	土	単層。ブロック状の断面を呈し、人為埋没が明瞭。
遺	物	なし。
所	見	調査区端部で検出されたため、大半の部分を調査区域外にもつ掘立柱建物跡である可能性が高い。

SA306 (第273図、PL29)

位	置	1D区、IV-S25グリッド
重	複	関係 なし。
軸	・	柱間 N-2°-W。1.6m~1.8m
柱	痕	なし。

覆 土 P1・2は黒褐色シルトの単層。P3・4はブロック状の断面を呈し、人為埋没が明瞭。
 遺 物 箱清水式土器、土師器の破片が少々。
 所 見 検出面からの深さが60～90cmという大型土坑であるため掘立柱建物跡を想定していたが、周辺にはこれらに対応する土坑は検出されず、一応棚列ととらえた。しかしながら柱痕は観察されず、用途・機能は不明である。他の掘立柱建物跡のビットに比べかなり大きめの土坑である。

SD301 (第13図、PL-)

位 置 1A区、VI-R05・10グリッド
 重複関係 SB311・313、SK706を切り、SK336・475に切られる。
 形状・規模 幅40～75cm、深さ約30cm。断面丸底状。南北方向に伸び、全長7.14m。
 覆 土 単層。自然埋没。
 遺 物 土器片が数点。流れ込みか。
 所 見 SD302と並行しており、覆土・切り合い関係も似ているため対をなすものとも考えられる。

SD302 (第13図、PL-)

位 置 1A区、VI-N21、S01・06グリッド
 重複関係 SB311・312・313・332、SK704を切り、SK325・338・357に切られる。
 形状・規模 幅約45cm、深さ10～16cm。断面丸底状。南北方向に伸び、調査区域内では18.26m。
 覆 土 単層。自然埋没。
 遺 物 土器片多数。流れ込みか。
 所 見 本跡覆土は非常に硬く検出の際地山が削られて本跡が盛り上がる状況となった。このため道路跡の可能性も考え、断面を観察したが明確な掘り込みが認められたため溝跡とした。SD301、SK325・475との関連から道路の側溝とも考えられる。するとSK325・475さらにSK336・357は門または鳥居のような施設なのだろうか。

SD304 (第274図、PL-)

位 置 1B区、VI-I22グリッド
 重複関係 なし。
 形状・規模 幅160cm前後、深さ約40cm。東西方向に伸び調査区域内では1.6m。
 覆 土 黄褐色土ブロックを含む。人為埋没か。
 遺 物 土師器片が少々。
 所 見 古代の溝としては大型であるが性格不明。

SD309・310 (第13図、PL-)

位 置 1B区、VI-I17・22グリッド
 重複関係 ST308、SK449に切られる。
 形状・規模 幅75cm前後、深さ約10cm。北西～南東方向に伸び調査区域内では2～3m。皿状。底部は凹凸が激しい。
 覆 土 単層。自然埋没。

遺物 ほとんどなし。
 所見 畑等の耕作にかかわる痕跡か。

SD311 (第14図、PL29)

位置 1B区、VI-I02・03グリッド
 重複関係 SE303、SK353を切り、ST303に切られる。
 形状・規模 幅40～70cm、深さ約15cm。東西方向にはほぼ直線状に伸び、調査区域内では10.38m。
 覆土 単層。自然埋没。
 遺物 土器片少々。
 所見 調査区をほぼ正東西に横断するため、区画のための溝か。

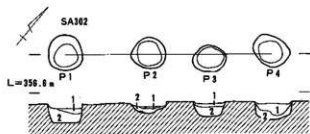
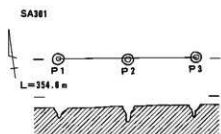
SD314 (第275図、PL-)

位置 1B区、VI-I11・12グリッド
 重複関係 SB371を切る。
 形状・規模 幅60～90cm、深さ約30cm。東西方向に伸び調査区域内では3.36m。
 覆土 単層。ブロック状の断面から人為埋没か。
 遺物 土器片多数。投棄によるものとみられ、瓦塔破片も少数検出された。
 所見 土器廃棄施設?

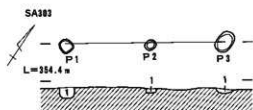
SD315 SX301に記載

SD324・325・326、SC304・305 (第273図、PL30)

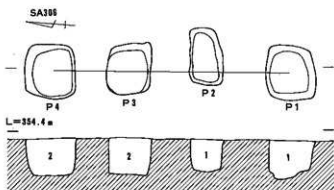
位置 1D区、VI-N20・25、O16・21～23、T01～03・06～08グリッド
 重複関係 SB401・402・405・406・410・411・515・530・536・570・571、ST318・319、SD329、SK784～786・790～798を切りSK781・854・855に切られる。
 形状・規模 SD324は上部幅4.5m前後、底部幅0.9～1.9m、深さ約1.5mで北西-南東方向に直線的に伸び調査区域外に続く。断面形は逆台形である。
 SC304はSD324南岸の堤防で基部の幅4.5～6.5m、上部は重機で削平してしまったが幅3m以内と考えられ、高さは80cm以上ある。
 SC305は北岸の堤防でSC304とほぼ同規模である。
 SD325・326はSC304上に掘られた小規模な溝で幅30～90cm、北西に進むにつれSD324から離れていく。深さ20cm前後で断面はU字状である。
 覆土 いくつかに分層されるが徐々に埋没したのではなく、洪水によって一気に埋まったものである。分層は色調・粒径等の差による。
 遺物 遺物僅少。須恵器、黒色土器の小片がある。
 所見 本跡は自然堤防上の古代集落の中央を破壊して構築されており、その規模及び直線的な形態から灌漑用の基幹水路として造られたものと推定される。底部には鉄分の集積がみられ水路として機能していたことが明確である。本跡の覆土は洪水砂とは異なった細砂～シルトが堆積していたため、当初洪水とは結びつかなかったが、高橋学氏から流速のはやい地点での洪水砂である旨のご指摘を受けたことにより、洪水で埋没したことが判明した。



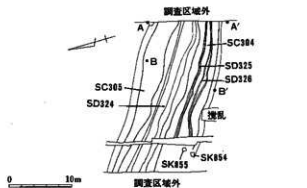
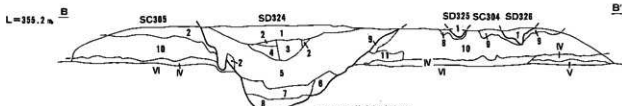
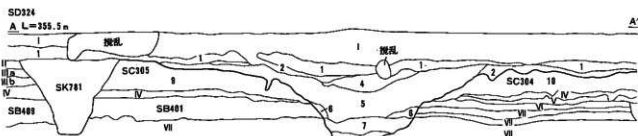
- 1: によい黄褐色土に灰色のブロック混じる
2: 黄褐色シルト



- 1: 黄褐色砂質土に褐色土ブロック混入



- 1: 黄褐色シルト
2: 1層に褐色砂ブロック少量混入



I-VII: 基本層序参照

- 1: 黄褐色シルト (耕作によるIとIIの混在)
- 2: 黄褐色シルトに1と4多量に混入、細砂混入
- 3: 灰黄褐色シルト 細砂混入
- 4: によい黄褐色砂 (II相当)
- 5: 灰黄褐色細砂 (II相当)
- 6: 灰黄褐色細砂と黄褐色シルト 5・7・8混入
- 7: 灰黄褐色シルト-細砂 砂ヲミナ状に混じる
- 8: 黄褐色シルト 7混入 底面Fe集積
- 9: 10基調 5塊状に混入
- 10: 黄褐色シルト 灰褐色土ブロック混入 人為的
- 11: 黄褐色シルト 灰褐色細砂小塊混入 10より黒い

第273図 その他の遺構(1)

本跡の堤防は黒色土で盛り土されており、ここに掘られた溝は本跡から分岐したものらしく、このような溝は取水溝として付近の水田に水を分配していたものと思われる。

本跡が掘り込まれた面の土壌は洪水砂に覆われた水田土壌へと連続的に変化していく状況が観察され、面的な調査はできなかったものの本跡周辺は広く水田として開発された時期があったことは確実である。従来この地域では、自然堤防上は本遺跡群や塩崎遺跡群のような集落遺跡、後背湿地は石川条里遺跡に代表される古水田と考えられてきた。

ところが近年の高速道路建設に伴う調査によって自然堤防上にも大規模な溝が検出され、従来集落域と考えられていた地域も一時的にせよ水田化された事実が明らかになりつつある。特に千曲川右岸の屋代遺跡群等では条里の区画に制約されない水田が自然堤防と後背湿地の中間地点や、やや低位の自然堤防上で確認されている。今回の発見は千曲川左岸でも同様の開発が行われたことを強く裏づける資料となろう。

本跡は洪水によって埋もれていることから同様に洪水で消滅した石川条里遺跡の平安水田を潤していたものと考えられ、石川条里水田は本跡の様な千曲川から直接取水する幹線水路によって維持されていた可能性が高い。すると9世紀前半の水田化は、かつて集落だった自然堤防から後背湿地までも含む大規模開発ということになりそうで、そこには大きな政治的な動きが予想されるのだが、今のところそのことに関する明確な資料に恵まれていない。

洪水は史料にみえる、仁和4年(888)に対比させる考え方が支配的である。したがって開発された水田は短期間で消滅したことになり、古代人たちの努力は一瞬にして無為に帰してしまっただけと推定される。洪水後の新たな水路の掘削や復興の痕跡がほとんどみられないことから、地形の大規模な変化によって人々は移動を余儀なくされたに違いないと、本跡においても10世紀に下る遺構はごくわずかし確認されていない。

SK310 (第274図、PL30)

位置 1A区、VI-R10グリッド

重複関係 SK3112を切る。

形状・規模 ほほ円形。直径約210cm、深さ15～30cm。断面皿状。

覆土 分層されるがあまり差はない。斑状の断面が観察され、明らかに人為埋没。

遺物 ほほ完形の須恵器杯2個体。ウマの完椎1個。

所見 周辺にはSK437をはじめとする土坑墓が分布しているため墓域を形成していると思われるが、人骨が検出されないため本跡の性格も推定の域を出ない。牛馬の墓が同一地域に在るとすれば興味深いだが、その可能性は低い。

SK348 (第274図、PL30)

位置 1A区、VI-M20、N16グリッド

重複関係 なし。

形状・規模 長方形。58cm×107cm、深さ約5cm。

覆土 単層。

遺物 なし。幼児人骨。

所見 土坑墓。頭部を北にむける。

SK437 (第274図、PL30)

位 置 1 A区、VI-R10グリッド
重 複 関 係 SB310を切る。
形 状 ・ 規 模 幅49cm×181cm、深さ約16cm。
覆 土 単層。
遺 物 完形の環。頭部の傍ら正位で副葬。成人骨。
所 見 土坑墓。頭部を北に向けている。

SK450 (第274図、PL30)

位 置 1 B区、VI-I17グリッド
重 複 関 係 SB371を切る。
形 状 ・ 規 模 幅71cm×160cm、深さ約12cm。
覆 土 単層。
遺 物 なし。小児人骨。5～7歳ぐらいか。
所 見 土坑墓。脚が土坑外に出ており、埋葬後、引きずり出されたものか。

SK461 (第14図、PL-)

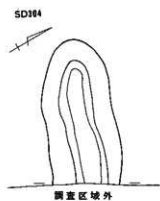
位 置 1 B区、VI-I02・03・07・08グリッド
重 複 関 係 ST312 P5、SK404に切られる。
形 状 ・ 規 模 楕円形。幅90cm×180cm、深さ約20cm。
覆 土 単層。人為埋没。
遺 物 検出面に平瓶。
所 見 性格不明。土坑墓とも考えたが、骨はまったく検出されず、平瓶も本跡への帰属性は明確でないため、むしろST309・311との関連を考えた方が良いかもしれない。

SK588 (第17図、PL-)

位 置 1 E区、IV-J13グリッド
重 複 関 係 なし。
形 状 ・ 規 模 長方形。幅170cm×200cm以上、深さ約30cm。
覆 土 不詳。人為埋没？
遺 物 内黒の環の大型破片及び人骨。
所 見 頭骨が見られるため明らかに土坑墓であるが性別・年齢等は不明。出土遺物等から古代とされているが土坑の形態から下る可能性もある。

SK589 (第274図、PL-)

位 置 1 E区、IV-J13グリッド
重 複 関 係 SB531に切られる。
形 状 ・ 規 模 不整形。幅75cm×140cm、深さ約90cm。
覆 土 ブロック状の断面が観察されるため明らかに人為埋没。
遺 物 覆土～底面に残存率の高い須恵器蓋・環及び人骨。

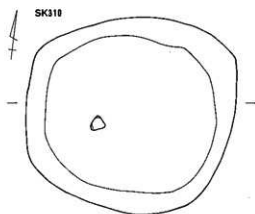


調査区域外

L=355.0m



1: 暗褐色土ににより黄褐色のブロック混入

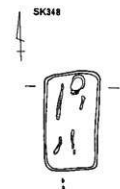


L=354.8m



1: 2層よりも黄褐色土が少ない。

2: 暗灰黄色土に黄褐色土が斑状に混入



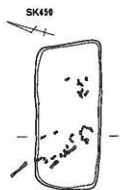
L=354.8m



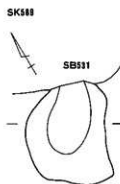
L=354.8m



1: 灰黄褐色砂質土



L=354.8m



L=354.8m



第274図 その他の遺構(2)

所見 土坑墓の可能性が高い。人骨は部位の特定できない四肢骨片のみである。本跡兩個にはやはり土坑墓と思われるSK588があり墓域を形成しているようである。

SK638 (第180図、PL-)

位置 1D区、IV-O18グリッド

重複関係 SK637を切る。

形状・規模 楕円形? 約0.75m×0.65m。二段底状を呈する。

覆土 単層。自然埋没?

遺物 須恵器片、鉢。出土状況は不明。

所見 機能・性格不明。二段底は柱のようなものを建てたものか。

SK714 (第13図、PL-)

位置 1B区、VI-N06グリッド

重複関係 SM221を切り、SB318・322・361に切られる。

形状・規模 長方形。幅80cm×240cm、深さ約35cm。

覆土 単層。自然埋没?

遺物 なし。

所見 性格不明。土坑墓とも考えたが、骨はまったく検出されず遺物もないためなんともいえない。

SK751 (第15図、PL-)

位置 1D区、VI-S25グリッド

重複関係 SD328、ST316・317を切る。

形状・規模 不整形。幅120cm×220cm、深さ約80cm。

覆土 炭化物を多量に含む層がみられ、遺物の出土状況等から明らかに人為埋没。

遺物 土器の細片が多量に出土。須恵器が多い。

所見 遺物が多いが接合するものは少なく、埋没途中で焚火の跡もみられることから土器投棄施設と思われる。8世紀か。

SK756 (第15図、PL-)

位置 1D区、VI-T11グリッド

重複関係 なし。

形状・規模 平面は円形。径1.0m、深さ1.4m。

覆土 均質な単層。自然埋没か。

遺物 ほとんどなし。

所見 形態・規模から井戸と考えたい。周囲にはST313があり、これに伴うとすれば屋根付きの井戸となる。

SL301 (第13図、PL-)

位置 1B区、VI-I07・12グリッド



第275図 その他の遺構(3) SX301、SD315

重複関係	なし。下層にSB340がある。
形状・規模	畝は検出時点で削平したため、洪水砂に覆われた畝間のみ溝状に検出。幅30～70cm、深さ約5cm。長さ約6m。
覆土	平安洪水砂。
遺物	なし。
所見	畑と認めうる面積は約26㎡。洪水砂は本跡周辺にも分布するが同様の遺構は検出されず、当初から限られた面積の遺構であったようだ。

SX301 (SD314・315) (第275図、PL29・30)

位置	1B区、VII-16・17
重複関係	なし。
形状・規模	瓦塔、土器片、礫等が散乱する範囲をSX301とした。形状は不定だが北辺はSD314、東辺はSD315で画されているようである。西側は調査区域外となり南はしだいに遺物の散布が疎らとなって終わる。調査範囲内の面積は約45㎡である。
覆土	基本的に遺構覆土は存在しないがSD314・315の覆土は単層で分層はできなかった。
遺物	直径2～18cm程度の円礫が900個以上出土しており、総重量78.15kgに達する。直径2～3cmで球形に近いものが多いように思われた。土器はテンバコで3箱分以上出土しているが細片ばかりで図になるものはほとんどなく、弥生時代後期の箱清水式から9世紀後半の灰釉陶器まで広範な時代にわたる。遺物には土器以外にも紡錘車、銅碗破片等が検出されているが、玉類、石製模造品、仏具など特殊な機能・用途のものは瓦塔以外には確認されていない。
所見	瓦塔は本跡からも検出されているが主体はSD315にある。やや大きめの礫等とともに打ち捨てられたような状態で検出された。当初から2個体存在することは判明していたが実際にどの程度まで復元可能なものかは不明で、本格的な整理を待たねばならなかった。瓦塔の詳細については第3節で述べているのでここでは記さない。

SD315とSX301の関係を注目すると検出面のレベル・調査時点での状況等からまずSD315が掘られ瓦塔その他が投棄された後、SX301を形成する礫・土器片等が投棄されたと考えたい。しかしながら瓦塔は溝の底部からは浮いており、確実にSD315に伴うとは言い切れない面もある。またSD315自体、浅く幅広く溝としてはやや一般的なでない形態で、下層に位置する古墳時代住居跡SB371の埋まりかけた凹地ととらえることもできる。いずれにせよ瓦塔がどのように投棄されたかについては不明な点が多い。

また投棄による土器片はともかく、礫の集積はかなり特異なケースで、当初瓦塔を安置する施設の基壇かとも思われたがついにその性格を結論づけることはできなかった。本跡周辺で瓦塔との関連を予想させるような遺構としては掘立柱建物跡ST308が考えられるが、単に位置的に近いだけで物証はなにもない。遺物も約8m程離れた中世遺構SE304から磚仏が検出されているのみで、広大な調査区全体からみれば近接した仏教関係遺物といえるかもしれないが、直接の関連を云々することは危険であろう。

本跡はやはり瓦塔投棄施設としてのSD315を中核にした土器投棄施設とみるのが適当であると考えられる。

8 古代の土器

概要

古代は篠ノ井遺跡群の最も繁栄した時期にあたり、検出された住居跡の数も最大となる。しかしその繁栄も9世紀半ばまでで、大規模な水路の開鑿によって本遺跡の大部分は水田となってしまった。したがって本遺跡の古代は7世紀末から9世紀中頃までの百数十年間にはほぼ集中することになる。この時期の土器の変化についてはすでにさまざまな報告・研究がなされており今また新たにその有様を述べようとは思わない(注)。そのかわり、善光寺平における古代の土器について現在の程度の年代観が与えられているかをなるべく明確に示すよう努力したつもりである。年代観に過ちが含まれているとすれば筆者の勉強不足である。叱正を賜るようお願いしたい。

本項でも便宜的に中世の遺物を含んでいる。

SB104 (第276図、PL-)

1は黒色処理を施しておらず直径も10cm程度である。2は9世紀半ばから見られる黒色処理の碗である。本跡の時期はやはり1の環によるものと考えたい。すると10世紀代ということになるか。

本住居跡は篠ノ井遺跡群の古代住居のなかではかなり新しいものの一つである。

SB105 (第276図、PL-)

図示可能な土器は掲載した須恵器の甕のみであるが、これとてわずかな破片である。時期は判然としないうちが9世紀か。

SB107 (第276図、PL75)

1の環は底部を手持ちヘラケズリしており、口縁部を1か所のみ欠損した以外は完全な個体である。2は高台が体部の端にあり斜めにふんばる形となる。底部は回転ヘラケズリが施されている。3の蓋は端部を小さく折り曲げて縁をつくっている。4はあまり見かけない蓋であるが内面にカエリを持つタイプの変形かと思われる。5は側面をヘラケズリした土師質の紡錘車である。

環、蓋の形態から本跡は8世紀前半に位置付けられると考えたい。

SB108 (第276図、PL-)

本遺跡から検出された羽釜は図示した個体が唯一である。10世紀代であろう。

SB304 (第276図、PL75)

1・2の環とも底部は回転糸切りのままである。3～5はいわゆる砲弾甕で口縁部から胴部上半をロクロナデ、下半をヘラケズリし、内面はナデまたはハケで仕上げている。環のあり方から9世紀前半～中頃の住居跡か。

SB307 (第277図、PL75)

1の環は底部がやや広く、回転糸切りしている。2の高台環は底部が高台外へ出ており、回転ヘラケズリで仕上げている。また「中」の墨書がある。5の甕は上半をナデ、下半をヘラケズリしている。

土器はやや時期差が認められるため年代的には8世紀前半から9世紀初頭あたりか。

SB315 (第277図、PL75)

1～4の須恵器坏はすべて回転糸切りで1・2の土器は口縁部に炭化物が付着しており、灯明皿として使用されたい。また5・6の土師器にも同様の炭化物が付着している。したがってこれらの土器は対をなすと考えられ、須恵器の坏に油を入れた土師器を重ねたものと思われる。7の土師器坏にも炭化物がみられるが対となる相手が見当たらない。

4は黒斑を持つ軟質須恵で体部に墨書がある「化」かと思われるが判然としない。8の坏は底部から体下部まで回転ヘラケズリしており内面は精緻なミガキとなっている。

本跡は9世紀前半～中頃であろう。

SB322 (第277図、PL-)

2の須恵器は小型の長頸壺か。

SB325 (第277図、PL-)

図示した坏は底部をヘラケズリしたのちナデている。2の甕はタタキのちカキメを施している。8世紀代と考えたい。

SB327 (第278図、PL75)

1は軟質須恵器。2・3の坏の底部は回転糸切りのままである。4は灰精陶器を模した椀であろうか。5は鉢と思われる。9世紀中頃～後半の土器群であろう。

SB328 (第278図、PL76)

すべて回転糸切りのままの坏である。3の墨書は「八千」だろうか。

SB330 (第278図、PL76)

1は軟質須恵器。2・3・5の坏はすべて回転糸切り、6は回転ヘラケズリである。9世紀中頃と思われる。

SB332 (第278図、PL76)

須恵器坏はすべて回転糸切り、2・3はやや軟質である。4・5は底部から体下部まで回転ヘラケズリしており、5は墨書がある。字ではないようでSB356-3と同様かと思われる。6は底部付近しか残っていないが大型の椀または鉢であろうか。底部は回転ヘラケズリしている。7・8は一般的な砲弾甕、9は耳がないが四耳壺であろう。本跡も9世紀の中頃と思われる。

SB334 (第279図、PL-)

1の高台坏は底部を回転糸切りしている。2は砲弾甕か。高台坏の形態から9世紀前半あたりか。

SB339 (第279図、PL76)

図示した坏は黒色処理しているもののまったくミガキが施されていない。かわりに内面には赤錆状の膜が付着している。漆かと思われたが分析できなかった。遺憾である。

SB343 (第279図、PL76)

1の須恵器環は糸切りであるがやや底部が広い。2は小型甕の胴部下半と思われる。内面が均一に黒いため網かけをしたが意図的なものかは不明である。3は須恵器の甕と思われるが器形は定かでない。4はミニチュア土器の一部で脚?に5孔をそなえる。何らかの器形を模していると考えたいが何だかわからない。本跡は須恵器環の形態からすれば8世紀末～9世紀初頭あたりか。

SB346 (第279図、PL76)

図示した環は1以外すべて糸切りである。10は小型甕と思われ体部にはカキメが施されている。9世紀半ば～後半と考えたい。

SB356 (第279図、PL77)

1の高台環は糸切り。2は一般的な環であるが、内・外面に筋状の炭化物がみられるため灯明皿と思われる。3は墨書が施されているが字とは思えない。2・3とも底部から体部下半まで回転ヘラケズリしている。9世紀前半～中頃か。

SB362 (第280図、PL-)

本遺跡唯一のリング状のつまみを持つ蓋である。8世紀と考えたい。

SB369 (第280図、PL76)

須恵器高台環を模した土師器の環である。内面には放射状のミガキがあるが黒色処理は施されておらずかわりに底部内面に炭化物が付着している。体部下半は回転ヘラケズリ、底部は糸切りである。胎土・調整も他の土師器とは異なっているため搬入品の可能性が高い。

SB363 (第280図、PL76)

1の底部はヘラオコシのちなデ、2はナデのちハケ?、3はヘラナデでどれも糸切りではないようである。4は底部に木葉痕跡。5は内外面ともハケであるが外面はミガキを施した後にハケで仕上げたものか光沢がみられる。いずれにせよあまり例をみない長胴甕である。

8世紀の前半あたりと考えたい。

SB392 (第280図、PL77)

1・2は黒斑を持つ軟質須恵器。3は灰軸陶器の椀で軸はハケ掛けである。4～6の環はすべて糸切りである。7・8の小型甕はクロコナデでカキメはない。10は一般的な砲弾甕と思われる。灰軸陶器の形態等から本跡は9世紀の後半であろう。

SB394 (第280図、PL77)

ヘラオコシの環である。8世紀初頭付近か。

SB396 (第280図、PL-)

1の高台環は底部を回転ヘラケズリしている。2は盤と考えたい。3は長胴甕の底部付近であろう。8世紀代の住居である。

SB397 (第281図、PL77)

1・2の坏は糸切りしたのち周囲を手持ちへラケズリしている。3・4はヘラオコシのちナデである。6の高台坏は底部を回転へラケズリしている。8の土師器坏は底部手持ちへラケズリである。糸切りとヘラオコシの共存から8世紀中頃と考えたい。

SB398 (第281図、PL—)

図示した甕は砲弾甕か。だとすれば9世紀代の住居跡であろう。

SB407 (第281図、PL77)

2の坏は糸切り、1は軟質の須恵器で底部は外周しか残っていないが手持ちへラケズリしている。3のふたは口縁端部を小さく作り出すタイプである。4は一般的な黒色処理を施した坏のはずであるが黒色処理がはっきりしなかったため網掛けはしていない。

3の蓋の時期がやや問題であるが9世紀前半の住居跡と考えて良いと思う。

SB412 (第281図、PL77)

糸切りの坏と小型甕である。9世紀前半であろう。

SB416 (第281図、PL—)

破片が小さいため部分的な図しか掲載できなかった。1の蓋はつまみが大きく大型を予想させる。2は甕の脚部付近と考えたい。3は甕の類か。4は短頸甕と思われる。8世紀の住居跡か。

SB501 (第281図、PL77)

1はヘラオコシのちナデ。2はヘラオコシのち手持ちへラケズリである。3の高台坏は回転へラケズリを施している。4はあまり見かけない坏で底部を手持ちへラケズリしている。5・6はやや大型の蓋である。7は甕と考えたが蓋の可能性もある。8は全面ロクロナデを施したもので小型甕の類だろうか。

本跡も8世紀の中頃付近と考えている。

SB502 (第281図、PL77)

1～3・5の坏はヘラオコシのちナデ、4は糸切りである。6・7の高台坏は両個体とも回転へラケズリである。8は内面をミガキ、底部をへラケズリした坏である。須恵器に時期差があるためやや判然としないが8世紀後半から9世紀初頭あたりか。

SB503 (第282図、PL77)

1は精選された胎土の坏で焼成も堅緻である。2は甕の類かと思われるがはっきりしない。内外面をミガキで仕上げているようで流れ込みの可能性が高い。1の坏は9世紀前半であろう。

SB507 (第282図、PL78)

1・2の坏は底部へラオコシ。4は回転へラケズリである。8世紀前半～中頃と思われる。

SB508 (第282図、PL78)

図示した須恵器環はすべて糸切りである。4はやや軟質な個体で口縁部に炭化物が付着しており、灯明皿として使用されたようである。黒色処理を施した環の底部調整はさまざまで9・10は回転ヘラケズリ、8は手持ちヘラケズリ、12は糸切りのままとされている。10には墨書も見られるが、やはり文字ではなく記号であるように思う。9世紀の半ばごろに位置すると考えたい。

SB509 (第282図、PL77)

1・2の環は双方ともヘラオコシのちナデの調整で、1は底部に窯印と思われるヘラ記号が見られる。また1の環は口縁部の内外面に炭化物の付着が見られ、灯明皿として機能していた可能性もある。3・4の高台環は深さが異なるものの両個体とも回転ヘラケズリが施され、底部が高台外へ出てしまうタイプである。8の蓋は口縁端部を小さく作り出している。6は広口の甕でタキを施したのちナデで仕上げている。本跡は8世紀前半の土器様相と思われる。

SB510 (第282図、PL-)

図示した環は体部下半まで回転ヘラケズリを施している。9世紀前半あたりでよいと思われる。

SB511 (第282図、PL-)

1の環は底部の調整がはっきりしないが、残存している部分ではロクロナデである。2は非ロクロの環で内外面ともミガキで仕上げている。時期的には8世紀代であろう。

SB514 (第282図、PL78)

須恵器の小壺である。底部を含む外面全体に自然釉がかかっているため調整ははっきりしない。

SB516 (第282図、PL78)

1の環は底部がヘラオコシのちナデとなっており口縁部の内外面に炭化物の付着が見られる。2は糸切りであるが底部がやや広い。3・4は非ロクロの環で全面ミガキである。

本住居跡は糸切りの環が出現していることから8世紀の半ばごろか。

SB519 (第282図、PL78)

1は糸切りの一般的な須恵器環である。3の甕は外面をタキ、内面をロクロナデで仕上げている。環の形態から9世紀の前半あたりと考えたい。

SB521 (第283図、PL78)

1・2とも底部はヘラオコシのちナデの調整である。8世紀の前半～半ばごろか。

SB525 (第283図、PL78)

底部糸切りのままの環である。9世紀半ばであろう。

SB524 (第283図、PL78)

図示した環はすべて底部が糸切りのままである。5の甕は内外面をナデによって仕上げられており底部付近

には強い指頭圧痕が認められる。6は一般的な砲弾甕と思われる。本住居跡も9世紀半ばと思われる。

SB526 (第283図、PL78)

1～3の環はすべて糸切り、4の鉢?は回転ヘラケズリである。前住居と同様9世紀の半ばであろう。

SB528 (第283図、PL78)

1・2の環はともに回転糸切りであるが1の個体はやや底部が広い。3の高台環は回転ヘラケズリ。4の環は回転糸切りを施したのち外周を手持ちヘラケズリしている。底部の広い糸切りの環の存在から8世紀末～9世紀初頭というところだろうか。

SB531 (第283・284図、PL79・80)

廃絶後、土器投棄施設となった住居跡の一括資料である。1～4はカエリのある蓋とセットになると思われる環で底部はヘラオコシしたのちナデ、回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリ等を施している。22・23はやや形態が変わっているがヘラオコシの環と考えたい。24～26は底部がヘラオコシのちナデ、27・28は回転ヘラケズリである。

11～13の高台環はすべて回転ヘラケズリによって底部を調整している。14～20は高台環とセットとなる蓋で口径がよくそろっている。

21は盤の脚であろうか。やや判然としない。

29～35は非ロクロの環で29の個体を除きすべて黒色処理が施されている。調整は33・34の個体が外面の口縁部を回転ナデ、体部をヘラケズリしているが内面についてはすべての個体がミガキで仕上げられている。36～38の高環はどれも坏部は内外面ともミガキ、脚部は外面がミガキ、内面がナデである。

39は全面をミガキで仕上げた土器で口縁の一部を除きほぼ完形である。40は小型甕か。内面はナデである。44は把手の形態が特殊で底部が不明なため判然としないか甕であろうか。底が存在するならば鍋か。いずれにせよ稀な器種で本遺跡内では図示した1点のみ検出されている。47は器形が不明であるが大型の甕か。内外面とも回転ナデの仕上げである。

41・42は短頸壺か。43の平瓶は胴部下半を回転ヘラケズリしている。48の大甕の肩部は厚い自然釉に被われ、タタキの状況は不明である。

掲載していないものも含めた環・蓋の組成割合を記述すべきであるが、環は小破片では分類があいまいになるため割愛し、蓋の組成割合のみ示す。当然ながら同一個体・別個体の区別は常に明確であるはずもなく、数値は誤差を含んだものであることをお断りしておく。

須恵器蓋 総個体数35 蓋H 2 (5.7%) 蓋A 13 (37.1%) 蓋B 20 (57.1%)

SB532 (第285図、PL78)

1の環は底部はナデで仕上げている。2は環か蓋か判然としないが一応蓋としておく。頂部付近の調整はナデのようだがはっきりしない。3は大型の蓋のつまみか。4・6は非ロクロの環、5は高環と思われる。本住居跡は7世紀末あたりに位置付けられるか。

SB537 (第285図、PL80)

1・3の環はヘラオコシのちナデ、2は糸切りした底部の外周を手持ちヘラケズリしている。5の環は手持ちヘラケズリである。この個体は焼成後外面に刻書?を施している。8はあまりみかけない土器の

小型甕?でロクロナデの仕上げである。7の長胴甕は底部がかなり大きい。本跡は8世紀の中頃だろう。

SB538 (第285図、PL-)

1器形がはっきりしないが高台坏か。2の高台坏は底部を回転ヘラケズリしている。本跡も8世紀代か。

SB539 (第285図、PL80)

2・4、7・8の坏は底部ヘラオコシ、3は回転ヘラケズリである。9・10は非ロクロの坏で全面ミガキである。11は甕の口縁部と思われる。

12は底部以外全面ミガキで仕上げており壺の類か。本跡の資料にはやや新しい時期の土器も混じっているようであるが全体的には7世紀末あたりに位置づけられるか。

SB540 (第286図、PL80)

図示した坏はどれもヘラオコシで2・3はのちにハケで仕上げている。8世紀前半～半ばか。

SB542 (第286図、PL-)

1・2は糸切りの一般的な須恵器坏である。3は体下部まで手持ちヘラケズリしている。9世紀前半の資料であろう。

SB543 (第286図、PL80)

糸切りの須恵器坏ばかりである。本跡も9世紀前半でよいと思われる。

SB544 (第286図、PL80)

すべてヘラオコシの坏である。1はヘラオコシののち手持ちヘラケズリしている。8世紀の前半～中頃か。

SB547 (第286図、PL80)

1は糸切りの一般的な須恵器坏。2は長頸甕である。

SB554 (第286図、PL81)

1は台のない甕か。2の高台坏の底部は回転ヘラケズリである。3は広口甕の類でタタキで成型したのちロクロナデで仕上げており、底部付近はさらに回転ヘラケズリを施している。4の大甕は頸部に補強帯を備えることが特徴である。時期的には8世紀前半あたりか。

SB559 (第286図、PL81)

1・2はヘラオコシ、3は糸切りの坏である。5・6はともに底部を手持ちヘラケズリしている。8世紀半ば～後半にあたるか。

SB565 (第287図、PL81)

1～3は糸切りで2の個体は口縁部の内外面に炭化物が付着している。4はヘラオコシと思われる。5

の長頸壺は頸部が細い。

SB568 (第287図、PL81)

1・2の坏はヘラオコシ、3～5は糸切りである。7は底部から体下部まで回転ヘラケズリしており、墨書「身」?が施されている。8は砲弾型の甕か。本跡の資料には新旧が混じっているが1・2を混入ととらえれば9世紀代か。

SB573 (第287図、PL82)

図示した坏類は4がヘラオコシ、8が回転ヘラケズリであるほかはすべて糸切りである。11の甕は底部付近をヘラケズリしているが底部そのものはナデで仕上げている。9世紀初頭あたりの資料と思われる。

SB576 (第287図、PL82)

1～3はどれもヘラオコシと思われる。4は回転ヘラケズリである。8世紀半ばであろうか。

ST317 (第288図、PL82)

底部をヘラオコシした坏で体部の内外面に炭化物が付着している。

ST318 (第288図、PL-)

非ロクロの坏で全面ミガいているが黒色処理はない。

ST503 (第288図、PL-)

糸切りの一般的な坏である。

SD304 (第288図、PL82)

図示した皿は内・外面を黒色処理した黒色土器Bである。本遺跡内で図示可能な黒色土器Bはこの個体のみである。

SD324 (第288図、PL82)

1・2はヘラオコシ、3～5は糸切り、8は回転ヘラケズリである。時期的に新旧がみられるが9世紀前半が主体か。

SD501 (第288図、PL-)

龍泉窯系の青磁である。

SK310 (第288図、PL82)

双方ともヘラオコシのちナデである。

SK309 (第288図、PL82)

3の坏は底部を回転ヘラケズリしている。4は非ロクロの坏である。6は底部を除きミガキで仕上げている。8世紀前半か。

SK638 (第288図、PL-)

1はヘラオコシのちナデ、2は回転ヘラケズリである。

SK751 (第288図、PL82)

3・4はヘラオコシ、2は不明である。8世紀前半あたりの資料か。

遺構外 (第289図、PL84)

1～7は底部をヘラオコシしたと思われる須恵器環である。ヘラオコシしたのちナデで仕上げたものがほとんどであるが、ナデの程度はそれぞれで外周付近のみのものから2のように底部全面をていねいにナデたものまでさまざまである。4は回転ヘラケズリしておりヘラオコシかやや判然としない。

8は削り出し高台で本遺跡群からは図示した1点のみの出土である。時期的には8世紀前半あたりか。11～13はどれも底部は回転ヘラケズリしたもので、12は底部が高台外へ出てしまうタイプのようなのである。13は灯明皿として使用されたものか内面に炭化物の付着がみられた。

10は直径25cm程もある大型の蓋で、つまみの形態とヘラ描きの波状紋?が特徴的である。内面にはカエリが痕跡程度に残っており、焼成も良好ではほぼ完形であるが残念ながら検出面遺物である。時期的には7世紀末～8世紀初頭あたりか。

14～15は回転糸切りの須恵器環である。18・19は底部が他の個体に比して小さいことからやや新しく位置付けられると考えたい。17は窯印と思われるヘラ記号が施されている。

21～28の環は23・26を除き底部を回転ヘラケズリし、精緻なミガキが施されている。23・26は底部が回転糸切りのままでミガキもやや雑である。

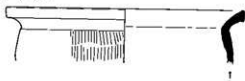
29～32は文字関係資料を示した。29は洪水砂層から得られたもので「財丸丸」であろうか。吉祥句を記したものであると思われる。30・31は朱墨パレットの一部と思われ、どちらも須恵器環の底部を使用している。32は本遺跡の目玉のひとつとも言えるべき踏脚硯なのであるが一部しか残っておらず、特に脚部は完全に欠損している。精選された胎土で堅緻に焼き上がっており、施釉したのか濃緑の釉が厚く掛かっているが残念ながら本個体も検出面遺物である。

注) 鳥羽英雄氏による最新の編年案が高遠遺跡年代遺跡群の報告の中で発表される予定である。本文での年代観も鳥羽氏の教示に依る所が大きい。記して感謝したい。

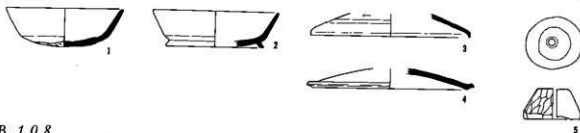
SB 104



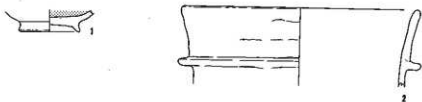
SB 105



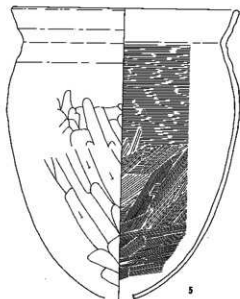
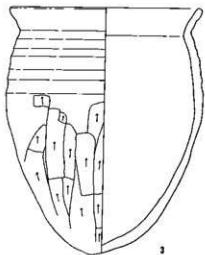
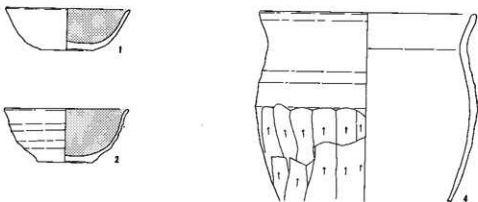
SB 107



SB 108



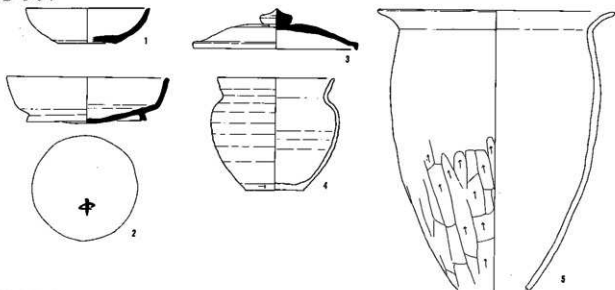
SB 304



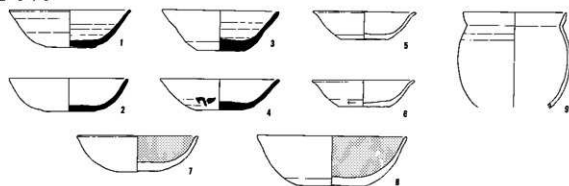
0 10cm

第276図 古代の土器(1)

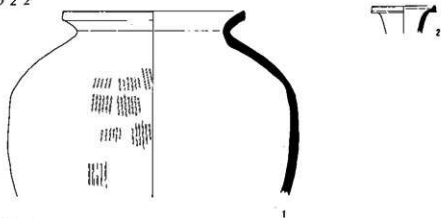
SB 307



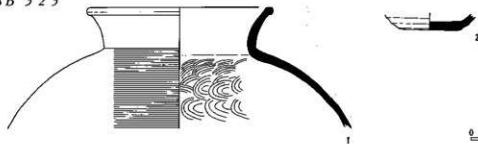
SB 315



SB 322



SB 325

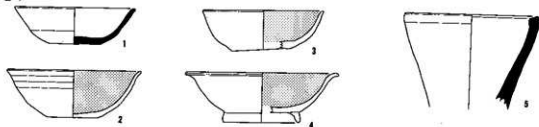


0 10cm

第277図 古代の土器(2)

第2章 篠ノ井遺跡群

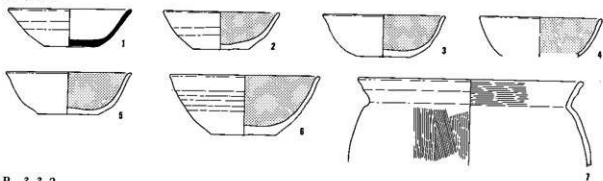
SB 327



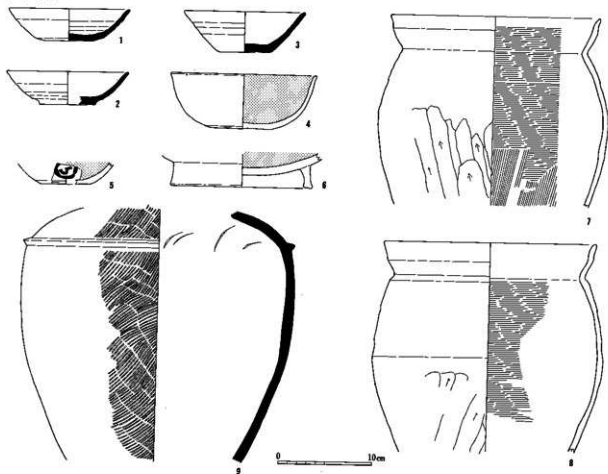
SB 328



SB 330

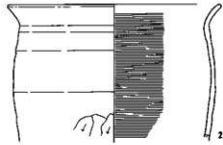


SB 332

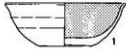


第278図 古代の土器(3)

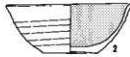
SB 334



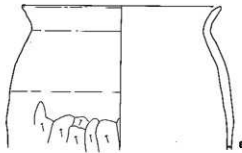
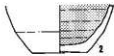
SB 339



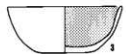
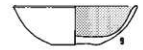
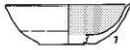
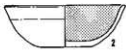
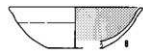
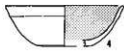
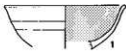
SB 341



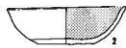
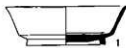
SB 343



SB 346



SB 356



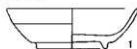
0 10cm

第279図 古代の土器(4)

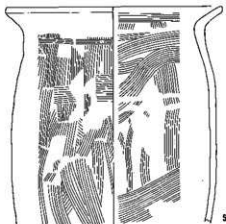
SB 362



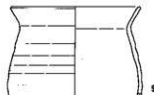
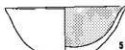
SB 369



SB 363



SB 392



SB 394



SB 395



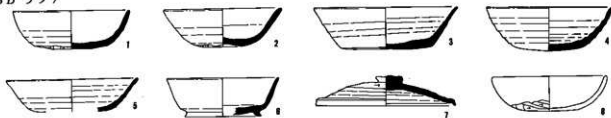
SB 396



0 10cm

第280図 古代の土器(5)

SB 397



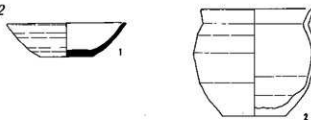
SB 398



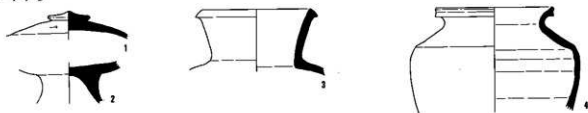
SB 407



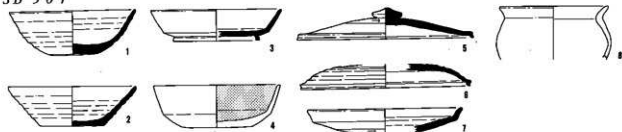
SB 412



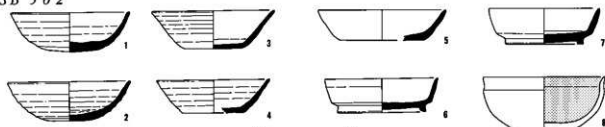
SB 416



SB 501



SB 502



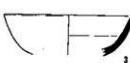
0 10cm

第281図 古代の土器(6)

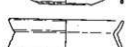
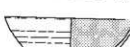
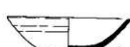
SB 503



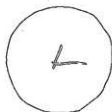
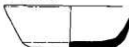
SB 507



SB 508



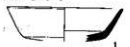
SB 509



SB 510



SB 511



SB 514



SB 516

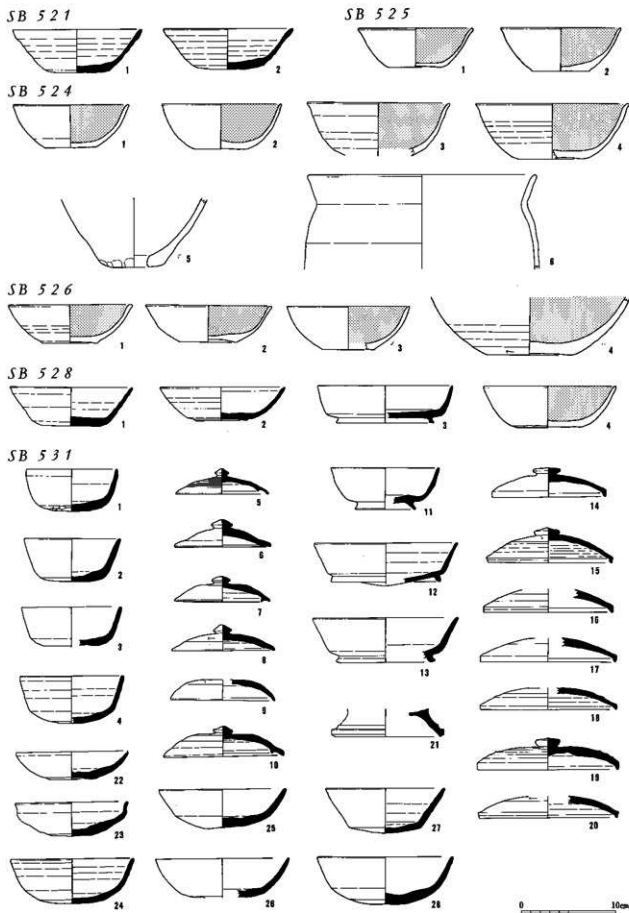


SB 519



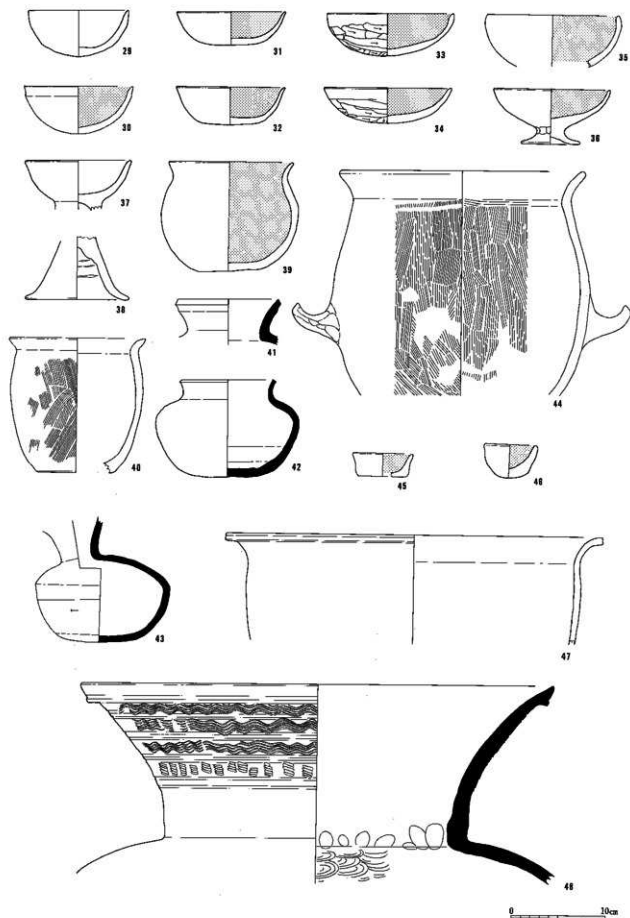
0 10cm

第282図 古代の土器(7)



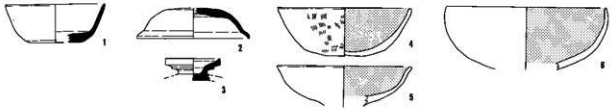
第283図 古代の土器(8)

第2章 鎌ノ井遺跡群

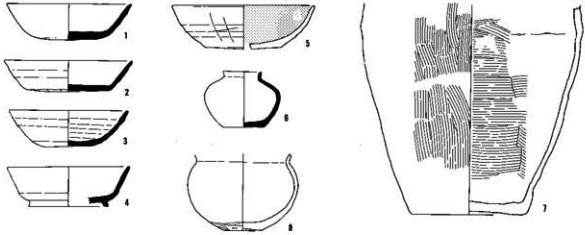


第284図 古代の土器(9)

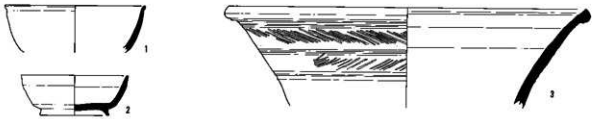
SB 532



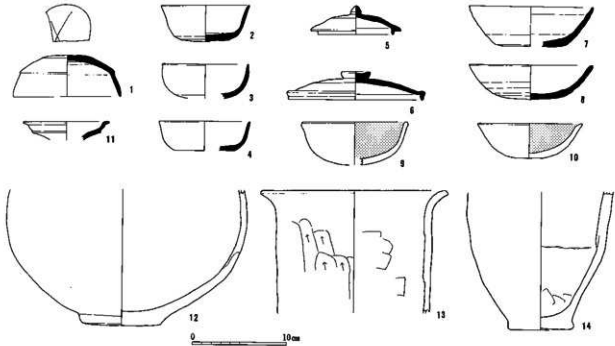
SB 537



SB 538



SB 539



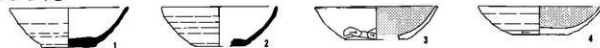
0 10mm

第285図 古代の土器00

SB 540



SB 542



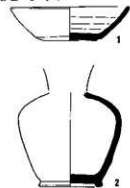
SB 543



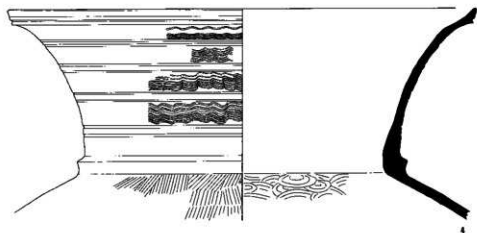
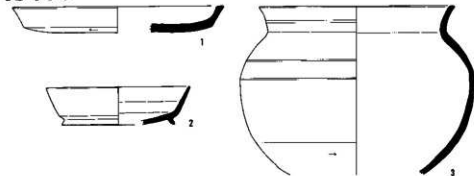
SB 544



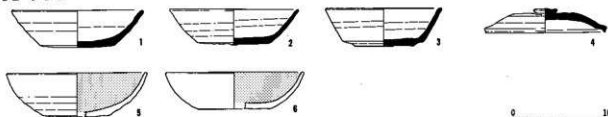
SB 547



SB 554



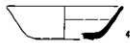
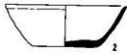
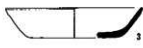
SB 559



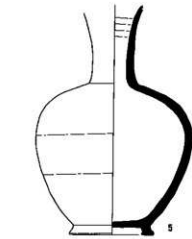
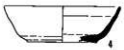
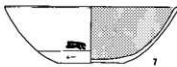
0 10cm

第286図 古代の土器(1)

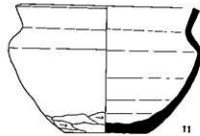
SB 565



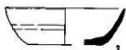
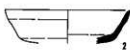
SB 568



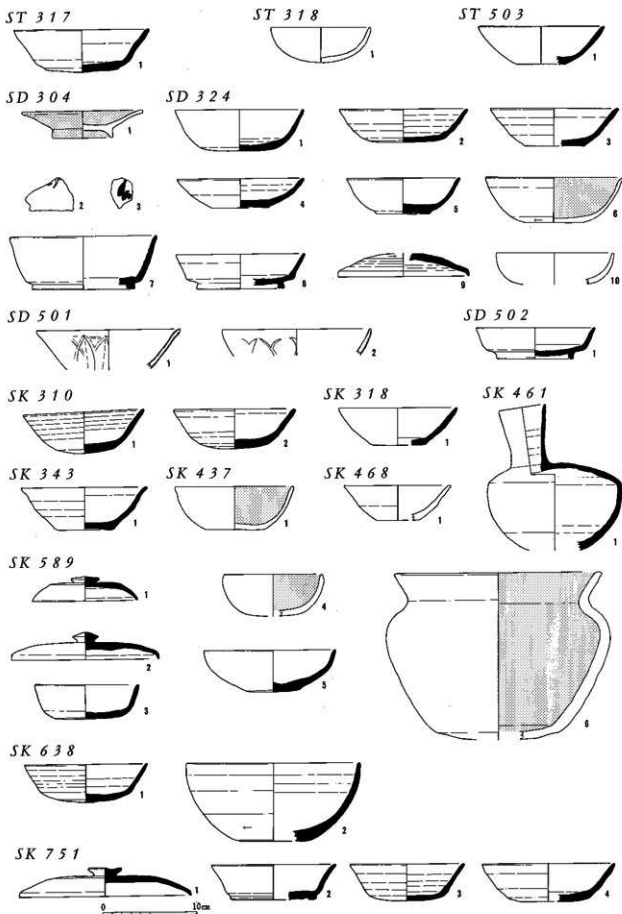
SB 573



SB 576

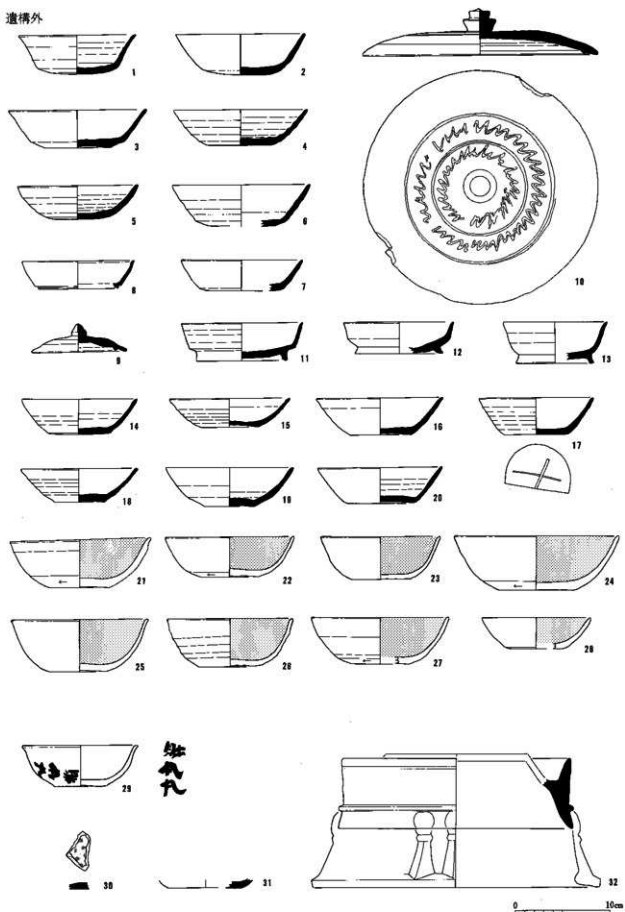


第287図 古代の土器02



第288図 古代の土器03

遺構外



第289図 古代の土器00

9 中世の遺構

概 要

中世の遺構は他遺跡のそれと同様、粗く黒っぽい独特の遺構覆土で他の時代とは明確に区別される。本遺跡内では掘立柱建物跡が1か所に集中する以外、該期の遺構は大変少なくかつ散在的である。掘立柱建物跡は古代のものと重なるため高燥な地点を求めての集中と考えられるが、それとて多い数ではない。対岸の屋代遺跡群のような密集はあくとしても、意外なほどの少なさの原因は何なのか。耕作による後世の擾乱による可能性が高いと思われるが、明確な説明は今だにできない。

掘立柱建物跡

ST301 (第290図、PL31)

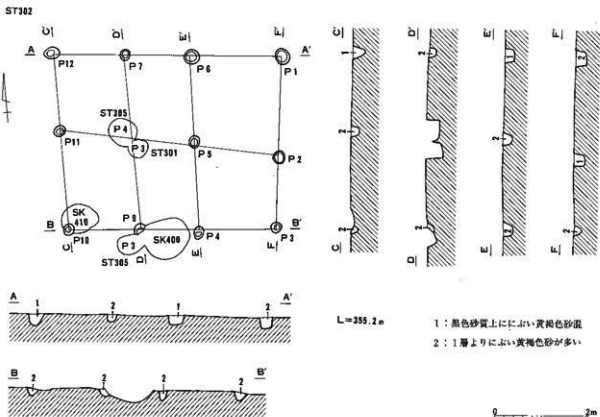
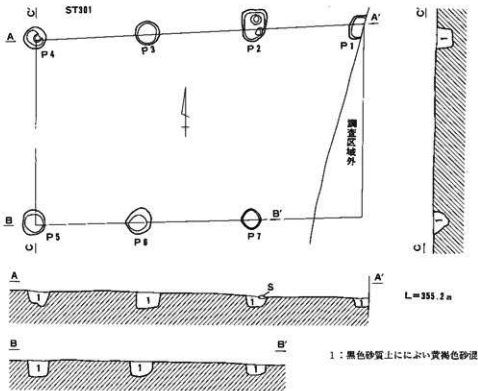
位 置 1 B区、VI-I 07・08グリッド
 重複関係 SB340、ST305、SK402・414を切る。ST302は不明。
 形 状 側柱。梁行1間、桁行3間。3.9m×6.8m。一部調査区域外。
 軸・柱間 N-87°-E 南北3.9~4.2m 東西2.1~2.3m
 柱 痕 直径9~11cm
 覆 土 単層。黒褐色砂質土。
 遺 物 土器片少々。流れ込みか。
 所 見 ST303と柱穴の規模・軸方向等が一致するため同時期の可能性が高い。

ST302 (第290図、PL31)

位 置 1 B区、VI-I 07・08グリッド
 重複関係 ST305、SK400・410に切られる。
 形 状 総柱。梁行2間、桁行3間。3.6m×8.9m。
 軸・柱間 N-87°-W。南北1.5~2.1m 東西1.2~1.9m
 柱 痕 なし。
 覆 土 単層。黒褐色砂質土。
 遺 物 ほとんどなし。
 所 見 総柱の建物としてはかなり歪んでいるが他に適合する土坑が見当たらない。

ST303 (第291図、PL31)

位 置 1 B区、VI-I 02・03グリッド
 重複関係 なし。下層に古代遺構。
 形 状 側柱。梁行1間、桁行3間以上。3.8m×6.6m以上。一部調査区域外。
 軸・柱間 N-86°-E。南北3.8m 東西2.1~2.3m
 柱 痕 なし。
 覆 土 単層。黒褐色砂質土。
 遺 物 土器片数点。
 所 見 ST301が隣接し、柱穴の規模・柱間・軸等が一致することから同時期の可能性が大きい。



第290図 中世の遺構 ST301・302

ST304 (第291図、PL31)

位置 1B区、VI-I 12・13・17・18グリッド
 重複関係 なし。
 形状 側柱。梁行2間以上、桁行2間以上。5.9m以上×4.5m以上。約半分が調査区域外。
 軸・柱間 N-72°-EまたはN-28°-W。南北2.6~3.3m 東西2.0~2.5m
 柱痕 なし。
 覆土 単層。黒褐色砂質土。
 遺物 土器片数点。
 所見 中世に特徴的な埋土であるが建物の規模に対してピットの直径がやや小さいか。

ST305 (第291図、PL31)

位置 1B区、VI-I 07グリッド
 重複関係 ST302を切り、ST301、SK400に切られる。
 形状 側柱。梁行2間、桁行2間以上。4.3m×3.6m以上。半分以上が調査区域外。
 軸・柱間 N-87°-E。南北2.0~2.4m 東西3.0~3.5m
 柱痕 なし。
 覆土 単層。黒褐色砂質土。
 遺物 土器片数点。
 所見 一応掘立柱建物としたがピットに規模がややふぞろいなことが気になる。

その他の遺構

SD501 (第20図、PL-)

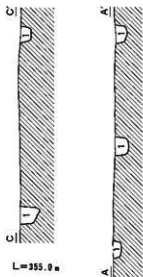
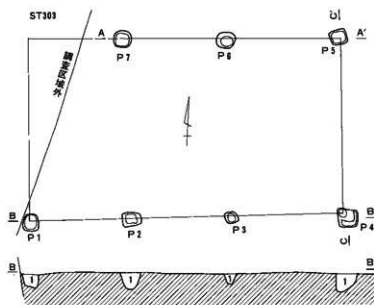
位置 1D・E区、VI-J 17・18・22・23、O03・08・13・14・18グリッド
 重複関係 隣接するすべての遺構を切る。
 形状・規模 幅約3m、調査区域内で長さ36m以上。
 覆土 詳細不明。中世に特有の砂に覆われている。
 遺物 竜泉窯系の青磁が若干。
 所見 遺物から鎌倉時代ころの溝。SD502と接続するとすれば直角に折れ曲がり、中世の屋敷地を区画する溝とも考えられる。

SD502 (第20図、PL-)

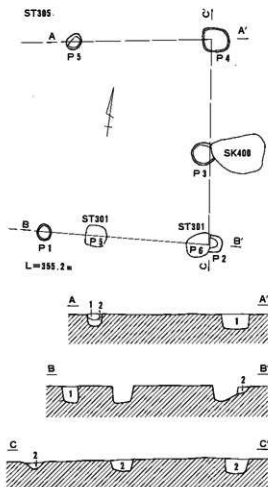
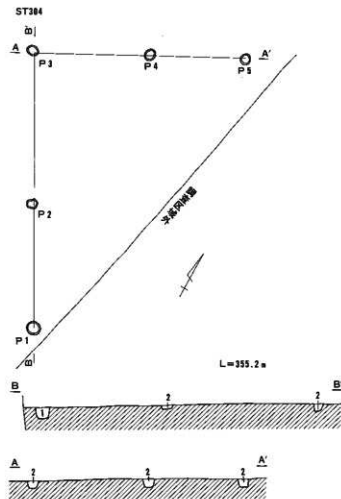
位置 1E区、VI-J 03・04・05・08・09・10グリッド
 重複関係 隣接するすべての遺構を切る。
 形状・規模 幅5m、調査区域内で長さ約12m以上。
 覆土 詳細不明。中世に特有の砂に覆われている。
 遺物 なし。
 所見 SD501参照

SK301 (第292図、PL-)

位置 1B区、VI-I 12グリッド



1 : 黒褐色砂質土に多い黄褐色砂混



- 1 : 黒褐色砂質土に多い黄褐色砂混入
- 2 : 1層よりも多い黄褐色砂が多い

- 1 : 黒褐色砂質土に多い黄褐色砂混入
- 2 : 1層よりも黄褐色砂が多い

0 2m

重複関係 洪水砂の上から掘り込んでおり、SB340を切る。

形状・規模 検出面での径200～210cmの円形。調査できた最下層は深さ225cm、径100cm。断面形は上部に向かって緩く広がる。

覆土 13分層したが、中位にある6層(炭化物層)の上層は黄褐色シルト、下層は黒褐色の細砂～シルトとともに他の層の土がブロック状に混入しており、中位まで埋め戻したのち焚火を行い、さらに埋め戻したと思われる。

遺物 特になし。

所見 形態から明らかに井戸跡。隣接するSK302・303も井戸で、本遺跡内では1C区、X19・24グリッドのSE301・302もやはり隣接している。

SK302 (第292図、PL31)

位置 1D区、VI-I17グリッド

重複関係 SB307を切る。

形状・規模 検出面では径170～186cmの円形、調査できた最下部の深さ210cm、径100cm。断面形は上部に向かって緩く広がる。

覆土 10分層したが上部の1～4層は灰黄褐色～暗褐色のシルト、5～10層は灰褐色～黒褐色のシルトが基調とともに他層の土がブロック状に混入し、人為埋没が明らか。

遺物 底部よりやや上層にある9層上部から人頭大の安山岩礫が3個みられ、ほぼ同レベルで青磁破片が1点出土した。

所見 形態から明らかに井戸跡。底部付近の礫はいわゆる三ツ石か。出土した青磁は13世紀前半のものである。

SK303 (第292図、PL-)

位置 1D区、VI-I17グリッド

重複関係 SB307を切る。

形状・規模 検出面では径115～120cmの円形、調査できた最下部の深さ200cm、径約50cm。断面形はほぼ垂直に近く、底部は緩く狭まる。

覆土 口径が小さいため土層断面を観察しながら掘り下げることはしなかったが、基本的にSK301・302と同様の覆土である。

遺物 特になし。

所見 形態から明らかに井戸跡。SK301参照。

SK444 (第19図、PL-)

位置 1D区、VI-D04グリッド

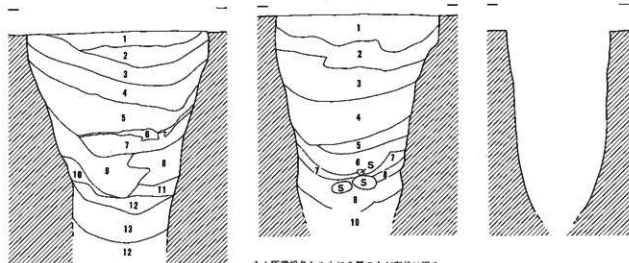
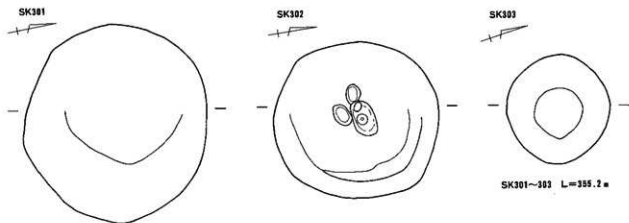
重複関係 SD306・307を切るか。

形状・規模 楕円形。幅45cm、長さ約80cm。

覆土 検出面が低く、明確ではないが中世に特有の砂に覆われている。

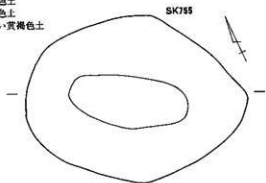
遺物 なし。小人人骨。

所見 土坑墓。検出時点で頭骨が輪切りになっており、他の四肢骨は細片で詳細不明。

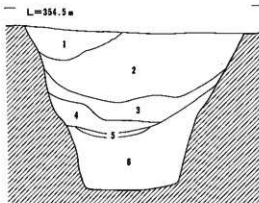


- 1: におい黄褐色土に灰黄褐色土塊状に混入
- 2: 灰黄褐色土 4層ほど黒くない
- 3: におい黄褐色土に灰褐色土塊状に混入
- 4: 灰黄褐色土3層のブロック混入
- 5: 褐灰色土に灰黄褐色土混入
- 6: 炭化物層
- 7: 黒褐色土に褐色土がブロック状に混入
- 8: 黒褐色土に7層と12層が混入
- 9: におい黄褐色土に13層が塊状に混入
- 10: 黒褐色土
- 11: 暗褐色土
- 12: 褐灰色土
- 13: におい黄褐色土

- 1: 灰黄褐色シルトに2層の土が塊状に混入
- 2: におい黄褐色土に灰色土ブロック混入
- 3: 灰黄褐色土に2層ブロック混入
- 4: 暗褐色土に黄褐色土ブロック混入
- 5: 褐灰色土に4層のブロック混入
- 6: 黒褐色土4層ブロック混入
- 7: 灰黄褐色シルト4層のブロック混入
- 8: 褐灰色土7層のブロックやや多く混入
- 9: 8層よりも7層ブロックが少ない
- 10: 灰黄褐色土



- 1: 洪水砂
- 2: 黒褐色土に褐色砂塊状に混入
- 3: 2層よりも褐色砂が多い
- 4: 黒褐色土
- 5: 褐色砂
- 6: 黒褐色土に褐色砂ブロック状に混入



第292図 中世の遺構 SK301~303・755

SK755 (第292図、PL-)

位置 1D区、VI-T11グリッド

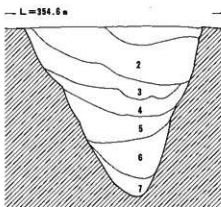
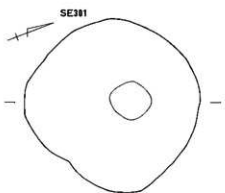
重複関係 SD327を切る。

形状・規模 不整形円形。幅240cm×180cm、深さ約180cm。

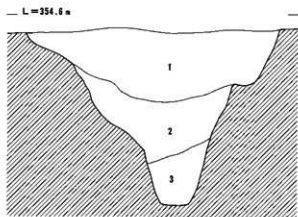
覆土 いくつかに分層されるが下層はブロック状の土、最上層は洪水砂が堆積しており、中間にも縞状の断面が観察されるため明らかに人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物 ほとんどなし。

所見 形状・規模から推察して井戸と考えたい。隣に古代の井戸SK756があり、地下水を得やすい地点だったということか。



- 1: 褐灰色シルト 焼土少々混
- 2: におい黄褐色シルトに灰色土混
- 3: 褐色シルトに黄褐色土斑状に混入
- 4: 褐灰色シルト 空隙あり
- 5: 灰色シルトと黄褐色土が縞状に重なる
- 6: 暗褐色シルト 空隙あり
- 7: 灰褐色シルト 空隙多くブロック状



- 1: におい黄褐色細砂 1層に近い
- 2: 灰黄褐色シルト
- 3: 2層に近いが実状、空隙あり



SE301 (第293図、PL-)

位置 1C区、IV-X24グリッド

重複関係 なし。

形状・規模 平面は円形。径1.8m、深さ1.8m以上。断面逆円錐型。

覆土 いくつかに分層されるが、空隙・ブロック状の断面が観察され、人為的に埋め戻されたようである。

遺物 ほとんどなし。

所見 SE302は本跡南側に位置し、対をなすものかもしれない。

SE302 (第293図、PL-)

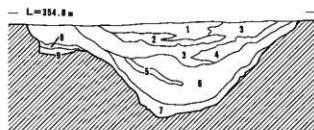
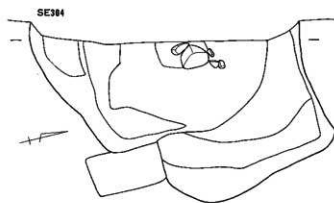
位置 1C区、IV-X24グリッド

重複関係 なし。

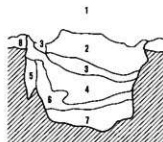
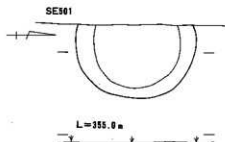
形状・規模 平面は台形～不整形。径2.4m、深さ1.8m。断面逆円錐型。

覆土 いくつかに分層されるが、中間に炭化物の薄層がみられ人為的に埋め戻されたようである。

遺物 ほとんどなし。



- 1: 暗褐色土に黄褐色土ブロック状に混入
- 2: 黄褐色土に暗褐色土が塊状に混入
- 3: 黒褐色土に炭化物多量に混入
- 4: 暗褐色土
- 5: 暗褐色土に黄褐色土少量混入
- 6: 黒褐色土に炭化物多量に混入
- 7: 黒褐色土に褐色土ブロック状に混入
- 8: 色調の異なる黄褐色土が層状にみえる
- 9: 黒褐色土に褐色土ブロック状に混入



- 1: におい黄褐色シルト 耕作土
- 2: 灰黄褐色土 灰色シルト塊状に混入
- 3: におい黄褐色シルトに2層と4層混入
- 4: 灰黄褐色土
- 5: 4層に褐色シルト混入
- 6: におい黄褐色土
- 7: 6層に近いが褐色土ブロック状に混入
- 8: 仁和水山層
- 9: 不詳

所 見 SE301と一対か。

SE304 (第294図、PL31)

位 置 1 B区、VI-I 21、N01グリッド

重複関係 SK476・718・719を切る。

形状・規模 平面は不整形。軸長5 m以上、短軸4.50 m以上、深さ約2 m。断面逆円錐～逆台型。

覆 土 いくつかに分層されるが、炭化物を多量に含むブロック状の覆土が観察され、明らかに人為埋設。

遺 物 覆土上層からややまとまって出土。箱清水式土器から青磁まで弥生時代後期から中世にかけての土器が検出されているが、細片ばかりで図になるものはほとんどない。磚仏の破片が出土しているが本跡との関連性は薄い。

遺構底部から人頭大～一抱えほど石が4個検出されているが詳細不明。

所 見 本跡は一応井戸と考えたが形態・規模ともに他の井戸とは掛け離れた状況にあり特殊遺構ととらえた方が適切かもしれない。青磁片の出土や覆土の状況から中世の遺構であることはかなり明確である。なお磚仏については第3節 瓦塔の項で述べる。

SE501 (第294図、PL-)

位 置 2 A区、IV-O09グリッド

重複関係 なし。約半分が調査区域外。

形状・規模 平面は円形。径1.4 m、深さ2.3 m。ほぼ垂直に掘られている。

覆 土 いくつかに分層されるが、ブロック状の断面が観察されるため人為的に埋め戻されたようである。

遺 物 ほとんどなし。

所 見 覆土の状況から中世と思われる。

10 石器・金属器・玉類

本項では全時代にわたる土器・土製品以外の遺物を種類ごとに一括して扱う。これは土器以外の遺物の数が多くないこと等の理由による。ここでは種類ごとの概略を述べるにとどめているので出土位置等の詳細は一覧表を参照されたい。

〈石器・石製品〉(第295～301図、PL86～90)

石鏃 打製と磨製とがある。打製は4を除き茎をもつタイプで、石材としては黒曜石製が3点、チャート製・安山岩製が各1点である。磨製は2点が検出されているにすぎず、双方とも粘板岩製と思われ、円形周溝墓にかかわる地点からの出土である。

石庵丁 破片が2点検出されている。1は表面が剝離しており孔と周囲の調整のみが石包丁の痕跡を示している。

扁平片刃石斧 1点のみである。未製品と思われる、磨き残しの部分が多い。

太型蛤刃石斧 3点出土している。11はやや小型か。12、13は破片である。どれも安山岩らしい。

不明石器 14は粘板岩製で1端に刃部を作り出しているが、他の部分に調整の痕跡はみられない。15は側面に鈍い刃部をもつ。16は両面に擦痕があり片側に刃部をもつ。石庵丁の未製品とも思われるが判然としない。

石製紡錘車 2点確認されており双方ともよく似ている。滑石製及び粘板岩製。

砥石 19～26は孔のある砥石をまとめた。19～21は大小あるが機能の差なのか、単なる使用による摩耗なのか判然としない。どれもグリーンタフ製である。

22、23は未固結あるいは風化した細砂岩を使用したとみられる製品で、触れただけで表面が崩れる程軟質である。孔がみられないものが多く、当初その性格すら不明であったがやや硬質な個体、孔のある個体が検出されるに及んで砥石と判明した。長年にわたって土に埋もれていたため、風化が進んだ可能性も否定できないが、やはり当時から軟質の石を利用していたと考えたい。

24～28は軽石製の製品で擦痕がみられるため砥石とした。孔をもつものと同様でないものがあり、形態もさまざまである。

30以降は孔のないやや大型の砥石をまとめた。石材としては砂岩が多く、安山岩、凝灰岩、軽石等がある。このうち35は円柱状の軽石で表面に整形の痕跡が明らかである。どのような機能・用途をもつものか判然としないが、軽石製であるため一応砥石としておきたい。37～40は板状の安山岩や砂岩等で、表面に滑らかな部分をもつものを一括した。砥石以外の可能性もある。

41～49は置き砥石をまとめた。砂岩、安山岩、凝灰岩等を使用している。このうち43、46は扁平で線状の擦痕がみられるため砥石としたが面的な使用痕は明らかでなく、砥石以外の可能性もある。

多孔石 安山岩質溶岩を利用している。孔の大きさはあまりそろっていない。本遺跡内で検出されたものは図示した1点のみである。

凹み石 すべて安山岩質溶岩製である。大型品は凹み石というより石臼としたほうが良いとも考えたが、一部を除き形態に差はなく、大きさも連続的であるため凹み石として一括した。この中で57、58はくぼみが浅く多孔石の1種としたほうが良いのかもしれない。

61は大型で短辺にくぼみをもつ特異なものであるが石質・くぼみの形態等に差は認められないため凹み石とした。

こも編み石 細長い形態の円礫、あるいは微妙な擦痕跡が認められる石器をこも編み石として扱う。一般

に自然石をそのまま利用した石器はその判定が困難であり、こも編み石もその例外ではないが、この石器の場合単独では機能しないため、ある程度の一括して出土したものをこも編み石として扱っている。

本項ではSB342の一括資料のみを掲載したが石質には安山岩系がほとんどで、450～500g程度のものが多いうである。

〈金属器〉(第302・303図、PL91)

銅 銅製と鉄製がある。銅製は帯状の銅を環にしただけのもので接続していない。鉄製は断面が三角形で明らかに稜をもつ。完全な個体を検していないので明確でないが銅鋼と同様に接続しない形態であろうか。

金環 本遺跡では図示した個体が唯一であるが、残念ながら検出面遺物である。

鎌 (12～17) 形態はさまざまである。柄に接続する部分の折り曲げで左右が生ずるが、実際に切先がどちらへ向くかは明らかでない。

板状鉄刃 (18・19) 鋤あるいは鎌先であるが総称して板状鉄刃とする。18の個体は弥生時代後期のものである。

鎌先 (20) 図示したものが唯一である。刃先が内側にえぐられているのでかなり使い込まれたものようである。

鉄鏃 明確なものは22のみである。21・23は茎だけでやや判然としないが断面が四角形であるため鏃とした。

刀子 (24～27) 全体の知れるものは26のみで、他は破片ばかりである。

ヤリガナ 本遺跡からは唯一の出土である。茎部に木質が残っている。

鉄槌 一見斧のような形態であるが、柄を通した孔が明確なため鉄錘と判明した。

紡錘車 (29・30) 30は軸だけであるが、断面が円形であるため紡錘車の軸とした。

鐮子 やや明確でないが頭部が環状であることから鐮子とした。本遺跡からは唯一の出土である。

釘 図示した個体は大型の釘であるため新しい時期のものか。

不明鉄製品 (34～37) 34は馬具の一種か。35は鉄鏃とも考えたが不明である。37はやや小型だが鉄鏃の可能性もある。

〈玉類〉(第304・305図、PL92)

管玉 1～13は太短いタイプをまとめた。このうち1から8までが住居廃絶後、祭祀が行われたと想定される古墳時代後期のSB340からの出土である。石質はあまり明確でないが流紋岩・碧玉等が用いられている。

14～23は細長いタイプですべて弥生時代後期の遺構からの出土である。碧玉製がほとんどで17のみ鉄石英を用いている。またこの個体は研磨による稜線が明らかで未製品の可能性もある。

勾玉 本遺跡から検出されたものはどれも小型でヒスイ製である。

ガラス小玉 スカイブルーのビーズで弥生時代後期の遺構から検出されたものがほとんどである。大きさはさまざまであるが遺構ごとにある程度まとまっている。人骨の頭部、下顎付近から出土したものが3例ほどみられるのでやはりネックレスだったのだろうか。

ガラス玉 90～93は球形で紺色のものである。これらはすべてSM211の人骨の頭部付近から出土しており、下顎骨内つまり口中から検出されたものもある。94は紺色の個体だが表面が風化している。95は淡緑色のものである。

96はやや大型のスカイブルーのガラス小玉の破片を再利用したものである。

白玉 大ききの差が著しいが、石質はどれも滑石製で形態・調整等も大差ない。97～122はSB349の一括資料でサイズがよくそろっている。131～134・136もSB349からの出土である。したがって同時期でも複数の大ききが存在するらしい。137～139はとくに大型で時期差とも考えられる。

石製模造品 140は鏡を模したものが、粘板岩製である。141はあまり例をみない形態であるが勾玉を模したのだろうか。滑石製である。

土玉 土器、土製品の項で扱うべきか迷ったが、小型であるため本項で取り上げる。なおSB374から土製勾玉が出土しているがこれのみ土器の図版に掲載している。

142・143は切子玉を模したものが、143はミガキが施されているため玉らしいが、142はナデだけの仕上げで土鍾の可能性も否定できない。144・145はミガキで仕上げられているが黒色処理はない。146～149はSB340の出土であるが、148・149は黒色処理を施しているようである。調整は不明瞭であるが弱いミガキか。

150・151は大型でとくに151はミガキ・黒色処理が施されているようである。逆に150はナデだけの仕上げで玉以外の何かかもしれない。152は管玉を模したと考えたいがやはりナデだけで仕上げている。

付表
石器

番号	種類	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)
1	打製石鏃	SB340	3.3	1.7	0.6	チャート	2.14
2	"	SK234	2.1	1.5	0.5	ガラス質安山岩?	1.75
3	"	SB411	2.0	1.3	0.4	黒曜石	0.87
4	"	1EIVO-3V層	3.2	1.4	0.7	"	1.77
5	"	1DIVO-16	1.8	1.3	0.5	"	0.76
6	磨製石鏃	SM230周溝内	4.0	2.0	0.5	粘板岩	3.13
7	"	SM218付近2枚	3.0	2.4	0.25	"	1.99
8	石砲丁	VI I-082枚	3.4	4.2	0.3	"	10.35
9	"	SB201	5.6	3.1	0.7	"	10.85
10	扁平片刃石斧	SB366	5.9	3.7	0.9	粘板岩?	20.00
11	大型蛤刃石斧	1DIVO-01	10.7	5.1	2.5	安山岩	237.40
12	"	SB502	4.1	6.1	3.9	"	180.00
13	"	SB366	6.9	6.7	3.4	"	270.00
14	不明石器	SB368	12.3	4.5	3.9	粘板岩	250.00
15	"	SB353	14.5	7.2	2.8	安山岩系	450.00
16	"	SB511	12.2	4.2	0.9	粘板岩	60.00
17	石製紡錘車	SB536	径4.1		1.1	"	40.00
18	"	SB353	径4.2		1.6	滑石	30.17
19	砥石	SB401	4.5	1.8	1.2	グリンタフ	14.82
20	"	SB518	8.0	3.0	1.5	"	80.00
21	"	SB340	6.3	2.8	1.8	"	60.00
22	"	SB340	5.2	4.2	0.7	細砂岩	40.00
23	"	SB342	11.5	4.3	1.0	風化砂岩	80.00
24	"	SB402	7.1	5.1	4.9	軽石製	20.00
25	"	SB340 覆土~床直上	6.4	7.3	2.5	"	35.00
26	"	SB340B区	3.7	4.0	2.6	"	15.00
27	"	SB402	7.2	5.1	4.9	"	50.00
28	砥石	SB571	7.7	2.5	2.1	軽石	10.00
29	"	SB366覆土	4.4	4.7	2.6	"	15.00
30	"	SB371	10.4	4.4	2.1	砂岩	130.00
31	"	SB400	13.3	7.3	5.6	細砂岩	870.00
32	"	SB536	12.9	6.2	5.5	緑色凝灰岩	550.00
33	"	SB355	12.8	4.7	6.2	砂岩	470.00
34	"	SB342	15.7	13.8	2.3	砂岩	570.00
35	"	SB517 Na 1	16.8	10.2	10.1	軽石	630.00
36	"	SB366 Na 3	12.8	5.0	3.1	砂岩	190.00
37	"	SD320	9.4	6.1	1.9	"	130.00
38	"	SB502 Na 6	12.8	7.8	2.4	安山岩	400.00
39	"	SB536 No.10	6.3	9.8	3.4	熔岩	210.00
40	"	SB507 Na 1	14.0	19.0	2.4	安山岩	1,180.00
41	置き砥石	SD501	14.7	9.2	7.7	砂岩	1,930.00
42	"	SB544 Na 6	20.1	12.7	7.0	凝灰岩	2,600.00
43	"	SB366 Na 4	16.8	8.5	2.2	砂岩	360.00
44	"	SB362 Na 1	15.9	15.6	8.1	"	2,400.00
45	"	SB374 Na.10, 11	20.1	15.7	2.7	安山岩	1,100.00
46	"	SB342 Na.47	13.6	12.9	5.5	砂岩	1,090.00
47	"	SB368	14.5	10.0	7.2	"(やや風化)	680.00
48	"	SB366 Na 1	35.9	20.3	15.0	安山岩	19,000.00
49	"	SB304 Na 1	23.8	21.0	9.1	安山岩	8,000.00
50	多孔石	SK302 Na 3	23.2	19.2	11.4	熔岩(黒色軽石)	3,230.00
51	凹み石	SB532 Na 1	8.7	4.0	3.7	安山岩	170.00

52	凹み石	SB371		12.3	7.2	3.6	燔岩	300.00
53	"	SB362	No.2	9.4	7.9	5.2	軽石	350.00
54	"	SE302		9.1	9.3	6.2	"	380.00
55	"	SB502	No.5	14.1	10.1	8.2	燔岩	880.00
56	"	SB554	No.2	20.6	17.7	9.7	燔岩(黒色軽石)	2,420.00
57	"	SK307		12.9	10.9	9.6	燔岩	640.00
58	"	SB321	No.1	20.4	12.7	8.1	"	1,440.00
59	"	SD306	No.1	29.1	19.4	16.5	軽石(燔岩)	5,400.00
60	こも編み石	SB342	No.34	16.4	5.2	4.3	安山岩	560.00
61	"	"	No.35	13.1	6.8	4.7	多孔質安山岩	520.00
62	"	"	No.36	13.0	6.3	3.9	安山岩	470.00
63	"	"	No.37	14.4	5.8	4.6	"	610.00
64	"	"	No.39	14.7	6.4	4.0	"	600.00
65	"	"	No.40	14.0	6.7	4.1	"(カクセン岩含む)	480.00
66	"	"	No.41	14.8	5.6	3.6	安山岩系?	510.00
67	"	"	No.42	13.2	6.0	4.0	安山岩	530.00
68	"	"	No.43	14.6	5.4	4.2	安山岩	570.00
69	"	"	No.44	14.6	6.0	4.7	安山岩?	600.00
70	"	"	No.45	15.5	5.8	3.8	安山岩	470.00
71	"	"	No.46	12.7	5.1	4.3	"	450.00
72	"	"	No.48	14.1	4.8	5.0	"	420.00
73	"	"	No.49	12.6	6.3	3.6	"	430.00
74	"	"	No.50	12.8	5.2	4.2	"	400.00

金属器

番号	種類	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)
1	鍋	SB217 No.6、7	径5.5	0.8	0.15	銅	8.64
2	"	"	径5.6	1.0	0.2	"	12.22
3	"	SB374 No.5	径5.4	0.6	0.1	"	2.25
4	"	SB304 No.32	径5.7	0.7	0.35	鉄	6.84
5	"	SK214 No.48	径6.1	0.5	0.3	"	5.74
6	"	SM211 No.47	2.1	2.7	0.25	"	2.37
7	"	SM211 No.46	2.7	0.6	0.2	"	0.63
8	"	"	径4.8	0.5	0.2	"	1.80
9	"	"	径5.0	0.6	0.2	"	1.38
10	"	"	径5.8	0.5	0.2	"	1.27
11	金環	IVO-01第1検出面	径1.7	0.6	0.3	"	3.18
12	鎌	SB539 No.5	11.6	2.3	0.4	鉄	9.89
13	"	SB307 No.30	12.7	4.3	0.6	"	78.63
14	"	SB519 No.12	4.5	3.1	0.2	"	6.07
15	"	" No.7	7.6	2.3	0.2	"	5.84
16	"	SB359 No.63	7.7	2.8	0.3	"	20.03
17	"	SB215 No.60	5.0	2.1	0.5	"	5.95
18	板状鉄刃	SB215 No.2	8.3?	2.1	0.15	鉄	6.06
19	"	C区IVX-20第2検出面	12.3	4.7	0.3	"	67.59
20	鋤先	SB101 No.9	9.4	4.4	0.6	鉄	36.18
21	鉄鎌	SB536 No.13	8.5	0.55	0.3	鉄	2.87
22	"	SB502 No.17	12.2	3.4	0.6	"	19.66
23	"	SB362 No.38	11.7	0.7	0.3	"	9.05
24	刀子	SB511 No.8	8.4?	0.9	0.3	鉄	3.20
25	"	SB215 No.2	6.5	1.5	0.3	"	6.78
26	"	SB511 No.6	15.4	1.2	0.3	"	6.60
27	"	SB519 No.10	5.3	1.0	0.3	"	3.04
28	ヤリガンナ	SB365 No.64	8.0	1.5	0.5	鉄	9.90

29	紡錘車	SB531	No67	径4.3		0.3	鉄	10.46
30	" 軸	1 C区VID-4 第1検		6.6	0.4	0.4	"	3.07
31	鉄錠	SB531	No57	15.9	4.2	3.6	"	963.60
32	サイ子	SB531		4.8	0.6	0.3	"	3.22
33	釘	1 B第1検		7.8	0.8	0.7	"	11.94
34	不明鉄製品	SB519	No10	径4.6	1.2	0.4	"	21.25
35	鉄鏃?	SB524	No14	5.0	0.4	0.4	"	2.68
36	不明	1 B区VII-22		4.8	0.5	0.4	"	2.09
37	鉄鏃?	SB531	No25	5.1	1.0	0.15	"	7.11

玉類

番号	種類	出土地点	直径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	色調	材質	重量(g)	
1	管玉	SB340	0.8	2.2	0.3		流紋岩?	3.39	
2	"	"	0.8	2.2	0.3	黒	流紋岩?	2.99	
3	"	"	0.65	2.1	0.3		流紋岩?	1.68	
4	"	"	0.7	2.0	0.25		流紋岩?	1.76	
5	"	"	0.7	2.2	0.25		碧玉?	2.06	
6	"	"	1.0	2.2	0.3		流紋岩?	2.81	
7	"	"	0.55	1.9	0.25		碧玉?	0.88	
8	"	"	0.65	1.4	0.2		碧玉?	0.45	
9	管玉	SB368	0.9	2.55	0.25	緑	グリーンタフ	3.23	
10	"	SB402	0.65	2.3	0.25	黒	流紋岩	2.26	
11	"	SB546	0.65	1.85	0.2	緑	碧玉	1.39	
12	"	SB567	0.7	2.15	0.25		流紋岩?	2.49	
13	"	SD315	0.8	2.45	0.4		流紋岩	3.32	
14	"	SB359中央7	0.25	2.25	0.15		碧玉	0.38	
15	"	SB220	0.3	2.6	0.15		碧玉?	0.41	
16	"	SB202	No.1	0.35	2.6	0.2		碧玉?	0.60
17	"	SB218		0.3	1.6	0.1	赤茶	鉄石夾	0.19
18	"	SM241、242 人骨No.1、管玉No.1	0.35	1.45	0.15	緑	碧玉?	0.26	
19	"	SM241、242 人骨No.1、管玉No.2	0.4	1.4	0.15	緑	碧玉	0.27	
20	"	"	0.35	1.15	0.15	"	"	0.24	
21	"	"	0.35	0.9	0.1	"	"	0.12	
22	"	"	0.35	1.0	0.1	"	"	0.18	
23	"	土器箱203	0.3	0.6	0.2	赤茶	鉄石夾	0.08	
24	勾玉	SB414	0.7	1.2	0.25	緑	ヒスイ	1.01	
25	"	SB579	0.6	1.15	0.15		"	0.73	
26	"	SB218	0.9	1.25	0.25	乳白色	"	1.00	
27	ガラス小玉	土器箱203	0.35	0.25	0.15	スカイブルー	ガラス	0.06	
28	"	土器箱202	0.3	0.25	0.1	"	"	0.02	
29	"	"	0.35	0.25	0.15	"	"	0.02	
30	"	"	0.3	0.2	0.1	"	"	0.01	
31	"	"	0.3	0.2	0.1	"	"	0.02	
32	"	"	0.3	0.2	0.1	"	"	0.02	
33	"	"	0.35	0.2	0.1	"	"	0.02	
34	"	"	0.35	0.25	0.1	"	"	0.01	
35	"	"	0.35	0.25	0.1	"	"	0.01	
36	"	"	0.35	0.2	0.15	"	"	0.02	
37	"	"	0.3	0.35	0.15	"	"	0.01	
38	"	"	0.3	0.25	0.15	"	"	0.01	
39	"	"	0.3	0.2	0.1	"	"	0.01	
40	"	"	0.35	0.3	0.1	"	"	0.01	

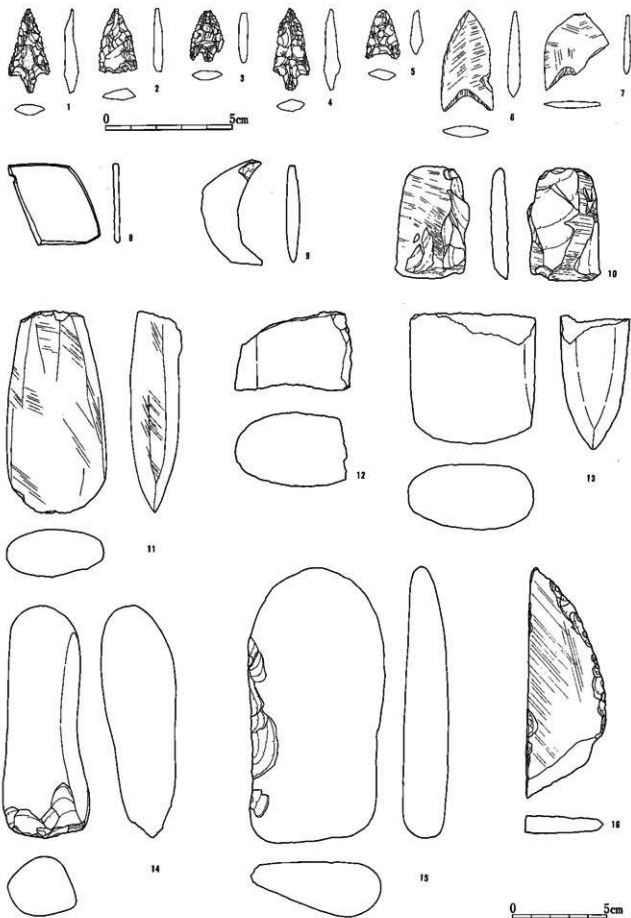
41	ガラス小玉	土器箱202	0.35	0.25	0.1	スカイブルー	ガラス	0.01	
42	"	"	0.3	0.25	0.1	"	"	0.01	
43	"	"	0.35	0.25	0.15	"	"	0.02	
44	"	"	0.35	0.2	0.15	"	"	0.03	
45	"	"	0.35	0.15	0.15	"	"	0.01	
46	"	"	0.35	0.25	0.15	"	"	0.04	
47	"	SM103北側人骨	0.3	0.3	0.15	スカイブルー	ガラス	0.02	頭部南側
48	"	"	0.35	0.25	0.15	"	"	0.04	
49	"	"	0.4	0.3	0.15	"	"	0.05	
50	"	SM103 No.3 頸骨	0.4	0.2	0.1	スカイブルー	ガラス	0.01	齒付近
51	"	"	0.35	0.2	0.1	"	"	0.02	
52	"	"	0.35	0.3	0.1	"	"	0.01	
53	"	"	0.4	0.2	0.1	"	"	0.01	
54	"	"	0.35	0.2	0.1	"	"	0.01	
55	"	"	0.4	0.3	0.15	"	"	0.01	
56	"	"	0.35	0.3	0.1	"	"	0.01	
57	"	"	0.35	0.25	0.15	"	"	0.03	
58	"	"	0.35	0.3	0.1	"	"	0.01	
59	"	"	0.4	0.25	0.1	"	"	0.03	
60	"	"	0.3	0.3	0.15	"	"	0.01	
61	ガラス小玉	SM103 主体部No.1	0.35	0.25	0.1	スカイブルー	ガラス	0.04	第1人骨 頭部後
62	"	SM211	0.4	0.45	0.15	スカイブルー	ガラス	0.10	
63	"	"	0.4	0.35	0.1	"	"	0.06	
64	"	SM241、242、人骨 No.2、ガラス小玉No.3	0.4	0.45	0.15	スカイブルー	ガラス	0.1	
65	"	"	0.35	0.4	0.1	"	"	0.07	
66	"	SB211トアゴ下	0.5	0.35	0.2	スカイブルー	ガラス	0.08	
67	"	"	0.45	0.3	0.15	"	"	0.02	
68	"	"	0.45	0.45	0.15	"	"	0.07	
69	"	"	0.4	0.45	0.15	"	"	0.03	
70	"	"	0.6	0.55	0.25	"	"	0.29	
71	"	"	0.45	0.3	0.15	"	"	0.05	
72	"	"	0.5	0.35	0.2	"	"	0.04	
73	"	"	0.45	0.4	0.15	"	"	0.08	
74	"	"	0.55	0.35	0.25	"	"	0.09	
75	"	SM211周溝内人骨	0.5	0.45	0.2	スカイブルー	ガラス	0.12	頭部より 出土
76	"	"	0.45	0.35	0.15	"	"	0.11	
77	"	"	0.4	0.25	0.15	"	"	0.07	
78	"	"	0.4	0.5	0.15	"	"	0.14	
79	"	"	0.35	0.3	0.15	"	"	0.05	
80	"	"	0.35	0.3	0.1	"	"	0.06	
81	"	SK214	0.55	0.5	0.2	スカイブルー	ガラス	0.18	
82	"	SK214	0.35	0.25	0.1	"	"	0.04	
83	"	"	0.4	0.4	0.15	"	"	0.06	
84	"	"	0.35	0.3	0.1	"	"	0.01	
85	"	"	0.5	0.4	0.15	"	"	0.08	
86	"	"	0.6	0.45	0.25	"	"	0.18	
87	"	1D区IVO-22・23	0.35	0.35	0.1	スカイブルー	ガラス	0.06	
88	"	SB411床下	0.6	0.5	0.3	コバルトブルー	"	0.29	
89	"	SM241、242、人骨 No.1、ガラス玉No.1	0.35	0.45	0.1	スカイブルー	"	0.08	
90	ガラス玉	SM211人骨頭部	0.95	0.95		コバルト	ガラス	1.01	
91	"	"	0.8	0.85		"	"	0.76	
92	"	"	0.9	0.8		"	"	0.87	

93	ガラス玉	SM211人骨頭部	0.95	0.85		コバルト	ガラス	0.88	
94	"	SK589	0.95	0.6	0.3	紺色	#(黒化)	0.92	
95	"	SB519	0.9	0.8	0.3	淡緑色	ガラス	0.69	
96	ガラス小玉	SM241、242、人骨 No.1、ガラス小玉No.2	0.65	0.25	0.1	スカイブルー	"	0.14	
97	白玉	SB349C区第二床面 No.1	0.45	0.25	0.2	グレー	滑石	0.04	
98	"	"	0.45	0.2	0.15	"	"	0.04	
99	"	"	0.4	0.3	0.2	"	"	0.04	
100	"	"	0.45	0.3	0.2	"	"	0.06	
101	"	"	0.5	0.3	0.2	"	"	0.09	
102	"	"	0.4	0.25	0.2	"	"	0.03	
103	"	"	0.5	0.25	0.2	"	"	0.08	
104	"	"	0.45	0.25	0.2	"	"	0.06	
105	"	"	0.45	0.25	0.2	"	"	0.05	
106	"	"	0.45	0.25	0.2	"	"	0.05	
107	"	"	0.5	0.3	0.2	"	"	0.06	
108	"	"	0.5	0.25	0.2	"	"	0.03	
109	"	"	0.5	0.25	0.15	"	"	0.02	
110	"	"	0.45	0.25	0.2	"	"	0.07	
111	"	"	0.45	0.35	0.2	"	"	0.08	
112	"	"	0.45	0.35	0.15	"	"	0.05	
113	"	"	0.45	0.35	0.2	"	"	0.07	
114	"	"	0.45	0.3	0.15	"	"	0.05	
115	"	"	0.5	0.3	0.2	"	"	0.04	
116	"	"	0.45	0.3	0.15	"	"	0.06	
117	"	"	0.45	0.25	0.2	"	"	0.05	
118	"	"	0.5	0.15	0.15	"	"	0.03	
119	"	"	0.45	0.3	0.2	"	"	0.02	
120	"	"	0.45	0.3	0.2	"	"	0.02	
121	"	"	0.45	0.25	0.2	"	"	0.05	
122	"	"	0.45	0.35	0.2	"	"	0.13	
123	"	SB340	0.4	0.25	0.15	グレー	滑石	0.08	
124	"	"	0.15	0.2	0.15	"	"	0.05	
125	"	"	0.4	0.25	0.2	黒	"	0.08	
126	"	"	0.45	0.3	0.15	グレー	"	0.08	
127	"	"	0.65	0.35	0.25	グレー	"	0.19	
128	"	"	0.65	0.45	0.2	白	"	0.27	
129	"	SX301	0.7	0.35	0.25	グレー	滑石	0.25	
130	"	"	0.45	0.2	0.15	グレー	"	0.12	
131	"	SB349カマド左脇床面	0.55	0.25	0.15	黒	滑石	0.15	
132	"	SB349第二床面No.2	0.65	0.25	0.2	グレー	"	0.21	
133	"	SB349第二床面No.4	0.6	0.25	0.25	"	"	0.12	
134	"	"	0.6	0.3	0.25	"	"	0.1	
135	"	SB342 3区	0.75	0.35	0.25	"	"	0.25	
136	"	SB349第二床面No.3	0.8	0.4	0.25	グレー	滑石	0.42	
137	"	1区IV J-09	1.2	0.6	0.35	"	"	1.59	
138	"	SB358 P-2	1.3	0.5	0.35	"	"	1.37	
139	"	SB524	1.2	0.3	0.25	グレー	"	0.58	
140	石製装飾品	SB315	1.65	1.55	0.25	"	粘板岩	1.24	
141	"	1D区O-11第1棟	2.0	2.6	0.25	"	滑石	5.82	
142	なつめ玉	SB515	1.0	2.0	0.15	黒	土	1.79	土鍾?
143	"	SB577	1.25	1.6	0.25	茶	"	1.88	赤彩、ミガキ
144	土玉	SB349第2床面No.5	0.7	0.65	0.1	黒	"	0.27	
145	"	SB349第2床面	0.7	0.7	0.15	茶	"	0.42	

第2節 遺構と遺物

146	土玉	SB340	No 3	0.75	0.6	0.1	黒	土	0.43	ナデ ^{or} 弱 いミガキ
147	"	SB340	No. 4	1.0	0.95	0.15	"	"	0.86	"
148	"	SB340	No 1	0.8	0.7	0.15	"	"	0.38	ナデ黒色 処理?
149	"	SB340	No 2	0.9	0.75	0.2	"	"	0.68	"
150	"	SB411床直		2.45	2.2	0.3	こげ茶	"	11.48	ナデ
151	"	SB311		1.7	1.4	0.2	黒	"	3.43	
152	土製管玉	1 B区1枚		0.95	2.6	0.1	黒	"	2.99	

第2章 篠ノ井遺跡群

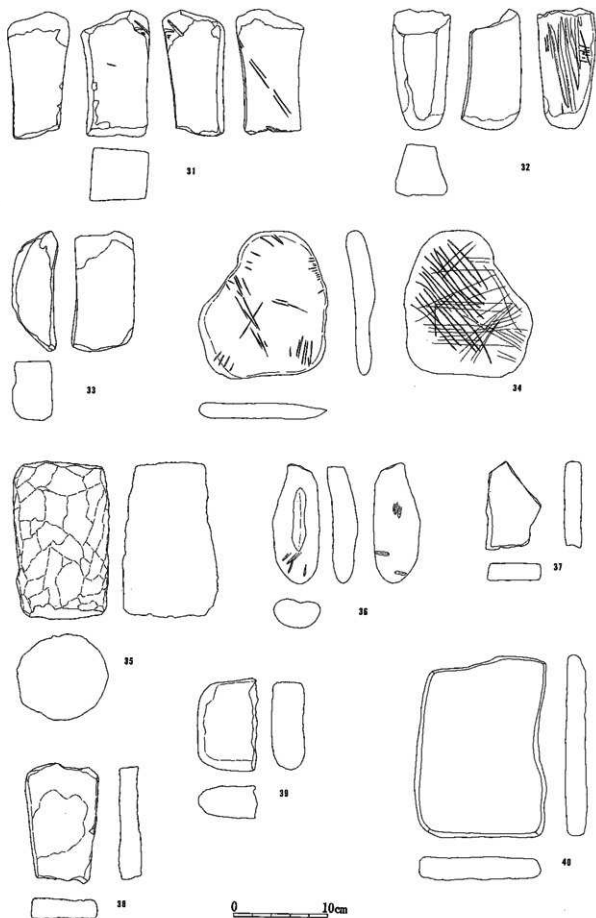


第295図 石器・石製品(1)

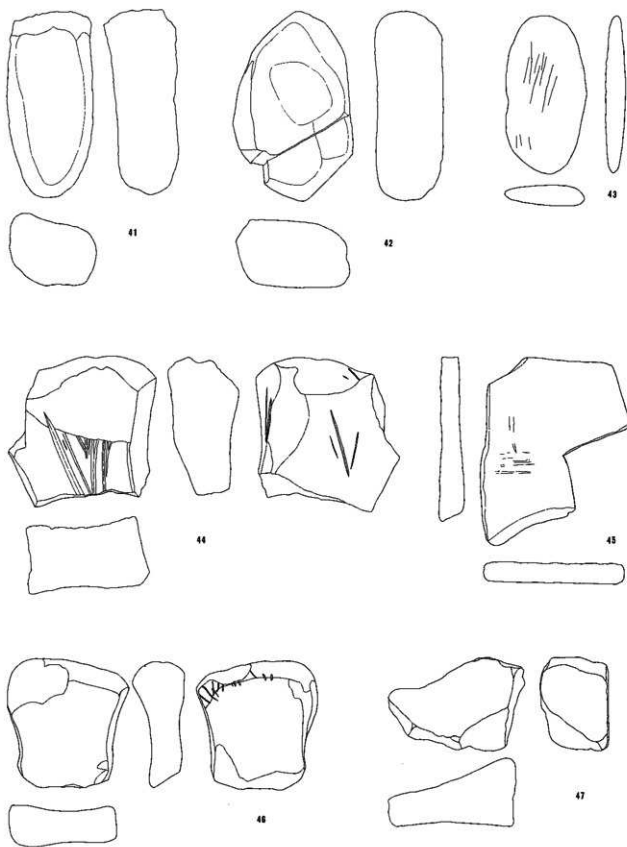


0 5cm

第296圖 石器・石製品(2)



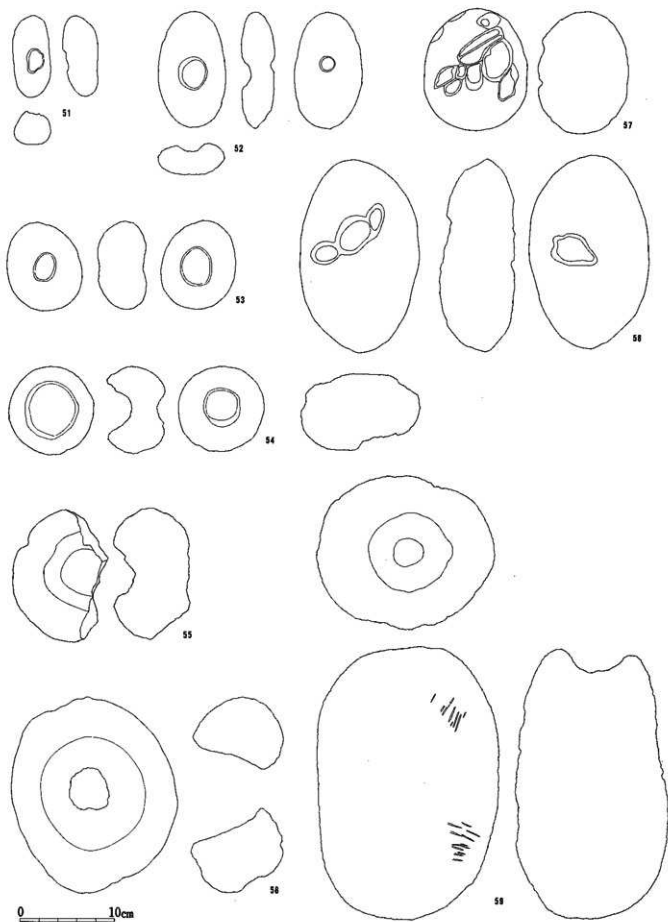
第297図 石器・石製品(3)



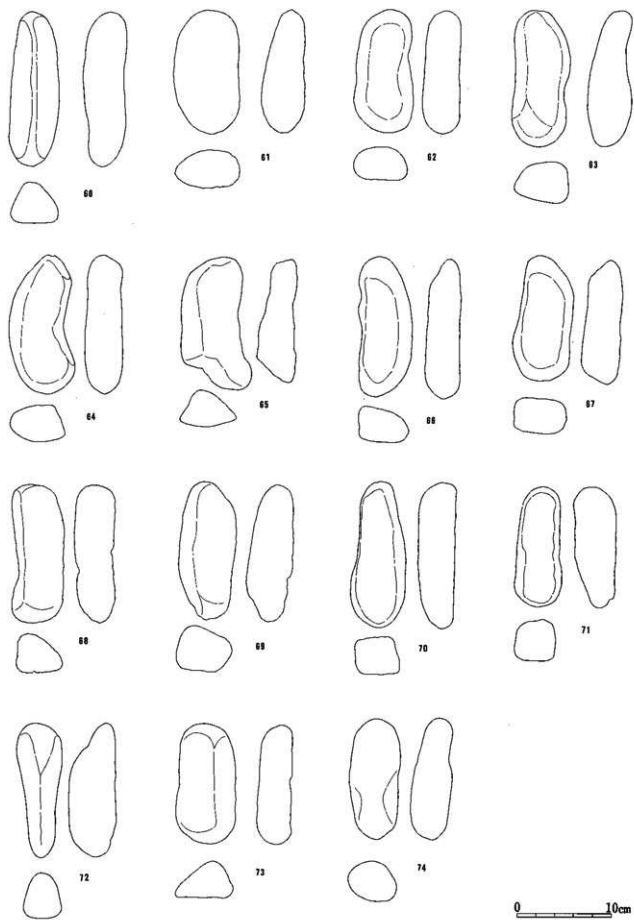
第298図 石器・石製品(4)



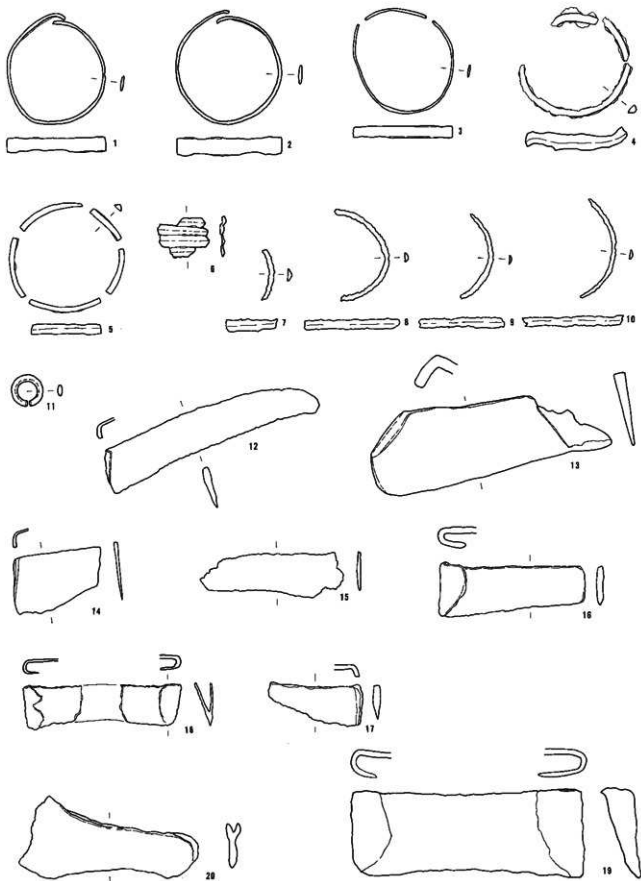
第299図 石器・石製品(5)



第300図 石器・石製品(6)

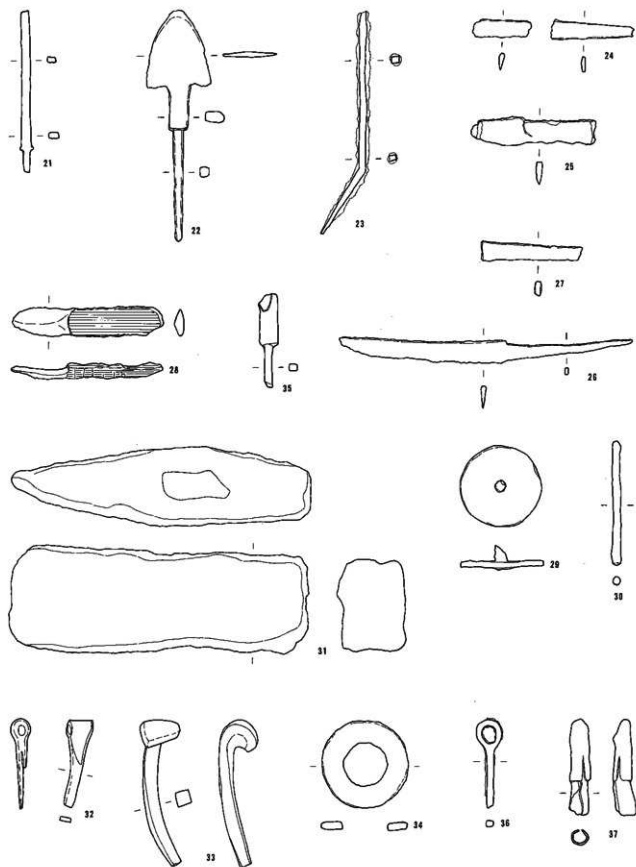


第301図 石器・石製品(7)

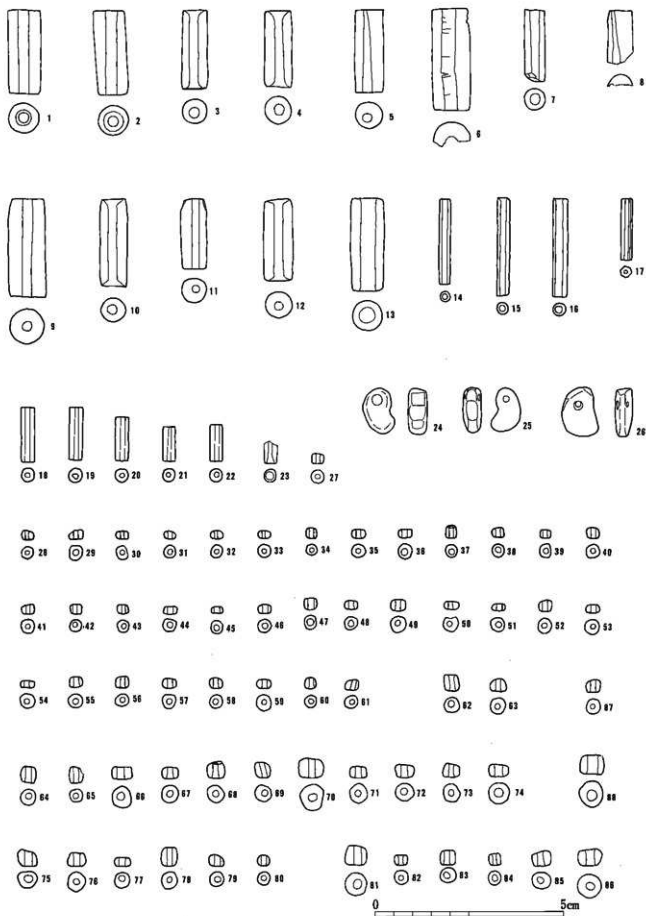


0 5cm

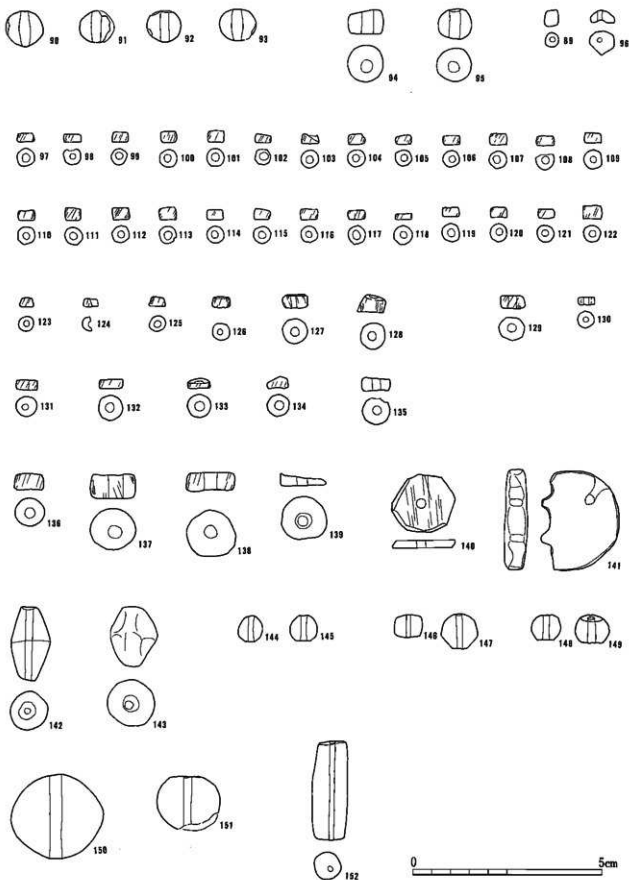
第302図 金属器(1)



0 5cm



第304図 玉類(1)



第305図 玉器(2)

第3節 成果と課題

本遺跡から検出・調査された遺構は住居跡217、掘建建物跡34、円形周溝墓55、土坑404にのぼる。これらの遺構については第2節で述べたとおりである。遺跡全体にわたる考察を行うべきであることは十分承知しているが、時間と紙数の都合からそれはほとんど不可能となった。

そこで、本遺跡の目玉とも言うべき円形周溝墓群と瓦塔についてのみ若干の考察を試み、成果と課題に代えることをお許し願いたい。

円形周溝墓群

本遺跡での円形周溝墓群発見以前に知られていた長野県の円形周溝墓は、佐久市周防畑B遺跡や篠ノ井遺跡群聖川堤防地点等が著名であった。また、飯山市須多ヶ峰遺跡の例のような円形とも方形ともいえない、いわゆる不整形の周溝墓の存在も各所で確認されていた。しかしながらこれらの円形周溝墓はどれも単独あるいは切り合う関係で検出され、わずかに大町市中城原遺跡で互いの周溝を共有する状況が想定されていたにすぎない。隣接する聖川堤防地点の円形周溝墓も図を見るかぎり切り合っているようにみえるが、この点については何とも言えない。

いずれにせよ本跡にみられるような周溝を共有しつつ密集する円形周溝墓群は県内では初めての検出例であり、箱清水期の墓制を考える上で非常に重要な位置に相当するものであるが、今のところ他に照合すべき資料も見当たらないため、周辺遺跡との比較・関連については資料の集積を待つこととし、ここでは本周溝墓群で観察された事柄らについて、問題提起のような形で述べたいと思う。

1 墓城の規模

堤防を越えた千曲川河川敷から1B区中央部まで広がる墓城は、長さ120mに達する。東西方向については未知の部分がほとんどだが、唐猫神社地点からも円形周溝墓が検出されていることから推定すると、調査区西側の部分だけでも東西100m近い範囲となる。そして幅9m程の新幹線路線内に55基が検出されているので、単純計算すると600基以上の円形周溝墓が分布していることになる。また、当然ながら調査区東側にも分布が予想されるため、その数は更に増えることになってしまう。はたしてそのような膨大な数の墓が地下に眠っているかどうかは今後の調査に期待するほかはないが、多数の円形周溝墓が密集する部分はかなりの面積となりそうである。

2 墓城と集落

本遺跡では集落と墓城（円形周溝墓群）とが非常に明確に分離されており、墓城が集落域と重なることはない。また廃屋等を利用した住居内埋葬（SB211の性格については別に述べる）や墓城を離れた単独の土坑墓等もほとんどみられない。そして集落と墓城との間に溝・柵・森林・広場といった緩衝地帯ともいえるべき空隙部分も、また存在しない。集落と墓城とが接続した1対のセットを成すことになら不思議はないが、これほどまでに接近しているにもかかわらず、重複しないことはあまり例がないと思われるだけに逆に不思議である。

円形周溝墓とそこに葬られた人々が、かつて生活していた集落との関係にはさまざまな推測が成り立ちうるが、墓とそれに近接した集落を想定するのが最も自然であろう。したがって、本遺跡の弥生時代後期の集落に生活していた人々が、集落の南に位置する墓城に葬られたと素直に考えたい。本遺跡では該期の

住居跡が70軒以上検出されているが、円形周溝墓の数と比べてそれほど掛け離れた数ではなく、単純に考えると、集落に生活していた人々の中の少なくない人数が円形周溝墓に葬られたことになってしまう。住民にはかなり大型のものもみられるが、遺物的に階層の差を思わせるものはみられず、円形周溝墓群にもとくに際立った規模のものは調査区域内では検出されていない。この事実をどのように考えるかはやや時期尚早であるが、従来のような古墳へと発展してゆく身分関係を想定することは本遺跡をみるかぎり困難と言わざるを得ない。

3 円形周溝墓の規模

周防畑B遺跡の円形周溝墓が小型であることは以前からよく知られているが、本遺跡のものもほぼ同様～やや大きめ程度で直径7m前後のものがほとんどである。このことは隣接する聖川堤防地点等でもまったく同じであり、本遺跡周辺に分布する該期の円形周溝墓はみな小型で、特に際立った規模の差はみられないようである。二重の周溝をもつものについては別に述べるがそれとて規模としては差は認められない。つまりこの規模の差が少ないことが本遺跡の円形周溝墓の最大の特徴といえるように思う。

また、後述するが遺物からもほぼ同様なことが想定され、この円形周溝墓群の性格を示唆しているように受け取れる。

4 円形周溝墓の新旧関係

周溝どうしの切り合いを土質の差や土層断面の観察から判断することはできなかった。これは基本的に周溝の切り合いを避け、一方の周溝が埋まり切らないうちに次々と周溝を増設・接続させることによると考えた。したがって、より古く築造された円形周溝墓ほど完全な円形に近く、新しくなればなるほど接続に接続が重なって独自の周溝は少なくなり、結果的に整った円とは掛け離れた形態となる。

このような状況の中では特に整った周溝をもつものは古く、形態のくずれたものが新しくなるはずであり、詳細に周溝のあり方を観察すればほとんどすべての円形周溝墓の新旧関係を解明することも可能ではないかと思われた。しかし実際には崩落に伴う周溝の接続や埋まった周溝の掘り直しによる切り合い、さらには後述する円形周溝墓群内の区画(?)溝・調査区の制約等により、おおまかな新旧は判断できても実際にどのような順序で円形周溝墓が築造されていったかを復元することは困難な場合が多い。

それでも周溝の形態から以下のような状況が導けそうである。つまり、多くの場合整った円形周溝墓に接続する周溝は初めの円形周溝墓の北側に築造されるようである。これは周溝の南辺が内側に湾曲することから判断でき、その眼で円形周溝墓群をながめると湾曲部が明確なものはすべて南側がへこむ形態をとることがわかる。また1A区の堤防地点から得られた土器群に、やや古い様相を示すものが多いことも示唆的である。すなわち、円形周溝墓群は基本的に南から北に向かって広がった可能性が高いと思われる。

ただし次項で述べる溝の存在から、単純に南から順次北へ展開したか、異集団の点在状況から周囲に拡大したかは今のところ筆者の不勉強も手伝って判然としない。今後は周辺部での調査と出土土器等の再検討が絶対に必要となろう。また最北部の円形周溝墓SM225・226は墳丘内に2基の主体部をそなえており、その位置関係から追葬とは考えられず、墓域の制約から苦肉の策として、1つの墳丘内に2つの主体部を掘らざるを得なかったととらえるのは筆者の考えすぎだろうか。

さらに円形周溝墓群の北側には、SB211とした特異な土坑墓が位置していることも円形周溝墓群の展開と無関係ではないように思われるのだが、この点についても現状では、その関連について言及するための根拠を見いだしかねている。

5 円形周溝墓群内の溝

円形周溝墓群最北部とB区南端付近に、周溝とは別の直線的な溝が調査区を横断している。これらの溝は円形周溝墓と切り合うことはなく、円形周溝墓にもこの溝を利用する形で築造されているものが存在することから、円形周溝墓群形成と同時かあまり遅くない時期に掘られたと考えざるを得ない。

北端付近の溝はほぼ東西方向に走っており、墓域と集落とを分離するためのものと考えられることでもできそうであるが、もう一つの溝は墓域内を区画するものようで、もし区画のための溝だとすると最初に予想したとおり、この円形周溝墓群が調査区域外にもかなりの規模で広がっていることの傍証になりそうである。また区画の意味を考えるならば、家族・縁故者といった血縁的なまとまりが容易に想定され、その意味でもこれらの円形周溝墓が特殊な人々の墓ではあり得ないことを予感させるものである。

無論、区画のための溝ではなく本来的な通水や道路としての性格も考えられなくはないが、この溝を周溝の一部として利用している円形周溝墓の存在から、そのような機能・用途はあまり現実的でないように思われる。

6 ブリッジ（開口部）

調査区の制約から全体が知れる円形周溝墓が少ない上に、周溝を共有する場合がほとんどで、確定的なことは言えるはずもないが、1A区堤防地点では対面する2か所にブリッジをもつものが多いようにみえる以外、ブリッジの位置と個数は論ずること自体あまり意味があるとは思えない。

方形周溝墓等ではブリッジのあり方が時期差・地域差として現れるようであるが本遺跡では傾向としてやや古いものは対面する2か所にブリッジをもつものが多い程度で、それ以外にとくに際立った規則性のようなあり方は観察されない。むしろブリッジをもたない円形周溝墓がみられないことから推して、ブリッジ本来の機能である墓参・祭祀のための墓道確保の意味が強いと思われる。また逆に、この狭い調査区内に56基もの円形周溝墓が密集していることから、ブリッジなど確保したところで迷路のような墓道をたどることになり、周溝も主体部に想定される小規模な封土も構わずに踏み越えて行ったほうがよほど効率的とも思えてしまうのだが、さすがにそのような不心得者はこの時代には棲息していなかったとみえ、埋もれてしまった周溝の掘り直しの際にも以前と同じ位置にブリッジを設けている。

7 二重周溝

本遺跡内には4基の円形周溝墓に二重周溝が認められる。このうち明確に同心円状を呈するものは1基のみで、他の円形周溝墓では部分的であったり、重なってしまったりとあまり整然としたものではない。これらは当初から二重周溝として掘られたものではなく、埋まってしまった周溝を掘り直す際に当初の位置からズレたと考えたい。すると同心円状のものも初めから二重で設計されたのではなく、当初は一般的な周溝が掘ってあったところ、次第に埋もれてしまい、墓域に余裕がないため以前の周溝の内側に掘り直したというシナリオもなりたつ。

いずれにせよ当初からの二重周溝は本遺跡内では明確でない。

8 主体部

主体部は土坑と木棺痕跡から確認されるが後世の擾乱と調査上の制約から、明確に検出されかつ残存率の高いものはごく少ない。またこのことは封土の規模も多少影響していると思われる。検出された土坑・木棺はどれも似たような規模で、周溝に大きな規模の差がみられないことと同様にここでも階層（経済

方?)の違いを示すような例は明確でない。ただ木棺の代わりに土器棺を使用したと考えられる例が、SM226で検出されており、これを階層差ととらえられなくもないが、あまり賛成できない。

木棺の木口痕は他地域の円形・方形周溝墓ではかなり一般的にみられるようであるが、本遺跡では検出されなかった。唯一SM214の主体部で、片側だけの木口痕らしいものが検出されているが、反対側は何度検出を繰り返しても確認することはできなかった。したがってSM214も含め、本遺跡の木棺は棺の両端を地山に突き刺して固定するI型木棺ではなく、棺底部が平坦なII型木棺であると考えたい。このため棺痕跡は非常に不明確なのであるが、少数検出された例では棺の長さは150~180cmの範囲に納まり、とくに形態・規模等の差は見いだせない。

人骨は膝を強く曲げた形態をとるものがほとんどで屈葬と伸展葬の中間のような状況である。SB211の人骨も膝を曲げているが円形周溝墓のあり方とはやや異なる。このことについては別に述べることにしたい。人骨のほとんどは遺存状態が悪く、性別・年齢ともに断片的な鑑定結果しか得られていないが鑑定に堪えるものは10代から20代の若い人が目立つ。

9 埋葬頭位

頭骨あるいは四肢骨の位置から埋葬頭位が判明しているものは12例あり、そのうち8例が東を向いており、残りも北東あるいは南東で、大きくとらえればすべてが東方向となる。また人骨が検出されず土坑あるいは棺痕跡のみが確認されたもので、東西方向及びそれに近い方向に長軸をとるものは16例で、人骨が検出されたものと合計すると28例となる。55基の円形周溝墓のうち主体部が確認されているものは39基であるので、約72%が東あるいはそれに近い方向をとっていることになる。

また周溝内に埋葬された人骨や集落城南端付近の大型土坑墓で確認された人骨も、すべて頭部が東に向いた状態であり、この時代には死者の頭位を東に向けようとする意識が大勢をしめていたようである。しかしながら主体部の軸を南北に近い方向にとるものもかなりの割合に達しており、しかも円形周溝墓群の分布域の中央部から北部にかけて多く分布するように感ずるのは筆者の偏見だろうか。またSM101とSM110やSM201とSM207のように、新旧関係が明らかなもので主体部の軸が東西方向から南北方向に変化しているのは単なる偶然だろうか。どうやらこの時期における埋葬頭位のあり方は単純ではないように思われる。

10 遺物

主体部から検出される副葬品には、ガラス小玉、銅・鉄鋼、ミニチュア土器等がみられ、主体部付近から出土したとされる磨製石鏃もあるがやや信頼性に欠ける。当初、金属製装飾品や武器の出土をもっていわゆる支配的な人々を被葬者に想定することが本遺跡でも短絡的に行われていたように思う。しかしながら主体部の遺存状況とこれら副葬品との間に明らかな正の相関が認められ、単に残りのよい主体部ならば上記遺物は当然に検出される状況が明確になるにつれ、金属製品等に対する認識は大きく修正されるべき段階にさしかかっていると言えよう。

また玉類についても死者の口中にふくませた例が確認され、大陸の含玉と同様な風習が当時すでに信州にも存在していたらしいことが濃厚となった。考えてみれば装飾品としての玉類は首飾りにするにしても相当な数が必要となるはずで、綿密な調査にもかかわらずそれらが検出されないこと、あるいはごく少数の玉しか確認できないことは単に後世の擾乱によって散逸してしまったとか、調査方法上の不備とかで片づけられていた。しかし頭部付近から検出される玉類に単なる装飾品としてだけでなくさまざまな機能・用途を想定することも十分可能であり、今後その可能性の一つとして本遺跡の例が重要な意味をもつこ

とは疑いないところだと考えている。

主体部以外の墳丘・周溝の遺物は土器類が中心となるが、ほとんど周溝内からの出土と言ってよく、墳丘からの出土はまずあり得ない。これは当然と言えば当然の事から、墓前祭祀のための土器にせよ墳頂の土器にせよ年月を経れば必ず周溝内へと転落し、墳丘にはなにも残らないことになる。そしてそのことを証するように、周溝内から検出される土器類はほとんどが底部から浮いた状態で検出されており、相対する周溝から出土した土器が接合した例も確認されている。またいくつかの器種のセットが一括して検出される例もみられるが、これらは墓前祭で使用されたものが投棄されたか転落した結果と考えたい。

検出された器種は多様であるが、甕・台付甕等の煮沸形態がかなりの割合で含まれており、しかも表面にススの付着したものが少ない。また住居跡等ではあまりみられない小型の甕がしばしば検出され、これにもススが付いたものがみられる。高坏、鉢等が多いことも示唆的であり、よく言われるように墓前祭としての宴会に用いられた土器なのかもしれない。しかしながら土器そのものの数や器種に円形周溝墓ごとの差は見いだせず、一部の墓でのみ盛大な祭りが行われたような状況は検出されなかった。むしろ簡単に質素な祖先供養を思わせる遺物がほとんどだと言えよう。

11 周溝内埋葬

周溝内に直接埋葬されたり、土器棺に納められて墳丘・周溝に埋葬された例は不明確なものも含め、9例を数えることができる。土器棺に納められた人骨は幼児～子供とすると主体部に葬られた人物の子供あるいは子孫と考えたいが、周溝内に直葬された人骨はいかなる人物のものなのだろうか。家族墓としての性格をもつ周溝墓であるからには主体部の人物につながる縁故者に違いないが、今のところこの問題に対する答は出せそうにない。直葬された人骨も主体部とほとんど差のない副葬品を備えていることから大きな身分関係の隔たりは感じられず、逆に何故木棺に納められないかが気になる。

12 SB211

墓域としての円形周溝墓群の北側に位置するSB211は明らかに土坑墓で、集落と墓域との接点に位置しているとも言え、非常に特異な存在である。同様な性格が予想されるSB202はしばらくおくとして、SB211の際だった特徴は大量に出土した土器と炉の存在であろうか。円形周溝墓でもSM211やSM224のように少なくない量の土器をもつものもあるが、これらは周溝全体からの土器の合計であって、SB211のような1か所に集積したあり方ではない。土器の器種にそれほどの差があるとは思えないが甕及び甕の蓋がセットで出土しており、第2節2でもふれたようにきわめて日常的な土器が一括して供えられているという印象が強い。また炉の存在も非常に興味深い事実で、遺構の形態と規模から廃屋等を利用した墓の可能性は低く、墓に付属した炉ととらえるべきものと考えたい。葬送儀礼にかかわる炉の存在についてあまり知識をもちえないので判然としませんが、墓を掘った後死者を埋葬する前に形成された炉であるからには、「もがり」等の死後、埋葬されるまでの間に執り行われた儀式にかかわるものであることはかなり濃厚である。

円形周溝墓とほとんど差がない時期にもかかわらず、このような大きな葬制上の違いはどのような意味をもっていたのだろうか。また人骨は、円形周溝墓のそれよりもさらに伸展葬に近い状況で埋葬されており、出土土器の様相から単なる時期差とは思えず疑問は増すばかりである。

いずれにせよ、集団墓地としての円形周溝墓群に葬ることのできない人物の墓ということだろうか。今後類例の増加を待って再考したいものである。なお本跡を切るSK214は、明らかに追葬で本跡に葬られた人物と極めて親密な、たとえば夫婦のような関係が予想される。

瓦 塔

出土資料の検討

はじめに

今回の調査でSD315を中心に出土した瓦塔は破片数も比較的多く、残存部の割合が高いため、全体の形状、大きさが分かる貴重な資料である。全体形がおおよそ復元できるものとしては、塩尻市菰蒲窯跡の瓦塔に次いで県内では2例目となる。

資料はSD315埋土及びその上層を中心に瓦塔集中区としてとらえられている。SD315は浅い掘り込みであり、瓦塔を遺構や層位別に分類することはできないが、形態・焼成の特徴などから、大きく2種類に分類できる。この2種類の瓦塔を「瓦塔A」、「瓦塔B」とした。A、B2種に分けた根拠は以下の点である。

- ・初層軸部の形態・斗拱表現の違い。Aは軸部中央に斗拱と柱をもつ方二間であるのに対して、Bは方三間であること。Aは柱表現などの省略が多いこと。
- ・屋ではAが1軒であるのに対して、Bは2軒であること。
- ・いずれも土師質であるが、Bは概して焼きが良好で赤褐色を呈する。Aは黒色～暗褐色の破片が目立つ。
- ・Bの胎土に白色の粗い微石粒が目立つ。Aにはあまりみられない。
- ・全体的にみて、屋蓋の軒廻や軸部の斗拱表現などBの方が表現は詳細であるが、それぞれの部位の調整はAの方が丁寧な感じを与える。

以上のような共通した特徴をもとに破片をA、Bにまず分類し、それぞれを部位ごとに分類する方法をとった。なお、図化した資料は部位が明確に判明したものを中心としており、出土資料のすべてではない。また、本資料の中に「瓦堂」の特徴を示すものはない。

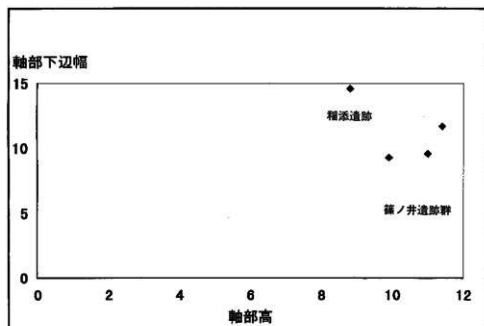
1 瓦塔A (第311～314・316図、PL84・85)

軸 部

1は基壇から軸部初層の全体形が分かる。基壇は二重で一辺28.0cmである。軸部の高さは32.2cmで方二間で四面に開口部をもつ。開口部横や軸部隅に柱表現はみられない。軸部中央、長押から台輪にかけてのみ柱表現がみられる。長押と基壇の開口部臨に軸ずりの穴を穿つ。軸部上部には長押及び台輪ないしは通肘木の突帯が巡る。大斗・墜付き三斗などは省略されている。軸部上部は屋根形の斜めの張り出しがつき、逆凸字状に張り出した手先三斗が、軸部中央に1つと四隅に表現される。四隅の手先三斗は先端が尖る。手先三斗の張り出しはうすく、厚さ5mm程である。調整はBの初層軸部に比べ丁寧な感じを与える。全体に丁寧なナデ調整がみられ、手先三斗などにヘラ状工具を当てた痕がある。また基壇内面に横方向のヘラケズリ痕がみられる。

2と3、4、5、6はそれぞれ、二層、三層、四層、五層の軸部である。これらをAの軸部とした根拠は、1の初層と同じく方二間であること。軸部上端の屋根形の張り出しや、逆凸字状の手先三斗など、斗

資 料	高さ	下辺幅
篠ノ井遺跡群三層目	11.4	11.7
同 四層目	11	9.6
同 五層目	9.9	9.3
長野市稲遺跡	8.8	14.6



第306図 軸部の法量

拱の表現に共通性がみられること。胎土が似ている点などである。大きさは二層の軸部高さ16.0cm、三層高さ11.4cm・下辺幅11.7cm、四層高さ11.0cm・下辺幅9.6cm、五層高さ約9.9cm・下辺幅9.3cmである。いずれも横幅と高さにそれほど差がなく、やや安定感にかけろがその分下辺幅を上端幅より長くしている。

また、軸部壁の厚さも下部ほど厚みがある。二層軸部は四隅に1か所、五層軸部は軸部中央に1か所、斗拱の欠損した痕がみられる。いずれも、三・四層同様の屋根形の斜めの張り出しに、逆凸字状の手先三斗が表現されると思われる。いずれの軸部にも外面にヘラ状工具でナデたような擦痕がみられ、内面に横方向のヘラケズリ痕を残す。調整の点からも初層軸部と共通性が認められる。7は軸部四隅の破片で形状・大きさからみて、おそらく二層の角にあたる部分であろう。8も軸部四隅の斗拱部分である。壁がうすく持ちおくりの段が明確でないことから五層の斗拱であろう。9は軸部中央につく斗拱部分で形状からして四層のものと思われる。

屋 蓋 部

Aの屋蓋は丸瓦を半截竹管状工具の引き出し、軒廻は一軒で、垂木はケズリ出しという共通の特徴をもつ。丸瓦の幅は0.6~0.7cmとほぼ一定である。垂木は軒先ほど高く、奥にいくほど低くなり幅もやや広がる。垂木の幅は0.9~1.5cm、長さは3.0~4.5cmである。調整は降棟や地覆などは比較的丁寧にナデが行われている。裏側は垂木の成形痕など全体的に粗いケズリ痕が目立つ。また、隅木先端の残るものには風鏝孔がある。

このように共通の特徴をもつAの瓦塔を主に、地覆の一辺の長さ、瓦継目の数、軒先端部から地覆までの瓦の長さの3点が手がかりにして各層に分類した。

	図版番号	瓦継目数	丸瓦長さ	地覆一辺長さ
瓦塔A初層	13~15、17~19	2つ	8.0cm以上	?
瓦塔A二層	16	2つ	6.0~7.0cm	13cm
瓦塔A三層か四層	7~12、21、26	1つ	7.0cm前後	10cm前後
瓦塔A五層	20、32	1つ	5.5cm	露盤あり
瓦塔B	29	3つ	8.5~9.5cm	12.5cm

第307図 屋蓋の分類

まず、10は露盤が作られていることから五層であると考えられる。五層の瓦の継目は軒先端から2.0~2.3cmのところに1つ施される。また、瓦部分の長さは5.5cmと最も短い。次に11は二層と判断した。軸部が収まる地覆内側の一辺の長さが約13cmを計ることから、軸部の下辺幅を考えると11.7cmの三層軸部が最も最適と思われる。二層軸部の下辺幅は明確には不明であるが、その高さを考えると下辺幅は15cm前後はあると思われるので11では収まらない。四層軸部の下辺幅は9.6cmであるので軸部の方が小さすぎる。二層(11)の瓦の継目数は2つで、軒先から約0.8cmと約3.8cmのところに刻まれる。もう1つ地覆の規模が分かるものに12がある。中央の円孔の大きさから地覆の一辺の幅は10cm前後になると考えられる。

軸部の下辺幅から判断すると四層か五層軸部が収まると思われる。よって、12は三層ないしは四層の屋蓋であろう。12と接合する他の破片はないが、継目が軒先から2.5~3.0cm付近に1つ刻まれること、瓦の長さが7.0cm前後であることなどから、13~17も三層ないしは四層の屋蓋に属する破片と思われる。残るは初層であるが、18~20、21~23が初層屋蓋の破片であると判断した。主な根拠は、瓦の継目が2つであることと、瓦部分の長さが8.0cm(18)あり、軒先端から2つ目の継目の長さも4.5~5.5cmと二層に比べて長いことなどである。また、屋蓋全体の反りも小さくやや平坦である。

以上のことを表を使ってまとめてみた。瓦の継目は初層と二層が2つ。三層目以上は1つである。また、瓦部分の長さも下層ほど大きくなる傾向にある。軸部ほど明瞭ではないが、屋蓋についても五重塔であることが推定できた。

相輪部

水標と九輪の一部が出土している。胎土や焼成などから全てAとした。電車、宝珠、伏鉢、受花は確認されなかった。30~34は九輪である。上端部に平坦面を作り全体に丁寧に横ナデされる。27~29は水標で27、28は下端隅の破片である。

瓦塔Aについてはそれぞれの部位の規模・形状が分かるため、全体形を推定し復元してみた。まず高さであるが、五層の軸部の高さの合計が80.5cmである。屋蓋の高さ、相輪を入れても1m前後とかなり小さな瓦塔となる。また、初層に比べて二層以上の軸部が極端に小さくなり、やや安定感に欠けるつくりである。

2 瓦塔B(第314~316図、PL85)

軸部

初層軸部の上半分(35、36)と基壇部分(37、38)、軸部四隅(39)がある。35は、これらから初層を図上復元したものである。基壇幅及び軸部高は推定である。軸部上端幅17cmを計る。

残存部の割合が高く初層の規模、斗拱の表現方法などが分かる。基壇は二重で開口部を四面にもつ。A類と異なり方三間で四隅に柱の突帯がつく。斗拱は軸部上端の四隅と中央に2つつく。横方向の突帯は下

から軸ずりの穴があく内法長押、台輪、通肘木が巡る。通肘木の突起状の出っ張りは大斗の表現であろう。軸部上端には逆凸字状の粘土帯が二段作り出されるが、これは壁付き三斗を作したものだと思われる。切り出しの際の工具の切り込み痕が明瞭に残る。大斗上に段階上の持ち送り部をつけ手先の三斗を作り出そうとしている。この持ち送りも大斗同様突起状にかなり突き出ており、多くは先端部を欠損している。なお、初層を上からみるとAに比べてやや丸みを帯びている。

屋蓋部

40はほぼ全体の大きさが推定できる屋蓋であるが、Bは他に屋蓋がほとんどないため何層目かは不明である。瓦は半截竹管状工具で引き出される。Aと異なり継目を3つ刻む。瓦の幅もやや狭い。四隅の降棟・隅木が先端部で突起状に尖る。軒廻は二軒で垂木の幅は1.3~1.8とAに比べやや大きい。降棟がやや歪んだり垂木のケズリ出しのあとを明瞭に残すなど、調整は全体的に雑な感じを与える。隅木先端に横方向の風鐸孔がなく、裏側の隅木先端部に風鐸孔を模倣したと思われる縦方向の穴がみられる。

この風鐸孔や初層軸部の大斗などの斗拱表現からAに比べBの方が実際の塔を細部まで模倣しようとしているが、表現が大胆で、調整も全体的に丁寧さに欠ける。34も屋蓋の一部である。地覆の角の部分である。地覆から中央円孔までの距離が1.6cmと非常に小さいので33よりは上層の屋蓋の一部であろう。41は屋蓋四隅の先端部である。隅木、降棟ともに先端部で大きく上方向に曲がる。隅木は42に比べ幅が小さく高さ2.0cmと高い。また、風鐸孔が横方向に穿たれる。

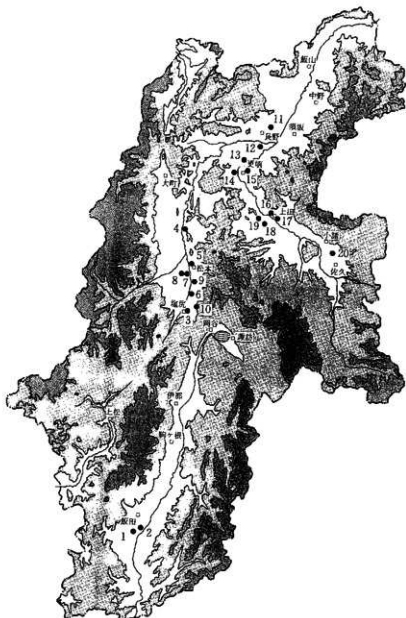
長野県内の瓦塔と篠ノ井遺跡群資料の位置

第308図のように現在のところ長野県内では20地点で瓦塔が確認されている。1985年の林和男氏の集成以前は表探資料も多かったが、近年の出土例はすべて発掘調査によるものである。また、吾瀧沢窯跡を除くとすべて奈良・平安時代の集落遺跡から出土したものである点も共通している。こうした近年増加した集落遺跡からの出土資料との比較から、篠ノ井遺跡群の形態的な特徴や時間的な位置づけについて考えたい。

まず、焼成であるが篠ノ井資料はすべて土師質である。瓦塔の焼成については以前触れたことがある。その際、土師質の瓦塔については、須恵器窯跡によらない土坑状の施設での焼成の可能性について指摘し、土師質・須恵器の識別は色調を基準とすべきであるとした⁹⁾。褐色から淡褐色を呈するものはすべて土師質とすると、県内の集落遺跡出土の瓦塔については篠ノ井資料と同じく土師質がほとんどを占める。篠ノ井資料で注目すべき点は瓦塔Aに黒色から暗褐色の破片が目立つ点である。とくに四層目軸部(5)などはほぼ軸部全体が黒色である。焼成の際に黒色に変化したものと思われるが、このような破片でも他の部位とともに一つの瓦塔として組み立てられたことが分かる。

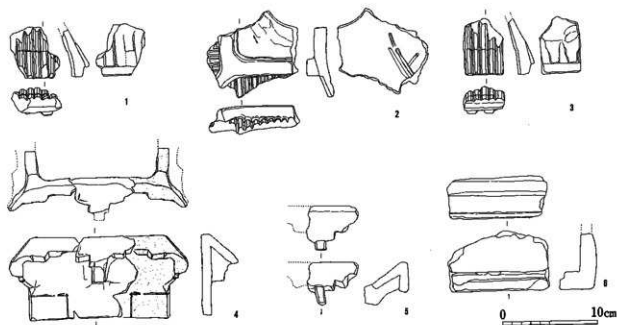
次に屋蓋の形態であるが、篠ノ井資料についてはA、B2種類の屋蓋がある。A、Bともに瓦部分を半截竹管状工具による引き出しによるもので、軒廻がAは一軒、Bは二軒である。近年の集落遺跡出土例は瓦塔Aと同じ特徴をもつものが多い。稲添、岳の鼻、高綱中学校、平田本郷の各遺跡から屋蓋の破片が出土しているが、いずれも土師質、瓦部分を半截竹管状工具の引き出し、一軒で垂木はケズリ出しという共通の特徴をもつ。

軸部は屋蓋に比べ出土例が限られるため、比較する資料が少ない。瓦塔Aの軸部は上端に屋根形の張り出しをもち、四隅と一辺の中央部に斗拱を造り出しているが、同じような特徴をもつものに長野市徳間の稲添遺跡資料がある。稲添資料は高さに比べ下辺幅が大きく全体が横長であるが、軸部上端の斜めの張り



番号	遺跡(地点)名	所在地	出土地点	焼成
1	前林庵寺遺跡	飯田市 竜丘	表採	土師質・須恵質
2	御村山遺跡	飯田市 毛賀	3、5号住・建物址Ⅲ(中世)	土師質・須恵質
3	大門遺跡	塩尻市 大門	方形の土屋状の遺構?	須恵質
4	明科原寺遺跡	明科町 明科	遺構外	土師質・須恵質
5	城山藤遺跡	松本市 鳴ヶ崎	表採	土師質
⑥	吉田川西遺跡	塩尻市 吉田	遺構外	土師質
⑦	北栗遺跡	松本市 鳥立	SB97・遺構外	土師質
⑧	高綱中学校遺跡	松本市 鳥立	1号住	土師質
⑨	平田本陣遺跡	松本市 芳川	住居(19-20-22-81-83-87号)・溝(1-3号)	土師質
⑩	高瀬沢原跡	塩尻市 片丘	竈跡・竪穴住居跡	土師質・須恵質
⑪	稲添遺跡	長野市 稲田	10号溝・P1・遺構外	土師質
⑫	田牧原橋遺跡	長野市 田牧	4号住・5号溝	土師質・須恵質
⑬	篠ノ井遺跡群・新幹線地点	長野市 塩崎	SD301	土師質
14	青木遺跡	更埴市 八幡	表採	須恵質
⑮	屋代遺跡群・高瀬沢地点	更埴市 雨宮	井戸(中世)・遺構外	土師質
16	廣白遺跡	上田市 常盤	表採	須恵質
17	付園国分寺遺跡	上田市 国分	遺構外(塔跡東築地付近)	土師質
18	塚ノ口一遺跡	上田市 平塚	表採	須恵質
⑰	岳の鼻遺跡	上田市 下室賀	A1号溝・遺構外	土師質
20	長上呂遺跡群・菅原遺跡	佐久市 長上呂	未発表資料	土師質

第308図 長野県内の瓦塔出土遺跡



第309図 稻添遺跡の瓦塔

出しを階段状に切り出し、手先の三斗と尾垂木を一体化して表現している点など共通点も多い。

一方、瓦塔Bの初層軸部にみられる逆凸字状の壁付き三斗の表現であるが、松本市芳川の平田本郷遺跡資料に共通する特徴がみられる。篠ノ井資料は壁付きの粘土帯を二段巡らす、平田本郷のものは一段のものや二段のものがある。いずれも、切り出しの際の工具の線刻が残る。また、軸部全体を上部からみたとし丸みを帯びる点も共通している。

以上、篠ノ井遺跡群資料を県内の集落遺跡出土の瓦塔と比較してきたが、ここで、篠ノ井資料の時間的な位置についてまとめておきたい。

瓦塔Aについては、平田本郷遺跡、高網中学校遺跡など、屋蓋が土師質で半截竹管状工具による瓦表現一軒のものについては9世紀代に属するものが多いこと、大斗、壁付き三斗、柱の表現などが省略されており、高崎光司氏の瓦塔の編年に当てはめるとⅢ期以降（9世紀代）の特徴をもつことから9世紀代に属するものと考えられる。明確に共存する土器がないため、それ以上細かい時期を推定するのは困難である。

瓦塔Bであるが屋蓋では瓦の継目も多く、二軒であること。初層軸部の斗拱や柱表現はA類より詳しいことなど、表現の変化（簡略化）という点からみるとAより先行するとも考えられるが、調整の点からみるとAほど丁寧ではなく、大斗を極端に尖らせたり、風鐸孔の位置が違うなど表現の仕方もやや雑である。高崎光司氏も指摘しているように⁴¹⁾、瓦塔は「製作者が実在する塔の建築意匠を常に製品に取り入れることが可能」であるため、単に模倣の度合いや建築表現を追うだけでは、その変化をとらえることはできず、製作技法や調整の仕方の検討も必要となる。BがAと同じ地点から出土していることから、瓦塔Bと瓦塔Aにはそれほど大きな時期差はないと考えたい。

瓦塔と集落内の祭祀

篠ノ井遺跡群の瓦塔は県内の集落遺跡から出土したものとしては量的に最も多い。また、明らかに形態の異なる二種類の瓦塔が同じ集中区で確認されている点や、調査区から銅碗の破片や埴仏が出土している

点など、瓦塔を含めた集落内での祭祀を考える上で大変貴重な資料である。

埴仏の時間的な位置や瓦塔との関係がいま一つ明確でないことなど検討すべき課題も多いが、現時点で瓦塔をめぐる集落内の祭祀について、本遺跡の資料が提起する問題について2、3触れてみたい。

1 SE304の埴仏（第316図、PL85）

得られた埴仏は光背の状況から阿彌陀三尊を表現したものの断片と思われ、残存部分は向かって左側の脇侍、勢至菩薩である。全体に丁寧な細工が施されており、天衣の形状や蓮台等も優美な造りとなっている。胎土は精選されたものを用いており、やや固く練った粘土を型に押し込んだ痕跡が裏面に指頭圧痕となって残っている。焼成は中程度でとくに良好という程ではない。

本個体は蓮台の形態から一基三尊形式かと思われる。

2 埴仏と瓦塔

埴仏は中世の井戸跡から検出され、その時間的な位置が定かでないことから、瓦塔との関係についても不明な点が多い。ここでは、先学の研究を参考にしながら本遺跡の瓦塔と埴仏について問題点を整理するにとどめたい。

瓦塔と埴仏については大脇潔氏の論考がある⁹³。大脇氏は富山県石名田木舟遺跡から出土した、瓦塔初層の壁面にまつられた三尊像が埴仏と同様の技法で造られたものであることに注目し、この資料の観察と他の類例から瓦塔初層に様々な方法で仏像を表現することが決して特殊な例ではなく、東海・北陸地方以西ではかなり普遍的なものであったことを明らかにした。

篠ノ井遺跡群の瓦塔と埴仏を観察すると、瓦塔の初層軸部に仏像片を表した痕跡はない。瓦塔と埴仏の胎土が全く異なることから、これらが別個体であることは間違いないであろう。本遺跡群の場合は、瓦塔初層壁面に直接仏像をまつることはなかったと考えられる。

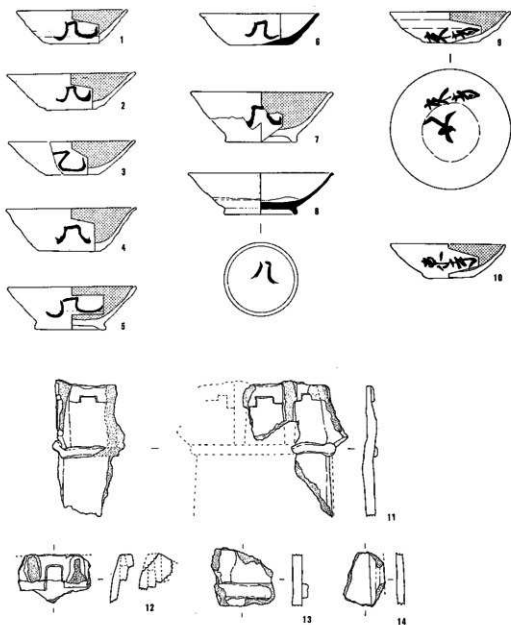
高崎光司氏は、瓦塔が野子的な機能を有し、初層内部に仏教的な宝器を納めた場合もあったのではないかと指摘している⁹⁴。本遺跡群の瓦塔と埴仏が同時期に存在したとすれば、瓦塔初層内部に埴仏を納めた可能性もあるが想像の域を出ない。

3 銅椀と瓦塔

つぎに、銅椀と瓦塔が同じ地点から出土した点である。出土状況から銅椀と瓦塔が同時に廃棄された可能性が高い。銅椀については原明芳氏が県内の資料を集成し、銅椀の受容とその背景について詳しく論じている⁹⁵。原によれば9世紀後半以降、銅椀は前段階の高級食器としての地位を失い、仏具としての性格をもつようになったとされる。また、瓦塔や「寺」名を記した墨書土器など、この時期、仏教に関連する遺物が集落遺跡から出土する点に注目し、集落への仏教の浸透について触れている。

県内において瓦塔と銅椀が同一地点から出土した例は篠ノ井遺跡群が初めてであるが、瓦塔と仏教関連の遺物が同一集落から検出される例は、松本市平田本郷遺跡においても認められる⁹⁶。同遺跡では瓦塔と同じ7期の遺構から「寺」「東寺」の墨書土器が出土しており、また、同時期の9、18号住居跡（7～8期）から則天文字風の「几」墨書土器、43号住居跡（8期）から鉄製の鉢が検出されている。墨書土器については出土地点も瓦塔に接近している。このような篠ノ井遺跡群や平田本郷の出土例から、瓦塔が単独でまつられず、墨書土器や銅椀とともに何らかの「仏教的なまつり」に使われる場合があったと考えられる。

こうした瓦塔や銅椀を中心とした仏教信仰の性格についても、原氏の考え方が参考となる。原氏はこの



第310図 平田本郷遺跡の墨書土器と瓦塔（9号住居1～8、24号住居9、23号土坑10） 1：4

時期の集落内の仏教の特徴として、「財富加」「財集」などの墨書土器にみられるように、現世的利益をもとめる呪術的色彩が強とし、銅椀についても現世利益を得るための呪術の道具（仏具）の一つであったとしている。そして、その所有についても出土量の少なから、集落の祭りを司る有力者層の可能性が高く体系的な仏教信仰に用いられたというより、集落内の仏教呪術のシンボリック的な用具として用いられたのではないかとしている。

瓦塔はその形から「小建築」として、集落内の一角に、あるいは仏堂のような建物の中になりに長期間にわたって建っている姿を想像しがちであるが、集落遺跡の瓦塔についてもこうした仏教呪術のシンボリック的な用具の一つとしてとらえ直せないだろうか。小建築物として組み立てられ、まつられたことは間違いないであろうが、その道具としての役割が終われば籬ノ井遺跡群の例が示すように、銅椀などとともに廃棄される場合もあったと考えたい。そして、このような集落における瓦塔や銅椀を中心とする仏教呪術の活発化が、高崎氏の編年のⅢ期以降の瓦塔の省略化・量産化を生み出したのではないかとと思われる。

まとめ

以上、篠ノ井遺跡群の瓦塔について検討してきたが、今後の瓦塔研究において多くの手がかりを与えてくれる資料であり、今回の検討で判明したこと、課題として残ったことについて簡単にまとめておきたい。

- ① 長野県内の集落遺跡において初めて、およそ全体形を復元できる瓦塔である点。近年、長野市稲添遺跡、松本市平田本郷遺跡など、県内の集落遺跡から瓦塔の出土が増加していたが、土師質である点、半截竹管状工具による瓦表現、軸部の屋根形の張り出しなど他の集落遺跡資料との共通点のみえてきた。集落遺跡においては相輪部の出土は初めてであり、県内の瓦塔の形態や製作技法、それらの時期的な変化を考える上で一つの典型的な資料となった。
- ② 今回は詳しく触れられなかったが、二種類の瓦塔が発見され、それぞれが焼成、胎土、製法技法に共通点が見られる点。消費地から出土する瓦塔についても、瓦塔の製作技法の変化や焼成場所など、瓦塔の生産にかかわる問題について多くの手がかりを与えることを示している。また、瓦塔の色調の問題について少し触れたが、瓦塔Aは異なる色調の部位でも、一つの瓦塔として組み立てられていたことが明らかになった。瓦塔の色調や須恵質か土師質かの焼成の違いは、瓦塔の量産化とも絡み、その性格や用途に及ぶ重要な問題であると考えている。
- ③ 瓦塔が銅椀や埴仏などの他の仏教的遺物とともに発見された点。埴仏については再検討が必要であるが、瓦塔が単独ではなく銅椀などとともに集落内の仏教的な祭祀に使われた可能性を示している。ただし、祭祀の具体的なあり方やいわゆる「村落内寺院」のような施設が存在したのかどうかは不明である。ここでは、瓦塔をめぐる祭祀のあり方について、従来の小建築物としての見方に加え、仏教的な呪術の道具（仏具）としての役割についても言及した。瓦塔の性格や用途にも時代や地域による違いがみられるのではないと思われる。今後、須恵質瓦塔から土師質瓦塔への変化など生産の問題とも絡めながら、瓦塔をめぐる祭祀のあり方についてさらに検討していきたい。

最後になりましたが、篠ノ井遺跡群の資料全般について高崎光司氏から貴重な助言・指導をいただきました。記して感謝申し上げます。

注・参考文献

- (1) 林 和男 1985年「信濃の瓦塔」『信濃』37-4
- (2) 出河裕典 1995年「信濃の瓦塔再考—近年の出土例を中心として—」『信濃』47-4
1996年「瓦塔の生産—塩尻市葛瀬沢窯跡の資料の検討を通して—」
『長野県の考古学』朝長野県埋蔵文化財センター研究論集I
- (3) 出河裕典 1992年「稲添遺跡出土の瓦塔について」『浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡 本権遺跡 柳田遺跡 稲添遺跡』
- (4) 高崎光司 1989年「瓦塔小考」『考古学雑誌』73-3
- (5) 大藤 潔 1995年「瓦塔にまつられた仏像」『富山県福岡町石名田船木遺跡発掘調査報告書』福岡町教育委員会
- (6) 長野県内では飯田市竜丘前麻生寺で瓦塔の破片とともに、鎌削で高さ20cm程の仏像を表した須恵質の板状断片が発見

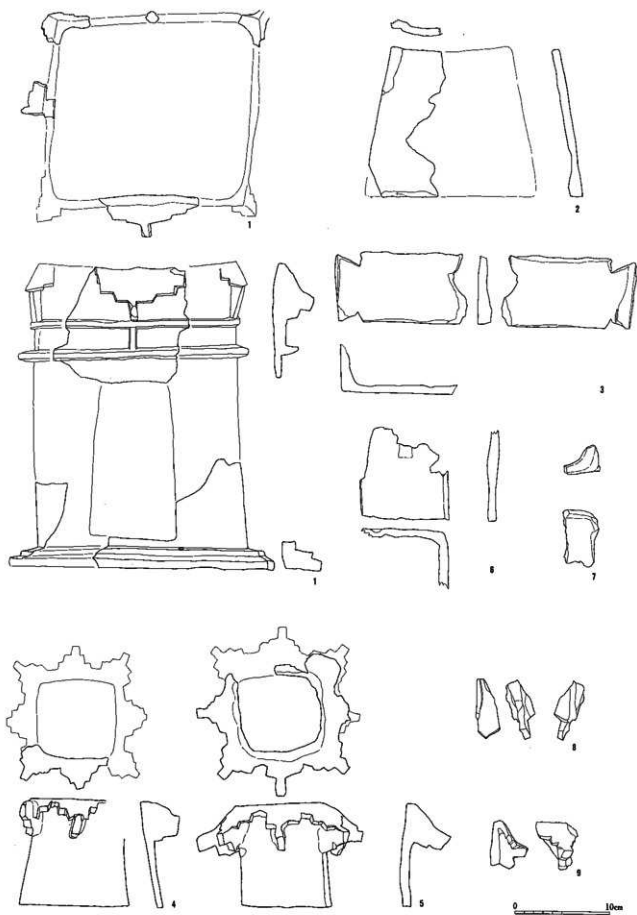
されている。(渡部真司・渡部藤麻呂1984年「伊那谷南部における初期仏教文化とその歴史的背景」『長野県考古学会誌』49号) 前掲注(5)で大脇氏はこれも瓦塔の内障に仏像を表現した例として取り上げている。

(7) 前掲注(4)

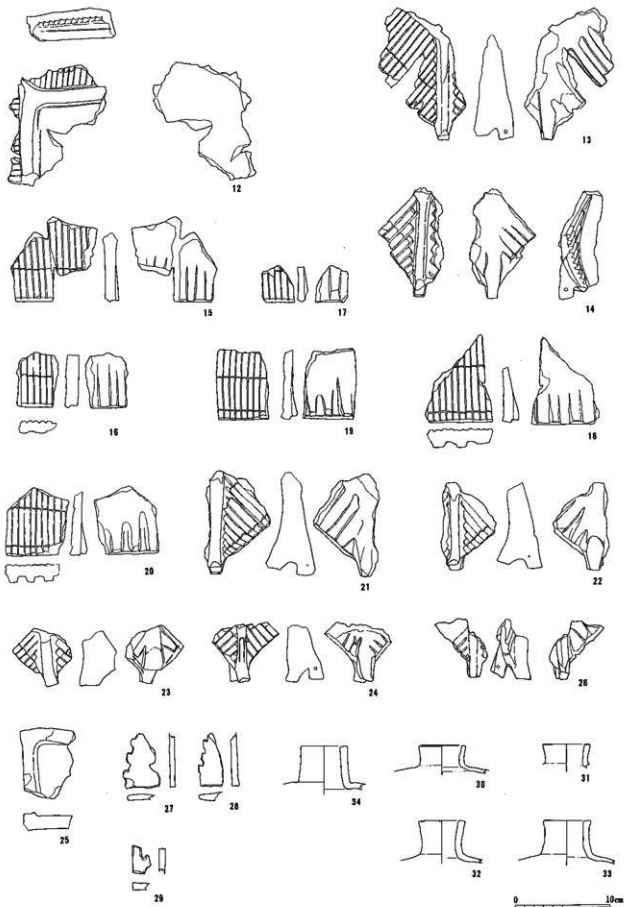
(8) 原 明芳 1986年「銅鏡考—長野県の奈良・平安時代を中心として—」『長野県の考古学』(財)長野県歴史文化財センター研究論集Ⅰ

(9) 松本市教育委員会 1994年『平田本郷遺跡』

(10) 高崎光司氏はⅢ期(9世紀)以降の瓦塔の製作技法の省略化に注目し、瓦塔の量産化の結果ではないかとした。(前掲注4)Ⅲ期以降の土師質瓦塔の増加も、埼玉原鳩山窯跡群柳原A瓦塔焼成土坑にみられるような、専用の焼成遺構の出現のためではないかと思われる。このことは、わざわざ須恵器の窯を構築しなくても瓦塔の生産が行われるようになったことを意味し、Ⅲ期以降の瓦塔の量産化は焼成方法の変化からも裏づけられる。



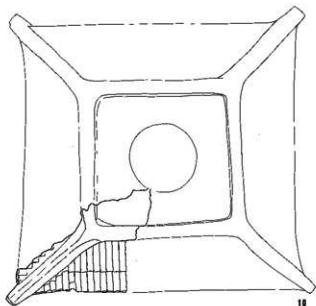
第311图 瓦塔A(1)



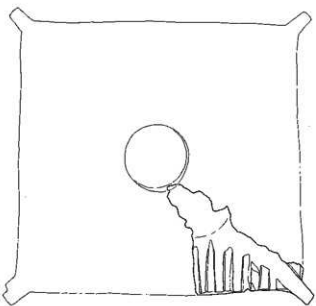
第312図 瓦塔A(2)



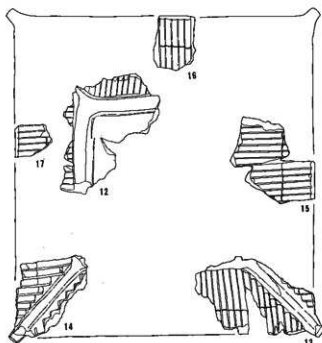
10



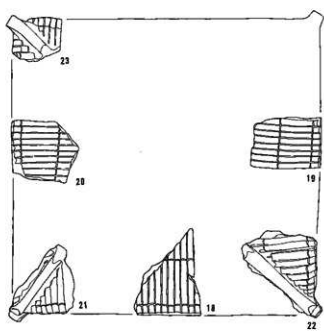
18



19

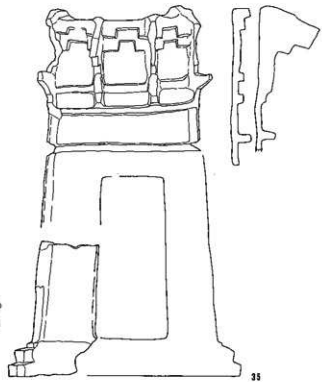
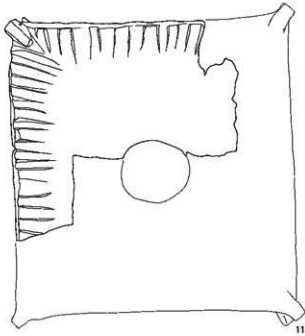
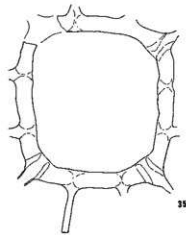
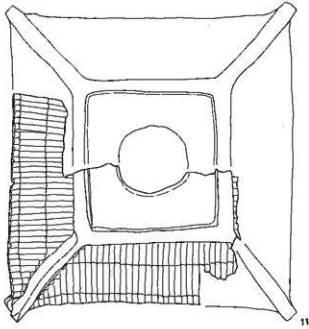
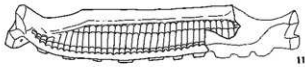


11



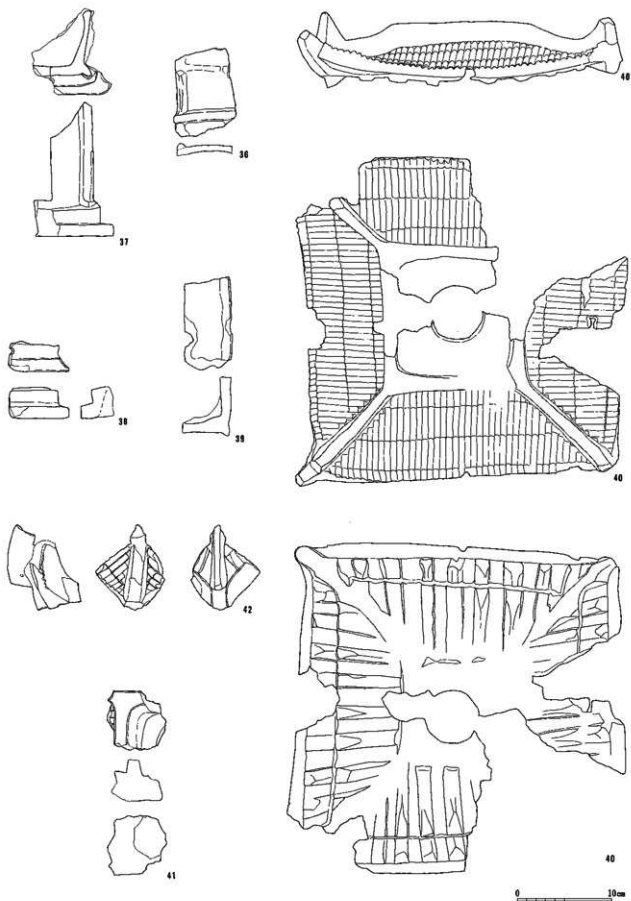
0 10cm

第313圖 瓦塔A(3)

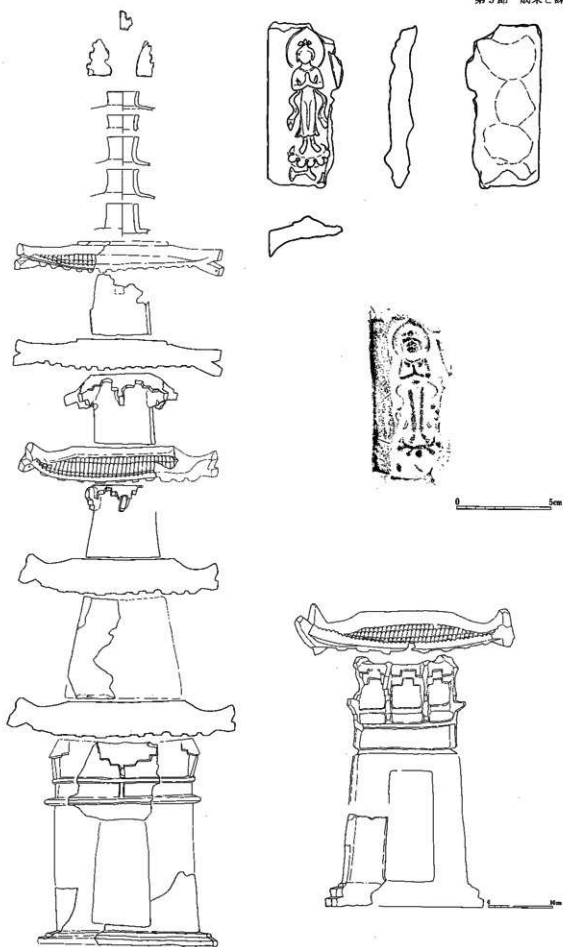


0 10cm

第314図 瓦塔A(4)・B(1)



第315図 瓦塔B(2)



第316圖 瓦塔・佛

第3章 石川糸里遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

長野市南部の篠ノ井から更埴市稲荷山にかけての地域は、千曲川によって形成された、長野県内では有数の広大な氾濫原が広がり、地元で「えぐみ」と称される肥沃な土壌が分布している。この地域は古くから水田として利用されているが、条里型地割りが認められることも知られており、小字名等にも地割りに関するものが数多く残されている。これらの状況は千曲川右岸の更埴糸里遺跡とともに早くから注目されていた。

長野市教育委員会（以下、市教委）は昭和57年度から今日に至るまでこの地域で広範囲に発掘調査を行い、現在の水田の下に埋没した古代・中世の水田跡を数多く検出している。そして一連の調査の中で、砂によって被覆された平安時代の水田跡の状況や条里型地割りの広がり等を解明するなど、多大な成果を納めている。また、同教委が実施した本遺跡二つ柳地籍のプラント・オパール分析によって平安水田よりもさらに下層に弥生時代の水田跡が存在することも確認されていた。

これらの成果をもとに昭和63年から当センターが実施した高速道路建設に伴う発掘調査では、平安水田跡のほか弥生時代中期・後期、古墳時代前期の水田跡が確認され、さらに微高地からは集落跡及び「もがり」施設と思われる大規模な祭祀遺構等も検出され、大畠平野や大和盆地の諸遺跡にも比肩しうる大遺跡であることが明らかになった。

今回報告する新幹線地点は遺跡の東端部分にあたり、南は篠ノ井遺跡群、西は横田遺跡群に接している。この地域も市道改修等に伴い、市教委によって洪水砂に覆われた平安時代の水田跡が確認されていた。

2 調査の概要

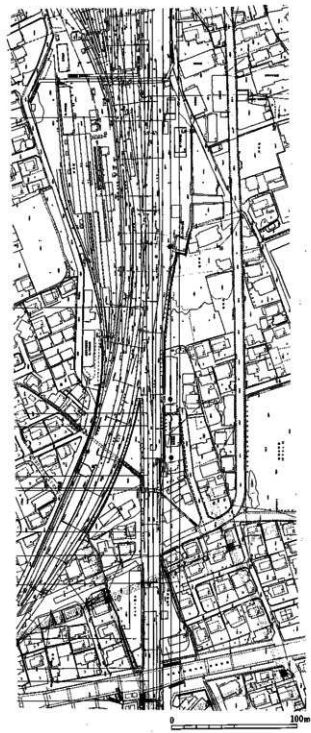
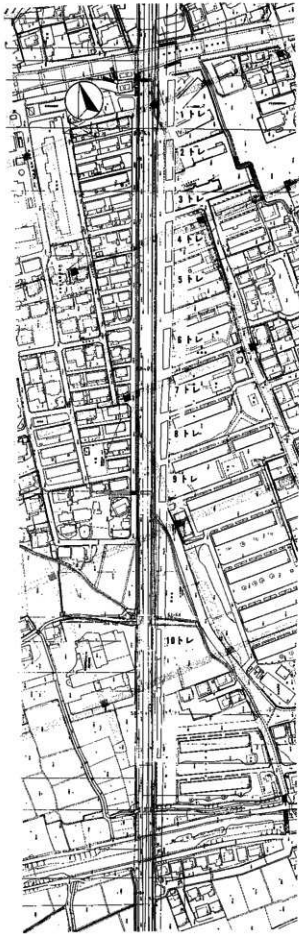
(1) 調査範囲と調査方法

JR篠ノ井駅付近では北陸新幹線が在来の旧信越線（現しなの鉄道）に平行して走るため、調査範囲は狭く、また市街地と重なるため、面的な調査は不可能であった。このためやや広めのトレンチによる、試掘とはは同様な調査形態をとりながら、水田の広がる範囲の確定に努めた。また、新幹線が在来線と重なる部分では可能な限り工事の立ち会いを実施し、古水田の存否を確かめた。

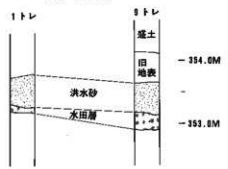
実際にトレンチを入れた範囲は第318図に示すとおりである。



第317図 石川糸里遺跡の位置



網羅：推定呼称

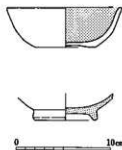


第318図 調査範囲

(2) 調査の経過と概要

調査は隣接する篠ノ井遺跡の調査の合間を縫って行われ、平成6年度は約3,500㎡を調査した。地点はみこと川団地のアパート跡地で宅地造成以前は水田である。この地域には厚さ2mもの砕石が盛られていたため掘削深は3m以上になり、崩落防止のため安全勾配を保つと検出面はわずかな幅しか残らなかった。造成前の水田下約30cmで中・近世の水田層、約1m下で9世紀後半とされる洪水砂に覆われた水田面及び畦畔が検出された。それ以下も掘削を続けたが水田層並びに遺構は確認されなかった。平安水田は黒色土器（洪水砂層）と灰釉陶器（田面）を伴っていたが、中・近世の水田からは遺物は検出されず明確な時期決定は困難であった。

続く平成7年度は6年度調査範囲の南側を調査し、同様の畦畔が検出された。また県道長野・信州新線を越えた北側については工事立ち会い調査を実施した結果、洪水砂が薄くなり、やや明確ではなくなるものの、JR篠ノ井駅南側までは確実に平安水田が広がっていることを確認した。



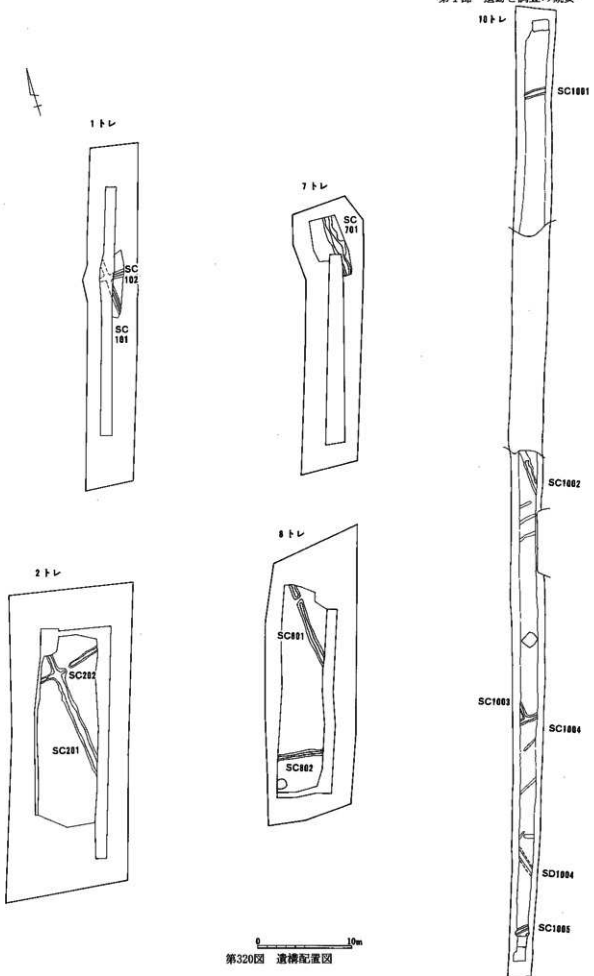
第319図 出土土器

第2節 遺 構

平安水田 調査地点並びに検出された畦畔は第320図に示すとおりである。

- SC101** 第1トレンチにて検出。基底幅約0.6m、上面幅約0.2m、田面からの高さ0.15m。
N-5°-W方向に延び、調査区域内では約2.5m。SC102と直交すると思われるが接続部分は調査区域外。
- SC102** 第1トレンチにて検出。基底幅約0.6m、上面幅約0.2m、田面からの高さ0.15m。
N-85°-E方向に延び、調査区域内では約1m。SC101と直交すると思われるが接続部分は調査区域外。
- SC201** 第2トレンチにて検出。基底幅約1m、上面幅約0.5m、田面からの高さ0.25m。
N-6°-W方向に延び、調査区域内では約14m。SC202と直交するが、特に施設等はみられない。長野市教委による推定環境に合致。
- SC202** 第2トレンチにて検出。基底幅約0.6m、上面幅約0.3m、田面からの高さ0.15m。
N-84°-E方向に延び、調査区域内では約7m。SC201と直交した接続部分の前後に水口を1か所ずつ備える。
- SC701** 第7トレンチにて検出。基底幅0.8~1.4m、上面幅0.3~0.7m、田面からの高さ0.2m。
N-6°-W方向に延び、調査区域内では約7m。やや不整型である。
- SC801** 第8トレンチにて検出。基底幅約0.7m、上面幅0.35m、田面からの高さ0.15m。
N-6°-W方向に延び、調査区域内では約10m。水口を1か所備え、水流は西→東であるSC802と接続するかは微妙。

第1節 遺跡と調査の概要



第320図 遺構配置図

- SC802 第8トレンチにて検出。基底幅約0.7m、上面幅0.35m、田面からの高さ0.15m。
N-80°-E方向に延び、調査区域内では約5m。SC801と直交するかは微妙。
- SC1001 第10トレンチにて検出。基底幅約0.7m、上面幅0.4m、田面からの高さ0.15m。
N-87°-E方向に延び、調査区域内では約2m。
- SC1002 第10トレンチにて検出。基底幅約0.7m、上面幅0.3m、田面からの高さ0.15m。
N-5°-W方向に延び、調査区域内では約4.5m。
- SC1003 第10トレンチにて検出。基底幅約0.65m、上面幅0.3m、田面からの高さ0.1m。
N-5°-W方向に延び、調査区域内では約1.5m。SC1004と直交。
- SC1004 第10トレンチにて検出。基底幅約0.65m、上面幅0.3m、田面からの高さ0.1m。
N-85°-E方向に延び、調査区域内では約2m。SC1003と直交。
- SC1005 第10トレンチにて検出。基底幅約0.6m、上面幅0.3m、田面からの高さ0.1m。N-80°-E方向に延び、調査区域内では約1.5m。
- SD1004 第10トレンチにて検出。基底幅約0.25m、上面幅0.7m、N-10°-W方向に延び、調査区域内では約2.5m。中世あたりの溝と考えられ、セクションには洪水砂層を掘り込む状況が明確であった。田面ではその底部を検出したにすぎず遺物もみられなかった。

第3節 成果と課題

今回の調査では、それ以前に長野市教委が推定していた大畦畔（坪境）のうち、東西方向に走るものが予想通り発見されるか大いに期待をもたれていた。ところが実際に発掘してみると、推定されていた部分はすでに攪乱を受けており、大畦畔は不明のまま終了せざるを得ない結果となった。

しかし、調査区東側に位置する市教委調査部分で確認された小畦畔は、今回の調査でもその延長線上に検出され、坪内が東西方向の小畦畔で区画されている状況が明らかになった。また南北方向の畦畔は、市教委による調査結果を総合すると、明らかに一定間隔で存在しており、その間隔の規模から坪内部は、半折型の区画で分割されていたらしいことも判明しつつある。

さらに糸里水田の広がりについても新知見を示すことができた。すなわち、それまでも旧JR信越線（現しなの鉄道）の西側までは糸里水田の分布が予想されていたが、今回の立ち会い調査によって線路を越えた東側の地域にも、平安水田が分布している可能性が極めて高いことが確認された。そしてこのことは平安水田が更に北に延びる可能性をも示唆している。

残された課題としては平安水田開発以前の土地利用状況の解明・水田の開発時期・そして洪水で埋没したのちの再開拓の時期などが浮かび上がってくる。今後の調査の継続によって、これらの課題におずかでも近づくことができるよう切に希望するものである。

第4章 築地遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

築地遺跡は長野県長野市篠ノ井岡田279-11ほかに所在し、JR築地踏切地点と長野県立篠ノ井高校グラウンドとの間に位置する。築地遺跡の存在が確認された篠ノ井～川中島間は北部は犀川の扇状地に、南部は千曲川の氾濫原に立地している。このため篠ノ井から川中島に向かってゆるやかな登り勾配となり、一帯は水田及び桃を中心とした果樹園として利用されている。篠ノ井～川中島のJR沿線付近はこれまで大規模な開発が少なく、埋蔵文化財調査の機会がなかったため、遺跡の分布についてはJR篠ノ井駅近くの布施城以外は不明な点が多かった。しかし、平成4年にJR川中島駅構内で近世の水田跡が確認されてから遺跡が分布している可能性が高まり、北陸新幹線の工事に先立って平成5年に試掘調査が実施され、初めて築地遺跡の存在が明らかになった。

築地遺跡は犀川扇状地上に立地しており、わずかに微高地となっている。このため、犀川、あるいは南側に位置する千曲川の氾濫の影響を受けにくく、故に集落が営まれたと考えられる。逆に周囲の微低地では表土及び旧耕作土直下が砂礫層となることが多く、今回の調査では遺構の分布はみられなかった。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法

本調査に先立ち平成5年5月10日～9月29日にかけて試掘調査を実施した。試掘調査は篠ノ井～川中島間の新幹線用地内に幅約2.5mのトレンチを延長3,300mにわたって南北に入れ、断面観察を中心に行った。当初予想された、川中島駅構内で確認されたような近世の水田跡はほとんど確認できず、かわりに犀川扇状地上の微高地である築地踏切地点付近、於下地点、今里地点の3か所で遺構の存在が確認された。築地踏切地点は3地点の一番南に位置し、9世紀後半～11世紀と考えられる土器片と遺構が確認された。遺構は東西に伸びる南北約200m程の微高地に集中しており、この範囲に水田が確認された南側の微低地を加えた約5,040㎡を調査区として設定した。

調査区は南の水田が確認された部分を①区、遺構の分布範囲については、北に向かって3段階に高くなっていく調査面のうち、南側の一番低い部分と残りの北側2段を最寄りのグリッド境界線で2分割し、南側を②区、北側を③区とした。

①区では試掘調査時に水田以外の遺構や遺物が確認されなかったため、トレンチ調査による断面観察を行い、水田の範囲の把握に務めた。②・③区は全面表土剥ぎを行い、遺構検出を実施した。

グリッドの設定は①区では行わず、②・③区では埋蔵文化財センター仕様（第1章第2節1参照）により設定し、調査を実施した。

調査の実施時期は、③区の南側を横断する水路部分（IT15、II P11・12グリッド）については工事が急がれていたため、平成5年度中に先行して調査を行い、残りの大部分については、翌平成6年に調査を実施した。

(2) 調査経過 (調査日誌抄)

試掘期間 平成5年5月10日～9月29日
(篠ノ井～川中島間全体)
本調査期間 平成5年11月25日～12月11日
平成6年4月11日～7月5日

平成5年度 試掘、一部先行調査

- 5月10日 篠ノ井～川中島間で重機による試掘トレンチ調査開始。
- 9月6日 築地踏切地点付近試掘調査開始。
- 9月24日 築地踏切地点付近試掘調査終了。
同地点の地表下約40～50cmにおいて平安時代の住居跡と黒色土器片及び時期不明の水田層を確認する。
- 9月27日 本調査区を設定。
- 11月25日 水路部分 (I T15・20～II P11・12・16・17グリッド) 調査開始。
- 11月29日 平安時代の住居跡 (SB37) と土坑 (SK756他) を検出。
- 12月11日 水路部分調査終了。
- 1月10日 冬期整理作業開始 (～1月17日)。

平成6年度 本調査

- 4月11日 発掘開始式を行う。②区南端から北に向かって調査開始。
- 4月14日 試掘の際には確認されなかった中世の遺構と思われるL字型の溝を検出する。(SD08)
- 4月20日 長野県立篠ノ井高校有志生徒が見学。
- 4月25日 SD08より人骨、動物骨が出土。
- 5月17日 ③区調査開始。
- 6月7日 ②区調査終了。
- 6月26日 北陸新幹線開通では初となる現地説明会実施。(参加者184名)
- 6月27日 長野市立通明小学校郷土発見クラブの児童約20名が見学。
- 7月6日 ③区調査終了。
- 7月8日 ラジコンヘリによる空撮実施。
- 7月11日 ①区のトレンチ調査開始。
- 7月12日 水田層を2層確認する (IV・VII層)。
- 7月15日 全調査終了 (以後浅川扇状地遺跡群の調査に合流)。
- 1月5日 冬期整理作業開始 (～2月7日)。



試掘調査風景



現地説明会



遺跡の現況

(3) 調査成果の概要

①区ではトレンチ調査の結果、試掘調査で確認された水田は①区のほぼ全域に広がっていた。遺物の出土がないため時期は特定しにくい、②区以北の集落の時期から、水田が造られたのは平安時代以降と考えられる。また、①区北側では間層を挟んでもう1層水田層が確認されている。この水田層は②区において、平安～中世の検出面であるVI層の下でも確認された。今回の調査で確認された遺構・遺物は9世紀後半が最も古いので、少なくとも平安時代以前のもと考えられる。下層の水田層が確認された範囲は①区北側～②区南側の南北約30mと狭いものの、この水田層（VII層）の時期が築地遺跡周辺に開墾の手が入った時期と考えられる。

②・③地区では、試掘時に確認された平安時代の遺構に加えて、中世の遺構が調査区のほぼ全面において確認された。両時代の遺構は同一の検出面上で確認されたが、分布が若干異なっており、集落の範囲の相違をしめしている。

平安時代の集落は②区のSD10から北に分布しており、遺跡の北端まで広がっている（第322図）。遺物の様相から9世紀後半～11世紀後半の集落であると考えられる。集落の範囲は、南はSD10から北は調査区の北端までの南北約200mの範囲であることが確認された。東西方向への広がりも調査区の幅が狭いため、判然としなが、調査区から西側に広がっていると思われる。

集落は10世紀後半を最盛期とし、以後は11世紀後半までしだいに規模を縮小しながら存続していたと推定される。中世の集落が営まれ始めたのは13世紀後半と考えられるため、12世紀～13世紀前半の間集落は一度断絶していると考えられる。

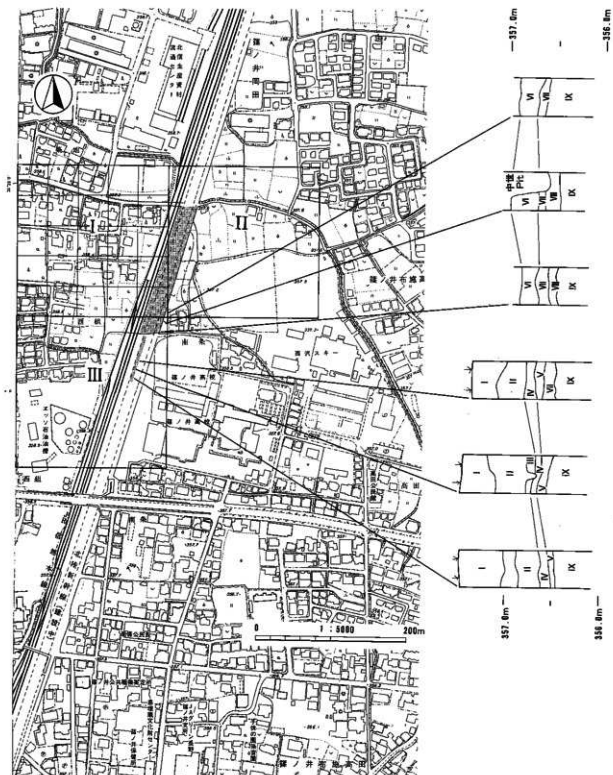
中世の集落は第323図に示したように、平安時代の集落南限であるSD10を越えて南に広がるが、①区まで遺構の分布が及んでいなかった。②区の南端で確認されたSD08の有り様から、集落は①区の東側に回り込むようにして南側に伸びていると思われる。しかし①区東側は平成4年に篠ノ井高校体育館改築工事に伴い長野市埋蔵文化財センターが確認調査を実施しているが、攪乱を受けているため遺構の有無は確認されず、集落の南限については不明である。集落の北限は遺構密度が希薄になる③区のSD37付近と考える。よって平安時代の集落と比べ、中世の集落は南へ移動したと推定される。中世遺構で最も古いと思われる竪穴状遺構は出土遺物から13世紀後半のもと考えられ、この時期に中世集落が営まれ始めたと判断する。そしてこの竪穴状遺構を切る独立柱建物が存在することから少なくとも14世紀以降まで集落が存在したことが推測されるが、遺構に伴う遺物の出土が少なく、集落の終焉時期は不明である。

(4) 基本土層

基本層序は第321図に示したように9層に分層される。I・II層は耕作土であり、II層は近世以降のものである。水田と考えられるものはIV層とVII層である。IV層は①区のほぼ全面にみられるが、②区では確認できなかった。逆に①区では確認できないVI層がIV層とほぼ同じ高さで②区南端からみられた。平安～中世の遺構はこのVI層上で検出された。VI層は調査区の北端まで続く。またVII層は①区から②区中央付近まで確認できるものの、②区北半以北では確認できない。VII層の水田は平安～中世の検出面より下層に位置することから集落の開始時期より古い9世紀以前のものであると考えられる。

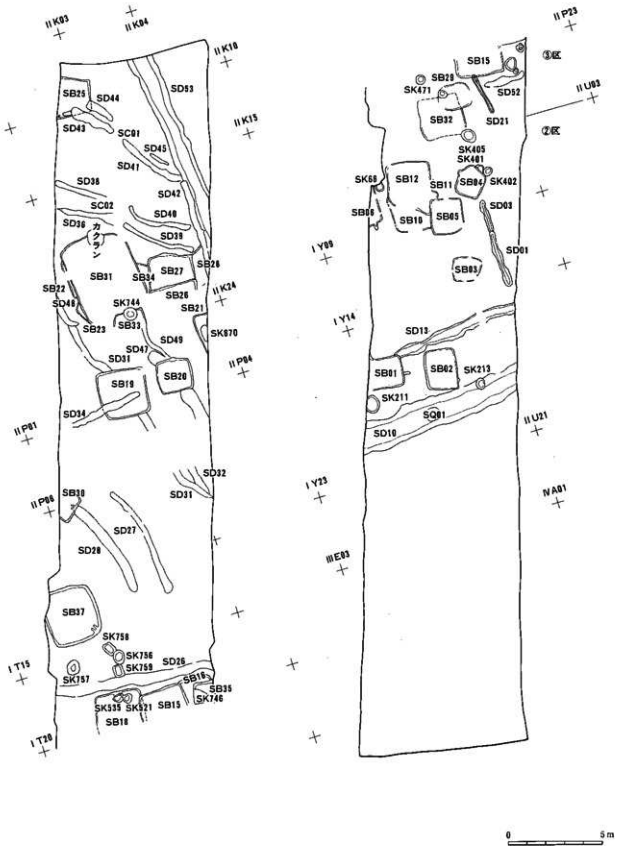
土層図を示した地点以北では含まれる褐色砂の増減はあるものの、VI層が調査区北端まで続き、VI層のすぐ下にIX層があり、同じく調査区北端まで続く層序となっている。

また、北へ行くほどVI層と現地表面との比高差は少なくなり、削平や攪乱を受けるようになっていく。したがって微高地の頂点であったII K18グリッドを中心とする③区北半の平安～中世の生活面は、今回の調査で確認されたものより高い位置にあったと推定する。

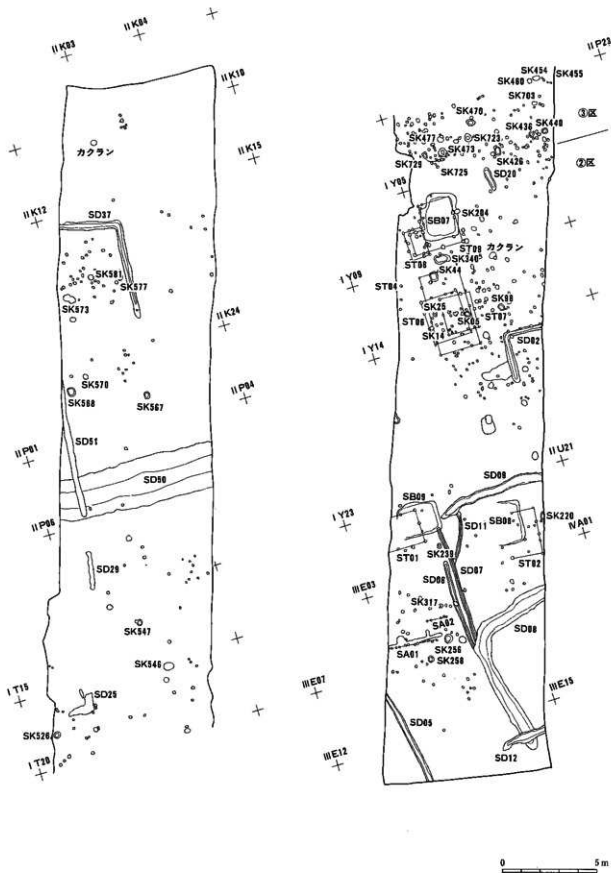


第321図 グリッド設定状況及び基本土層

- I 表土
- II におい黄褐色土に褐鉄を少量含む。粘性あり、しまり良し
- III 灰白色砂質土に褐鉄を少量含む。粘性弱く、しまり良し
- IV 褐灰色土に褐鉄を1割ほど含む。粘性強く、しまり良し。水田面
- V 明黄褐色土に1~2割の褐鉄が沈着する。粘性強く、しまり良し
- VI 黄褐色土に褐色砂が3割ほど混じる。粘性弱く、しまり良し。検出面
- VII 褐灰色土。粘性強く、しまり良し。水田か
- VIII 明黄褐色砂質土に褐鉄を1割ほど含む。粘性あり、しまり良し
- IX 黒褐色~褐色砂



第322図 平安時代遺構配置図



第323図 中世遺構配置図

第2節 遺構と遺物

1 平安時代

(1) 概要

平安時代の遺構は第322図に示したように、②区中央にあるSD10を南限とし、密度は薄いが③区の北端まではほぼ全面にわたって確認された。出土した遺物はロクロ整形された土師器が主体で黒色土器Aや須恵器も出土するが、ともに終末期の形態である。よって集落の開始は9世紀後半ごろであると考えられる。また土師器の中心である環Aは小型化、偏平化が進み、ほとんど皿と区別が付かなくなっているものが見られ、集落がほぼ平安時代の後半まで続いたことを示している。9世紀後半～10世紀前半の遺構の多くは、SD10と③区南側のSD26の間と微高地の頂点にあたるII K18グリッド付近の南北2か所に分かれて分布している。その後遺構の分布は時期が下るに従って一つにまとまっていく傾向がみられる。それと同時に遺構数自体も徐々に減少していく。このあとに続く中世の遺構が13世紀後半ごろからであるので、集落は12世紀ごろ一度終焉を迎えたと考えられる。

(2) 住居跡・竪穴状遺構

平安時代のSBは29基が検出された。いずれも貼床、支柱穴は確認されず、カマドの有無や形状、規模などから26軒に住居跡と判断した。残り3基は住居跡とする判断材料を欠くため、竪穴状遺構として登録した。住居跡の形態や構造に大きな変化はみられないが、規模は時期が下るにつれて、大小に2極化していく傾向にある。

SB01 (②区 I Y14、第324図、PL95・99・104)

検出：VI層で検出。SD13を切り、SK210に切られる。

埋土：埋土中にブロック状の土や焼土・炭・人頭大の礫が含まれており、人為的埋没と考えられる。

構造：南北約3.2mに対し東西は調査区外にかかるが、確認できた部分でも約4mあるため、長方形となる。深さ約32～40cm。地山をそのまま床面としている。

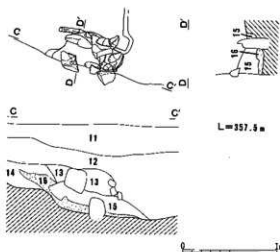
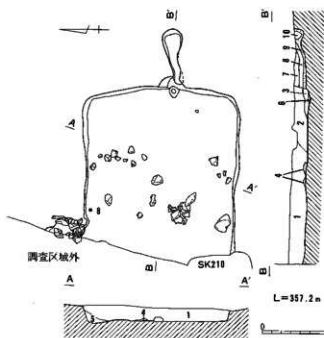
カマドは東壁と北壁で計2基確認された。東カマドが完全に壊されているのに対し、北カマドは袖の石組が残存していたことから東カマドの方が古いと考える。柱穴は検出されなかった。

遺物：須恵器環A(1・2)、黒色土器A環(3・4)、灰釉陶器碗(5)、施釉陶器碗(6)、土師器小型甕(7)、土師器甕(8～10)が出土している。

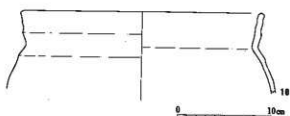
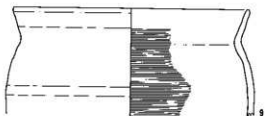
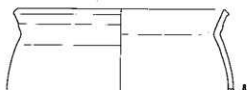
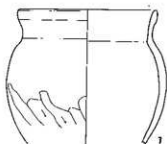
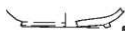
須恵器環Aのうち、1は軟質須恵器である。2は墨書が認められるが字は不明。3・4は内面が荒れているため、ミガキの跡は不明瞭である。底部は3が手持ちへら削り、4は回転糸切りであったと思われる。5は光ヶ丘1号窯式と思われる。6は内面に全面施釉が施され、中世遺構のSB09出土の施釉陶器(第356図1)と酷似している。7はロクロ調整ののち、体部下半にへら削りがなされている。8～10はロクロ調整されており9のみが内面にカキ目がみられる。

そのほかには黒色土器B、土師器環、灰釉陶器、青磁などが出土している。環は黒色土器Aの割合が最も高く、土師器、須恵器の順でこれに続く。土器以外の遺物では、刀子(PL104-2)1点、鉄滓2点が出土している。

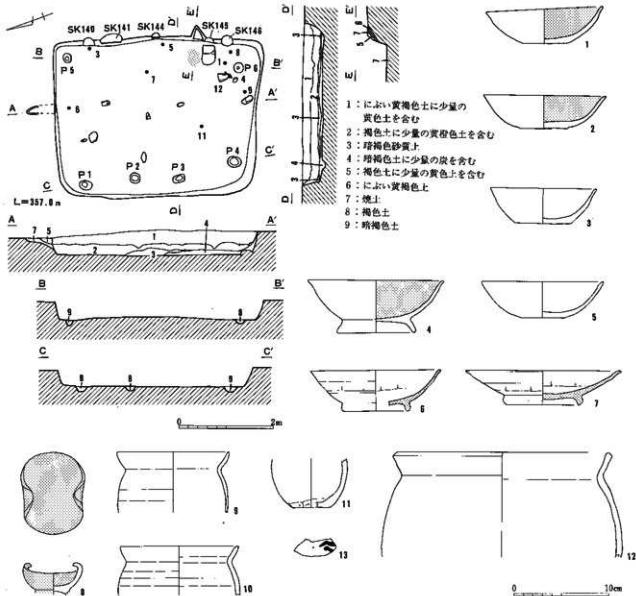
時期：土器の様相から9世紀後半と考えられる。



- 1: におい黄褐色土に暗オリーブ褐色土と少量の炭を含む
- 2: 暗灰黄色土に多量のブロック状褐色土を含む
- 3: におい黄褐色土にブロック状オリーブ褐色砂質土と褐色土を含む
- 4: 褐色土にブロック状焼土とオリーブ褐色土を含む
- 5: オリーブ褐色土に少量の褐色土と炭を含む
- 6: におい黄褐色土に黄褐色土と少量の焼土を含む
- 7: 暗灰黄色砂質土に明黄褐色土を含む
- 8: 暗灰黄色土に黄褐色土と少量の炭を含む
- 9: におい黄褐色土に多量の焼土と少量の炭を含む
- 10: 暗灰黄色土に黄褐色土を含む
- 11: 暗灰黄色砂質土に少量の明黄褐色土を含む しまりやや弱い
- 12: 黄褐色土に少量の砂を含む
- 13: におい黄褐色土に少量の炭を含む
- 14: におい黄褐色土に黄灰色土と明黄褐色土を含む
- 15: におい黄褐色土に少量の焼土と炭を含む
- 16: 焼土
- 17: におい黄褐色土にブロック状焼土を含む



第324図 SB01



第325図 SB02

SB02 (㊸区I Y15・20、第325図、PL95・99)

検出：VI層で検出。SK284・285を切り、SK138～147に切られる。

埋土：4層に分層される。自然埋没と考える。

構造：4.3m×3.4mの長方形で深さ約40～56cm。地山をそのまま床面としている。

カマドはSB01と同じく東壁と北壁で検出された。しかし、火床の残り具合や袖石の有無などからSB01とは逆に北カマドの方が古いと考えられる。どちらの火床もあまり焼け込んでいないので使用期間は短いと思われる。煙道は北カマドのものが約64cmの長さをもつに対し、東カマドの煙道は壁からすぐ立ち上がる非常に短いものである。

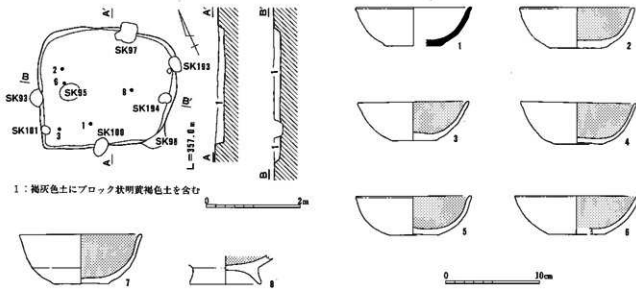
主柱穴となるようなピットは検出されず、小ピットが6基検出された。直径約10～20cm、深さ約10cmでいずれも壁際に位置する。

遺物：須恵器環A (13)、黒色土器A環 (1・2)と同椀 (4)、黒色土器B耳皿 (8)、土師器環A (3・5)、灰釉陶器椀 (6)と同皿 (7)、土師器小型甕 (9～11)と同甕 (12)などが出土し

ている。13は軟質須恵器で墨書があるが、字は不明である。1・2及び4の黒色土器Aは内面が荒れているため、ミガキの痕跡は不明瞭である。6・7はともに光ヶ丘1号窯式と思われる。8はミガキの跡はみられない。9～11及び13はロクロ調整がされており、11は底部直上の体部到手持ちへラ削りによる調整が確認された。

図示した以外の出土遺物は黒色土器A環と土師器甕の割合が最も高く、土師器環A、須恵器環Aの順でこれに続く。出土地点は東カマドの右側が多い。

時期：土器の様相から10世紀前半と考えられる。



第326図 SB03

SB03 (②区I Y10、第326図、PL96・99)

検出：VI層で検出。SK93～95・97・98・100・101・192～194・346～352に切られる。

埋土：単層。ブロック土が含まれるため、人為的埋没と考える。

構造：2.6m×2.9mの長方形で深さ約15cm。地山をそのまま床面としている。

カマド、柱穴等の施設は検出されなかった。

遺物：須恵器環A(1)、黒色土器A環(2～7)、黒色土器A椀(8)が出土している。

1は軟質須恵器であり、内面の一部と外面に薄く炭化物が付着している。黒色土器A環は口径約12cm強、器高約4cmの2～5と、口径約13cm強、器高約5.2cmの7という2法量がみられ、6が2法量の間値(口径約13cm強で器高約4cm)を示す。4の内面のミガキは暗紋状になっている。ほかの黒色土器Aも内面のミガキは粗雑である。6は外面に薄く炭化物が付着している。

上記以外には土師器、灰胎陶器が出土している。環は黒色土器Aの割合が最も高く土師器環A、須恵器環Aの順でこれに続く。

時期：土器の様相から9世紀後半と考えられる。

SB04 (②区I Y05・II U01、第327図、PL96・99)

検出：VI層で検出。SK401を切り、SK207に切られる。

埋土：単層で、自然埋没と考える。

構 造：2.8m×3.4mの長方形で深さ約10cm。地山をそのまま床面としている。

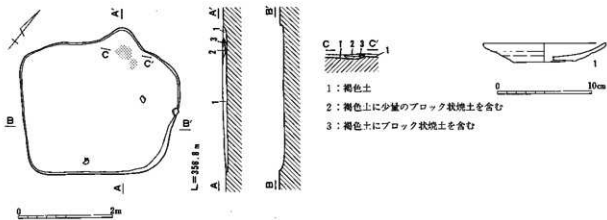
北西側の突出した部分付近に火床と思われる焼土を検出した。この突出部分を煙道とするカマドがあったと考える。煙道は突出部分の形状から、SB02の東カマドと同じく壁からすぐ立ち上がる、非常に短いものと思われる。

柱穴等の施設は検出されなかった。

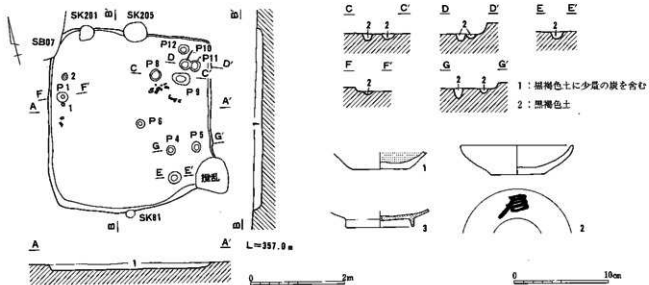
遺 物：土師器坏A（1）が出土している。口径約13cm、器高約2cmで、皿に近い器形をもつ。

そのほかには須恵器、黒色土器A、土師器甕、灰釉陶器が出土している。

時 期：土器の様相から11世紀後半と考えられる。



第327図 SB04



第328図 SB05

SB05 (②区 I Y05・10、第328図、PL96・99)

検 出：VI層で検出。SB10・11を切り、SB07、SK70・73～76・81・201・205、ST09 P 5 に切られる。

埋 土：単層で、自然埋没と考える。

構 造：3.5m×3.8mの長方形で深さ約7～20cm。地山をそのまま床面としている。

床面で計11基のピットを検出した。いずれも直径15～30cm、深さ8～25cmであり、補助柱穴程度

の規模である。カマド等の施設は検出されなかった。

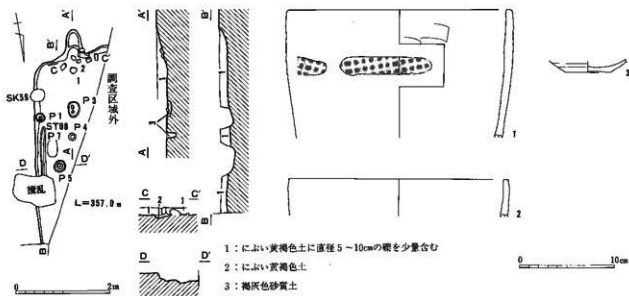
遺物：黒色土器A環（1）、土師器環A（2）、灰釉陶器椀（3）が出土している。

1の内面のミガキは雑である。2はほぼ完形で出土し、胴部に墨書をもつ。墨書は「君」と考えられる。3は光ヶ丘1号窟式と思われる。

図示した以外には須恵器、黒色土器Bが出土している。黒色土器A環と土師器環Aの割合が高く、若干土師器環Aのほうが比率が高い。

土器以外ではP8・9の南側で炭化材が出土している。床面より5cm程高い位置から出土しており、本跡の廃絶後に投棄されたと思われる。

時期：土器の様相から10世紀後半と考えられる。



第329図 SB06

SB06 (②区IY04、第329図)

検出：VI層で検出。ST08P3・7・12、SK59に切られる。

埋土：単層で、直径5cm～握り拳大の礫が含まれるが、量は少ない。自然埋没と考える。

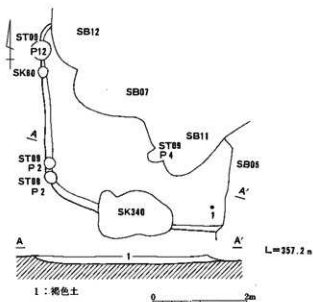
構造：大部分が調査区外にかかるため、規模、プランともに不明である。深さ約20cm。地山をそのまま床面としている。

カマドは東南隅で検出された。短い煙道と袖構築材と思われる石が確認されたが、火床はみられない。煙道の内壁もあまり焼け込んでいないため、使用期間は短いと考える。

ピットは4基確認された。また、西壁直下に部分的な周溝が検出された。

遺物：土師器羽釜（1・2）、土師器環A（3）が出土している。1は口径24cmで平らな口縁端部をもつ。鋳は欠落した跡が残るのみであり、鋳があった形跡がみられない部分もみられる。鋳は3～4か所で短く切れていたと思われる。2は1より若干薄手であるが、そのほかは胎土、焼成、口縁部の形状などが1とよく似ているため、羽釜と判断した。3は底径と体部の開き具合から小型化かつ偏平化した形状と考えられる。図に示したほかに須恵器、黒色土器A、土師器、灰釉陶器が出土している。土師器環Aの比率が最も高い。

時期：土器の様相から11世紀前半と考えられる。



第330図 SB10

SB10 (②区1 Y05・10、第330図、PL99)

検出：VI層で検出。SB05・07・11・12、ST08P 2・3、ST09P 2・3・4・12、SK58・60～62・287・288・298・340に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

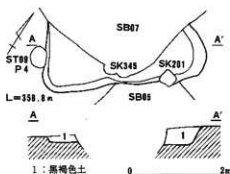
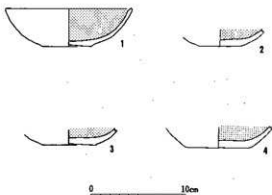
構造：南北約4.4m。東西の長さは他の遺構に切られ不明。プランの形状は残存部分から、東西に長い長方形になると思われる。深さは約15cm。地山をそのまま床面としている。ほかに住居跡と比べると比較的堅固な床面をもつ。

カマド、柱穴等の施設は検出されなかった。

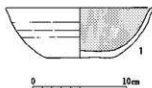
遺物：出土した土器はすべて黒色土器A環であり、土師器はみられない。1の内面のミガキは雑であり、口縁部付近で横方向のミガキが確認できたのみである。2は四方から中央に向かっての暗紋風のミガキがみられる。3は風化のためミガキが確認できない。4のミガキは1～3と比べると比較的丁寧である。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から9世紀後半と考えられる。

所見：ほかの住居跡にみられる土師器環Aが全く出土していないことから、築地遺跡で最も古い住居跡であると考えられる。



第331図 SB11



SB11 (②区I Y05、第331図)

検出：VI層で検出。SB10を切り、SB05・07、ST09P4、SK201・345に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：南西—北東約3.5m。形状は東隅の様子から方形にはならないと考える。深さは約15~35cmで地山をそのまま床面としている。カマド、柱穴等の施設は検出されなかった。

遺物：黒色土器A環(1)が出土している。1の内面のミガキは雑である。

そのほかにも須恵器、土師器が少量出土している。

時期：土器の様相から9世紀後半と考えられる。

所見：不整形な形状から住居跡とは考えられない。よって堅穴状遺構として登録した。

SB12 (②区I Y05)

検出：VI層で検出。SB10を切り、SB07、ST08P4、ST09P8~10、SK204・289・291・294に切られる。

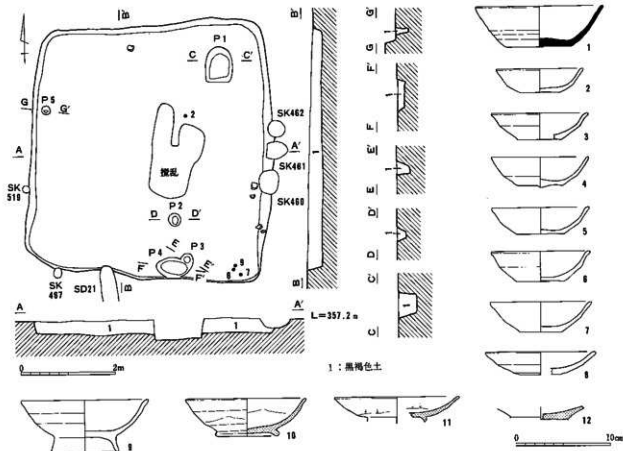
埋土：黒褐色土の単層である。自然埋没と考える。

構造：4.6m×4.1mの長方形で深さ約10cm。地山をそのまま床面としている。

カマド、柱穴等の施設は検出されなかった。

遺物：須恵器、黒色土器A、土師器、灰釉陶器が少量出土している。

時期：他の遺構との切り合い関係から10世紀前半と考えられる。



第332図 SB15

SB15 (③区ⅡP16・17・21・22、第332図、PL99)

検出：Ⅵ層で検出。SB16・18、SD23を切り、SD21、SK460～462・466・467・519に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：約5.2m四方の正方形。深さ約30cm。地山をそのまま床面としている。

ピットは計5基検出された。内P1は位置や深さから柱穴と考える。P2・3・5は補助柱穴であろう。P4は貯蔵穴と考える。

カマド等他の施設は検出されなかった。

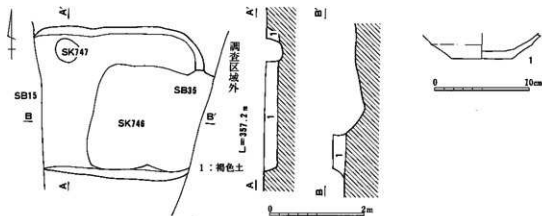
遺物：第332図に示した須恵器環A(1)、土師器環A(2～8)と同椀(9)、灰釉陶器椀(10)と同皿(11・12)が出土している。1は軟質須恵器である。2～7は法量や口縁部の仕上げに異なる部分があるが、「く」の字に内湾する体部の形状が共通している。8は2～7に比べて外傾が強く、やや時代が下ると思われる。9は本体に比べて高台が高い。10は虎溪山1号窯式、11は大原2号窯式であると考えられる。12は内面に朱が付着しており、朱墨硯として転用されていたと考える。

図に示したほかに須恵器、黒色土器A、黒色土器B、土師器、灰釉陶器、青磁が出土している。

黒色土器A環、土師器環及び同甕の割合が高く、遺物の多くは南東隅で出土している。

土器以外では鉄滓1点が出土している。

時期：土器の様相から10世紀中ごろと考える。



第333図 SB16

SB16 (③区ⅡP17・22、第333図、PL96)

検出：Ⅵ層で検出。SB15・35、SK461・462・542・746～748に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

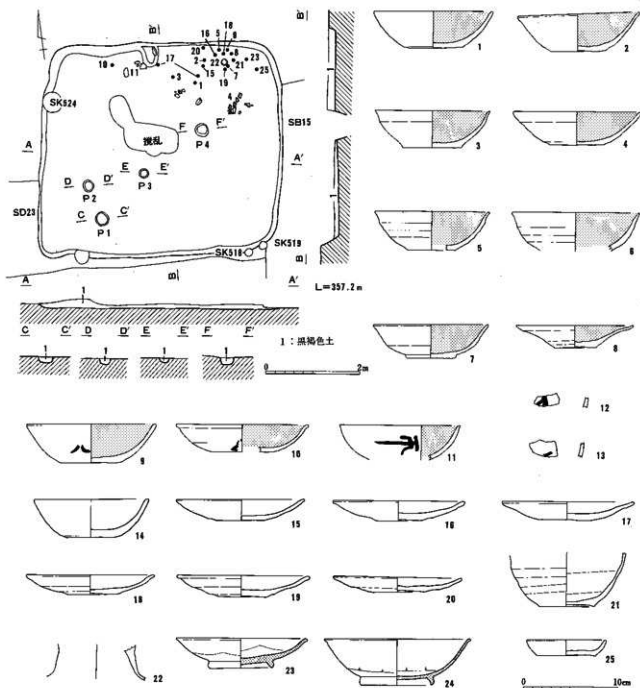
構造：3.2m×3.8mの長方形プランと考えられる。深さ約25cm。地山をそのまま床面としている。

カマド、柱穴等の施設は検出されなかった。

遺物：土師器環A(1)が出土している。底径約6.5cmで底部から体部にかけての形態はSB15出土の土師器環Aと同じである。

そのほかに須恵器、黒色土器A、灰釉陶器が出土している。土師器甕の破片が最も多く、黒色土器Aと土師器の環がこれに続く。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から9世紀後半と考えられる。



第334図 SB18

SB18 (③区 I T20・25・II P16・21、第334図、PL100)

検出: VI層で検出。SB15、SD23及び同ビット、SK518-524・535に切られる。

埋土: 単層。自然埋没と考える。

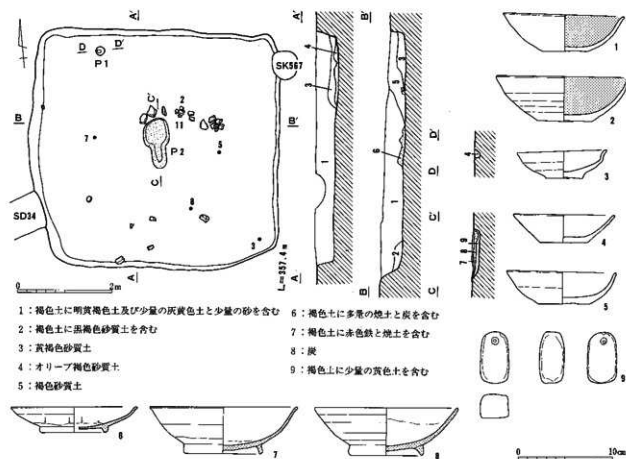
構造: 5.2m×4.6mの長方形プランをもつ。深さ約12~38cmで南へ向かって若干傾斜した地山をそのまま床面としている。

カマドは北壁にあり、地山を利用した左袖以外は破壊され、周囲に小礫が散っていた。残存した左袖の内側はあまり焼け込んでおらず、火床も検出できなかったことから、使用期間は短かいと考える。ビットは計4基検出されたが、いずれも補助柱穴的な規模である。

遺物：黒色土器A環(1~13)、土師器環A(14)、同皿A(15~20)、同小型甕(21)、同盤Aのものと思われる足高の高台(22)、灰釉陶器皿(23)、同椀(24)、カワラケ(25)が出土している。黒色土器A環のうち、7は高台を意識したような底部が付く。8は他の環に比べて外傾が強く、皿に近い形態である。9~13には墨書が確認された。11の梵字のような記号が確認できた以外、読み方は不明である。15~20は他の器種に比べて完形率が高い。21はロクロナデのみでカキ目はみられない。23は大原2号窯式、24は光ヶ丘1号窯式である。25は著しくほかの遺物と年代が異なるため、流れ込みと考える。

そのほかに須恵器、黒色土器Bが出土している。全体の約7割弱が黒色土器A環である。遺物はカマドの右脇に多い。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から10世紀前半と考えられる。



第335図 SB19

SB19 (③区IIK22・P02、第335図、PL96・100・104)

検出：VI層で検出。SD31を切り、SD34、SK567に切られる。

埋土：6層に分層される。自然埋没と考える。

構造：5.4m×5.1mの長方形。深さ約45cm。南西側に堅固な部分をもつが、基本的に地山をそのまま床としている。

床面のほぼ中央に鍵穴状のプランをもつP2は、北側に散乱する礫が周囲を囲っていたと考えられ、埋土には炭、焼土、粒状の鉄滓を含んでおり、鍛冶炉と考える。そのほかのピットは北壁近

くで1基検出された。

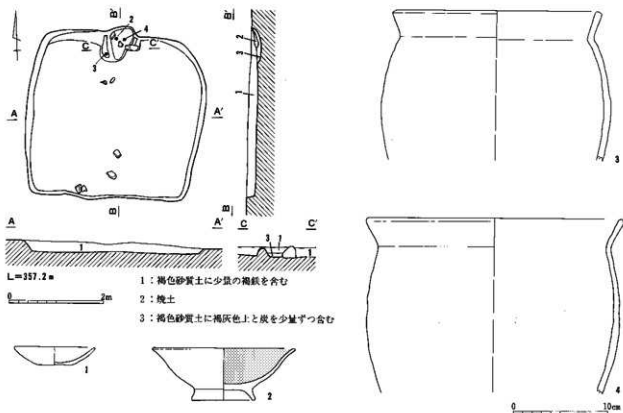
カマドについては当初南東隅に集中した礫をカマドの袖の残骸と考えた。しかし、礫は床面より10cm近く浮き、床面に痕跡がまったく確認されなかったことから、この礫はカマドの袖構築材ではなく、投棄されたものと判断した。

遺物：黒色土器A坏（1・2）、土師器坏A（3～5）、灰釉陶器碗（7・8）及び同皿（6）、土器以外では砥石（9）が出土している。1・2は表面が風化しており、ミガキは観察できなかった。3～5も風化が進んでいる。6・7は光ヶ丘1号窯式、8は大原2号窯式である。

図示した以外の器種は黒色土器A碗、土師器甕、青磁が出土している。坏は黒色土器Aに比べ土師器坏Aのほうがやや比率が高い。土器以外では鉄滓が出土している。

遺物は南東隅付近に多い。

時期：土器の様相から10世紀前半と考える。



第336図 SB20

SB20 ③区ⅡK22・23、第336図、PL96・100

検出：VI層で検出。SD47・49を切る。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：3.8m×3.6mの長方形のプランをもつ。深さ約18～22cm。地山をそのまま床面としている。

カマドは北壁中央で検出され、袖は下部の地山を利用し、上部が石組みだったと考えられる。

煙道及び柱穴など他の施設は検出されなかった。

遺物：土師器坏A（1）、黒色土器A碗（2）、土師器甕（3・4）が出土している。1は風化のため表面が荒れている。2は暗紋状の雑なミガキである。3はクロコナデのみで調整されているが、4

はロクロナデに加えて胴部最大径より下にヘラ削りによる調整がなされている。

上記以外には灰釉陶器が出土している。坏は土師器、黒色土器Aの順で比率が高く、須恵器はみられない。

時期：土器の様相から10世紀前半と考える。

SB21 (③区II K23)

検出：VI層で検出。SK669・670を切る。

埋土：褐灰色砂質土による単層。自然埋没と考える。

構造：規模は不明。残存部から正方形または長方形のプランになると思われる。深さ約7～10cm。地山をそのまま床としているが軟弱である。柱穴、カマドなどの施設は検出されなかった。

遺物：出土していない。

時期：付近の遺構がすべて平安時代の遺構であることから、本跡も平安時代の遺構と考える。本跡及び本跡が切る2基の土坑からも出土遺物がないため、細かい時期は不明。

SB22 (③区II K12・17)

検出：VI層で検出。SB31、SK537・753に切られる。

埋土：暗褐色土による単層。自然埋没と考える。

構造：南北約4.1m。ほとんどをSB31に切られているため、東西の長さは不明。残存部から正方形または長方形のプランになると思われる。長さ約18cmで地山をそのまま床としていると思われる。柱穴、カマドは検出されなかった。

遺物：出土していない。

時期：SB31に切られているため、11世紀中ごろ以前と考えるが遺物の出土がないため、細かい時期については不明。

SB23 (③区II K17)

検出：VI層で検出。SB31に切られる。

埋土：黒褐色土による単層。自然埋没と考える。

構造：ほとんどをSB31に切られているため、規模、形状ともに不明。残存部の最長軸で約2.3mあったためSBとして登場した。深さ約16cmで地山がそのまま床となっている。

遺物：出土していない。

時期：SB31に切られているため、11世紀中ごろ以前と考えるが遺物の出土がないため、細かい時期については不明。

所見：住居跡とする判断材料を欠くため、竪穴状遺構として登録した。

SB25 (③区II K08、第337図、PL96・101)

検出：VI層で検出。SK717～719を切り、SD43・44、SC01に切られる。

埋土：3層に分層される。自然埋没と考える。

構造：南北約4m。東西の長さは不明。確認された部分から正方形または長方形のプランになると思われる。深さ約16～20cmで地山をそのまま床としている。カマド、柱穴は検出されなかった。

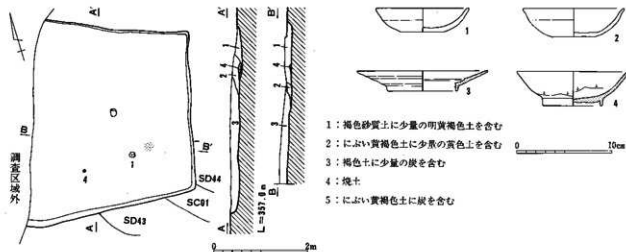
床面の南東側で焼土跡を検出したが、壁から90cm程離れておりカマドではないと判断した。

遺物：土師器坏A（1・2）、灰釉陶器段皿（3）及び同椀（4）が出土している。3・4はともに大原2号窯式である。

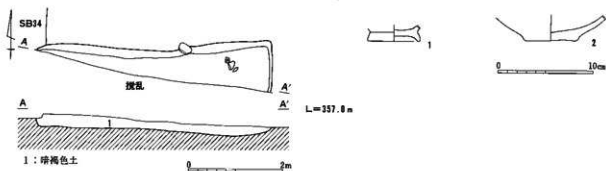
そのほかには須恵器、黒色土器A、土師器甕が出土している。坏は土師器の比率が高い。

遺物の多くは焼土跡の西側から出土している。

時期：土器の様相から10世紀前半と考える。



第337図 SB25



第338図 SB26

SB26 (③区IIK18、第338図、PL104)

検出：VI層で検出。SB27・28を切り、SB34に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：東西約4m。北壁付近以外は攪乱を受けているため南北の長さは不明。南側に位置するSB21と切り合い関係がないので、南北の長さは3.8m以内に取まると考えられる。よって東西に長い長方形のプランをもつと思われる。深さ約25～30cmで地山をそのまま床としている。

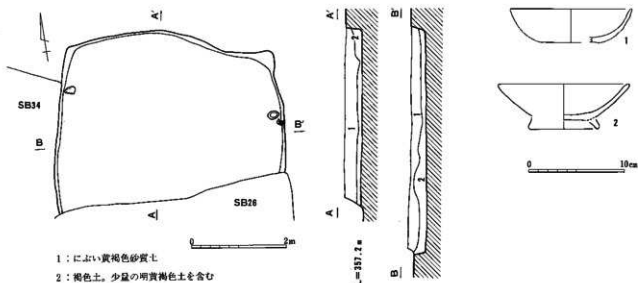
攪乱を受けている部分が多く、カマド、柱穴等の施設は検出されなかった。

遺物：土師器椀（1）及び同坏A（2）が出土している。

上記以外には黒色土器A、土師器甕が出土している。坏においては土師器の比率が高い。

金属製品は刀子（PL104-6）が出土している。

時期：土器の様相や、他の遺構との切り合い関係から10世紀後半と考える。



第339図 SB27

SB27 (③区IIK18、第339図、PL101・104)

検出: VI層で検出。SB28を切り、SB26・34・SK743に切られる。

埋土: 2層に分層される。自然埋没と考える。

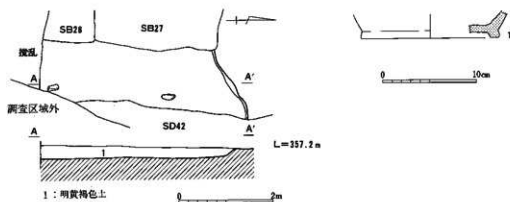
構造: 東西約4.5m。南側をSB26に切られるため南北の長さは不明。深さは約38cm。地山をそのまま床としている。

東壁付近でピットを1基検出。その他の施設は検出されなかった。

遺物: 土師器環A(1)及び同碗(2)が出土している。そのほかに須恵器、黒色土器Aが出土している。構成は土師器環Aが中心である。

また、丸く加工された花崗岩(PL104-23)が出土している。

時期: 土器の様相から10世紀前半と考える。



第340図 SB28

SB28 (③区IIK18・19、第340図)

検出: VI層で検出。SB26・27、SD42・53に切られる。

埋土: 単層。自然埋没と考える。

構造: 東西を他の遺構に切れ、南側に攪乱を受けているため、規模、形状ともに不明。深さは約20

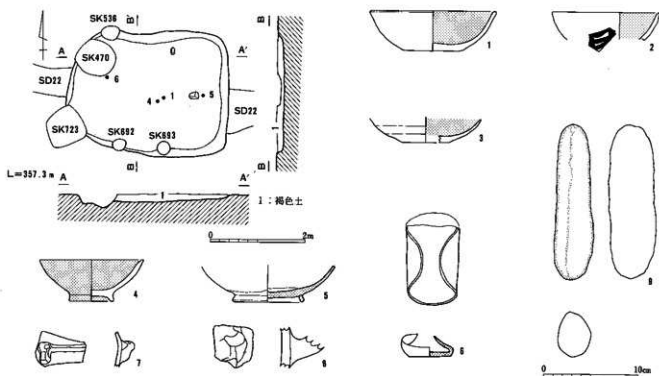
cm。地山をそのまま床としている。

カマド、柱穴等の床は検出されなかった。

遺物：灰釉陶器瓶類（1）が出土している。底径約15cmで、高台の底部全面にヘラによる刻みがつけられている。

図示した以外には黒色土器A、土師器が少量出土している。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から9世紀後半と考えられる。



第341図 SB29

SB29 (③区ⅡP21、第341図、PL101・104)

検出：VI層で検出。SB32を切り、SD32、SK470・496・536・692～694・710・711・723に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

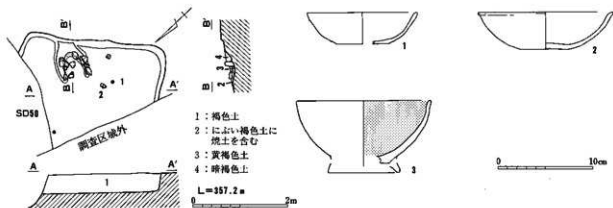
構造：3.4m×2.6mの長方形のプランをもつ。深さ約10～16cm。地山をそのまま床面としている。カマド、柱穴等の床は検出されなかった。

遺物：黒色土器A坏（1～3）、黒色土器B碗（4）、灰釉陶器碗（5）及び同耳皿（6）、須恵器四耳壺（7）及び同双耳壺（8）、蓆織み石（9）が出土している。

1～3はいずれもミガキは粗雑である。2の墨書はSB05出土の墨書土器と同様に「君」である可能性もあるが、欠損部が多く不明である。4は内面縦方向のミガキの間隔がやや粗い。5・6は虎溪山1号窯式と思われる。7は耳の部分に孔はみられなかった。7・8は同一固体と思われる破片の出土がまったくないので遺構には伴わないと考える。そのほかには黒色土器Aが出土している。

坏は土師器が約7割を占める。土器以外では刀子（PL104-3）、鎌（PL104-12）、雁股鎌（PL104-13）、鉄滓が出土している。

時期：土器の様相から11世紀前半と考えられる。



第342図 SB30

SB30 (③区ⅡP05・10、第342図、PL97・101)

検出：VI層で検出。SD28を切り、SD50に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：南西-北東約2.9m。南東-北西の長さは不明。方形プランをもつと思われる。深さ約40cm。地山をそのまま床面としている。

カマドは南東壁にあり、袖は下部に地山を利用し、上部は石組みであったと思われる。支脚には石を用いている。煙道は検出できなかった。柱穴等の施設は検出されなかった。

遺物：土師器環A(1・2)、黒色土器A柄(3)が出土している。3は内外面が荒れ、ミガキはほとんど確認できない。

図示した以外に須恵器、土師器甕及び羽釜、灰釉陶器、鉄滓が出土している。環は多くが土師器である。

遺物の出土はカマド手前から右側にかけてと、調査区境界線付近の2地点に多くみられる。

時期：土器の様相から11世紀前半と考える。

SB31 (③区ⅡK12・17・18、第343図、PL101)

検出：VI層で検出。SB22・23・34を切り、SD37、SK572～586・590～592・730～733・750～755に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：東西7m。南側は擾乱を受けているため南北の長さははっきりしないが残存部でも約9mあり、長方形のプランをもつと思われる。築地遺跡で検出された住居跡の中では最大である。深さは8～16cm。地山をそのまま床面としている。

西壁南側付近で焼け跡のある石と薄く散らばる焼土があり、カマドの残痕と考えられる。

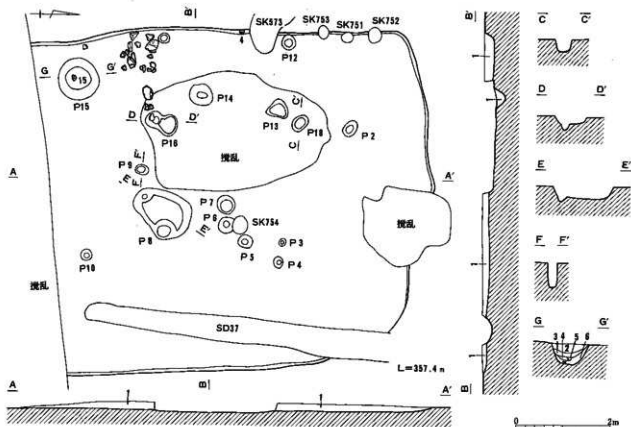
ピットは計16基を検出。内P15が規模・位置から柱穴、P12・19が位置から壁柱穴と考える。

他の施設は検出されなかった。

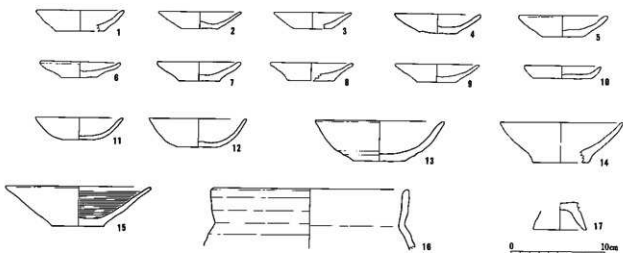
遺物：土師器環A(1～9・11～15)及び同甕(16)・同盤Bと思われる高台(17)、カワラケ(10)が出土している。土師器環Aは1～9・11・12と13～15の2法量に分かれる。なお5は内外面に炭化物が付着しており、灯明皿と考える。15は内面にカキ目がみられる。

そのほかに須恵器、黒色土器A、灰釉陶器、白磁が出土している。遺物の出土はカマドを中心とする半径約1mの範囲が多い。

時期：土器の様相から11世紀後半と考える。



- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1: 褐色土に砂を含む | 4: 暗褐色土に少量のいり黄褐色土を含む |
| 2: 褐色土に黄褐色土と少量の炭を含む | 5: ブロック状のいり黄褐色土 |
| 3: 黒褐色土に暗褐色土と炭を少量ずつ含む | 6: 褐色砂質土 |



第343図 SB31

SB32 ③区 I T25・II P21、第344図、PL101)

検出: 基本土層VI層で検出。SB29・36、SD22、SK405・420・468・470・473~475・655・674~678・691~693・723・724に切られる。

埋土: 単層。自然埋没と考える。

構造: 東西約4.5m。南側は祝乱を受けているためはっきりしないが、推定で南北約4.4m。長方形のブ

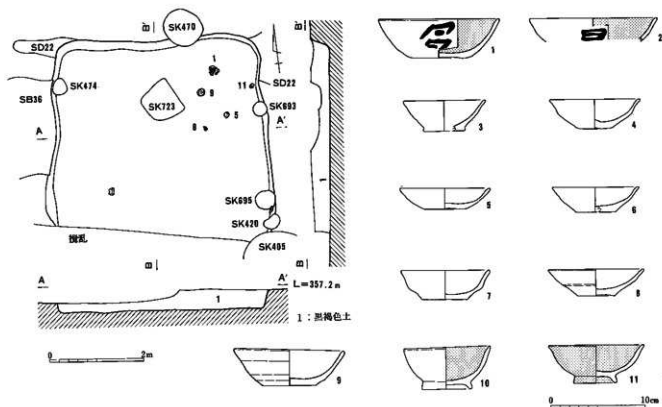
ランをもつと思われる。深さは約40cm。地山をそのまま床面としている。

カマド、柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物：黒色土器A坏（1・2）及び同碗（10）、黒色土器B碗（11）、土師器坏A（3～9）が出土している。1・2の墨書はともに読み方は不明であるが、2はSB05出土の墨書土器と同じく「君」である可能性もある。また内面のミガキはともに雑である。3～9の土師器坏Aは2法量分化が認められる。10の内面のミガキは丁寧である。11の内面のミガキは暗紋状で粗い。また口縁部に炭化物が付着しており、灯明皿であったと考えられる。

そのほかに須恵器、灰釉陶器が出土している。坏は黒色土器Aと土師器が同じような比率で出土しており、須恵器は少ない。

時期：土器の様相から10世紀後半と考える。



第344図 SB32

SB33 (③区IIK17・22、第345図、PL97・102)

検出：VI層で検出。SK734・735・741・744に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

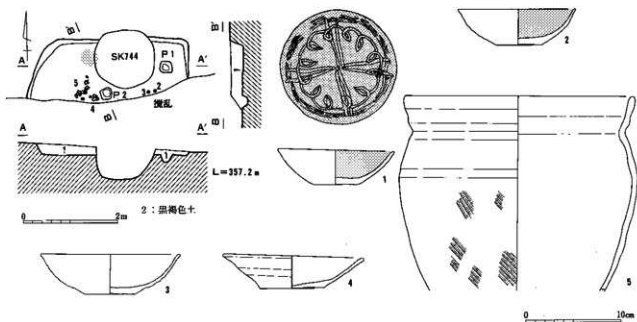
構造：東西3.4m。南北の長さは不明。方形プランをもつと思われる。深さは約12～22cm。地山をそのまま床面としている。

北壁西側付近に直径35cm位の範囲に焼土が散り、この付近にカマドが存在したと推定される。袖の残痕や煙道は確認されなかった。ピットは2基検出された。位置からP1が主柱穴、P2が補助柱穴と考える。

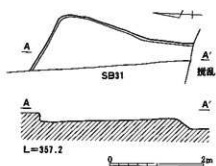
遺物：黒色土器A坏（1・2）、土師器坏A（3・4）及び同碗（5）が出土している。1は内面のミガキが暗紋状になっている。本跡から出土した坏は1・2以外はすべて土師器である。5は最大

径より下にタタキ目がみられる。

時期：土器の様相から10世紀前半と考える。



第345図 SB33



第346図 SB34



SB34 (③区II K18、第346図)

検出：VI層で検出。SB26・27を切り、SB31に切られる。

埋土：黒褐色土の単層。自然埋没と考える。

構造：規模は不明。残存部から正方形または長方形のプランを持つと思われる。

深さは約15cm。地山をそのまま床面としている。

カマド、柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物：土師器坏A(1)が1点出土したのみである。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から11世紀前半と考えられる。

SB35 (③区II P17・22、第347図、PL102)

検出：VI層で検出。SB16を切り、SK746に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：東側が調査区外にかかるが、約2m四方の正方形プランになると思われる。深さは約35cm。

地山をそのまま床面としている。

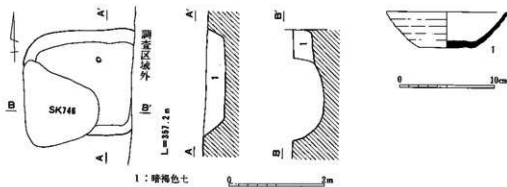
カマド、柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物：軟質須恵器坏A(1)が出土している。

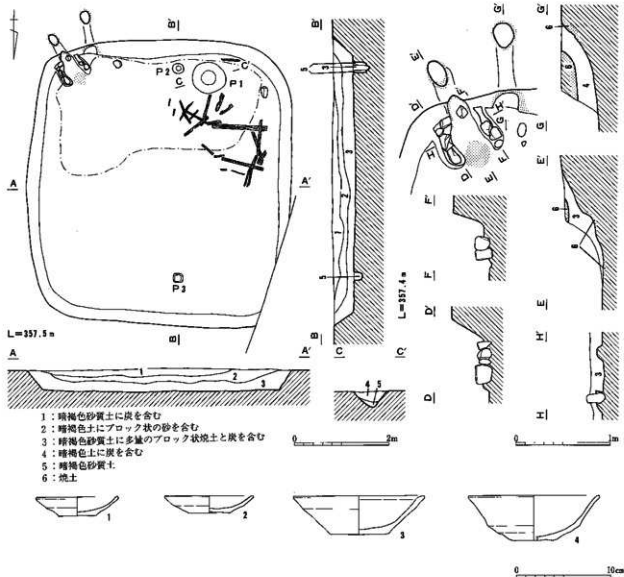
そのほかには、黒色土器A、土師器、灰釉陶器が少量出土している。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から9世紀後半と考えられる。

所見：他のSBと比べ著しく小さい規模から、竪穴状遺構として登場した。



第347図 SB35



第348図 SB37

SB37 (③区IT15・IIP11、第348図、PL97・102・104)

検出：VI層で検出。他の遺構との切り合いなし。

埋土：3層に分層され、各層にブロック状の土や焼土、炭化物を含む。人為的埋没と考える。

構造：5.6m×5.8mの長方形プランをもつ。深さは約50cm。南側はたたきのはっきりした床であるが北側は地山をそのまま床面としている。

南東隅に長さ1mの煙道をもつカマドを2基検出した。この内東側のカマドは袖と火床を確認した。袖は石を床に突き刺し、周囲を黄褐色砂質土で固めた構造であった。西側のカマドは煙道と袖石を抜き取った痕跡のみが確認された。3基のピットのうちP2は柱痕が確認された。

遺物：土師器環A(1～4)が出土しており、1・2と3・4の2法量に分かれる。そのほかには須恵器、黒色土器A、土師器甕及び羽釜、灰釉陶器が出土している。環は大部分が土師器である。

金属製品は鉄製の紡錘車(PL104-9)が出土している。また、住居跡の南西側で炭化材が出土した。出土位置は床面より高く、砂や土が混じっているため、投棄されたものと思われる。

時期：土器の様相から11世紀前半と考える。

(3) 溝

平安時代と考えられる溝は23条が確認された。規模は様々であるが走る方向によって、集落の南限であるSD10に平行もしくは直行するものと北西-南東に蛇行しながら走るものの2種類に大別できる。

SD01 (②区IIU06・11、第349・350図、PL102)

検出：VI層で検出。SD03・SK176を切り、SK177・185に切られる。

埋土：単層。少量ではあるがブロック状の土を含む。人為的埋没であると考えられる。

構造：南北に直線的に伸びる。全長約6.2m、幅約88cm、深さ約20～45cmで中央部に向かって深くなる。

遺物：須恵器環A(1・2)、黒色土器A環(3～5)が出土している。2は軟質須恵器である。3～5のミガキは粗雑であった。そのほか黒色土器B、土師器、灰釉陶器が出土している。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から9世紀後半と考えられる。

SD03 (②区IIU01・06、第349・350図、PL102)

検出：VI層で検出。SD01に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：南北に直線的に伸びる。全長約3.4m、幅約60cm、深さ約16cmで底部の比高差は小さい。

遺物：黒色土器A環(6)が出土している。6のミガキは粗雑である。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から9世紀後半と考えられる。

SD21 (③区IIP17、第349・350図、PL102)

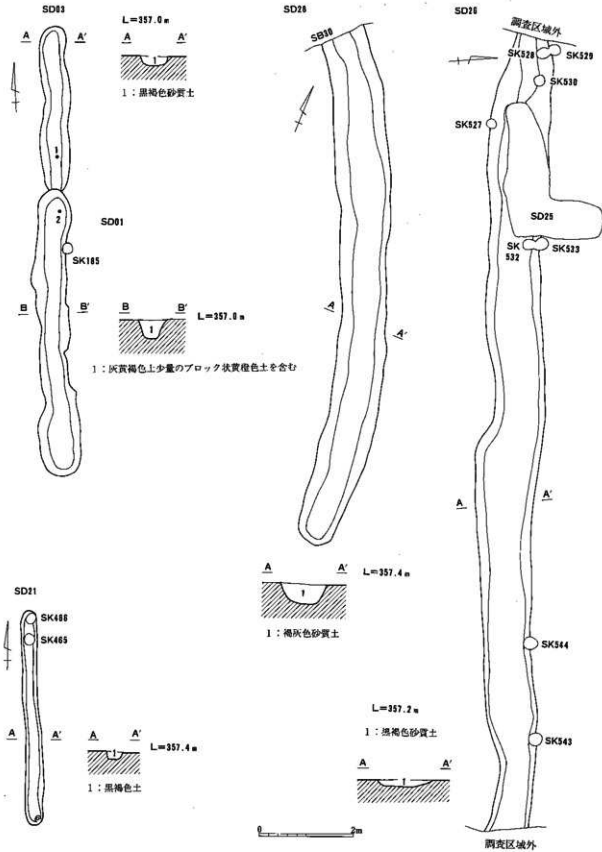
検出：VI層で検出。SB15、SD22を切り、SK465・466に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：南北に直線的に伸びる。全長約4.6m、幅約60cm、深さ約16cmで南北両端が若干深い。

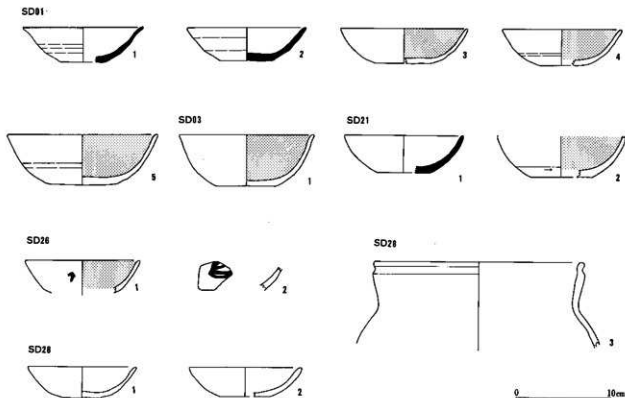
遺物：軟質須恵器環A(7)、黒色土器A環(8)が出土している。8は丁寧なミガキがなされ、底部から底部下半にかけて回転ヘラ削りがなされている。そのほか土師器が出土している。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から10世紀後半と考えられる。



第349図 SD01・03・21・26・28

第4章 築地遺跡



第350図 SD01・03・21・26・28出土遺物

SD26 (③区I T20・II P16・17、第349・350図)

検出：VI層で検出。SD25、SK527～534・543・544・626・759に切られる。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：東西に直線的に伸び、両端は調査区外に至る。方向はSD10とほぼ平行する。幅約0.6～1.2m、深さ約14cmで底部の比高差は小さい。

遺物：黒色土器A環(9・10)が出土している。ともに墨書が認められるが、読み方は不明。そのほかに須恵器、土師器が少量出土している。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から、9世紀後半と考えられる。

所見：本跡とSD10の間に9世紀後半の遺構が多いことから、この時期の集落の北限と考える。

SD28 (③区II P06・11、第349・350図、PL102)

検出：VI層で検出。SB30に切られる。

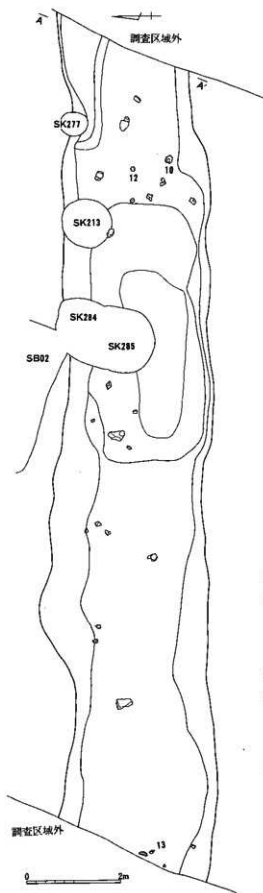
埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：南から北西にかけてゆるやかな弧を描きながら伸びる。北西端をSB30に切られているため、長さは不明。幅約1.2m、深さ約40cmで中心部がとくに深い。

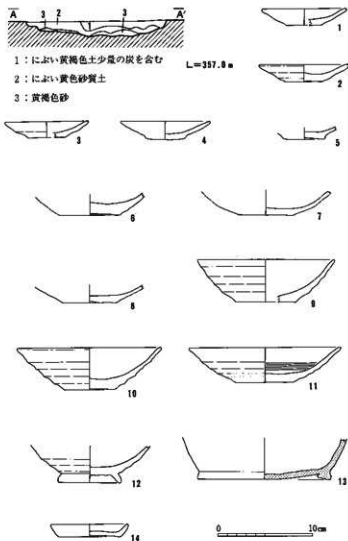
遺物：土師器環A(11・12)及び同甕(13)が出土している。ほかは少量の土師器のみである。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から9世紀後半と考えられる。

所見：すぐ東に位置するSD27が本跡とほぼ平行して伸びており、関連があると思われる。また北西に位置するSD31・47～49も本跡と同様の方向に走っており、これらのSDで一つの空間を区画しているとも考えられる。



第351図 SD10



SD10 (②区 I Y18・19・20、第352図、PL97・102・104)

検出：VI層で検出。SK213～215・235・277・282～286に切られる。また本跡プラン内の検出面上にSQ01が存在する。

埋土：3層に分層され、自然埋没と考える。

構造：東西に直線的に伸び、両端は調査区外に至る。

幅約2.8～3.6m、深さ約27～57cmで溝中央に最深部をもつ。低部の所々に凹凸がみられる。

遺物：土師器坏A (1～11) 及び同椀 (12)、灰粘陶器瓶類 (13)、カワラケ (14) が出土している。土師器坏Aは1～5と6～11の2法量がみられる。11はSB31出土の坏 (第343図15) と同様に内面にカキ目がみられる。13は内面に朱が付着しており、朱墨碗に転用されたと考える。14は本跡を切っている中世の土坑に帰属する可能性もある。図示した以外に須恵器、黒色土器A、黒色土器B、灰粘陶器が出土している。

坏は土師器の比率が高い。金属類は刀子（PL104-4）、鉄滓が出土している。

時期：本跡はSB02・SK284・SQ01との切り合い関係から9世紀後半のSB02以前に造られ、SQ01が形成される12世紀以前に埋まったと考える。

所見：本跡が平安時代集落の南限と考える。

(4) 土坑

平安時代と考えられる土坑は18基が確認された。直径1.5m前後、深さは30cm以上1m未満のものが多く、中世のものに比べると大型である。

SK405 (③区II P 21・U01、第352図、PL103)

検出：VI層で検出。SB32を切る。

埋土：3層に分層され、1・2層にはブロック状の土や炭片が含まれている。3層が自然堆積、1・2層は人為的埋没と考える。

構造：直径約1.4mの円形プランをもつ。深さ約84cm。

遺物：土師器坏A（1）が出土している。そのほかには黒色土器Aが少量出土している。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から11世紀後半と考えられる。

SK744 (③区II K17、第352図、PL103)

検出：VI層で検出。SB33を切る。

埋土：4層に分層される。1～3層はブロック状の土や炭、礫を含む。4層が自然堆積、1～3層は人為埋没と考える。

構造：直径約1.3mの円形プランをもつ。深さ約80cm。

遺物：黒色土器A坏（2）、土師器坏A（3～9）及び同碗（10）と同盤と思われる高台（11）が出土している。2はミガキがみられなかった。土師器坏Aは3～8と9の2法量に分化している。

出土遺物のほとんどを土師器坏Aが占める。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から11世紀後半と考えられる。

SK746 (③区II P17、第352図、PL96・103)

検出：VI層で検出。SB16・35を切る。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：東西約1.6m、南北約1.9mの不整形なプランをもつ。深さ約66cm。

遺物：土師器坏A（12）が出土している。そのほかは黒色土器Aが少量出土しているだけである。

時期：土器の様相や他の遺構との切り合い関係から11世紀後半と考えられる。

SK758 (③区II P16、第352図、PL97・103)

検出：VI層で検出。SK758・759を切る。

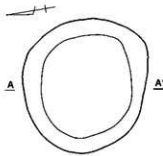
埋土：単層。多量の炭を含んでおり、人為的埋没と考える。

構造：長軸約1.5m、短軸約1.2mの楕円形プランをもつ。深さ約32cmで南側に向かって深くなる。

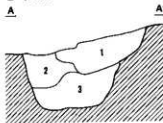
遺物：土師器坏A（13）が出土している。そのほかは黒色土器Aが少量出土しているのみである。

時期：土器の様相や他の遺構との関係から11世紀前半と考えられる。

SK485



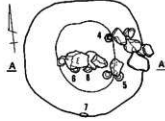
L=357.2m



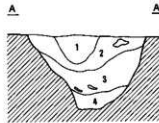
- 1: 黒褐色土に少量の炭を含む
- 2: 黒褐色土にブロック状黄褐色土を含む
- 3: 黒褐色砂質土。しまりやや弱い



SK744



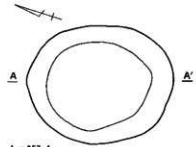
L=357.2m



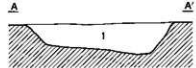
- 1: におい黄色褐色土にブロック状オリーブ褐色土を含む。しまりやや弱い
- 2: 黒褐色土にブロック状黄褐色土及び炭を少量ずつと礫を含む
- 3: におい黄褐色砂質土に少量のブロック状褐色土と礫を含む
- 4: 黄褐色砂に少量の褐色砂を含む



SK756



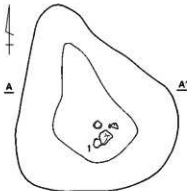
L=357.4m



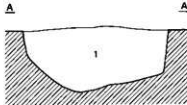
- 1: 黄褐色土に多量の炭を含む



SK746



L=357.2m



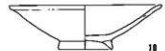
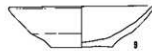
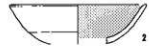
- 1: 黒褐色土



SK485



SK744



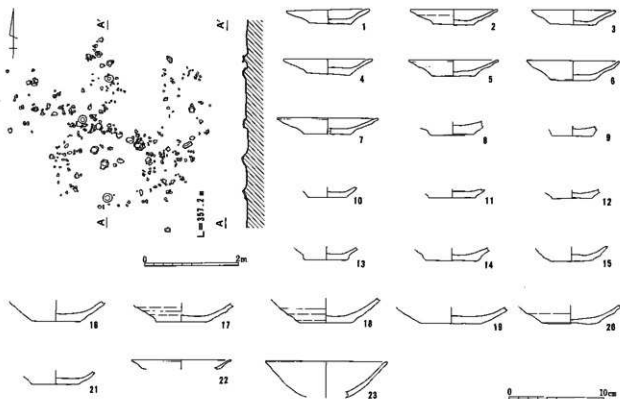
SK756



第352図 SK405・744・746・756

(5) その他の遺構

土器集中遺構1基と溝に挟まれた道路状遺構2基が検出された。



第353図 SQ01

SQ01 (②区I Y19、第353図、PL97・103・104)

検出：VI層で検出。SD10のプラン内で確認される。

構造：東西約2.2m、南北約2mの範囲に土器片が、面的に集中して分布する。掘り込みはない。

遺物：土師器環A（1-23）は2法量分化がみられ、小型のものは偏平化している。また胎土によって2種類に分かれる。2・3・5・12・19・22・23は砂、黄白色粒が混入されており、黄白色に焼き上がっている。それ以外のものは赤砂が混入され、赤褐色に焼き上がっている。黄白色の環はどちらの法量も混入物や焼成は均一である。それに対し赤褐色の環は小型品ほど赤砂などの混入物が多い。

図示した以外に黒色土器Aが少量出土しているが、大半は小型の土師器環Aである。土器以外では刀子（PL104-4）、鉄滓が出土している。

時期：土器の様相から11世紀後半～12世紀前半と考えられる。

SC01 (③区II K07・08・13)

検出：VI層で検出。SB25を切り、SD53に切られる。

構造：厚さ約3cmの突き詰められた黄橙色土が、幅約60cmで北西～南東方向に伸びる。確認できた部分の長さは約13m。北西端は後世の削平を受けたため、はっきりしない。両脇にSD41・43～45が付随する。

遺物：なし。

時期：SB25を切ることから10世紀中ごろ以降と考えられるが、細かい時期は不明。

所見：道としては幅が狭いため付随するSDも含め、区画に用いられていたと思われる。またSC02が南側にはほぼ平行しており、両者で一つの大きなSCを形成しているとも考えられる。

SC02 (③区IIK07・12・13・18)

検出：基本土層VI層で検出。SD37・42に切られる。

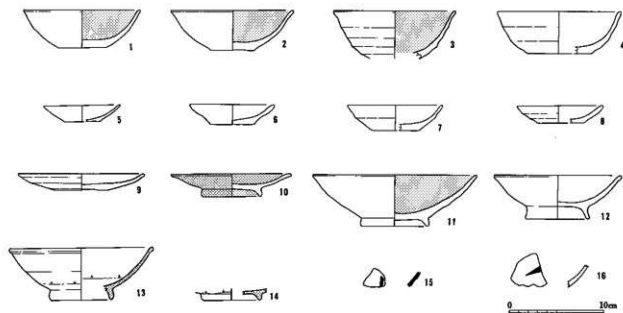
構造：厚さ約3cmの突き固められた黄橙色土が、幅約0.8～2.2mで北西～南東方向に伸びる。確認できた部分の長さは約16m。両脇にSD36・38～40が付随する。

遺物：なし。

時期：SC01と対を成す遺構と考えると10世紀中ごろ以降と考えられるが、細かい時期は不明。

所見：付随するSDも含め、区画に用いられていたと思われる。また北側にほぼ平行するSC01とで一つの大きな区画を形成しているとも考えられる。

(6) 遺構外出土遺物



第354図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物 (第354図、PL103・104)

黒色土器A環(1～3)及び同碗(11)、黒色土器B皿(10)、土師器環A(4～8)及び同皿A(9)と同碗(12)、灰軸陶器碗(13・14)、墨書がみられる須恵器(15)と土師器(16)が出土している。

1～3及び11は風化のためミガキは観察できない。13・14はともに光ヶ丘1号窯式である。14は底部内外面に朱が付着しており、朱墨硯に転用されていたと考える。15・16は破片が小さく、読み方は不明である。遺構外出土の土器は土師器が中心であり、9世紀後半よりさかのぼるものは確認されなかった。

鉄製品では紡錘車の軸(PL104-8)、釘(PL104-11)、鉄滓が出土している。また銅製品では沙波理鋳(PL104-14)が出土している。沙波理鋳はSB31が攪乱を受けている地点で出土しており、帰属性が判然としないため、遺構外出土扱いとした。

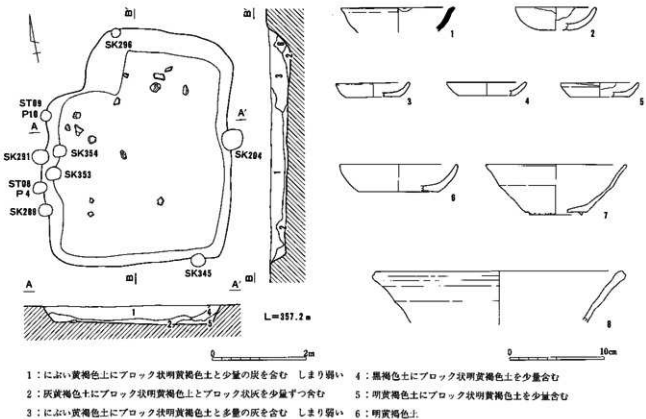
2 中 世

(1) 概 要

中世の遺構は②～③区のほぼ全面で検出された。遺構は平安時代集落の南限であるSD10を越えて南へ展開し、北限は③区のSD37まで南下している（第323図）。遺物はロクロ成形のカワラケが中心で、山茶碗、こね鉢、青磁が少量出土している。遺物から中世集落の始まりは13世紀後半ごろと考えられる。

(2) 竪穴状遺構

②区で3基のSBが検出された。いずれも住居跡とする判断材料を欠くことから、竪穴状遺構として登録した。また3基ともやや位置がずれるが、似通った規模、形状、方向の掘立柱建物跡に切られている。



第355図 SB07

SB07 (②区 I Y05、第355図、PL98・103・104)

検出：VI層で検出。SB05・10～12を切り、ST08P4及びST09P6・7・10・11、SK204・289・291・296・345・354・355に切られる。

埋土：6層に分層される。ブロック状の土、炭、灰を含んだ埋土である。人為的埋没と考える。

構造：4.0m×5.0m。北西角が引っ込む不整形なプランをもつ。深さ約36から44cm。地山をそのまま床としている。カマド、柱穴等の施設は検出されなかった。

遺物：軟質須恵器（1）、カワラケ（2～6）、山茶碗（7）、こね鉢（8）が出土している。

1は内面に炭化物が付着しており、灯明皿であったと考える。他の出土遺物と大きく様相が異なるため、流れ込みと思われる。3～6はロクロナデによる体部の調整がなされ、底部から体部へ

明確な屈曲をもって立ち上がる。3～5と6の2法量がみられる。2はほかのカワラケと異なりロクロナデの後で、体部外面に手持ちへう削り調整がなされている。また、2と5は口縁部に炭化物が付着しており、灯明皿であったと考えられる。7は白土原窯式と思われる。8は東海系と思われる。

図示した以外に青磁、珠洲産と思われる甕、流れ込みと考える平安時代の土器が出土している。金属類では刀子(PL104-1)、釘(PL104-10)、銭貨が出土している。銭貨は3点で、開元通寶(PL104-17)、元豊通寶(PL104-16)、元祐通寶(PL104-19)である。

時期：遺物の様相から13世紀後半と考えられる。

所見：本跡は住居施設がまったく検出されなかったので、竪穴状遺構として登録した。またやや南西にずれるものの、同じようなプランをもつST09が本跡を切っている。本跡を埋め立てた後に、掘立柱建物に建て替えたと考えられる。

SB08 (②区 I Y24・25)

検出：VI層で検出。ST02P 1、SK218・224に切られる。

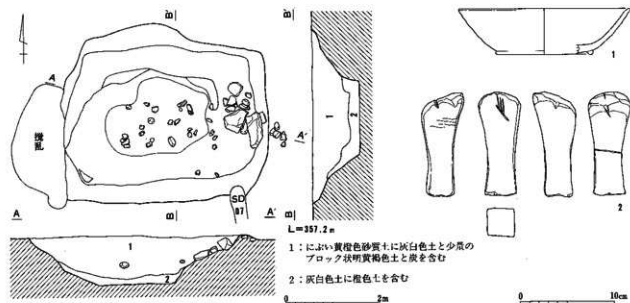
埋土：少量の炭を含むふい黄褐色土の単層。自然埋没と考える。

構造：南北約3.5m。東西方向は試掘トレンチに切られており不明。方形のプランをもつと思われる。深さ約14cm。壁は緩やかに立ち上がる。厚さ5cmの炭を含んだ灰白色土を固くたたきしめた貼床をもつ。カマド、柱穴などの施設は確認されなかった。

遺物：なし。

時期：ST02との切り合い及び位置関係がSB07とST09の関係に似ていることから、SB07と同様の13世紀後半と考えられる。

所見：本跡は貼床以外に住居施設がまったく検出されなかったので竪穴状遺構として登録した。またやや南東にずれるものの、同じようなプランをもつST02が本跡を切っており、本跡を埋め立てた後に掘立柱建物に建て替えたと思われる。



第356図 SB09

SB09 (②区 I Y23・24、第356図、PL98・103・104)

検出：VI層で検出。ST01P1～4、SD07、SK304・307に切られる。

埋土：2層に分層される。ブロック状の土や炭、礫が混じることから、人為的埋没と考える。

構造：4.4m×3.3～3.8m。基本的に長方形プランであるが北西壁がやや張り出すため、若干不整形である。深さ約1m。地山をそのまま底部とし、中心の約4m²が平らになっている。底部直上に薄く炭が堆積し、炭の下には褐鉄がみられた。遺構内で施設は確認されなかった。

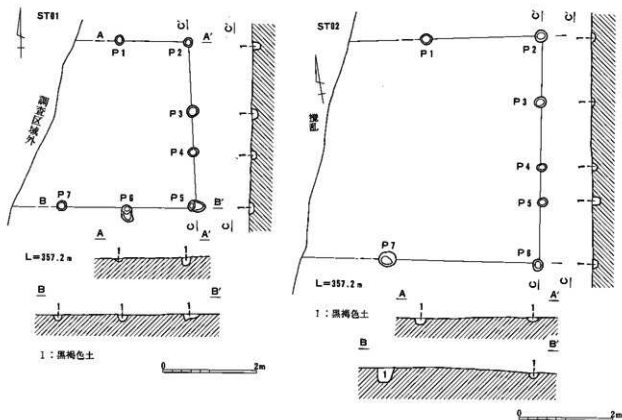
遺物：施釉陶器(1)、砥石(2)が出土している。1は内面が全面施釉されている。そのほかに、青磁、須恵器、黒色土器A、土師器、灰釉陶器、鉄滓が出土している。

時期：STとの切り合い関係がSB07と似ていることから、SB07と同様の13世紀後半と考えられる。

所見：本跡は住居施設が検出されなかったことや、断面の形状から住居ではないと判断し、竪穴状遺構とした。深さや断面の形状から井戸の可能性もあるが、判断材料が少ないため断言できない。

(3) 掘立柱建物跡

II K12グリッド付近、I T20及びII P16・17～I Y19・20間、I Y23・24以南の3カ所に土坑の分布が集中している。ここに掘立柱建物があると考え、冬期整理作業時に7棟を登録した。いずれも側柱で、棟軸はほぼ南北方向である。



第357図 ST01・02

ST01 (②区 I Y23、第357図)

検出：VI層で検出。SB09を切る。

埋土：各柱穴とも単層で、自然埋没と考える。柱痕は確認できなかった。

構 造：側柱。梁行3間（3.5m）で桁行は調査区外に掛かるが2間（4m）以上と思われる。

柱間は梁行が1.2m、桁行が0.7~1.3m。軸方向はN-2-W。

柱穴は円形または楕円形で深さ5~17cm。

時 期：SB09を切ることから14世紀以降と考えるが遺物の出土がなく、細かい時期は不明。

所 見：SB09が掘立柱建物に建て替えられたと考える。

ST02 (②区 I Y25・III E04・05、第357図)

検 出：VI層で検出。SB08を切る。

埋 土：各柱穴とも単層で、自然埋没と考える。柱痕跡は確認できなかった。

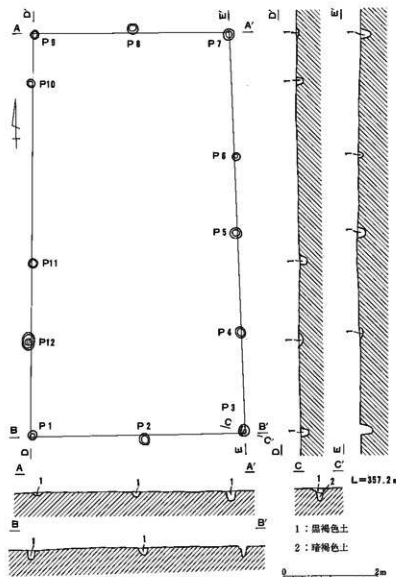
構 造：側柱。梁行4間（4.7m）で桁行は攪乱を受けているが2間（3.3m）以上になるとと思われる。

柱間は梁行が2.2~2.9m、桁行が0.6~1.2m。軸方向はN-5-E。

柱穴は円形で深さ約7~17cm。

時 期：SB08を切ることから14世紀以降と考えるが遺物の出土がなく、細かい時期は不明。

所 見：SB08が掘立柱建物に建て替えられたと考える。



ST04 (②区 I Y09・10・14・15、第358図)

検 出：VI層で検出。ST06・07とプランが重なるが柱穴の切り合いがなく、3棟の新旧関係は不明。

埋 土：P3以外は単層で、自然埋没と考える。柱痕跡は確認できなかった。

構 造：側柱。梁行2間（4.5m）×桁行4間（8.5m）で本遺跡の掘立柱建物跡では最大である。

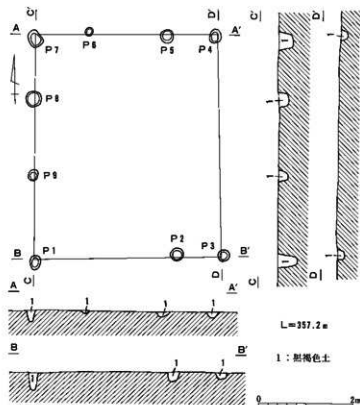
柱間は梁行が2~2.2mで桁行が1.4~2.4m。

軸方向はN-0。

柱穴は円形または楕円形で深さ約6~24cm。

時 期：中世の竪穴状遺構を切る掘立柱建物跡と軸方向が同じことから中世と考えるが、遺物の出土がないため細かい時期は不明。

第358図 ST04



第359図 ST06

ST06 (②区 I Y09・10・14・15、第359図)

検出：VI層で検出。ST04・07とプランが重なるが柱穴同士の切り合いがなく、3棟の新旧関係は不明。

埋土：各柱穴とも単層で、自然埋没と考える。柱痕跡は確認できなかった。

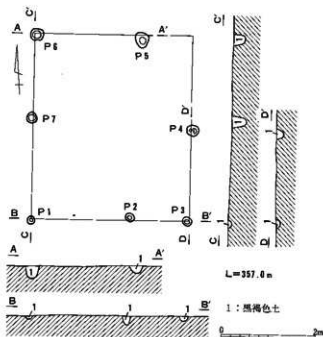
構造：側柱。梁行3間(3.8m)×桁行3間(4.8m)。

柱間は梁行が0.8~1.4m、桁行が0.9~1.6m。

軸方向はN-0。

柱穴は円形または楕円形で深さ約6~40cm。

時期：中世の竪穴状遺構を切る掘立柱建物跡と軸方向が同じことから14世紀以降と考えるが、遺物の出土がないため、細かい時期は不明。



第360図 ST07

ST07 (②区 I Y09・10・14・15、第360図)

検出：VI層で検出。ST04・06とプランが重なるが、柱穴同士の切り合いがなく、3棟の新旧関係は不明。

埋土：各柱穴とも単層で、自然埋没と考える。柱痕跡は確認できなかった。

構造：側柱。梁行2間(3.4m)×桁行3間(3.9m)。

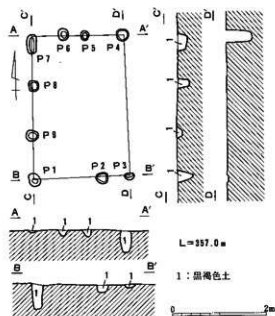
柱間は梁行が1~2m、桁行が1.5~2m。

軸方向はN-4-E。

柱穴は円形または楕円形であり、深さ約8~36cm。

遺物：なし。

時期：中世の竪穴状遺構を切る掘立柱建物跡と軸方向が同じことから14世紀以降と考えるが、遺物の出土がないため、細かい時期は不明である。



第361図 ST08

ST08 (②区 I Y04・05、第361図)

検出：VI層で検出。平安時代遺構のSB06・10・12と中世遺構のSB07を切る。

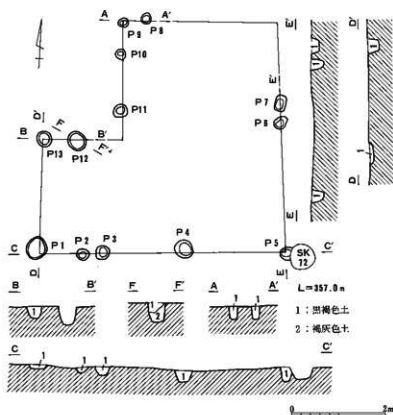
また、ST09とプランが重なる。ST09と柱穴同士の切り合いはない。

埋土：各柱穴とも単層で、自然埋没と考える。柱痕跡は確認できなかった。

構造：細柱。梁行3間(2m)×桁行3間(3.1m)。柱間は梁行が0.8~1m、桁行が0.4~0.8m。軸方向はN-0。

柱穴は円形または楕円形で深さ約5~56cm。

時期：SB07を切るため、14世紀以降と考えるが細かい時期は不明。またST09がSB07を埋め立てて造られたとすると、本跡の時期はST09より更に新しくなると思われる。細かい時期は遺物の出土がないため不明。



第362図 ST09

ST09

(②区 I Y04・05、第362図)

検出：VI層で検出。SB05・07・10・11・12を切り、SK72に切られる。ST08とプランが重なり合う。

ST08と柱穴同士の切り合いはない。

構造：南西が張り出すL字型のプランをもつ。

側柱。梁行は北側3間以上(3.3m)、南側4間以上(5.3m)×桁行4間以上(4.9m)。

柱間は梁行が0.5~2.2m、桁行が0.6~2.8m。

軸方向はN-4-W。

柱穴は円形または楕円形で深さ約15~32cm。

時期：SB07を切るため、14世紀

以降と考えるが、遺物の出土がないので細かい時期は不明。

所見：やや位置、方向はずれるもののSB07と似たプランをもつ。SB07を埋め立てて、独立柱建物に建て替えたと考える。よってプランが重なるST08より本跡は古いと判断する。

(4) 溝

溝跡は14条検出された。東西あるいは南北方向にほぼ直行する直線的なものと、L字型のプランをもつものに大別される。L字型の溝は区画された内側に掘立柱建物の存在を想定した。しかし土坑は散在するものの柱穴となりうるものは確認されなかった。

SD02 (②区I Y15・II U11、第363図、PL98・103)

検出：VI層で検出。SD04・13を切り、SK129・130・172～174に切られる。

埋土：2層に分層され、自然埋没と考える。

構造：東と南へ伸びるL字型のプランをもつ。長さは屈曲点～南は約4.9m、東へは約3.8m伸び、調査区域外に至る。幅60～70cm、深さ約15～40cmで南側ほど深い。

遺物：カワラケ(1)が出土している。灰黄褐色の胎土に細かい砂を含む。色調、胎土ともにSK526出土のカワラケ(第365図4)と酷似している。

時期：土器の様相から13世紀後半と考える。

SD08 (②区III E04・05・09・14、第363図、PL98・104)

検出：VI層で検出。SD06・09を切り、SD12、SK339に切られる。

埋土：4層に分層され、自然埋没と考える。

構造：東と南へ伸びるL字型のプランをもつ。長さは屈曲点～南は約14.9m、東へは約8.4m伸び、調査区域外に至る。幅1.5～2m、深さ約67～114cmで屈曲点付近に最深部をもつ。

遺物：馬骨(3・4)、人骨(5・6)が出土している。3は成獣と考えられる左大腿骨であり、4は肋骨及び種名不明の四肢骨である。4付近からは馬の下顎骨と小白歯が出土しているが、3・4と同一個体であるかは不明である。5は右大腿骨が2本と左脛骨及び腓骨である。6は左下顎骨とそれに付いた第1小白歯～第3大白歯及び遊離した左下顎第2大白歯であり、男性と考えられる。人骨は右大腿骨が2本出土しているので少なくとも2個体分が出土していることになる。人骨、馬骨共に埋土中位の出土であり、埋没過程で投棄されたと思われる(付章第2節参照)。

そのほかに黒色土器A、土師器、白磁、青磁、刀子(PL104-7)が出土している。

時期：遺物の様相から14世紀と考えられる。

所見：規模の大きさから溝の内側に館の存在を想定して調査したが、遺構・遺物は確認されなかった。

SD37 (③区II K12・13・17・18、第363図、PL98・103)

検出：VI層で検出。SB31、SD36・38を切る。

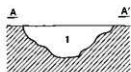
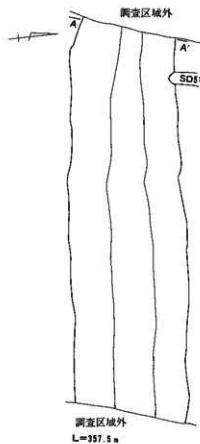
埋土：2層に分層される。2層目の埋土はほかの遺構ではまったくみられず、人為的埋没の可能性が考えられる。

構造：西と南へ伸びるL字型のプランをもつ。長さは屈曲点～南は約10m、西へは約6m伸び、調査区域外に至る。幅50～90cm、深さ20～30cm。

遺物：中世土器と思われる土師質の蓋(2)が出土している。そのほかには平安時代の土器とカワラケが出土している。

時期：遺物の様相から14世紀と考えられる。

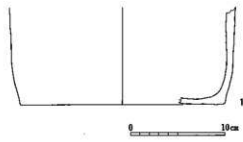
所見：本跡に囲まれる形で40基の土坑が点在する。このうち幾つかは掘立柱建物の柱穴であると考えられたが、掘立柱建物として組めたものはなかった。



1: 1 による黄褐色砂質土に直径1~5cmの礫を少量含む



第364図 SD50



SD50 (③区II P01・02・03、第364図)

検出: VI層で検出。S B30及びS D31・32・47を切り、SD51、SK565・624に切られる。

埋土: 単層。自然埋没と考える。

構造: 東西に直線的に伸びる。幅4~5m。長さは調査区域外に掛かるため不明。深さ約1.4m。東西の比高差はみられない。

遺物: 内耳鍋(1)が出土している。そのほかに青磁とすり鉢の小片、及び流れ込みと思われる須恵器と土師器が出土している。

時期: 遺物の様相から15世紀と考えられる。

所見: 本遺跡最大の溝跡である。15世紀ころの集落の境界を示していると考えられるが、柵列などの付属施設が検出されなかったため、当時の集落がSD50の南北どちら側にあったかは不明。

(5) 土坑

本遺跡の土坑は(3)で述べたように、3ヶ所に分かれて分布している。規模は直径15~25cmで円形もしくはやや角張った楕円形のプランを持つものが最も多くみられる。用途としては柵列あるいは掘立柱建物の柱穴が考えられるが、柱痕跡が確認されたものはない。また、位置関係から掘立柱建物の柱穴と判断できたものも少ない。しかし、これら土坑群の中に柵列あるいは掘立柱建物の柱穴が含まれている可能性は否定できない。

SK14 (②区I Y09、PL104)

検出: VI層で検出。ST06 P 9に切られる。

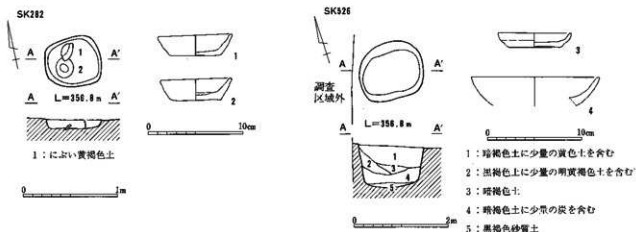
埋土: 黒褐色土の単層。自然埋没と考える。

構造: 長軸約52cmのやや角張った楕円形のプランを持つ。深さ約40cm。ほぼ垂直に立ち上がる壁と平坦な底部を持つ。

遺物: 硯の破片と思われる黄白色の粘板岩(PL104-22)が出土している。

そのほかにカワラケが少量出土している。

時期：ST06P9との切り合い関係から13世紀後半と考える。



第365図 SK282・526

SK282 (②区IY20、第365図、PL98・103)

検出：VI層で検出。SD10を切る。

埋土：単層。自然埋没と考える。

構造：長軸約60cmのやや角張った楕円形のプランを持つ。深さ約10cm。平坦な底部を持つ。

遺物：カワラケ(1・2)がほぼ完形で出土している。いずれも黄白色で、胎土に赤砂が少量混入している。焼成はやや軟質である。

時期：遺物の様相から14世紀と考えられる。

SK526 (②区IT20、第365図、PL103)

検出：VI層で検出。他の遺構との切り合い関係はなし。

埋土：5層に分層される。堆積の状況から人為的埋没と考える。

構造：長軸約1.4mのやや角張った楕円形のプランを持つ。深さ約90cm。平坦な底部を持つ。

遺物：カワラケ(3・4)が出土している。3は黄白色で胎土に赤砂が少量混入する。4は灰黄褐色で胎土に細かい砂が混入しており、SD02出土のカワラケ(第363図1)に似ている。破断面が研磨されて平らになっており、破片が再利用されたと考えるが使用方法は不明。

そのほかに須恵器と土師器が少量出土している。

時期：遺物の様相から14世紀と考えられる。

(8) 遺構外出土遺物 (PL104)

検出面よりカワラケ、すり鉢、青磁が少量出土しているがいずれも小片で、器形や法量を観察できるものは出土しなかった。土器以外では大観通寶(PL104-17)、皇宋通寶(PL104-18)、元豐通寶といった銭貨が出土している。銭貨も含め、遺物のほとんどはSB07を中心とする半径約10mの範囲で出土している。この付近は中世と思われる土坑が点在しており、掘立柱建物の存在をうかがわせるが掘立柱建物として組めたものは少ない。

第3節 小 結

1 水田と集落の成立について

調査の概要で述べたように、今回の調査では①区で水田層が2層（IV層とVII層）確認されている。どちらも遺物の出土はないが、IV層は平安～中世の検出面と概ね同じ高さで確認される。そして平安時代集落の成立から終焉まで一貫して、SD10以南に居住域が展開していかないことから、南側に水田が存在したことをうかがわせる。よって①区で確認されたIV層の水田は、ほぼ集落と同時期のものと考えられる。これに対し、VII層は平安～中世の検出面より下層であるため、集落が成立する9世紀後半以前のものと見える。よってVII層の水田の時期が、築地遺跡周辺に開発の開始時期と推測する。しかしVII層が確認できた範囲は南北約30mと狭いため、本格的な開発の開始は集落が営まれる9世紀後半であると考えられる。

この時期は築地遺跡の南に位置する石川条里遺跡の条里水田が、9世紀後半に比定される千曲川の洪水によって埋没した時期と重なる。この洪水砂層は千曲川流域や長野盆地南部に普遍的にみられるが、築地遺跡では確認されていない。築地遺跡周辺は千曲川から離れ、標高も石川条里遺跡より高いこともあって洪水の影響を受けなかったと思われる。石川条里遺跡の水田が洪水以後は放棄されていることから、同遺跡周辺の洪水の影響を受けなかった地域が開発の対象となったと推測される。石川条里遺跡の約1.5km北に位置する築地遺跡も洪水後の開発対象地域の一つであったと考えられる。

2 集落の変遷について

(1) 平安時代

先の第1項で述べたように、集落の成立は9世紀後半と考えられる。この時期の住居跡は、ほとんどがSD10～SD26間に分布している。この両SDの間にもう1条、両SDに平行して走るSD13（I Y14・II U11）が存在する。このSDは、9世紀後半と思われるSB01に切られているため、少なくともSD10よりは古いと思われる。よって集落は当初SD13～SD26間で成立し、その後間もなくSB01が造られるに及び、集落の境界線がSD10まで南下したと考えられる。以後、集落の南限は平安時代を通じて不変であり、SD10と①区の水田の間、南北約30m強は集落成立から終焉に至るまで、平安時代と思われる遺構はみられない。

10世紀に入ると住居跡数も増加し、集落は遺跡の北端まで広がる。しかし、住居跡の分布は連続しておらず、9世紀後半から続くSD10～SD26間の居住域と、微高地の頂点であるII K18グリッド付近の2カ所に分かれて分布している。II K18グリッド付近は9世紀後半にもすでにSB28がみられるが、本格的に居住域を形成するのは10世紀に入ってからである。集落の北への展開から、集落北側の開発が始まったと思われる。築地遺跡の北側は微低地となっており、籬ノ井～川中島間の試掘調査時に水田層の存在が確認されている。この水田層は遺物の出土がなく、また攪乱を受けている箇所が多いため、時期や範囲については不明な点が多いが、この水田の開発に伴ってII K18グリッド付近に居住域が設けられた可能性も考えられる。

11世紀に入ると南北に分かれていた居住域は次第に一つにまとまり始める。それと同時に住居跡の数も減少傾向となる。11世紀後半には築地遺跡最大の住居跡であるSB31が造られている。このような大型住居が集落のはずれに造られるとは考え難い。よって住居跡数の減少は居住域の移動ではなく、集落の衰退であると考えられる。12世紀の可能性を持つ遺構はSQ01以外にはみられないため、平安時代の集落は12世紀

に入るころには終焉を迎えていると推測する。自然災害の痕跡がみられないことから、集落の終焉は古代から中世に向かう社会的な変化に起因すると考えられ、今後の調査・研究が期待される。

(2) 中 世

中世集落の成立は、竪穴状遺構の時期から13世紀後半と考えられ、平安時代集落とは150年近い断絶期間がある。築地遺跡の中世集落の成立と前後して、本遺跡の北に位置する於下遺跡の集落も成立している。13世紀前後に犀川扇状地の開発が始まったと考えられる。本遺跡の中世集落も、開発の流れの中で成立した集落の1つであるといえる。前述の竪穴状遺構は数も少なく、埋め立てられて掘立柱建物に建て替えられていることから、本遺跡周辺の再開発が始まった時の臨時的住居であったと推測する。よって本格的に集落が成立するのは、掘立柱建物が造られる14世紀前後であると思われる。

遺構の分布は大きく3カ所に分かれる。位置は北から、ⅡK12グリッド付近、ⅠT20及びⅡP16・17グリッド～ⅠY19・20グリッド間、ⅠY23・24グリッド以南の3カ所である。このうち、ⅠY23・24グリッドは平安時代集落の南限であるSD10の南側にあたり、平安時代には全く手つかずであった場所である。また、残る2カ所は9世紀後半～10世紀にかけての平安時代集落の居住域とほぼ一致する。3カ所ともし字型の溝と直径15～25cmの土坑群が分布している。土坑群のうち掘立柱建物として組めたものはわずかであるが、掘立柱建物が存在した可能性は高いと考える。遺物や遺構の軸方向などから、ほぼ同時期に3カ所の居住域が併存していたと推測する。

その後の集落の変遷は、内耳鍋が出土したSD50が15世紀に比定できるものの、遺物が少ないため、15世紀以降については不明な点が多く残った。

参考文献

- 長野県埋蔵文化財センター 1997「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15-長野市内その3-石川糸里遺跡-」
- 長野県埋蔵文化財センター 1997「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16-長野市内その4-篠ノ井遺跡群-」

第5章 於下遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

於下遺跡は長野県の北部、長野市川中島町今里於下に所在する。ここは善光寺平南西部に位置する犀川扇状地の扇央やや上部にあり、遺跡は微視的にみると、扇状地内の網状の低地（河道跡）に挟まれた小微高地に立地する。本遺跡はこれまでは隣接する於下館に含まれず、遺跡と認知されていなかったが、今回はじめて北陸新幹線建設に伴い調査が実施されることになった。なお、調査前の地表面ではL字状に曲がる堀の痕跡が認められていた。

2 調査の概要

本遺跡の発掘調査は北陸新幹線建設に伴うもので、調査に先立つ平成5年度に予定地内で試掘調査が実施された。試掘調査では、路線予定地の中央を貫く細長いトレンチが入れられ、基本土層は現耕作土、善光寺地震に伴う犀川洪水土と思われる土層、黒褐色土、砂礫層の4つに分けられ、この中で黒褐色土の下部から掘り込まれる柱穴・溝跡が確認された。この試掘結果から本遺跡は中世の居住遺跡で、遺跡範囲は小規模な微高地部分と推測された。なお、このトレンチで南側の堀土橋部分を一部破壊してしまった。

翌年の平成6年度に、調査面積約2000㎡を対象とした発掘調査が調査研究員2人によって、11月21日から12月22日までの約1か月実施された。調査は遺構が明瞭に識別できる砂礫層上面まで重機で掘削した後、順次遺構を検出・精査し、最後に空撮・空測を実施した。なお、測量方法や記録方法は姉長野県埋蔵文化財センターの方法に準じ、調査グリッドは国家座標に従ってVIII系 $X=67,000$ 、 $Y=-31,200$ の交点を北西隅の起点とする200m四方の大々地区を設定し、内部を40m四方の大地区、8m四方の中地区、2m四方の小地区に分割している。

3 歴史的環境と地形・土層

(1) 歴史的環境

本遺跡の立地する犀川扇状地の扇央部付近では、詳細な遺跡分布は知られていなかった。しかし、近年における開発の進展とともに新たな遺跡が判明しつつあり、今後この地域の遺跡の詳細な状況が明らかにされてくると期待される。したがって、ここでは現状で知られる様相についてのみ簡単に触れておくことにしたい。これまでに知られる犀川扇状地には、扇央部から扇端部にかけて点在する古墳時代～中世の集落遺跡、扇状地に隣接した西側山地で弥生時代の鉄斧・管玉・勾玉が無頭壺とともに偶然発見された光林寺裏遺跡、善光寺平でも比較的新しいとされる前方後円墳の腰村1号墳や若干の古墳がある。

遺跡分布が希薄な点については、小規模な微高地と網状の旧河道が組み合う複雑な地形環境に加え、近世末期の善光寺地震による犀川氾濫堆積土によって、旧地表面が厚く埋没していることも一因と考えられるが、一方で実態として中世以前の遺跡が少ないとする見解もある。

原明芳は長野県下の古代の集落消長からみた開発時期として、7世紀末～8世紀前半、9世紀後半～10

世紀前半、12世紀の3期あるとし、犀川扇状地の扇央以上で7世紀後半から始まる集落遺跡が確認できない点について、弥生時代以来の開発が一定水準に達し、さらに伝統的な豪族の力も強いので国家が介入できなかった善光寺平南部の特殊性として理解している(注1)。犀川扇状地での遺跡分布は開発のあり方を考える上で重要な問題ではあるが、往時の犀川流路位置などの地形環境を考慮する必要はあろう。

なお、古代の様相を文献記録からみると犀川扇状地周辺は更級郡に属し、氷鏡・斗女・池気郷の3郷あったとされる。この中で遺跡に近いところは氷鏡郷が現川中島付近、斗女郷が篠ノ井北部付近に比定されるが、それぞれの郷の中心は扇央部から下部付近と考えられている。また、東山道から分岐して越後国府へ通じる官道が本遺跡近辺を通ると推測されている。その具体的なルートは、犀川の流路変更が著しいためにたどりにくいとされるが、本遺跡周辺が西側山地際を通り、扇頂付近で犀川を渡河し、渡河付近に日理の駅があったと推測されている(注2)。ちなみに、中世までは扇頂に近い小市・窪寺周辺が犀川の渡河の中心で、江戸時代に北国街道の整備に伴って下流の丹波島に移されたと考えられる。

次に中世である。これまでに知られる周辺の中世遺跡では内後・於下館などの居館と山城のみがあるが、近年新たに判明してきた遺跡がある。また、当地域で偶然の機会に検出された五輪塔など近在の寺院等にも集められているが、これからも周辺に集落遺跡、あるいは墳墓などの遺跡が存在することをうかがわせるものであろう。このように、周辺の中世遺跡の実態は今後の検討を待たなければならないが、古代よりも遺跡数が増加している傾向はうかがえ、中世における犀川扇状地の開発進展を裏づけるとも考えられる。

中世の状況を文献からみると、中世前半では犀川扇状地に布施荘・布施厨・富部厨が存在していたことが知られる。各荘園や厨の範囲は明らかになっていないが、いずれも中心地は古代の郷の中心地周辺となる扇状地扇央部から千曲川の自然堤防にかけて比定する考えが多い。ただし、遺跡地西側に隣接した犀川の渡に近い小松原地区には伊勢社があり、布施厨との関連も想定されている。また、中世の遺跡周辺にいたとされる武士名はあまり明らかになっていないが、地元では小田切氏がいたとする伝承がある。

内後館は小田切氏の上屋敷、於下館は下屋敷とされ、戦国時代に武田氏に攻め滅ぼされた。小田切駿河守を顕彰するために近世に建てられた墓は内後館に隣接した圓成寺にある。この小田切氏については明治時代の町村誌の記述(注3)で、確固たらずと断わりながらも、本来今里村にいて後に犀川対岸の小市に移ったとしている。しかし、現在は小田切氏は佐久方面の海野系に分流した武士で、犀口と称する犀川が善光寺平に出てくる付近北側の、小田切の地に居を構えた武士であろうと考えられている(注4)。

小田切氏は大塔合戦(1400年)では犀川流域の落合・窪寺氏等の武士とともに、守護小笠原氏に反抗した大文字一揆に加わっており、永享12年(1440)結城合戦の際の『結城陣番帳』では、15番に落合・窪寺氏とともにその名がみえるなど、室町前半において犀川流域沿いに隣接した小市・窪寺などの武士との結び付きが強いことが知られる。そして、諏訪大社の祭礼費用を長野県下の武士に割り振った御符札古書では、室町後半期から小田切に隣接した小市・窪寺の地に小田切氏の名がみえるようになる。すなわち、小田切隣接地の小市では、享徳元年(1452)に堀内光頼が諏訪頭役を務めるが、寛正元年(1460)・文正元年(1466)・文明3年(1471)には代官の徳長道頼氏が務め、文明9年(1477)以後は小田切清遠が諏訪頭役を務める。

また、窪寺では窪寺氏が寛正4年(1463)まで諏訪頭役を務めるが、文正元年(1466)には小田切高遠代官官尻遠重氏、文明元年(1469)に小田切高遠代官官尾高重の名がみえる。なお、小田切高遠と同名の人物は応仁元年(1467)に高梨寄子として水内郡宮武郷にもみえている。そして、文明6年(1474)に小田切高遠が記され、文明10年(1478)以後は代官徳長遠綱が務めている。これらの様相から現時点では小田切氏がしたいに犀川北岸の小市・窪寺に勢力を延ばし、15世紀後半では小市に本拠を移し、今里へは犀

川沿岸から南下していったものであろうと推測されている(注4)。

一方で、本来の本拠地とされる小田切の居館が不明瞭な問題や、今里の居館構築者が伝承以外は不明瞭である問題は残される。その後の小田切氏については弘治2年(1556)葛山城に落合氏とともに立てこもって、武田氏側に打ち取られた記録が知られるが、その一族は生き残って上杉氏に従った者もいたようだ。

近世の遺跡周辺は今里村に含まれ、初期に松代藩領、元和8年(1622)には岡田・今井・上水鉤・中水鉤・戸部村とともに上田藩飛地となる。この今里村の近世における石高は、慶長7年(1602)は1145.751石であり、幕末の天保5年(1834)には1165.587石と、近世を通じて大きな変化はみられない。水田耕作の状況については詳細に調べられなかったが、近世を通じて石高に大きな変化がみられないことから、かなりの部分が近世初期までに開発されつくしたと考えられる。なお、この犀川扇状地では近世に犀川から取水する上中下3本の幹線用水が重要な位置を占めていたが、その構築された時期は子細不明ながら慶長年間とされている(注5)。ただし、「上中堰の歴史」では寛永年間の絵図に描かれている扇状地内の流路位置が、現在の上中堰の場所と異なる点を指摘している。

最後に、近世末期に当地域に多大な被害を与えた、弘化4年(1847)の洪水について触れておきたい。これは同年に起きた善光寺地震によって決壊した岩倉山の土砂が犀川を堰き止め、それが20日後に決壊して一気に犀川扇状地へ溢れ出たものである。この洪水で犀川から扇状地部の川中島地区では甚大な損害を被ったとされる。この洪水土に対比しうる土層はJR川中島駅構内遺跡や本遺跡でも確認できた。

(2) 地形環境と基本土層

長野県中央部の松本平から山内を流れ下った犀川は、遺跡北側の犀口で善光寺平に出て広大な扇状地を形成する。この犀川扇状地左岸は裾花川扇状地と重複するものの、南・東側は単純に傾斜し、千曲川を盆地東縁辺へ押しやっている。本遺跡はこの犀川扇状地の扇央部にあり、微視的には網状の谷状低地に囲まれた狭い微高地に立地する。この小微高地は北側が於下集落の微高地と接続し、全体形は扇状地傾斜方向に長軸をとる紡錘形となる。今回の調査範囲はこの小微高地を斜めに横断する形となった。

遺跡内の基本土層は大きく4つに分層される。一番下層には扇状地を形づくるIV層砂礫層があり、その上にIII層の黒褐色～暗褐色土がある。遺構の検出面はIV層上部であり、中世の遺構埋土はIII層を基調とする。その上には善光寺地震に伴う犀川洪水土と思われる黄褐色土のII層がある。そして最上部がII層を基調とする現耕作土のI層である。この中で調査域北側の低地寄りではII層が非常に厚く堆積しており、谷状低地を大きく埋没させていることが確認された。

また、調査では北側のII層は砂質の強い上層と粘性の強い下層に分層できる可能性がとらえられた。現地表面の標高は北側から南側へ単純な傾斜を示すが、基盤の砂礫層は調査区中央部が最も高く南側と北側がそれぞれ低地となることを考えると、下層が洪水堆積土そのもので、上層は洪水直後の周辺水田復旧に伴う盛土の可能性がある。このように考えると、中世の北側堀が地表面に痕跡をまったく残さない点も納得できる。なお、調査域南側の低地部は数枚の水田層が認められたが、連続耕作のために水田面は把握できない。

注1 原明芳 1996「信濃における沖積地の開発」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第7集』 帝京大学山梨文化財研究所

注2 黒坂周平 1989「第3章 5節 東山道」『長野県史 通史編』第1巻 県史刊行会

注3 1985『長野県町村誌(北信濃)』郷土出版

注4 米山一政 1978「第10章 城館跡と氏人」『更埴地方誌』

注5 1986『上中堰の歴史』上中堰土地改良区

第2節 検出された遺構と遺物

1 遺 構

(1) 遺構の概要

遺跡の立地する小微高地は調査区中央部南寄りが最も高く、北側と南側は低地へ向かって傾斜する。遺構は小微高地の高まりを中心に分布し、中央部では溝跡・掘立柱建物跡・柱穴多数・土坑、方形の屋敷地を形づくる堀跡が検出された。これらの遺構は出土遺物から13世紀前後と16世紀前後の2時期を中心とすると思われる。これに対し、調査区内の北・南側傾斜面は遺構の分布が希薄であり、北側傾斜面では散在的な柱穴跡と低地域に溝跡、南側傾斜面では散在的に土坑・火葬施設・溝跡が検出されたのみである。北側傾斜面の柱穴跡はいずれも浅く建物跡と認定できず、溝跡もほとんどが近世以後の所産である。また、南側傾斜面の低地寄りでは基本土層から水田として利用されている可能性が知られたが、水田の時期は特定できなかった。以下には個別遺構を種類別に記述する。

ア 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はすべて整理段階で認定した。認定にあたっては土地区画に沿って建物跡が構築されると仮定し、土地区画方位を示すと思われる溝跡と同方向に、直線的に等間隔に配列する柱穴跡から認定する方法をとった。調査域が狭いこともあって建物跡の認定に不安もあるが、確定できた建物跡は全部で11棟ある。この中でST3～5(6)は構造や規模が類似し、ほぼ重複位置で建て替えられた中核的な建物跡と思われる。また、ST7・8・9・10は小規模な建物跡ながら、これも類似位置での建て替えが推測されるものである。それ以外は単独で存在する小規模な建物跡である。なお、調査では柱穴跡すべてにSK番号が振られたが、本報告でも柱穴跡の呼称方法として踏襲している。

ST1 HH20～MI02 (第370図)

小微高地北側に位置し、方形に配列すると思われるSK241・243・248をもって認定した。SD02に切られるため、中間及び南西隅の柱穴跡は不明である。棟方向はN-15°-E、梁行1間約3.0m、桁行は柱間数は不明ながら2間前後と推定され、長さ約5.0mを測る。桁行の柱間寸法は2間とすると約2.5mである。小規模な建物跡と思われるが、棟方向は他の建物跡と異なる異質な存在である。

ST2 MF06～MI07 (第370図)

小微高地上の北部に位置し、長方形に配列するSK219・34・58・64・52・42・17をもって認定した。他遺構との切り合いはないが、北側桁行列西から3番目の柱穴跡は試掘トレンチで破壊したと思われる。桁行3間約6.9m、梁行1間約2.8mで棟方向はN-87°-Eである。桁行の柱間寸法は西から1.9、2.7、2.1mで、中間の柱間寸法が長い。なお、周囲には建物跡とは認定できなかったが、本跡の各辺に平行するような柱穴跡の配置が認められるので類似場所で建て替えが行われている可能性がある。出土遺物はSK17から内耳鍋破片が出土した。

ST 3 ME08~MI11 (第370図)

微高地上の中央部ST 4~6と重複した位置にある。本跡はSK227・(7)・48・39・53・128・72・113・90・208・247・(75)・(111-249)・(92)・80・95・214からなるととらえたが、SK 7・75・111はST 4、SK92はST 5の柱穴想定位置と重複し、帰属の断定に不安がある。また、一方でSK 7・111と隣接したSK48・249が本跡に帰属する柱穴跡の可能性もある。このように周囲は柱穴跡が密集し、しかも本跡の東側がトレンチで破壊されているために、建物規模や構造については確定しきれていないところがある。

建物跡は西側調査区外へ延びている可能性があるものの、調査区内では桁行4間約7.8m、梁行3間約5.5mとなる。棟方向はN-87°-Eで、総柱建物跡と思われる。柱間寸法は桁行方向で約1.9~2.1m、梁行方向は約1.8~2.0mで両者とも近似した数値である。本跡は柱穴跡に確定しきれていないところがあるため、切り合いも判然としなが、SK111が本建物跡の柱穴跡とするとST 4を切っていることになる。ST 4~6と建て替えの関係と思われ、規模や構造からも中核的な建物跡と思われる。

ST 4 MD08~MG11 (第370図)

微高地上の中央部ST 3・5・6と重複した位置にある。本跡はSK223・(7)・222・134・73・115・130・(75)・(111)・93・122・116・135・101から構成されるととらえたが、SK 7・75・111はST 3の柱配置に位置しており、帰属する建物跡の認定に不安が残る。また、本跡西側は調査区外へ延びている可能性があり、さらに北東隅の柱穴跡はトレンチで破壊して不明である。他遺構との切り合いはSK111が本跡の柱穴跡とすると本跡がST 5を切り、SK249がST 3の所産とするとST 3に切られることになる。

なお、SK73とSK 5は切り合いになるが、わずかな重複で前後関係は明確にできなかった。建物規模は上記の推測に従えば、調査区内で桁行3間約6.3m、梁行3間約5.8m、棟方向はN-88°-Eと思われ、構造は総柱建物跡である。なお、本跡南側桁の西側延長先にあるSK132は本跡に帰属し、桁行4間約7.6m前後になる可能性がある。柱間寸法は桁行方向で約1.8~2.2m、梁行方向は約1.7~2.3mである。本跡はST 3・5とは同規模で、重複位置にあるので建て替えの関係にあると思われる。出土遺物はSK116からカワラケ小破片、SK223から龍泉窯系連弁文青磁碗破片が得られている。

ST 5 ME09~MH11 (第370図)

微高地上の中央部ST 3・4・6と重複した位置にある。建物跡の規模や構造に不確定なところがあるが、SK250・114・245・74・112・92・131・78・107・96・124・83・105で構成され、さらに西側調査区外へ延びると思われる。なお、北西隅の柱穴跡は検出されていないが、見逃した可能性がある。他遺構との切り合いはST 3・4の帰属が判然としないうちSK111が本跡SK112を切る。SK101はSK21と切り合いになっているが、前後関係は明確に把握できていない。

調査域内で認定された規模は桁行3間約6.9m、梁行3間約5.9mで、棟方向はN-88°-Eの総柱建物跡である。柱間寸法は桁行で約2.1~2.5m、梁行で約1.8~2.3mである。梁行の柱間寸法のほうが若干長い。規模や構造はST 3・4とはほぼ類似し、しかも重複する場所に位置するので、これらの建物跡と建て替えの関係にあると思われる。出土遺物はSK114からカワラケ破片が出土した。

ST 6 MF09~MG10 (第370図)

微高地上の中央部ST 3~5と重複した位置にある。他遺構との切り合いはない。本跡はSK120・77・110・102を通るラインを基準として、SK77・102の北側直交方向にあるSK71・91も含めて構成されると推測したが、南側の直交方向にあるSK126・85・106は距離が長すぎて、本跡のものか断定できなかった。

欠落する柱穴跡が多く、建物跡の規模や構造の詳細は不明であるが、SK120・77・110・102・71・91で構成される部分は桁行3間約6.2m、梁行1間約2.1mで、SK126・85・106を含めると梁行2間約5.0mの総柱建物跡となる。棟方向はN-87°-Eである。柱間寸法は梁行で約1.8m～2.3m、梁行が1間とすると2.1m、2間とすると約2.1mと2.9mとなる。出土遺物はSK71より内耳鏡破片が得られたのみである。本跡は位置や棟方向からするとST3～5と関連する可能性があるが、柱穴跡の欠落や建物跡の認定に不確定なところがある。

ST7 MD13～ME14 (第370図)

微高地上の南部に位置し、長方形に配置するSK138・135・179・173・135・150をもって認定した。西側は調査域外へ延びている可能性があるが、調査域内では桁行2間約3.8m、梁行1間約3.0mの規模で、桁行の柱間寸法は約1.8～2.0m、棟方向はN-89°-Eである。本跡のSK179がSK11と切り合いになるが、調査ではSK179はSK11の調査後の底面上で検出されたものの、切り合いは明確に把握できているわけではない。また、ST8とは重複する位置にあるため同時存在しないと思われる。

ST8 MD14～ME15 (第370図)

微高地の南部に位置する。長方形に配置するSK143・177・172・155をもって認定したが、桁行が長すぎて認定に不安が残る。本跡の西側は調査域外へ延びている可能性があるが、調査域内では桁行1間約3.3m、梁行1間約2.1mの規模で、棟方向はN-90°-Eである。SK155がSK154と切り合うが、前後関係は把握できなかった。また、重複位置のST7とは時期差となると思われる。

ST9 MC16～ME17 (第370図)

微高地の南部、ST10とはほぼ重複した位置にある。長方形に配置するSK166・169・227 (198)・201をもって本跡と認定したが、SK227とSK198はほぼ同位置に重複するもので、いずれが本建物跡に帰属する柱穴跡か判断できなかった。本跡の西側は調査域外へ延びると思われるが、調査域内では桁行1間約2.8～3.1m、梁行1間約2.3mの規模である。柱の通りが悪いが、棟方向はN-88°-Eである。他遺構との直接的な切り合いはないが、ST10とは時期差になるとと思われる。

ST10 MC16～ME17 (第370図)

微高地の南部にST9とはほぼ重複する位置にある。長方形に配置するSK164・168・199・204から本跡を認定し、西側は調査域外へ延びると思われる。調査域内では桁行1間約2.2～2.3m、梁行1間約2.1～2.2mの規模で、棟方向はN-86°-Eである。他遺構との切り合いはないが、重複位置のST9とは時期差をもつと思われる。

ST11 MG13～MH15 (第370図)

微高地の南部、調査区東壁際で検出され、主体は調査区東外にあると思われる。SK183・189・192の配列から認定したが、ごくわずかな部分しか確認できていないので全体の規模や構造は不明である。調査区内では桁行1間約2.1m、梁行2間約3.2mの規模が確認でき、棟方向はN-85°-Eである。柱間寸法は梁行で約1.6mである。他の遺構との切り合いはない。

イ 土坑

土坑は柱穴跡と必ずしも厳密に区分できていないが、感覚的に柱穴跡よりも大きめで柱穴跡とは考えにくいものを土坑として扱う。多様な形態が認められるが、方形の大きめの土坑、楕円形の土坑、小型の円形の土坑、大型の楕円形・円形の土坑などの数種類に分類できそうである。概略の土坑は性格不明で、SK251のみは火葬施設と推測される。分布は南側の低地寄りに大きめの楕円形・円形土坑と火葬施設と思われる土坑があり、それ以外の方形の浅い土坑、あるいは小規模な楕円形、円形の土坑はほぼ微高地上に限定される。

また、埋土は黒褐色土を基調とするものが多いが、SK 2・3・6・8・9・15・22は褐灰色土を基調とする。褐灰色土は調査区北側でII層とIII層の中間に部分的にみられるところがあり、具体的な位置付けはできなかったが、この土層起源とすると近世末期以前ながら中世の遺構より後出する可能性がある。なお、調査ではSK 1、SK163は土坑ととらえたが、それぞれ攪乱の一部、柱穴跡の複数集合するものととらえられるので省略した。

SK 2 ME03~MG05 (第371図)

微高地北側のSD 2 脇に位置する。SK 4・9・10を切り、上面に竈柱の攪乱が部分的に入る。本跡東辺はこの攪乱で破壊され、西辺は調査区外へ延びている。調査区内では東西440cm、南北250cmの規模で、平面形は長方形である。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦ながら西側へ緩やかに傾斜して検出面からの深さ48cmを測る。底面が西側へ傾斜するので、本跡の西側底面で検出したSK10は本跡の一部である疑いがある。埋土は北壁際に褐灰色土が入るが、主体は暗褐色土ブロック・砂が混じる褐灰色土で占められる。埋土がII層下の褐灰色土を基調とするならば、中世以後から近世末期以前の可能性がある。なお、SK 3・6・8・9・15・22は埋土が類似する。出土遺物はカワラケ、龍泉窯系青磁碗、古瀬戸平碗、常滑小壺?の破片がある。

SK 3 MF06~MG07 (第371図)

微高地北部に位置し、本跡がSK220・221を切る。平面形は長軸190cm、短軸110cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土は粗砂や黄褐色土ブロックを含む褐灰色土の単層で、SK 2・6・8・9・15・22と類似する。出土遺物は非ロクロカワラケ、在地産土師器すり鉢の破片がある。埋土から後出する可能性がある。

SK 4 ME04・MF04 (第371図)

微高地北部のSD 2 脇に位置し、西辺の一部は調査区外へ延びる。北側がSK 2 に切られ、SK31を切る。平面形は方形もしくは長方形を呈すると思われ、調査区内で南北234cm、東西274cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。埋土は3層に分層され、下層に3層のにぶい黄褐色土ブロックを含む黒褐色土、北側中位に2層の黒味の強い黒褐色土、上部に1層の黒褐色土がある。出土遺物は龍泉窯系面花文青磁碗、蓮弁文青磁碗、青磁小皿、青白磁梅瓶、ロクロ・非ロクロカワラケ破片がある。形態から竪穴建物跡の可能性もあるが、断定はできなかった。

SK 5 ME09・10 (第371図)

微高地の北側に位置する。SK73とわずかに切り合うが、前後関係は明確に把握できなかった。平面形は長軸212cm、短軸92cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは16cmを測る。埋土は黄褐

色土ブロック・砂・小礫を含む黒褐色土の単層である。出土遺物にはカワラケ破片がある。

SK 6 ME08 (第371図)

微高地北側に位置し、SK 7・8を切っている。中央部を試掘トレンチで破壊してしまったが、平面形は楕円形を呈し、長軸84cm、短軸62cm前後と思われる。断面形は浅いU字状を呈し、検出面からの深さは22cmを測る。埋土は西側壁際に砂を多く含む褐色土、中央部に黄褐色土小ブロックを含む褐色土が入る。SK 2・3・8・9・15・22と類似した埋土で、後出する時期の所産と思われる。

SK 8 ME09 (第371図)

SK 6 南側に位置し、ST 5のSK250を切り、SK 6・22に切られる。北側を試掘トレンチで破壊してしまったが、南北120cm前後、東西136cmの円形を呈する。断面形はすり鉢状となり、検出面から底面までの深さは23cmを測る。埋土は砂を多く含む灰黄褐色土の単層であり、SK 2・3・6・9・15・22と類似する。また、位置や形態の類似から隣接するSK22と関連すると思われる。

SK 9 ME03~MF04 (第371図)

微高地北側のSD 2 脇に位置し、SK 2に切られる。位置的にSK 2と重複するが、本跡の北側壁がSK 2より外側に広がることから別の土坑と判断した。西側は調査区外へ延び、上部はSK 2で破壊されるため全体形は不明である。平面形は調査域内で長軸140cm、単軸142cmの楕円形を呈し、東側が直径100cm前後のすり鉢状に落ち込む。検出面から底面までは67cmとかなり深い。埋土は褐色土に灰黄褐色土が織状に入る。形態はSK 8・22、埋土はSK 2・3・6・8・15・22と類似する。

SK10 ME・MF04 (第371図)

微高地北部に位置する。SK 2 底面で検出し、本跡南辺がSK 2の南辺とほぼ一致するのでSK 2の一部とも考えたが、埋土の違いから別の土坑の可能性があると考えた。ほとんどがSK 2に切れ、西側が調査区外へ延びるために本来の規模はまったくわからないが、調査域内で長軸174cm、短軸100cmを測り、平面形は不整形な三角形状を呈する。断面形は残存部で南側へ傾斜した浅いくぼみ状となり、検出面から底面までの深さは60cmである。埋土は黒褐色土の単層である。

SK11 ME13 (第372図)

微高地南部に位置し、SD 5に切られる。SK178・179は本跡の底面で検出されたが、埋土が類似するため確実な前後関係は不明である。平面形は長軸230cm、短軸138cmの楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形で検出面から底面までの深さは22cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物は青白磁梅瓶、カワラケの小破片がある。

SK12 MC18 (第369図)

SD 3 北側の調査区壁際にあり、一部は調査区外に延びる。平面形は長軸が残存部で121cm、短軸118cmを測る楕円形を呈すると思われる。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは38cmを測る。埋土は砂礫を多く含む黒褐色土の単層である。

SK13 MF18 (第369図)

SK12の東側に位置する。平面形はやや不整形な楕円形で長軸128cm、短軸92cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは12cmと非常に浅い。埋土はにぶい黄褐色土の単層であり、後出する段階の所産と思われる。

SK15 MG15 (第372図)

微高地の南部に位置し、SK16を切っている。平面形は南北98cm、東西80cmの方形を呈し、断面形は箱形で検出面からの深さ73cmを測る。埋土は底面から礫を多く含む褐灰色土の5層、褐灰色土の4層、炭化物層の3層、暗褐色土・黄褐色土ブロックを多く含む1・2層に分層された。この中で4・5層が土坑使用時の所産で、3層の炭化物が入った後に埋め戻しされたとみられる。埋土の色調はSK2・3・6・8・9・22と類似する。後出時期の所産と思われる。

SK16 MG14・15 (第372図)

微高地南部に位置し、SK15に切れ、西辺はトレンチで破壊した。平面形は東西方向が残存長で222cm、南北方向が280cmの方形を呈する。断面形は浅い逆台形を呈し、底面は平坦で検出面からの深さは20cm前後である。埋土は南部下層にある黄褐色土ブロックが混じる灰褐色土の2層と上面を覆う黒褐色土に分層された。平面形や規模から竪穴建物跡の可能性もあるが、断定はできなかった。なお、北側に隣接するSK21とは規模や形態の類似から関連が想定できる。

SK19 MH15 (第369図)

微高地南部に位置し、SD6に切られる。東側は調査区外へ延び、調査区内では長軸104cm、短軸74cmを測る。平面形は楕円形と思われる。断面形はU字状で検出面からの深さは26cmで、埋土は砂礫を多く含む黒褐色土の単層である。出土遺物は摩滅したカワラケ小破片1点のみがある。隣接するSK20とは形状が類似し、関連すると思われる。

SK20 MH14 (第369図)

微高地南部に位置し、SD6に切られる。東側は調査区外へ延び、調査区内では長軸108cm、短軸114cmを測る。平面形は楕円形と思われる。断面形は南側に小規模なテラスが付属するU字状を呈し、検出面からの深さは36cmを測る。埋土や形態が類似するSK19と関連があると思われる。

SK21 MI11~MH12 (第372図)

微高地の中央部に位置し、西辺はトレンチで破壊した。SD7に切られると思われたが、埋土が類似するため断定はできない。また、ST4のSK101やSK103~106は本跡の底面で検出したものの、これも前後関係は明確に把握できていない。平面形は長方形を呈し、南北260cm、東西は残存部で304cmを測る。掘り込みは浅く、底面はやや凹凸があって検出面からの深さは16cm前後である。埋土は黄褐色ブロックを含む黒褐色土の単層である。形態や規模から竪穴建物跡の可能性があるが、断定はできなかった。また、形態的に類似するSK16とは関連すると思われる。出土遺物は内耳鍋、カワラケ小片がある。

SK22 MF09 (第371図)

微高地北側にSK8と隣接して位置し、SK8とST5のSK250を切る。平面形は東西154cm、南北124cm

の円形を呈し、断面形はすり鉢状で検出面からの深さは58cmを測る。埋土は下層の砂が多く混じる灰黄褐色土と上層の砂が混じる灰黄褐色土に分層された。この埋土はSK2・3・6・8・9・15と類似する。位置や形態の類似からSK8と関連があると思われる。

SK24 RE05～RE06 (第372図)

微高地南端に位置し、平面形は長軸302cm、短軸244cmの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは非常に緩やかなU字状を呈し、検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土は壁周囲に2層の灰黄褐色土、中央部上部に炭片・黄色褐色ブロックを混じる1層の黒褐色土、底面上の部分的な炭化物を大量に含む3層の黒褐色土、東壁際のみ分布する4層の黒褐色土に分層された。出土遺物は在地産の須恵質すり鉢・内耳鍋・カワラケの各小破片、骨小破片若干などがある。

SK26 MF17 (第369図)

微高地南側に位置する。平面形は長軸122cm、短軸86cmのやや不整形な長方形を呈し、断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さ30cmを測る。埋土は記録漏れで不明である。

SK28 RF01 (第369図)

微高地の南部、SD3とSD8の中間に位置する。周辺には類似遺構がなく、ほぼ単独で存在する。平面形は直径76cmほどの円形で、断面形は逆台形となり、検出面から底面までの深さは31cmである。埋土は黒褐色土の単層である。

SK29 RC03 (第372図)

微高地南端に位置し、SD8に切られる。平面形は東西202cm、南北は残存部で158cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面まで深さ32cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。

SK30 RG02・03 (第372図)

微高地南部、SD8に接して位置する。東半分は調査区外へ延び、調査区内では南北182cm、東西は調査区内で123cmを測る。平面形は楕円形と思われる。断面形は壁が緩やかに立ち上がるU字状を呈し、検出面から底面までの深さは49cmである。埋土は暗褐色土の単層で、出土遺物は内耳鍋破片がある。

SK35 MIO5 (第369図)

微高地北部に位置する。平面形は長軸92cm、短軸70cmの楕円形を呈し、断面形は浅い逆台形で検出面からの深さは20cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。規模的には柱穴跡の可能性もあるが、柱穴跡より若干大きめなので土坑として扱った。

SK109 MF10・11 (第369図)

微高地中央南寄りに位置し、SK108を切る。平面形は長軸114cm、短軸60cmの方形ぎみの長楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面まで深さ22cmを測る。埋土は炭粒混じりの黒褐色土の単層である。

SK251 RD08 (第371図)

微高地南端、低地際に位置し、上部には水田跡の疑似畦畔と思われる遺構が残る。平面形は長軸123cm、

短軸58cmの長方形に東辺中央で18cm程の小規模な煙道が付属する。断面形は浅い箱形を呈し、検出面からの深さは8cmで、かなり上面が削平されていると思われる。埋土は灰黄褐色土が大半を占め、上面の一部に焼土ブロックが入る。形態から火葬施設と思われるが、焼骨等は検出されなかった。

ウ 溝跡

調査域内では全部で8本の溝跡が検出された。これ以外に調査区壁のみで確認された溝跡が多数あるが、基本土層II層よりも上部から掘り込まれるものなので、ここでは省略した。埋土・遺物などから中世と思われる溝跡は方形の屋敷地を形づくる堀のSD2・3、SD3と関連すると思われるSD8、土地区画溝と思われるSD5・6・7がある。SD5・6・7とSD2・3・8は走行方向が異なり、時期差をもつと思われる。近世の溝跡は近世水田用水と考えられるSD4、溝跡としたが善光寺地震に伴う洪水以後の礎片づけ遺構と思われるSD1がある。

SD1 HL05~HM12 (第373図)

調査域北東部隅の現用水に沿った位置にあり、この周辺には多数の溝跡が重複する。本跡東岸は調査区外にあり、調査区内では幅約240cm、長さ約9.8mを確認した。底面に箱形の掘り込みが列状に並列し、一つの箱形の掘り込み幅約240cm、長さ約3.8mで、溝跡上面から底面までは深さは約1.4mである。埋土は埋め土と思われる砂礫土で、箱形の掘り込み境にシルト質土が挟まり、箱形の掘り込みは微高地側から順次構築されているとみられ、時間差が想定される。出土遺物は珠洲すり鉢、瀬戸美濃産の近世灰釉碗、志野丸皿、伊万里染付碗、内耳鍋小破片が若干ある。近世末の礎片づけ遺構と思われる。

SD2 ME01~MK02 (第373図)

微高地北側にあり、東西方向に調査域を横断する。本跡は現地表面の土地境に一致し、SD3とともに方形の屋敷地を形づくると思われる。他遺構とは直接的な切り合いはないが、ST1を切ると思われる。幅は280~310cmで長さは調査域内で12mを測る。断面形はV字形を呈し、検出面からの深さ96cmである。埋土は西・東壁で若干様相が異なるが、底面下部に褐灰色粘土質土、その上に砂や小礫を含む黒褐色土、中位には褐灰色土・にぶい黄褐色土・薄い砂層、上部に埋め土と思われる砂礫を多く含む灰黄褐色土がある。その上には砂礫を含まない灰黄褐色土、褐灰色土が入り、II層で覆われる。

本跡はSD3と埋土が若干異なり、廃絶以後しばらく開口したままであったが、近世末期までに埋め戻されていると思われる。出土遺物には瀬戸美濃産の染付徳利、古瀬戸の碗類底部、青白磁梅瓶、龍泉窯系青磁碗、唐津碗、カワラケ、内耳鍋破片がある。瀬戸美濃産の染付徳利は現代の電柱構築による混入の所産であろう。

SD3 MB19~MG20 (第373図)

微高地平坦部南側に位置し、調査区を東西方向に貫いてSD2とともに方形の屋敷地を形づく。試掘トレンチで破壊したが、現地削り遺構から中央部に土橋があったと想定される。規模は西側が幅410cm、長さ4.8m、深さ117cm、東側が幅370cm、長さ5.1m、深さ114cmを測り、土橋は幅1m前後と思われる。断面形はV字形で、埋土は東・西ともに上層に砂礫を多く含む褐灰色土、下層にはやや暗い砂礫を多く含む褐灰色土がある。SD2と同一の溝跡と思われるが、底面に褐灰色土が認められず、廃絶直後に埋め戻されたと思われる。出土遺物は内耳鍋、カワラケ破片、石臼、五輪塔火輪部、銅銭などがある。

SD 4 RA07~RC07 (第373図)

微高地南端の低地脇に位置する。西端は調査区外へ延びるが、東側は試掘トレンチ周辺までしか検出されず、調査区内では幅40cm前後、長さ4.2mを測る。調査区壁でみると上面がII層に覆われ、II層下面から底面までの深さ54cmで、断面形は底面が細い逆台形を呈する。埋土は底面上に砂を多く含む4層の褐灰色土、類似したやや暗い3層、灰黄褐色土の2層、にぶい黄褐色土の1層に分層された。近世の用水跡と思われる。出土遺物はない。

SD 5 MC13~MI13 (第373図)

微高地中央南寄りに位置し、N-75°-Eの方向に調査区を貫く。SK11・181を切り、SK100との関係は不明である。幅は50~104cmで、平均は90cm前後、長さ11.7mを測る。断面形は逆台形で深さは26cm、埋土は砂礫を多く含む黒褐色土の単層である。走行方向の類似や配置関係からSD 6・7と同時に存在した土地区画の溝跡と思われる。出土遺物にはカワラケ破片がある。

SD 6 MH13~MH15 (第373図)

微高地中央南寄り東部に位置し、南端は調査区外へ延びる。SK19・20を切り、SK135との関係は判然としない。幅40~50cmで調査区内で長さ2.7mを測り、北端はSD 5付近で立ち上がる。走行方向はN-30°-W、断面形は逆台形を呈し、深さ16cmである。埋土は砂礫を多く含む黒褐色土の単層でSD 5・7とは関連する土地区画の溝跡と思われる。出土遺物はない。

SD 7 MH11・12 (第373図)

微高地中央南より東端に位置する。南端はSD 6の延長先付近でSD 5に接続し、北端は緩やかに立ち上がる。SK16・99・103・104は本跡底面で検出したが、埋土が類似するため前後関係は確定的ではない。走行方向はN-15°-Wで幅40~50cm、長さ3.6mを測る。断面形は逆台形で深さ11cmである。埋土は黒褐色土の単層で、埋土から中世の所産で配置位置等からSD 5・6と関連すると思われる。

SD 8 RB01~RG02 (第373図)

微高地南部にあり、SD 3の南約2m離れて平行する。SD 3同様に中央付近に土橋を形成すると思われるが、土橋西側の立ち上がりは確認できたものの、東側は試掘トレンチで破壊した。西側は幅280cm、調査区内で長さ4.9m、深さ61cm、東側は幅200cm、調査区内で長さ4.7m、深さ62cmを測り、断面形は東西ともにU字状を呈する。切り合いは本跡がSK29を切り、SK30とは接するものの直接切り合わない。

土橋はSD 3とはほぼ一致した場所にあり、幅約1m前後と思われる。埋土は部分的に東側底面上でにぶい黄褐色土、西側最上部で褐灰色土が認められたところがあるが、下部の黒褐色土、中位のにぶい黄褐色土、上部の黒褐色土はほぼ共通する。本跡は走行方向や土橋の位置からSD 3との関連が想定されるが、時間差の有無や機能は明らかにできなかった。調査区東壁の土層観察ではSD 3に先行するようにも思われるが、人為的な埋め戻しが明瞭でなく断定できない。出土遺物には龍泉窯系蓮弁文青磁碗、青磁鉢、カワラケ、内耳鍋破片が少量ある。

2 遺物

出土遺物は少量しかない。以下に材質別に記述する。

ア 焼物 (第375図)

焼物は全部で127点採取されたが、いずれも小破片である。中世の焼物は輸入磁器、国産陶器（古瀬戸・山茶碗・常滑？・珠洲、在地産土器がある。輸入陶磁器は龍泉窯系画面花文碗（10）、連弁文碗（25・48・34）、小皿（11）、鉢（47）などの青磁、青白磁梅瓶などがある。いずれも出土量は少なく、白磁類や同安窯系青磁碗、中世後半の輸入陶磁器類は出土していない。なお、龍泉窯系青蓮弁文青磁碗は腰の張るタイプ（25・48）と、腰の張らないタイプ（34）がある。国産の陶器類では東濃産の山茶碗（23-SK40・194出土品同一個体か）、常滑と思われる小型壺？（3）、古瀬戸の平碗（4）・灰釉を掛ける碗類の底部（32）、珠洲すり鉢（28・49）などがある。山茶碗は薄手で口縁端部が肥厚する明和窯式と思われる。

常滑は小破片のため子細不明であるが、灰白色の緻密なもので小型の鉢、もしくは小型壺の類と思われる。古瀬戸は非常に少なく、碗類のみがある。（4）は平碗体部破片で詳細な時期は不明であり、（32）は灰釉を掛ける削り出し高台破片で小皿類の可能性もある。大窯製品は出土していない。珠洲製品は2点のすり鉢がある。（49）は出土SKが不明となったもので、内面に卸目がなく、外底部に静止糸切りが観察される。珠洲Ⅱ・Ⅲ期の所産と思われる。（28）は焼成の甘い大振りのもので珠洲Ⅳ期の所産と思われる。在地産土器はカワラケ・内耳鍋・須恵質すり鉢・土師質すり鉢・土師質火鉢と思われる破片がある。

カワラケは非ロクロ（1・5・8・13・16・50）とロクロ調整（6・9・12・14・15・17・22・24・29・30・37～40・44・45・46）があり、それぞれ法量は大小2種ある。非ロクロカワラケは口縁部端部が若干肥厚して面取りされるものと丸く納められるものがあり、口縁部周囲が1回ヨコナデされ、内底面には押えのヨコナデが認められる。いずれも灰褐色の緻密な胎土である。ロクロ整形のカワラケは形態的にバリエーションが認められ、複数時期のものが含まれると思われる。口縁部形態は内湾するもの（6・14・17）と外反さみになるもの（29・30・44・45?）があり、内底面中央がロクロ調整によって盛り上がるもの（例29）と、押さえのヨコナデが観察されるもの（例17）がある。

胎土は明褐色や灰褐色のものがあるが、周辺の館跡でよくみられる灰白色の緻密な胎土や厚手のつくりのカワラケはみられない。内耳鍋（19・20・21・35・36・42・43）は少量得られ、口縁部の形態は若干立ち上がりぎみで内面にわずかにヨコナデ痕を残すもの（21・35?）と、口縁部が若干屈曲して内湾さみに立ち上がり、内面に調整痕を顕著に残さないもの（19・20・41・42?）がある。内耳鍋は中世後半の遺跡では良くみられるが、本遺跡では非常に少ない点は気になる。時期的に内耳鍋が少ない段階にあたるためか、本遺跡の特性かは明らかでない。在地産すり鉢は2点検出された。（7）はSK3から出土し、表面が明褐色、器壁中央が青灰色を呈して外面はナデ調整される。色調から土師質としたが、呼称は適切ではないかもしれない。（18）は外面はナデ調整されるが、ナデが弱く縦方向のハケ痕が残存する。青灰色の比較的堅い焼成である。これ以外に中世の所産か不明ながら土師質の焼成で火鉢と思われる（51）がある。

以上の中世焼物を年代別にみると、13世紀代は各種輸入陶磁器と山茶碗、珠洲すり鉢があり、ロクロカワラケの一部と非ロクロカワラケもここに加わると思われる。14世紀代では前半期に輸入青磁の一部、在地産すり鉢、珠洲すり鉢（・ロクロカワラケ）、15・16世紀では内耳鍋と古瀬戸碗類・ロクロカワラケがある。以上から、13世紀代に本遺跡（周辺）での土地利用が開始され、以後継続的に利用されるが、13世紀と15・16世紀の焼物が多く認められるので、この2時期に本遺跡（周辺）で居住があったと思われる。ただし、全時代を通して貯蔵と調理具類が低調な点は問題が残る。また、流通状況では13世紀代（14世紀前半まで）は山茶碗など東海産や珠洲などの雑器類も入るが、14世紀代から珠洲と在地産が主体で東海産は古瀬戸の小型品に限定され、15世紀では東海産・北陸産の雑器類が減少してしまう傾向はうかがえる。

次に遺構との関係をもとに13世紀代の資料については個々の遺構からは出土量が少なく、しかも中世後半期の遺構に混在して出土したものも多い。したがって、良好な一括資料と認められるものはない。15・16世紀代の資料では内耳鍋が柱穴跡や土坑の一部、屋敷地を区画する堀で出土している。この中で堀をめ

ぐらせた屋敷地の年代について若干検討を加えておきたい。SD2・3出土の在産土器には内底面中央部にロクロ調整による盛り上がりを残すカワラケ(29)、口縁部が若干屈曲して内湾ぎみに立ち上がり、内面に調整痕をあまり残さない形態(41・42)の内耳鍋があるが、これらは松原遺跡(注1)に類似品が認められ、松原遺跡では大窯の端反丸皿が伴出している。したがって、本遺跡は大窯製品や中世後半期の輸入陶磁器が出土していないもの、在産土器からみると松原III遺跡と類似した年代と思われる。

さらに15世紀代と思われる外反口縁の内耳鍋、内面に顕著なヨコナデ痕跡を残す内耳鍋が確認できず、しかも石川条里遺跡や長野市栗田館などで検出されている15世紀代後半までは残存しないと思われる厚手のカワラケが確認できないことは先の推測年代を補強するものと思われる。以上からすると、堀をめぐらせた屋敷は16世紀代の所産と思われる。

近世の焼物は断片的な資料が得られたのみである。17世紀の所産はSD1の志野丸皿(27)、SD2から唐津碗の底部破片(33)がある。これ以外は近世後半から近代の所産であり、(26)は瀬戸美濃産の灰釉丸碗、(31)は近代の瀬戸美濃産の染付徳利と思われる。

注1 1993「松原遺跡III」長野市教育委員会

イ 石製品

すべて図示した。1～2が石臼で、3が石鉢、4が五輪塔火輪部、5が砥石である。3は内面が滑らかで上面片側に片口が付属し、携き臼の可能性もある。4は表面に細かなタガネ痕を残す。石質は砥石が凝灰岩、その他は安山岩である。石材選択のあり方は本遺跡周辺ではほぼ共通するものと思われるが、長野市周辺の中世遺跡でよくみられる軽石質の黒色安山岩製品は含まれない。なお、2～4は取り上げ後に出土遺構の記載を紛失したが、記憶ではSD3出土と思われる。また、1はSK224出土と記載された箱の中にあったが、遺構平面図には石臼は記載されておらず出土遺構に不安がある。

ウ 金属製品

すべて図示した。鉄製品は1～3が釘、4が鎌先端部、5が短刀、もしくは刀子の柄と思われる。青銅製品は銅銭2点と切羽1点がある。銅銭は「永樂通宝」と「熙寧元宝」である。

第3節 小 結

1 遺跡の変遷

13世紀以前の焼物が認められないことから、本遺跡は13世紀代から本格的な土地利用が始まると思われる。この年代は従来指摘される開発画期(注1)に照らすと12世紀代からの開発増加の中に位置づけられ、厚川扇状地上部の開発開始年代を示唆する可能性がある。これ以後は断片的に焼物が確認され、本遺跡は継続的な利用があったと思われるが、ここでは13世紀以後の遺構変遷について検討を加えてみたい。

まず、遺跡の変遷について述べる前に、遺構の時期区分の方法について述べておく。本遺跡では認定に不安を残すものもあるが、遺構方位が数グループに分離できるので、まったくの無秩序に遺構が造られたのではなく、土地区画などの基準となるものが存在したと考えられる。しかも、異なる方位の遺構が切り合うことから異方位の土地区画は同時存在しないと仮定でき、方位による時期区分が有効と思われた。本遺跡の遺構方位は以下のように分類できる。

A N-15°-E前後と直交方向-ST1、SK5・11?・24

B N-75°-E前後と直交方向-SD5・6・7、SK251

C N-86~89°-E前後と直交方向-SD2・3・4・8、ST2~11、SK2~4・16・21

以上の中で、現地割はC方位であり、SD2・3が現地割と一致することからもSD2・3構築以後はC方位が踏襲されていると考えられる。したがって、A・B方位は偶発的なものでない限り、C方位のSD2・3よりも古いと予想される。このことはST1がSD2に切られ、埋土から比較的新しい所産と思われたSK2などがC方位である点からも支持される。また、SK11は断定はできないが、A方位とするとB方位のSD5に切られるのでA→Bの可能性がうかがえる。ただし、調査所見の中で切り合いが断定できなかったB方位のSD7がCのSK21を切るとすると矛盾を生じる問題が残される。

次に、出土焼物を比較すると、A方位ではSK24から内耳鍋、SK5から非ロクロカワラケが出土し、B方位の遺構はロクロカワラケのみで内耳鍋が含まれない。C方位の遺構では内耳鍋を含む遺構はSD2・3・8、ST2・6、SK21、内耳鍋が含まれず非ロクロカワラケが含まれる例はSK2~4がある。ただし、SK3は内耳鍋が含まれないものの、在地産の土師質すり鉢の出土から後出する可能性があり、SK2も埋土から中世以後と考えられ、出土遺物は混入とらえたほうが良いと思われる。以上からみると、必ずしも遺構から推測された変遷と出土遺物が一致しない状況となる。とくにA方位のSK5は13世紀代、同グループのSK24は15・16世紀の所産の遺物であり、このことはCグループも同様に認められる。

しかし、遺物出土量の少なさからも混入品とらえうる場合があり、必ずしも出土遺物が遺構年代を示さないものがあることは十分考えられる。そこで、再度見直してみると、大きな矛盾点となるのはA・C方位遺構間の出土遺物年代のずれである。これは混入によるか、あるいはA・Cがそれぞれ2時期に分離できるかが考えられる。この中でSK5はカワラケ1点のみなので混入の可能性が高いが、CのSK4では破片ながら類似年代を示す焼物が複数出土しているためC方位の遺構は2時期に分離しうる可能性がある。したがって、ここでは遺跡出現時の遺構がA・C方位いずれのものか断定できないが、C方位の遺構が出現時と最終段階の2時期に区分できる可能性を含めて、(C)→(A)→(B)→Cと考えておきたい。なお、SK24出土の内耳鍋を尊重すると、後半のA→(B)→C間にはあまり時間差がない可能性が考えられる。次にはこの変遷の推測から遺跡の様相について検討を加えてみたい。

まず、遺跡出現時であるが、AかC方位遺構のいずれかであるが、ここでは2つの可能性から考えてみる。C方位が遺跡出現時の所産とする場合では、川中島地区で現地表面に条里的な地割がみられないことから、C方位を取る理由は局地的な敷敷地周囲などの区画であって、条里的な広域にわたる開発の所産ではないと思われる。C方位の中で当該期の所産の可能性が高いのはSK4しかなく、居住があったとしてもその様相は不明瞭である。年代はSK4出土品を尊重すれば、13世紀代と推測できる。次にA方位が遺跡出現時の時期を含むとする場合である。

この方位の基準が何によるか判然としないが、隣接した於下館がこの方位に近いと思われる点は注意される。年代的にはSK24のわずかな内耳鍋破片出土によれば、15世紀代まで含まれることになる。この中でC→Aとすると於下館を基軸とした周囲の再編成と考えられるが、逆にSK24出土内耳鍋を混入ととらえると、A方位が14世紀代以前の最も古い開発時の所産となり、この地域の開発は地形に合わせる局地的なもので、開発主体もより個別的なものであったことになろう。さらに、於下館はこの土地区画を踏襲する形で後出したと考えられる。このA・C方位の遺構の認定と関連については、今後周辺遺跡の状況によって明らかにされることに期待したい。

次にB方位の遺構段階である。このB方位は本遺跡の立地する微高地の長軸方向に直交するもので、地形に合わせた土地区画であることがうかがえる。出土遺物からは15世紀以後の所産と考えられるが、点的

な年代は示し得ない。また、この段階の位置についてはSD7とSK21の関係が問題になるが、SD7がSK21を切るならばB方位は本遺跡の堀をめぐらせた屋敷地廃絶以後の局地的な所産で、より個別の土地所有の所産と理解されよう。逆にA方位が於下館と関連するならば、本遺跡の堀をめぐらせた屋敷地と於下館は時間差をもつ可能性が考えられる。いずれにしろ、この段階では居住の可能性は少ないと思われる。

C方位の遺構段階であるが、これはSD2・3の検討から16世紀以後の段階と思われる。この段階に方位が再度尊重されたことは屋敷地の設定による局地的なものであり、現地表面の状況からこの方位が現代まで踏襲されると考えられる。したがって、近世も含まれることになるが、ここでは16世紀と推測される堀をめぐらせた屋敷地についてのみ触れておく。この屋敷地は周囲を堀で区画し、その規模は堀内側で33m、外側で37m四方と思われる。周囲の中世館規模からすると一回り小さい。南側に入口が確認されたが、その他の箇所については不明である。内部の建物は少なくともST6周辺が母家、ST2、7~11が付属屋と推測され、これらはほぼ棟を東西方向にとって並列する。

内部の配置の特長としては館によくみられる空き地となる中庭が調査域外にあるにしても狭いと考えられ、正面が南側であったとすれば軒をみせて建物が配置することになる。この点では京都の影響を受けている国人領主高梨氏の館とは大きく異なり、はるかに下位に位置する在地の系譜のあり方とみられよう。ただし、いくつか問題は残される。まず、一つに本遺跡の規模の館があまり知られていない点がある。より下位のものが居住したならば、類例が多いと考えられるが、類例が少ない点では地形などの地域的な特性の中で考えざるをえない。

また、建物の構造をみるとST3~5(6)のような総柱建物跡例は中世前半期に多く知られるタイプで、中世後半期では梁間2間の長方形ものが多いことを考えると、果たしてST3~5を本時期の所産として良いか疑問もないわけではない。この点で、C方位が遺跡出現時に認められるかどうかを含めて周辺の状況との比較が必要である。さらに、建物跡の建て替えの多さに比べて遺物量の少なさの問題もある。とくに内耳鍋が少ない点では大きな疑問が残る。

以上の変遷はあくまでも一つの解釈の可能性でしかないが、こうした方位による時期区分が可能なのは小規模な微高地と網状の旧河道の低地が複雑に絡む本遺跡周囲の特性によるところが大きいと思われる。しかも、開発状況や耕作地の継続性、あるいは社会構造によって、こうした土地区画が変化する状況が生まれた面もあろう。ここではそうした背景について詳細には触れられないが、今後考えていかねばならない問題と思われる。

注1 原明芳 1996「信濃における沖積地の開発」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第7集』帝京大学山梨文化財研究所

2 於下館との関係について

於下館は本遺跡に隣接し、位置関係からしても両者の関係は問題となろう。於下館の堀跡は現在民家の裏地にくぼ地として残り、明治年間の公園でみると中心の屋敷地は南北約70m、東西約60m四方と思われる。さらに、周囲の土地区画からすると、中心屋敷を取り巻いて外側の区画が存在するようにもみえる。外側の区画ラインについては南西部が比較的明瞭で、この南辺延長ラインはSD3、もしくはSD8に一致し、それに直交するラインは堀をめぐらせた屋敷地の東辺とSD1を結ぶラインに該当するようにもみえる。このことからすれば、本遺跡の堀をめぐらせた屋敷と於下館は関連するようにも思われるが、単純に背背

できないことがある。

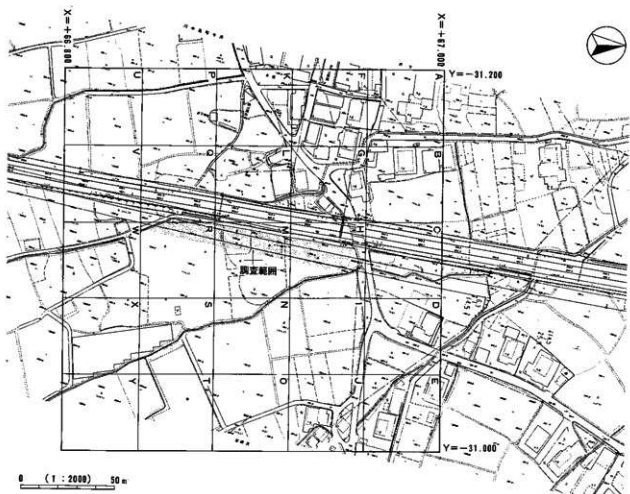
まず、於下館の東外側ラインはしなの鉄道西側で取束する可能性があり、本遺跡は於下館外に位置するともみられる。また、厳密に中心屋敷の方位を比べると本遺跡とずれている点がある。とくに於下館の中心屋敷地は、本遺跡のAグループの方位に近いように思われる。もちろん、小規模な微高地と谷状低地が複雑に組み合う地形からすると方位がずれをもってもおかしくはないが、本遺跡のみが方位を合わせる点では奇異に思われる。したがって、土地区画の影響を受けたかもしれないが、少なくとも構築された時期が異なると考えたほうが良いように思われる。また、於下館周囲や内部には本遺跡のような小規模な堀をめぐらせた屋敷地は認められないため、積極的に関連づけることは難しい。

以上から、本遺跡の堀をめぐらせた屋敷地と於下館は構築時期が異なり、少なくとも本遺跡は於下館に組み入れられた形では造られていないと思われる。さらに、SD3の位置が土地区画の影響を受けているとすれば、本遺跡のほうが後出することになる。もちろん、これは一つの推測であって詳細は今後の検討によりたい。

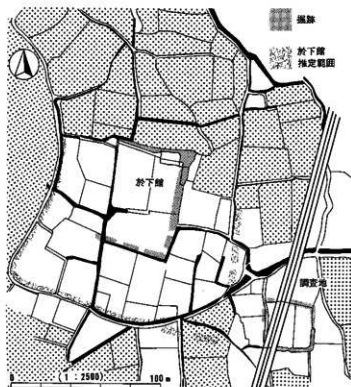
於下遺跡出土器物一覽

遺構	器 種	備考	図番号	遺構	器 種	備考	図番号
SK1	ロクロカワラケ	口縁1/8	1	SD1	瀬戸美濃志野丸皿	底部1/8	近世 27
SK2	古瀬戸 平碗	体部1/8	4		伊万里? 染付碗	体部1/8	近世
	常滑? 小壺?	口縁1/8	3		内耳鍋	口縁1/8	
	龍泉窯系青磁碗	体部1/8			内耳鍋	体部1/8	
	ロクロカワラケ	口縁1/8	2		内耳鍋	体部1/8	
	ロクロカワラケ	口縁1/8		SD2	瀬戸美濃磁器徳利	底部2/8	近代 31
	ロクロカワラケ	口縁1/8			古瀬戸 小壺?	底部8/8	32
	ロクロカワラケ	底部1/8			ロクロカワラケ	底部1/8	
	ロクロカワラケ	底部1/8			内耳鍋	口縁1/8	35
	在土土師質すり鉢	体部2/8	7		内耳鍋	体部1/8	
SK3	非ロクロカワラケ	口縁1/8	5		青白磁梅瓶	体部1/8	
	非ロクロカワラケ	口縁1/8	6		龍泉窯系青磁碗	底部1/8	34
	非ロクロカワラケ	底部1/8			唐津碗	底部4/8	33
	非ロクロカワラケ	底部1/8			ロクロカワラケ	口縁6/8-底部8/8	29
	龍泉窯系画花文青磁碗	体部1/8	10		ロクロカワラケ	口1-底部3/8	30
SK4	龍泉窯系通弁文青磁碗	体部1/8			内耳鍋	体部1/8	
	龍泉窯系青磁皿	口縁1/8	11		内耳鍋	体部1/8	
	青白磁梅瓶	体部1/8			内耳鍋	体部1/8	
	非ロクロカワラケ	口縁1/8	8		内耳鍋	体部1/8	
	ロクロカワラケ	底部1/8	9		内耳鍋	底部1/8	
	ロクロカワラケ	底部1/8			内耳鍋	底部1/8	
	非ロクロカワラケ	底部1/8			内耳鍋	底部1/8	
	非ロクロカワラケ	底部1/8			内耳鍋	体部1/8	
SK5	非ロクロカワラケ	口-底3/8	13		内耳鍋	体部1/8	
	非ロクロカワラケ	口縁1/8	12		内耳鍋	体部1/8	
SK7	内耳鍋	体部1/8		SD3	内耳鍋	底部1/8	36
SK11	青白磁梅瓶	体部1/8			内耳鍋	口縁1/8	41
	ロクロカワラケ	体部? 1/8、摩滅			内耳鍋	口縁1/8	
	ロクロカワラケ	体部1/8、摩滅			内耳鍋	体部1/8	
	ロクロカワラケ	体部1/8、摩滅			内耳鍋	体部1/8	
SK18	ロクロカワラケ	口-底3/8	14		カワラケ	部位不明、摩滅	
	ロクロカワラケ	口-底2/8	15		カワラケ	部位不明、摩滅	
SK19	カワラケ?	部位不明1/8、摩滅	15		ロクロカワラケ	底部1/8	37
SK21	内耳鍋	口縁1/8	19		ロクロカワラケ	底部1/8	39
	内耳鍋	口縁1/8	20		内耳鍋	口・体部1/8	42
	内耳鍋	耳			内耳鍋	体部1/8	
	内耳鍋	底部1/8			内耳鍋	底部1/8	43
	内耳鍋	底部1/8			ロクロカワラケ	底部7/8	38
	内耳鍋	体部1/8			ロクロカワラケ	底部7/8	40
SK24	ロクロカワラケ	体部1/8			内耳鍋	底部1/8	
	在土産須恵質すり鉢	口-体部1/8	18		内耳鍋	体部1/8	
	内耳鍋	口縁部1/8			内耳鍋	体部1/8	
	非ロクロカワラケ	口縁部1/8	16		内耳鍋	体部1/8	
	ロクロカワラケ	口-底3/8	17		内耳鍋	体部1/8	
	ロクロカワラケ	口縁部1/8			内耳鍋	体部1/8	
	ロクロカワラケ	体部1/8		SD5	ロクロカワラケ	口-底1/8	44
	ロクロカワラケ	体部1/8		SD8	龍泉窯系通弁文青磁碗	体部1/8	48
	ロクロカワラケ	体部1/8			龍泉窯系青磁鉢	口縁1/8	47
	ロクロカワラケ	底部1/8			ロクロカワラケ	底部1/8	
	ロクロカワラケ	底部1/8			内耳鍋	体部1/8	
	ロクロカワラケ	底部1/8			内耳鍋	体部1/8	
SK30	内耳鍋	口-体1/8	21		ロクロカワラケ	口縁1/8	45
	内耳鍋	体部1/8			ロクロカワラケ	底部1/8	46
SK40	東濃系山茶碗	口縁部1/8(SK194と同一)	23	不明	珠洲すり鉢	底部2/8	49
	ロクロカワラケ	口縁部1/8	22	不明	カワラケ	体部1/8	
	ロクロカワラケ	底部1/8		検出	瀬戸美濃陶器瓶類	体部1/8	近世
SK71	内耳鍋	体部1/8			伊万里灰類	体部1/8	近世
SK114	カワラケ	部位不明、摩滅			瀬戸美濃陶器灰精碗	体部1/8	近世
SK116	ロクロカワラケ	口-底1/8	24		非ロクロカワラケ	口縁2/8	50
SK174	ロクロカワラケ?	口縁1/8 摩滅			ロクロカワラケ	底部1/8	
SK194	東濃系山茶碗	体部1/8(SK40と同一)			ロクロカワラケ	体部1/8	
	ロクロカワラケ	体部1/8、摩滅			ロクロカワラケ	不明1/8	
SK223	龍泉窯系通弁文青磁碗	口縁1/8	25		在土土器器種不明	体部1/8	
SD1	珠洲すり鉢	体部1/8	28		在土産灰鉢	口縁1/8	時期不詳 51
	瀬戸美濃灰釉碗	口縁1/8 近世	26	西壁	内耳鍋	口縁1/8	

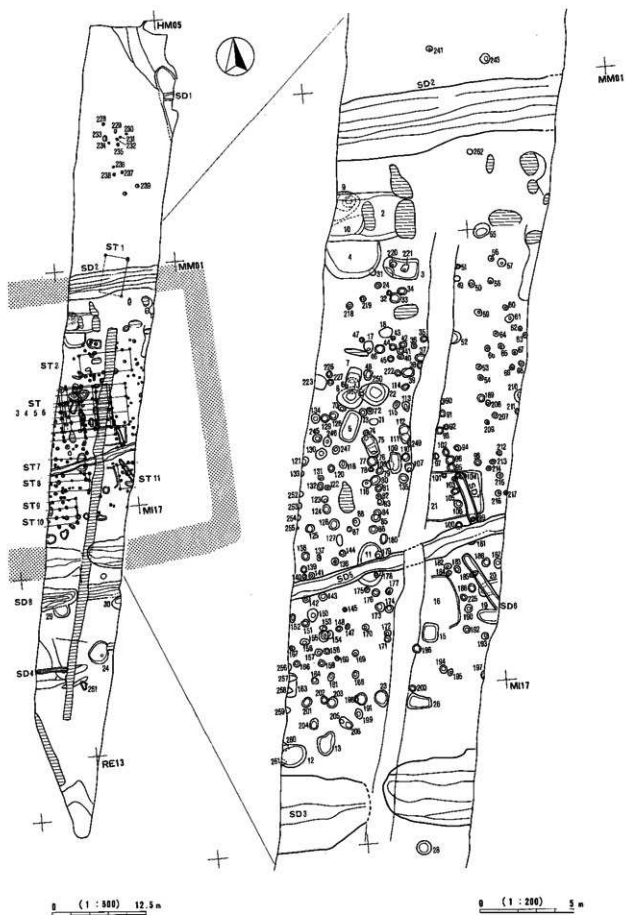
第5章 於下遺跡



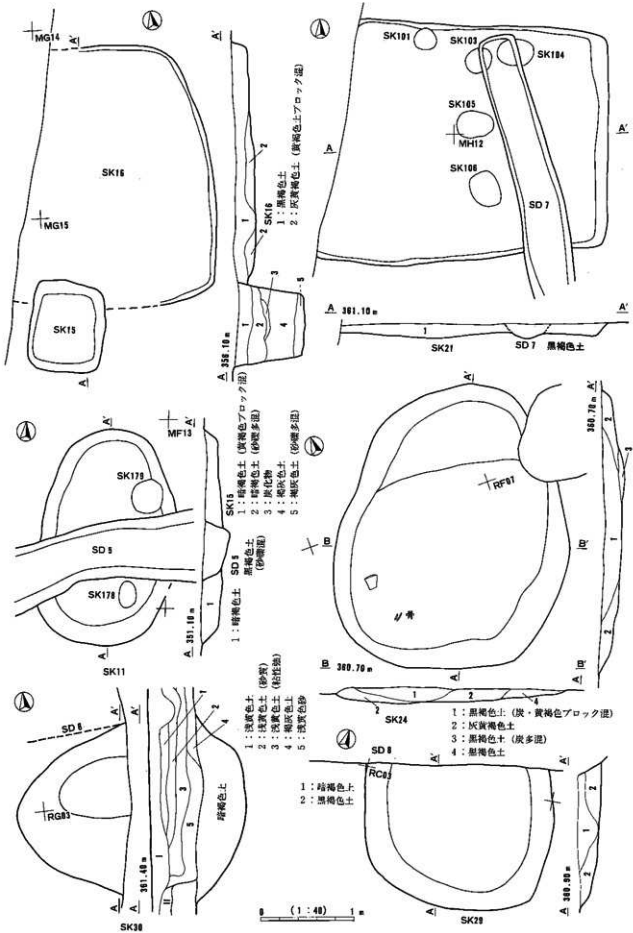
第366図 調査範囲とグリッド設定



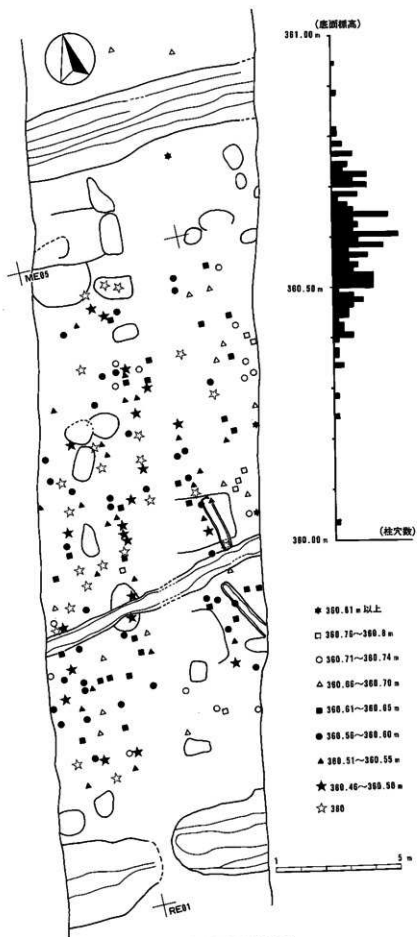
第367図 於下館周辺 (ドットのスクリントーンは水田)



第369図 遺構全体図

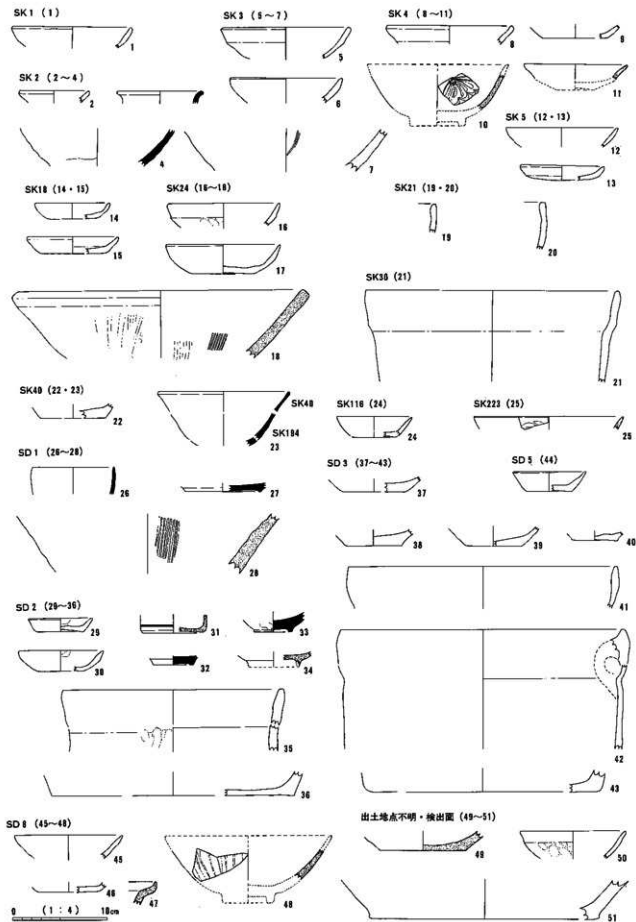


第372図 土坑 2



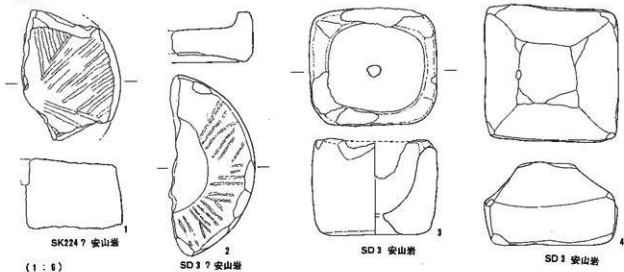
第374図 柱穴跡底面標高別分布

第5章 於下遺跡

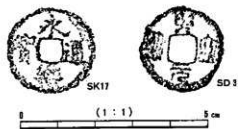
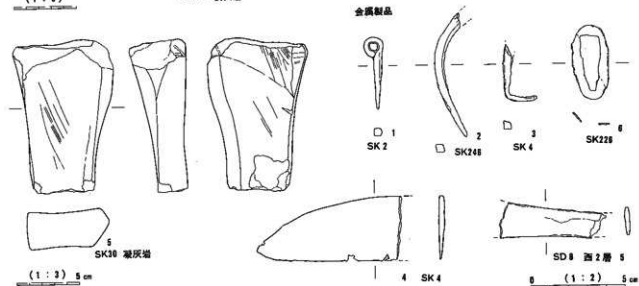


第375図 焼物

石製品



金屬製品



第376圖 石製品・金屬製品・錢貨

第6章 今里遺跡

第1節 遺跡の概要

1 遺跡の概観

遺跡は長野市川中島町大字今里585番地に所在する。ここは犀川扇状地の扇頂寄りにある小規模な微高地にあたり、調査前は畑であった。従来、遺跡とは認定されていなかったが、新幹線建設に先立つ試掘調査で溝状遺構・焼土跡が検出され、面的な調査が実施されることになった。

2 調査の概要

北陸新幹線建設に伴って、平成5年度に川中島地区の新幹線予定路線内で試掘調査が実施され、本調査地点ではⅡ層から掘り込まれる溝状遺構とその下のⅢ層上面で焼土跡が検出された。この試掘結果から面的調査が必要と判断され、平成5年11月4日から12月3日までの約1か月間にわたり調査が実施された。対象地は溝状遺構が検出された微高地部分を中心として、用水を挟んで南北2地区に分割し、検出面は試掘調査で焼土跡が検出されたⅢ層上面とした。精査の結果、南調査地区では何も検出できなかったが、北調査地区では溝状遺構数条・畝状遺構が検出され、最後に北端にかかった古道の断ち割り調査を行った。

測量・記録方法は勸長野県埋蔵文化財センターの方法に準じ、グリッドは国家座標IV系X=67,400、Y=-31,200の交点を北西隅の起点とした200m四方の大大地区を設定し、内部を40m四方の大大地区、8m四方の中地区、大大地区はさらに2m四方の小地区に分割した。

3 地形と基本土層

遺跡は犀川扇状地の扇頂寄りに立地する。この犀川扇状地は微視的にみると、細かな旧河道と傾斜方向に長軸をとる小規模な微高地が複雑に組み合わせる地形となっている。遺跡はこうした小微高地の一つに立地し、南・北側は谷状の低地となる。ただし、傾斜する扇状地において扇端側の微高地範囲は比較的明瞭であるが、扇頂部側の範囲は堆積土で覆われて非常に不明瞭である。

基本土層は現耕作土のⅠ層の褐色粘質土、近世末の犀川洪水土と思われるⅡ層の黄褐色粘質土、河川堆積物のⅢ層の褐色粘質土、その下に扇状地を形づくる基盤の砂礫層が確認できた。この中でⅢ層は最下部の砂礫層は北調査地区で河道状に大きく落ち込む部分に入るもので、南側の砂礫層が浅くなる部分でⅢ層自体も不明瞭となる。溝状遺構はこのⅢ層分布範囲に限定的に認められ、砂礫層の高い部分を避けているように思われる。遺構検出面はⅢ層上面であるが、検出遺構の多くはⅡ層上面まで立ち上がり確認できる。畝状遺構は、調査時には幕末の善光寺地震に伴う洪水で埋没したものととらえられていたが、調査区壁の土層図を見直すとⅠ層下部から入る砂礫層下に位置することが判明した。この砂礫層は純粋なものではなく土混じりであるため、洪水以後に構築された掘り込みの底面施設の可能性がある。以上のように検出された遺構のほとんどが善光寺地震（1847年）以後の所産と考え得る。

第2節 遺構と遺物

1 土坑

SK1 XS01 (第378図)

北調査地区南部にあり、中央部を試掘トレンチで破壊した。平面形は長軸420cm、短軸220cm前後の長楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは46cmである。埋土は砂利土で占められ、底面には炭化物がごく一部に認められたが、これは酸化鉄塊の可能性もある。形状から土坑としたが、隣接する溝状遺構と類似した遺構の可能性もある。

2 畝状遺構

北調査区南西端に位置し、西側は調査区外側へ連続すると思われる。III層上面で検出されたが、西側調査区壁の土層観察では、本跡の分布範囲に一致してII層上面から掘り込まれる砂礫混じり土の穴跡が認められ、本跡はこの穴跡の底面にあたる。形状は幅60cm前後、長さ5～6mの細い溝状の掘り込みが南北約6m、東西約11mの範囲に13条並列するもので、溝状の掘り込み断面は緩やかなU字状を呈して検出面からの深さ10cm前後を測る。本跡は検出された状態から畑跡とされたが、以上のように幕末以後の穴跡の底面施設、あるいは掘削痕の可能性もある。

3 溝状遺構

調査域北側に多数の溝状遺構が検出された。調査区内で端部の立ち上がりが確認され、溝跡とするより非常に細長い土坑列にとらえられる。調査は検出面で平面規模を確認し、一部断面観察を行ったのみである。各溝状の掘り込みは幅1～3m、長さ5～19mの規模で、溝状遺構間の切り合いが認められるため、個々の溝状遺構には時期差があると考えられる。埋土は砂礫混じり土で占められる。断面形は箱形で検出面からの深さは1.2m前後である。本跡の性格は不明ながら、基盤の砂礫層が高くなる南側を避けて密集することや、埋土が砂礫で占められている点、さらに同じ砂利層は犀川洪水の際の礫を片づけた伝承をもつ旧国道脇にもみられることから、これらの遺構は幕末の犀川洪水土を片づけた遺構か、客土を行うために土を採取した遺構ではないかと考えられる。

4 旧道跡

調査域北端に古い道跡とされる場所がかかった。この道は松代から川中島を通り犀川を渡河する古い道とされ、一時公道であったが、時代とともに少しずつ民間に払い下げられて現在は幅80cm分だけ残って、地元では「アカセン」と呼ばれている。また、幕末の犀川洪水で田畑を覆った不要な礫をこの道脇に積み上げたとき、現在小規模な土塁状の高まりとなっている。調査では調査範囲にかかったごく一部のみ断面観察を行ったが、先行する道跡遺構は明らかにできなかった。

5 遺物

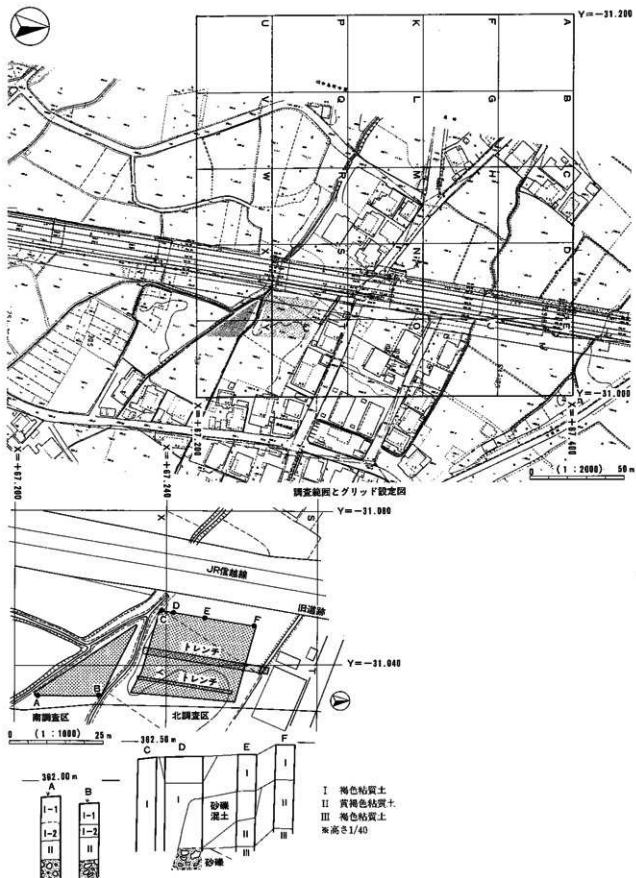
6点の焼物が得られたが、いずれも小破片で図示しえない。I層から赤褐色焼締甕の体部小破片1点、II層から近世瀬戸美濃産陶器の鉄軸瓶類破片1点、検出面（III層上面）から摩滅したカワラケ破片1点、15Cの青磁皿破片1点、18Cの伊万里皿破片1点、旧道跡の砂礫層上部から近世瀬戸美濃産陶器の灰釉瓶

類体部破片1点がある。中世以後の所産しかなく、土地利用開始は於下遺跡同様に中世と考えられる。

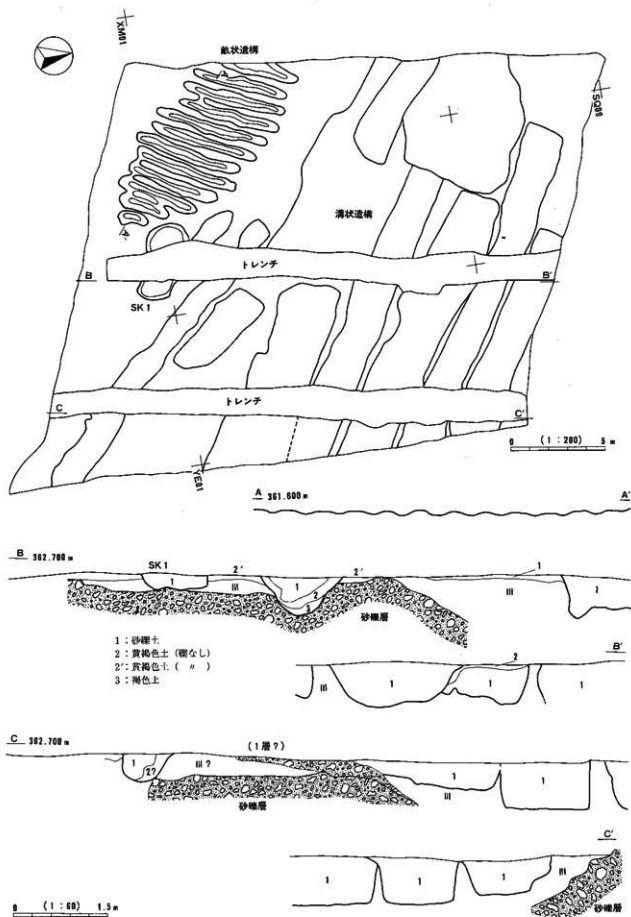
第3節 小 結

本遺跡で検出された遺構のほとんどが、幕末の善光寺地震に伴う犀川氾濫以後の所産で、砂礫を多量に含む埋土の共通点から客土のための土取り跡、もしくは洪水に伴う礫の片づけ遺構と思われる。耕作地遺跡における洪水後の復旧遺構については江浦洋一によってまとめられ(注)しており、本県では長野市石川条里遺跡で検出された、細長い方形土坑も該当すると指摘されている。本例もそうした事例の一つに加え得るかもしれない。この善光寺地震に伴う犀川の洪水は甚大な被害をもたらしたことはすでに指摘される場所であるが、こうした災害後の復興手順などはあまり明らかにされていないとはいえない。こうした中で、本遺跡で検出された遺構は災害に伴うものとすれば、復興方法について一定の情報をもたらすものと思われる。とくに、切り合いがあることから複数回にわたって継続的に行われたと推測でき、1回の規模が小さいことから個人(家)による可能性がある。このことは先にみた江浦の指摘と一致する。なお、於下遺跡のSD1は本遺跡と類似した遺構ととらえられ、この周辺では数多く分布する可能性がある。

注 江浦洋一 1996「大名・庶民の時代と自然 [4] 水田面における災害復旧と災害対策」『考古学による日本歴史 16 自然環境と文化』雄山閣



第377図 グリッド配置と基本土層



第378図 遺構

付 章

第1節 篠ノ井遺跡群出土の人骨と動物遺存体

京都大学霊長類研究所

茂原 信生

I) はじめに

篠ノ井遺跡群は長野県長野市篠ノ井にある遺跡で、北陸新幹線の工事に伴って、平成5年から7年にかけて、長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。本報告はその際に出土した人骨と動物骨に関するものである。

人骨の計測はマルチン法(馬場:1991)に従い、歯の計測は藤田(1949)にしたがった。

II) 出土人骨の特徴

1) SM101 (弥生時代後期)

③左上腕骨片

細いという以外は不明。

2) SM110 (弥生時代後期)

部位不明の四肢骨片。

3) SM112 (弥生時代後期)

細い脛骨、粗線はやや発達しているがあまり太くない大腿骨。

4) SM114 (弥生時代後期)

頭蓋骨片と四肢骨片が出土している。頭蓋骨片は頭蓋骨とわかる以外は不明である。大腿骨は太く、粗線はやや発達している。他に部位不明の四肢骨片が出土している。

この個体の性別は不明である。

5) SM116 (弥生時代後期)

部位不明の四肢骨片が出土している。

6) SM103 (弥生時代後期)

円形周溝墓からの出土である。下肢骨は膝を強く曲げて、下腿を内側に曲げこんでいる。屈葬であろう。

頭蓋骨

頭蓋骨(Na5)は、顔を右に向けている。顔面部は失われている。頭蓋骨の左右の方向に、すなわち上方から土圧を受けており扁平になっている。矢状縫合の後部の外板は癒合している。耳道上縁は発達しておらず、側頭線も明瞭ではない。

歯

歯は上顎左第3大臼歯、下顎の右第1・第2小臼歯の3本が残っている。小臼歯は咬耗はしているものの象牙質の露出はなく、また第3大臼歯には咬耗も隣接面磨耗も認められない。したがって、20歳前後の可能性がある。第3大臼歯は付加咬頭のある異常形である。第1小臼歯には線状のエナメル質減形成が確

認される。このエナメル質減形成は5歳前後に形成されたものと推定される。歯の大きさは、以下の通りである。第1小臼歯（近遠心径：7.8mm、頬舌径：9.2mm）・第2小臼歯（近遠心径：8.1mm、頬舌径：9.3mm）。

四肢骨

下肢骨は原形を留めていないが、いずれも細い。

この個体の性別は不明である。

7) SM104（弥生時代後期）

四肢骨が残っている。下肢は、股関節は伸展し、膝を強く曲げた屈葬である。

四肢骨

上腕骨（右）は太くて頑丈である。左大腸骨の遠位半が残っており、後面の粗線はよく発達し、骨は太く、厚い。

棺外からは、右寛骨の腸骨を含む寛骨臼部が出土している。この寛骨の耳状面周辺に妊娠痕は観察されない。

8) SM105（弥生時代後期）

円形周溝墓からの出土である。下肢は股関節を伸展し、膝を強く曲げて下腿を内側に曲げこんでいる。

四肢骨

右大腸骨は両端が失われているが、残っている骨幹の部分でも388mmあり、骨頭を含めると420mmは越える長さであったと推測される。骨は太くて頑丈である。後面の粗線はよく発達しており、数mmの幅を持った稜状をなしている。殿筋隆起はさほど発達していない。骨体上横径は33.6mm、上矢状径は26.2mmで、扁平指数は78.0で扁平大腿骨である。中央横径は32.0mm、中央矢状径は30.0mmである。大腿骨から計算される推定身長は少なく見積もっても158.6cmである。

この個体は、男性の可能性が高い。

9) SM109（弥生時代後期）

円形周溝墓からの出土である。顔を右に向けている。左右の上肢は肘をほとんど伸展して腹部においている。下肢は膝を強く曲げた屈葬で、膝を左に倒している。

頭蓋骨

耳道上稜はよく発達している。下顎骨のオトガイ隆起は著しく、オトガイ結節も比較的発達しているのでオトガイ三角が顕著である。オトガイ高は31.7mmである。矢状縫合は鋸歯状の縫合が明瞭である。

歯

上顎は一部が破損しているものの第3大臼歯まで残っている。左右とも側切歯（第2切歯）が欠落しているが萌出するスペースがないので先天性の欠如の可能性が高い。下顎歯は第2大臼歯までが確認出来る。下顎でも側切歯が欠如している。エナメル質減形成が認められる。

上顎中切歯はシャベル型である。咬耗は、第2・第3大臼歯以外は象牙質の露出したモルナーの3であり、第3大臼歯には咬耗は認められない。したがって、18歳には達していない程度の年齢であろう。

四肢骨

左上腕骨は細い。脛骨は土圧でややつぶれていることを割り引いても、扁平である。

この個体は18歳には達していない少年であると推測されるが、性別は不明である。

10) SM211（弥生時代後期）

円形周溝墓内からの出土である。青色ガラス玉10個が頭蓋骨内部から出土した。頭蓋骨は仰向けに位置している。

歯

上顎歯（左第2小臼歯・第1大臼歯・第3大臼歯？、右第1小臼歯・第2大臼歯・第3大臼歯）、下顎歯（左右第1および第2小臼歯）の計10本が残っている。

四肢骨

四肢骨の保存状態は悪い。脛骨の断面はヘリチカIV型を細くした形である。

この個体は周溝内にあるもので頭蓋骨と四肢骨が比較的まとまった形で出土している。性別は不明である。副葬品に鉄鋼があり、主体部のものにも同様の鉄製品が副葬されていた。

11) SM211 主体部（弥生時代後期）

下肢は膝を曲げて左右に開いて、足を中央にあわせてかっこうの屈葬である。上肢の位置は不明である。

頭蓋骨

顔面を右に向けている。左右方向の土圧を受けてつぶれている。乳様突起は普通である。頭蓋は大きい印象である。矢状縫合は単純化している。眉弓は発達していない。性不明。

歯

上顎の左第2小臼歯～第3大臼歯までの4本が出土している。

四肢骨

保存状態は悪く、計測に耐えるようなものはない。大腿骨は骨幹が残っている。後面の粗線はやや発達しているがさほど高くはない。腕筋隆起はほとんど目立たない。脛骨の骨間縁は鋭く発達しているが骨は細い。女性的な印象である。

12) SM213 主体部（弥生時代後期）

部位不明の四肢骨片が数点出土しているだけである。特記すべきことはない。

13) SM224（弥生時代後期）

大腿骨および脛骨と思われる四肢骨片が見られるが詳細は不明である。

14) SM229（弥生時代後期）

主体部

四肢骨の保存状態は悪く、計測に耐えるものはない。左大腿骨の後面の粗線は幅を持った稜状にやや発達している。骨は太い。脛骨の断面はヘリチカのII型とI型の中間形で、後面の短い三角形である。後面の鉛直線は発達してない。

15) SM236（弥生時代後期）

主体部

部位不明の四肢骨片が出土しているだけである。

16) SM238（弥生時代後期）

大腿骨および脛骨骨幹が確認出来る。詳細は不明である。

17) SM241（弥生時代後期）

歯2本と四肢骨片が残っている。四肢骨の部位は不明である。

18) SB211（弥生時代後期）

鉄鋼を持っていた。膝をやや曲げてわずかに外方へ開いている。左右の足は中央に寄せている。上肢は左右ともに肘を直角程度に曲げて手を中央にあわせている。

頭蓋骨

上下方向に土圧を受けている。耳道上稜はやや発達しており、乳様突起は大きい。矢状縫合は後部でも

まだ鋸歯状の縫合がみられる。

四肢骨

四肢骨の形は残っているが、保存状態は非常に悪い。

19) SB325 (平安時代)

頭部は顔面を左に向けている。左右方向の土圧を受けている。顔面は失われている。

頭蓋骨

乳様突起は比較的大きく、かつ内外的に厚い。頭蓋冠の骨は厚い。耳道上稜はやや発達している。頭蓋最大長は185mm前後と思われる。矢状縫合はかなりの部分で単純化している。オトガイ結節はやや発達している。下顎体はさほど厚くない。

歯

下顎歯は第3大臼歯までが萌出しており、咬耗もしているので成人である。上下顎とも臼歯はみられない。

20) SK214 (弥生時代後期)

青色ガラス玉6個が一緒に出土している。

下肢骨は確認出来るが詳細は不明である。脛骨はさほど太くない。

21) SK348 (古代)

頭蓋骨と四肢骨の一部が残っているが保存状態は非常に悪い。頭蓋骨以外は存在が認められる程度である。発掘時の状態では上肢は体の横で伸展していたらしい。下肢は不明である。

頭蓋骨

頭蓋冠だけが残っている。顔を右に向けている。頭の左上から右下にかけての土圧を受けて変形している。ラムダ縫合部が残っており顔面はない。縫合は矢状縫合のラムダ部をはじめとしてどれも鋸歯状の縫合が明瞭でさほど高齢ではない。

性別は不明である。

22) SK437 (平安時代)

2体分が埋葬されていたらしい。頭蓋骨が2つ出土している。

No.1 頭蓋骨

顔を上にしてのいる(ただし、顔面部は失われている)。人字縫合はどれも癒合していない。さほど高齢ではない。後頭隆起のように後頭骨が膨隆している。側頭骨の錐体は頤丈である。

四肢骨は骨であることは確認出来るが詳細な形状は判定出来ない。

23) SK444 (中世)

頭蓋は仰向けになっていた。頭蓋冠が保存されておりそれ以外は失われている。

頭蓋骨

冠状縫合、矢状縫合、人字縫合ともに鋸歯状の縫合が明瞭で、比較的若い個体であろう。正中から2cmほど左の冠状縫合に直径1cmほどの穴があいている。先天的なものであろう。

24) SK450 (古代)

ヒトの四肢骨片であるが部位不明である。

25) SK589 (古墳時代後期?)

頭蓋骨であるという以外は不明である。

26) SK589 (古墳時代後期?)

部位の特定出来ない四肢骨片のみである。

27) 土器棺203 (弥生時代後期)

保存状態は非常に悪く、骨の表面などは脱落しており、頭蓋であることは確認出来るが詳細は不明である。

28) 土器棺504 (弥生時代後期)

部位、種不明の焼骨細片が1点である。

III) 出土した動物遺存体の特徴

出土した量はさほど多くない。同定できたものは53点で、うち7点は種名が不明である。出土したものではウマがもっとも多く28点、シカが10点、ウシが7点、そしてイノシシあるいはブタが1点である。

1) SB103 (古墳時代後期)

ウマの下顎歯片である。歯種は臼歯という以外は不明である。

2) SB210 (弥生時代後期)

ト骨とされているもので、ニホンジカ?の肩甲骨と考えられる。

3) SB303 (古墳時代中期)

ウマの手根あるいは足根骨と思われる破片が出土している。

4) SB313 (古墳時代後期)

ほぼ完形のウマの左上腕骨と左桡尺骨が出土している。

5) SB315 (奈良時代)

完形のシカの右距骨である。

6) SB316 (平安時代)

部位不明の四肢骨片。

7) SB318 (平安時代)

ウマの左脛骨骨幹、大腿骨遠位部、および中足骨と思われる骨片が確認出来る。

8) SB326 (古墳時代後期)

ウマの右大腿遠位骨幹と思われるものである。

9) SB353 床面直上 (古墳時代後期)

10cmほどのシカの角の破片である。他に、シカの椎骨片と思われるものと部位・種不明の四肢骨片であるがどちらも焼かれている。

10) SB362 (奈良時代)

ウマの左脛骨骨幹、右中足骨・右距骨・踵骨、右楔状骨・舟状骨が出土している。

11) SB377 (弥生時代後期)

ト骨とされている肩甲骨である。

12) SD316 (弥生時代後期)

ウシの前頭骨角突起であり、かなり大きな個体と思われる。他に部位、種不明の四肢骨がある。

13) SD322 (古墳時代後期)

ウマの中手骨あるいは中足骨の近位後面が出土している。前後方向に土圧を受けてつぶれている。

14) SK310 (平安時代)

ほぼ完形のウマの環椎である。

15) SX301 (8世紀以降)

ウマの下顎歯で、右のI1~I3と左のI1~I2までの5本が残っており、これらは同一個体と思われる。I3はまだ磨耗していない若い個体のものである。

IV) 動物遺存体のまとめ

出土したものの量は多くなく、ウマがもっとも多く、ついでシカ、ウシ、イノシシの順であった。イノシシの少なさが眼を引く。ウマは頭蓋骨が出土しておらず、4本の歯以外はすべて四肢骨、あるいは椎骨であった。焼かれている骨はシカだけであった。

V) まとめ

篠ノ井遺跡群は弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。出土遺物は弥生時代と平安時代のものが多い。獣骨はウマとシカ、ウシ、イノシシが出土しているが量的には少ない。人骨は多数出土しているが、保存状態のいいものがなく、集団としての特徴は明らかにできなかった。

今後は、出土した歯のデータを他の長野県内の弥生集団と比較することを考える必要があるが、現時点では資料があまりにも少ない。今後の資料の集積が待たれる。

これらの貴重な資料を観察する機会を与えてくださった長野県埋蔵文化財センターの方々に厚く感謝いたします。

参考文献

- 馬場悠男 (1991) : 人骨計測法。人類学講座別巻1、「人体計測法」、江藤盛治編纂、雄山閣：159-358。
藤田恒太郎 (1949) : 歯の計測規準について。人類学雑誌, 61:1-6。

写真の説明

写真1 : 篠ノ井遺跡群出土の人骨

1 : SB325人骨の頭蓋骨左側面、2 : SB211 (Na 1) 人骨の下顎歯咬合面 (上が顎側)、3 : SB211人骨の下顎歯咬合面 (上が顎側)、4 : SK348人骨の下顎骨と下顎歯咬合面 (上が顎側)、5 : SK437 (Na 1) 人骨の下顎歯咬合面 (上が顎側)、6 : SK444人骨の頭蓋骨上面視、左が前、7 : SK437人骨の上顎歯 (左の3本) と下顎歯咬合面 (上が顎側)、8 : SM103人骨の上顎 (上の2本 ; 上が顎側) と下顎 (下の2本 ; 下が顎側) の咬合面、9 : SM103 (Na 5) 人骨の下顎と下顎歯咬合面

写真2 : 篠ノ井遺跡群出土の人骨

1 : SM103人骨の歯の咬合面 (線の側が舌側、以下同じ)、2 : SM103 (北個人骨) 人骨の歯の舌側面 (上の4本) と咬合面、3 : SM104人骨の下顎骨と下顎歯咬合面、4 : SM105人骨の下顎骨右側面とその下顎歯咬合面、5 : SM109人骨の頭蓋骨左側面視、6 : SM109人骨の上顎歯咬合面、7 : SM109人骨の下顎骨前面、8 : SM109人骨の下顎骨前面

写真3 : 篠ノ井遺跡群出土の人骨と獣骨

1 : SM211 人骨の上顎歯咬合面、2 : SM211人骨 (前の軀体とは別個体である) の咬合面、3 : 土器棺203から出土した人骨の歯の咬合面、4 : SB374から出土したウシの上顎臼歯咬合面、5 : SB322から出土したウシの下顎歯舌側面

写真4 : 篠ノ井遺跡群出土の獣骨

1 : SB374から出土したシカの下顎外側面、2 : SB374から出土したシカの左距骨、3 : SB315から出土したシカの右距骨、4 : SD502から出土したウシの左中足骨、5・6 : SB313から出土したウマの左上腕骨の前面と後面、7 : SB313から出土したウマの左桡尺骨、8 : SK310から出土したウマの環椎

写真5 : 篠ノ井遺跡群出土の人骨と獣骨

1 : SM105から出土したヒトの右大腿骨、2 : SD502内から出土したウマの上顎歯咬合面、3 : SD502から出土したウマの上顎歯咬合面と舌側面、4 : SD502から出土したウマの下顎臼歯の顎側面と舌側面、5 : SX301から出土したウマの切歯

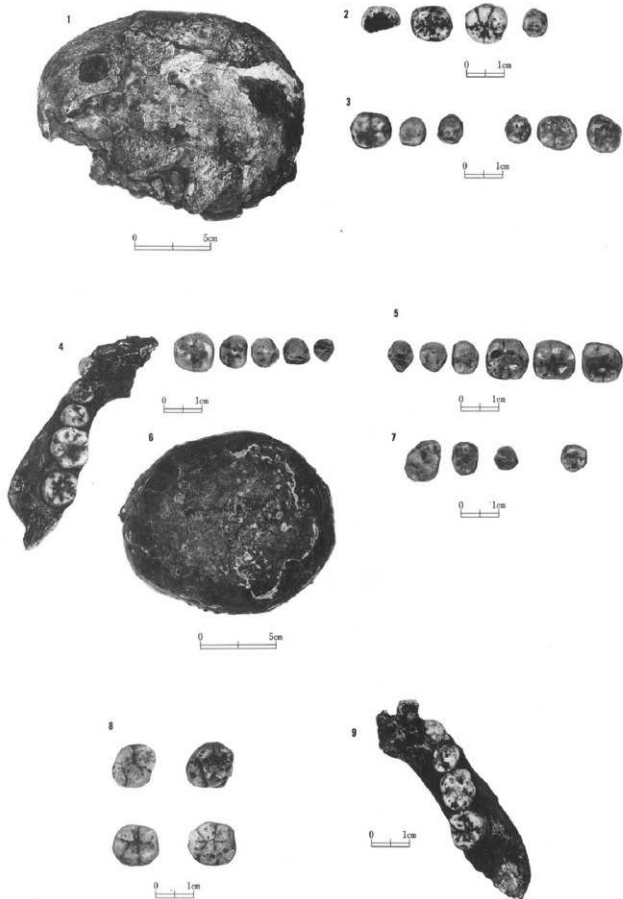


写真1：篠ノ井遺跡群出土の人骨

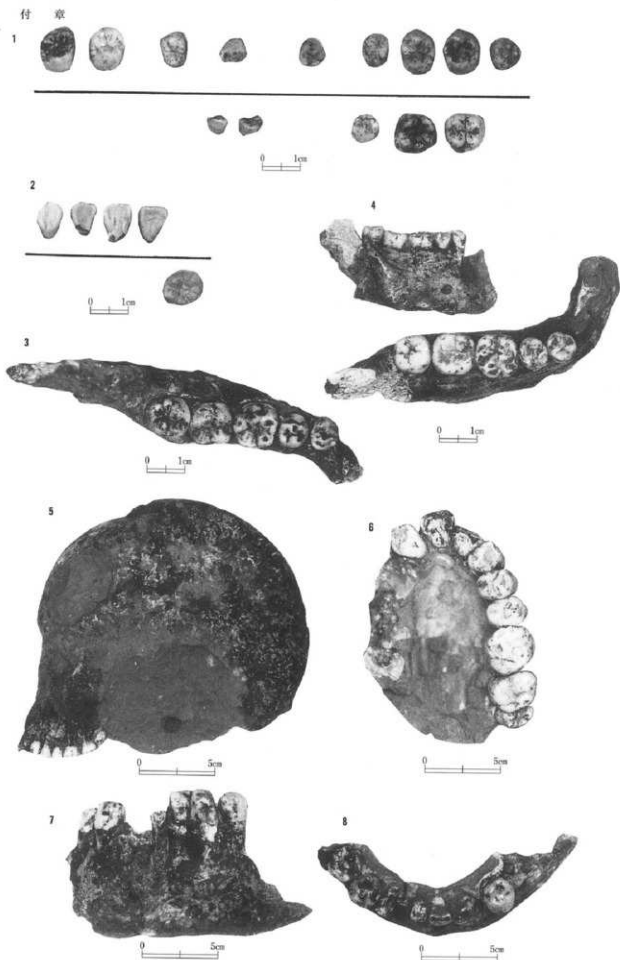


写真2：篠ノ井遺跡群出土の人骨

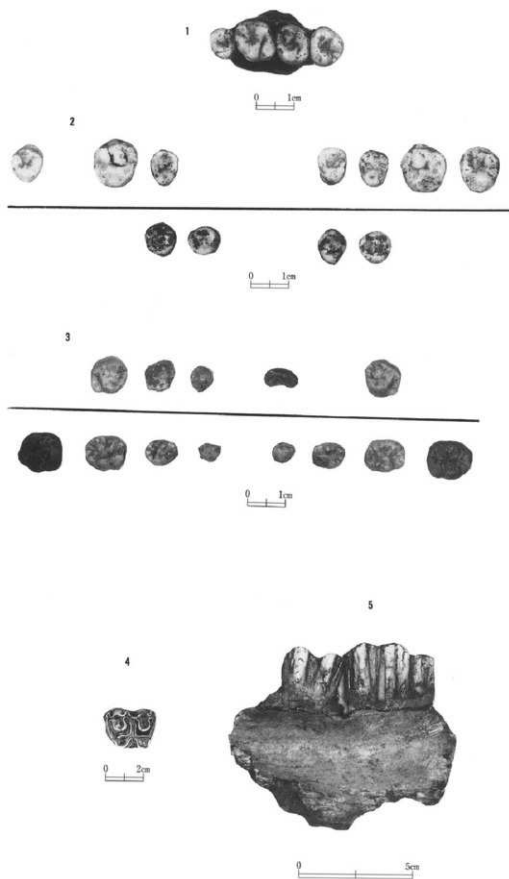


写真3：篠ノ井遺跡群出土の人骨と獣骨

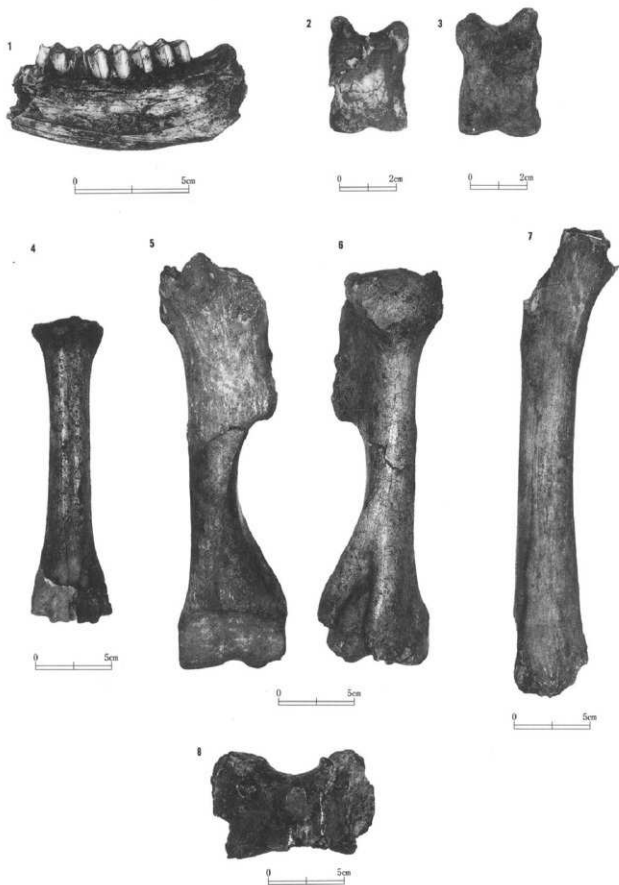


写真4：篠ノ井遺跡群出土の獣骨